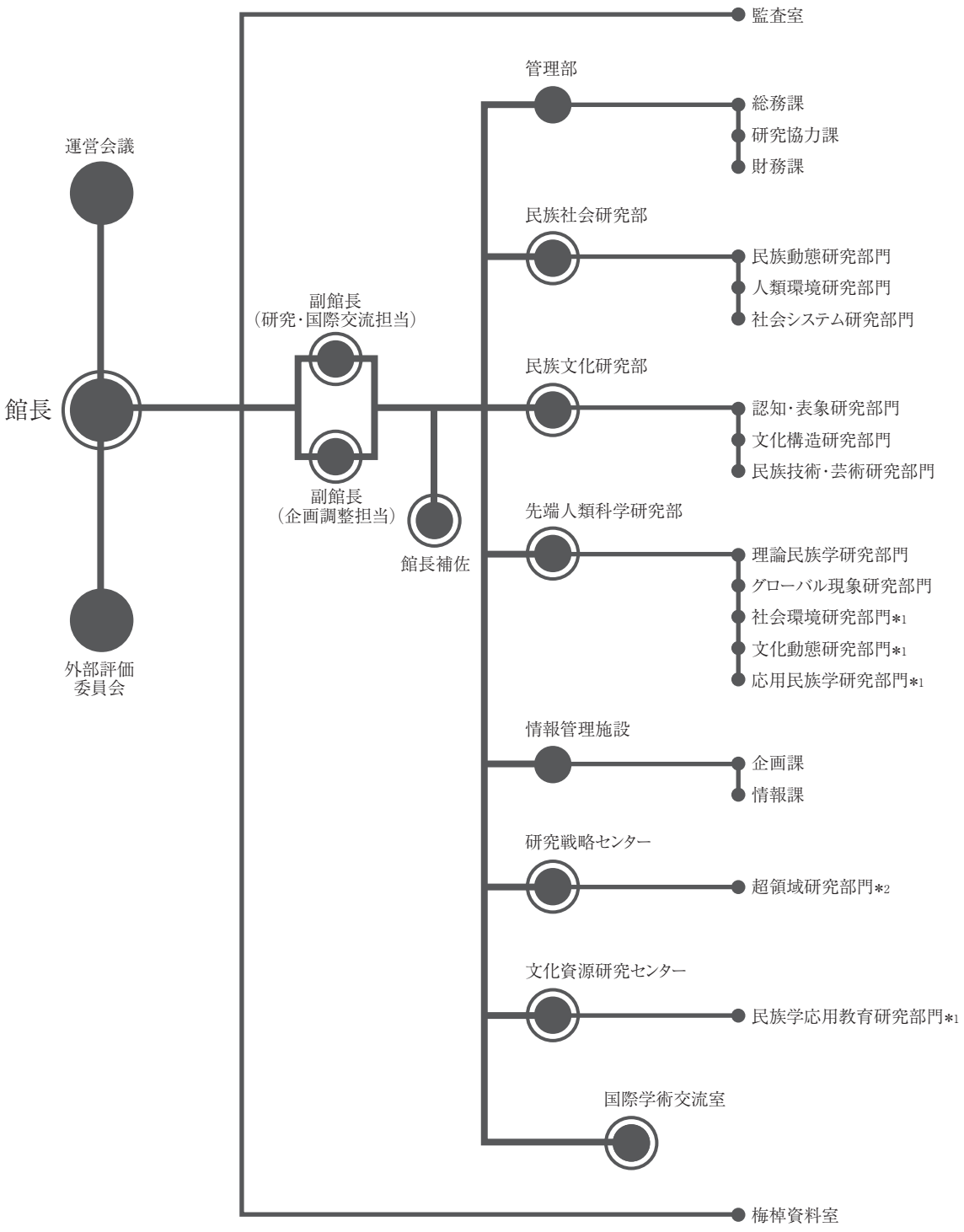
みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

1.組織

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008421

1 組織

組織構成図 (2016年 3 月31日現在)



注) *1 客員研究部門
*2 外国人客員研究部門

運営組織（2016年３月31日現在）

●運営会議

植野弘子　東洋大学社会学部教授*1
栗田博之　東京外国語大学総合情報コラボレーションセンター長*2
栗本英世　大阪大学大学院人間科学研究科教授*1
富沢寿勇　静岡県立大学国際関係学部教授*3
松田　凡　京都文教大学総合社会学部教授*3
松田素二　京都大学大学院文学研究科教授*2
山梨俊夫　国立国際美術館長
吉岡政德　神戸大学大学院国際文化学研究科教授*1
渡邊欣雄　國學院大學文学部教授*2
（館内）
池谷和信　民族文化研究部長*1*2*3
岸上伸啓　副館長（研究・国際交流担当）*1*2
笹原亮二　総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長
民族文化研究部教授*1
鈴木七美　研究戦略センター長*1*2*3
寺田吉孝　先端人類科学研究部長*1*2*3
西尾哲夫　民族社会研究部長*1*2*3
野林厚志　文化資源研究センター長*1*2*3
吉田憲司　副館長（企画調整担当）*1*2

注）*1　人事委員会委員
*2　共同利用委員会委員
*3　研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達　淳　国立情報学研究所副所長
黒柳俊之　独立行政法人国際協力機構理事
小泉潤二　大阪大学特任教授
八村廣三郎　立命館大学情報理工学部特任教授
廣冨靖以　公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団理事長
堀井良殷　公益財団法人関西・大阪21世紀協会理事長
宮田亮平　東京藝術大学長
三輪嘉六　特定非営利活動法人文化財保存支援機構理事長
山本真鳥　法政大学経済学部教授

館内運営組織（2016年３月31日現在）

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会
福利厚生委員会
安全衛生委員会
ハラスメント防止委員会
広報企画会議
機関研究運営会議
刊行物審査委員会
研究出版委員会
知的財産委員会
科学研究費補助金管理体制検討委員会
「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点運営委員会
大学院委員会
図書委員会
学術情報リポジトリ委員会
情報システム委員会（休止）
情報システム整備委員会
文化資源運営会議
国際研修博物館学コース運営委員会
施設マネジメント委員会
危機管理委員会
大規模災害復興支援委員会
フォーラム型情報ミュージアム委員会

現員（2016年３月31日現在）

区　　分	館長	教授	准教授	助教	事務職員・技術職員	計
館長	1					1
管理部					27	27
情報管理施設					20	20
研究部		16	13	3		32
研究戦略センター		5	4	2		11
文化資源研究センター		4	5	2		11
客員（国内）		10	6			16
客員（国外）＊		4	5			9
計	1	39	33	7	47	127

注）客員（国外）＊は、のべ人数

歴代館長・名誉教授（2016年３月31日現在）

●歴代館長

初　代／梅棹忠夫（故人）　1974年６月～1993年３月
第２代／佐々木高明（故人）1993年４月～1997年３月
第３代／石毛直道　1997年４月～2003年３月
第４代／松園萬亀雄　2003年４月～2009年３月
第５代／須藤健一　2009年４月～

●名誉教授

祖父江孝男（故人）1984年４月１日
岩田慶治（故人）1985年４月１日
加藤九祚　1986年４月１日
伊藤幹治（故人）1988年４月１日
中村俊亀智（故人）1988年４月１日
君島久子　1989年４月１日
和田祐一（故人）1990年４月１日
垂水　稔（故人）1991年４月１日
杉本尚次　1992年４月１日
梅棹忠夫（故人）1993年４月１日
大給近達（故人）1993年４月１日
片倉素子（故人）1993年４月１日
竹村卓二（故人）1994年４月１日
周　達生（故人）1995年４月１日
松澤員子　1995年４月１日
大丸　弘　1996年４月１日
友枝啓泰（故人）1996年４月１日
藤井知昭　1996年４月１日
佐々木高明（故人）1997年４月１日
杉村　棟　1997年４月１日
和田正平　1998年４月１日
清水昭俊　2000年４月１日
黒田悦子　2001年４月１日
崎山　理　2001年４月１日
端　信行　2001年４月１日
小山修三　2002年４月１日
森田恒之　2002年４月１日
石毛直道　2003年４月１日
栗田靖之　2003年４月１日
杉田繁治　2003年４月１日
熊倉功夫　2004年４月１日
立川武藏　2004年４月１日
田邉繁治　2004年４月１日
藤井龍彦　2004年４月１日
山田睦男（故人）2004年４月１日
江口一久（故人）2005年４月１日
大塚和義　2005年４月１日
松原正毅　2005年４月１日
石森秀三　2006年４月１日
野村雅一　2006年４月１日
大森康宏　2007年４月１日
山本紀夫　2007年４月１日
松園萬亀雄　2009年４月１日
松山利夫　2010年４月１日
長野泰彦　2011年４月１日
秋道智彌　2012年４月１日
中牧弘允　2012年４月１日
小林繁樹　2014年４月１日
田村克己　2014年４月１日
吉本　忍　2014年４月１日
久保正敏　2015年４月１日
庄司博司　2015年４月１日
八杉佳穂　2015年４月１日

研究部教員の紹介（2016年３月31日現在）

組織図に基づく現員一覧

館　長		須藤健一		
副館長（企画調整担当）		吉田憲司		
副館長（研究・国際交流担当）		岸上伸啓		
研究部	職名・研究部門	教　授	准教授	助　教
民族社会研究部	研究部長	西尾哲夫		
	民族動態	關　雄二 朝倉敏夫 横山廣子 小長谷有紀（併）	三島禎子	
	人類環境	印東道子 MATTHEWS, Peter J.		
	社会システム	韓　　敏	佐藤浩司 宇田川妙子 太田心平	吉岡　乾
民族文化研究部	研究部長	池谷和信		
	認知・表象	森　明子	山中由里子	齋藤玲子
	文化構造	杉本良男 笹原亮二	新免光比呂 廣瀬浩二郎	藤本透子
	民族技術・芸術	竹沢尚一郎 出口正之	鈴木　紀	
先端人類科学研究部	研究部長	寺田吉孝		
	理論民族学	佐々木史郎 齋藤　晃	菊澤律子 飯田　卓	
	グローバル現象		丸川雄三 松尾瑞穂 卯田宗平	
研究戦略センター		鈴木七美（センター長） 岸上伸啓（副館長） 塚田誠之 平井京之介 樫永真佐夫	三尾　稔 丹羽典生 南 真木人 伊藤敦規	菅瀬晶子 河合洋尚
文化資源研究センター		野林厚志（センター長） 吉田憲司（副館長） 園田直子 信田敏宏	福岡正太 山本泰則 林　勲男 日髙真吾 上羽陽子	川瀬　慈 寺村裕史
国際学術交流室		岸上伸啓（室長）（併） 印東道子（兼務） 韓　　敏（兼務） 齋藤　晃（兼務） MATTHEWS, Peter J.（兼務）	菊澤律子（兼務） 山中由里子（兼務）	

須藤健一［すどう　けんいち］――館長

1946年生。**【学歴】**埼玉大学教養学部卒（1969）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）修士課程修了（1972）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）博士課程単位取得満期退学（1975）**【職歴】**国立民族学博物館第３研究部助手（1975）、国立民族学博物館第１研究部助教授（1986）、神戸大学国際文化学部教授（1993）、神戸大学国際文化学部長（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科長（2002）、神戸大学附属図書館長（2005）、神戸大学大学院国際文化学研究科教授（2007）、国立民族学博物館館長（2009）**【学位】**文学博士（東京都立大学 1986）、文学修士（東京都立大学 1972）**【専攻・専門】**社会人類学、オセアニアの社会と文化、海外移住、伝統政治と民主主義**【所属学会】**日本文化人類学会、日本オセアニア学会、南島史学会、生態人類学会、ニュージーランド学会

【主要業績】

［単著］

須藤健一

2008 『オセアニアの人類学――海外移住、民主化、伝統の政治』東京：風響社。

1989 『母系社会の構造――サンゴ礁の島々の民族誌』東京：紀伊国屋書店。

［編著］

須藤健一編

2012 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』東京：風響社。

【受賞歴】

2010　第２回石川榮吉賞

1985　第16回澁澤賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

伝統的航海術における呪術的力に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

星と波と風をたよりの伝統的航海術とカヌーを駆使して島間を行き来する人びとが今でもミクロネシアのサタワル島とその周辺の島じまに暮らしている。星の出没位置を利用するスターコンパスと西流する海流や北東からの貿易風など自然現象に規則性を見抜いて航海を実践する。乗り物は10m足らずのシングルアウトリガー・カヌー。科学的には不正確な方位と洋上の位置の割り出し技術、そして脆弱な舟による航海は常に危険を伴う。この危険性を除去する主要な方法が呪文と儀礼からなる呪術の力である。サタワルの航海者が航海において依拠してきた呪術的世界を明らかにすることが本年度の研究目的である。

・成果

呪文と儀礼の分析と解釈を中心に航海者のふるまいについての記述について研究を進めており、研究成果として『国立民族学博物館研究報告』にて公開する予定である。

◎出版物による業績

［論文］

須藤健一

2015 「情報と地位の贈与・交換論――大工集団の贈答の分析」伊藤幹治・栗田靖之編『（ミネルヴァ・アーカイブズ）日本人の贈答』pp.203-233，京都：ミネルヴァ書房（初版：1984年）。

［その他］

須藤健一

2015 「閉会の挨拶」『人間文化』22：43，東京：人間文化研究機構。

2015 「初航海のふがいなさ」『月刊みんぱく』39(5)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年４月18日　招待講演 「Cultural Anthropology Research and Museology at the National Museum of

Ethnology, Japan」 The First Global Creative Industries Conference, School of Modern Language and Cultures, Faculty of Arts, The University of Hong Kong, Hong Kong

2015年６月27日　招待講演「The Museum Activities in Recovery From Disaster: National Museum of Ethnology, Japan」第６回東北アジア民族文化フォーラム『無形文化遺産の保護、民族文化の変化と異文化交流』中央民族大学民族学社会学学院、北京

2015年10月15日　招待講演「21世紀の民族学博物館と博情館――文化資源研究の新展開」国際学術ワークショップ『民族學與歴史學的交會（民族学と歴史学の交錯）』台湾国立台湾歴史博物館、台北

2015年10月22日　招待講演「文化資源に関するForum型情報博物館の構築――民博の研究展開」浙江大学『東方論壇』第178回講演会、浙江大学、杭州

・研究講演

2015年４月27日　「博物館の多面的活動のすすめ――民博ミッション」「堺市博物館活性化戦略会議」堺市博物館、大阪

2015年８月１日　記念講演「柳田國男と民族学」「柳田國男生誕140年記念／柳田國男・松岡家記念館開館40周年記念 第36回山桃忌」福崎町エルデホール、兵庫

2015年12月６日　「“ふれあい”と文化創生の場としての博物館」文化講演会，佐渡国小木民俗博物館活性化実行委員会、佐渡中央会館、新潟

・広報・社会連携活動

2015年４月４日　「パラオの今――日本統治から70年」佐渡高校関西地区同窓会，国立民族学博物館

2015年５月13日　「星と風と波と――オセアニアの偉大な航海者」カレッジシアター「地球探検紀行」、あべのハルカス近鉄本店

2015年７月９日　「21世紀のみんぱく」第２回京都素交会、京都東山高台寺月真院

2015年10月６日　「21世紀を挑戦するみんぱく」神戸シルバーカレッジ、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年11月１日　「オセアニアの食文化――タロイモとパンノキの実の料理」第403回みんぱくウィークエンド・サロン研究者と話そう

・館内研修

2015年４月15日　「みんぱく今昔物語」2015年度民博新任職員等研修

2016年１月22日　「“みんぱくのこれから”とわたしたち――プロパー職員との語らい」第２回みんぱくミーティング

◎調査活動

・海外調査

2015年６月26日～６月29日―中華人民共和国（中央民族大学民族学与社会学学院、東北アジア民族文化研究所主催シンポジウムに参加及び招待講演）

2015年10月15日～10月18日―台湾（国立台湾歴史博物館との協定調印式及びワークショップに参加）

2015年10月21日～10月24日―中華人民共和国（浙江大学でのシンポジウムにおいて招待講演及び浙江大学「民博文庫」開室セレモニー参加）

2015年12月７日～12月９日―大韓民国（韓国国立民俗博物館特別展「韓日食博」開幕式典へ参加）

2016年１月27日～２月６日―オーストラリア、ニュージーランド（オーストラリア、ニュージーランドの大学訪問及び博物館視察）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人大阪府文化財センター評議員、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、金沢大学大学院人間社会環境研究科文化資源マネージャー養成プログラムアドバイザー、関西サイエンス・フォーラム理事、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員、独立行政法人国立美術館 国際美術館評議員、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、太平洋諸島学会理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、日本ニュージーランドセンター理事、公益財団法人日本博物館協会参与、NPO法人 パシフィカ・ルネサンス顧問、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員、第25回山片蟠桃賞審査委員、公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団助成事業選考委員長

岸上伸啓［きしがみ　のぶひろ］――――――――――副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

1958年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マッギル大学人類学部博士課程中退（1989）**【職歴】**早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学助教授（1992）、国立民族学博物館第１研究部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**文化人類学 1）カナダ・イヌイットの社会変化、2）都市在住のイヌイットの民族誌的研究、3）先住民による海洋資源の利用と管理、4）北アメリカ先住民**【所属学会】**日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族藝術学会

【主要業績】

［単著］

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。

［編著］

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

2007　第18回カナダ首相出版賞

1998　第９回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カナダ西部地域および中部地域における諸先住民文化の変化と現状に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、カナダ西部地域および中部地域における諸先住民文化の歴史的変化と現状について比較研究するとともに、同地域における先住民の文化資源資料に関する情報を吟味し、フォーラム型情報ミュージアムのコンテンツを作成することである。具体的には、下記のことを行う。

（1）カナダ西部地域および中部地域における諸先住民文化の変化と現状について、既存の民族誌や学術論文などの渉猟および現地調査の成果に基づき、比較研究を行う。

（2）ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館やウミスタ文化センター、北海道立北方民族博物館ほかと連携しながら、国立民族学博物館や国内の他機関が収蔵している同地域の先住民の文化資源資料に関する情報を吟味し、その高度化を図る。

（3）（1）と（2）の研究成果を統合し、フォーラム型情報ミュージアムのコンテンツを作成するとともに、成果の一部を論文で発表する。

なお、本研究は、国立民族学博物館の「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトおよび2015年度科学研究費助成事業（基盤研究（A）・一般）「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）の一部として実施する。

・成果

本年度は、カナダ西部地域および中部地域における諸先住民文化の変化と現状についての研究を行った。既存の文献を渉猟するとともに、本館が収蔵する同地域の先住民文化に関連する標本資料の調査を実施した。その結果、カナダ極北地域の標本資料と比べると、カナダ西部地域および中部地域の標本資料は質量ともに見劣りがするが、1979年に本館が入手したルオンゴ・コレクションの中には、仮面や木箱など貴重な北西海岸先住民資料があることが明らかになった。これらの資料情報をフォーラム型情報ミュージアムから発信するための準備を行った。また、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館のReciprocal Research Networkに本館の標本資料情報を提供するための準備を、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトおよび2015年度科学研究費助成事業（基盤研究(A)・一般)「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）と連動させながら実施した。

研究成果の一部は、北海道立北方民族博物館主催の第30回北方民族文化シンポジウムで口頭報告するとともに、同シンポジウムの報告書（2016）や『国立民族学博物館調査報告（SER)』131号（2015）および132号（2015）において論文として出版した。また、本研究の成果を、2017年度秋季企画展「カナダにおける先住民文化の過去、現在、未来」（仮称）として公開するための準備を行った。

◎出版物による業績

［編著］

岸上伸啓編

2015 『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告 132）大阪：国立民族学博物館。［査読有］

［論文］

岸上伸啓

2015 「カナダにおける先住民アートの展開について」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題――国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告 131）pp.23-44，大阪：国立民族学博物館。［査読有］

2015 「環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する人類学研究の歴史と現状――日本人による文化人類学的研究を中心に」岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告 132）pp.7-77，大阪：国立民族学博物館。［査読有］

2016 「北アメリカ北方地域の先住民文化に関する文化人類学研究の動向――日本人人類学者および日本の博物館による貢献」北海道立北方民族学博物館編『第30回北方民族文化シンポジウム　網走――北方民族研究30年　成果・課題・博物館の役割』pp.31-38，網走：北方文化振興協会。

2016 「北アメリカの現代先住民捕鯨に関する比較研究――アラスカのイヌピアットとカナダ・イヌイットのホッキョククジラ猟の比較」『人文論究』85：63-75。［査読有］

Kishigami, N.

2016 Revival of Inuit Bowhead Hunts in Arctic Canada. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 16: 43-58.［査読有］

［その他］

岸上伸啓

2015 『極北の大地・グリーンランドの夜明け――The First Steps』（ヌカ・K・ゴッツフレッセン作・画，沢広あや訳，岸上伸啓監修）東京：清水弘文堂書房。

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌②　北極海の『クジラ料理』」『京都新聞』 5月20日。

2015 「アラスカ・イヌピアット社会における使者祭りの変化と現状について」日本文化人類学会第49回研究大会準備委員会編『日本文化人類学会　第49回研究大会発表要旨集』pp.105，大阪：日本文化人類学会第49回研究大会準備委員会（国立民族学博物館)。［査読有］

2015 「極北の祝宴――クジラを分かち合い、食べる喜び」『Vesta』100：22-24。

2015 「北アメリカの北太平洋沿岸地域と極北・亜極北地域の先住民文化に関する文化人類学研究の動向――日本人人類学者および日本の博物館・大学による貢献」『第30回北方民族文化シンポジウム（網走）発表要旨集（［第30回記念大会　北方民族研究30年――成果・課題・博物館の役割］)』pp.5，網走：㈶北方文化振興協会・北海道立北方民族博物館。

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌⑳　イヌイットのアザラシ猟」『京都新聞』10月21日。

2015 「カナダ研究と私」『日本カナダ学会関西地区便り』100：11。

2015 「北アメリカ北西海岸先住民のポトラッチ儀礼のダンス」国枝たか子編『世界のダンスII 百ヵ国を結ぶ舞踏文化』pp.80-81，東京：不昧堂出版。

2015 「アラスカ先住民のドラム・ダンス」国枝たか子編『世界のダンスII 百ヵ国を結ぶ舞踏文化』pp.82-83，東京：不昧堂出版。

2015 「国立民族学博物館における1990年代以降の北アメリカ先住民資料の収集について――イヌイット版画と北西海岸先住民版画を中心に」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題――国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告 131）pp.17-20，大阪：国立民族学博物館。［査読有］

2015 「はじめに」岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告 132）pp.1-4，大阪：国立民族学博物館。

2015 「おわりに」岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告 132）pp.259，大阪：国立民族学博物館。

2016 「旅・いろいろ地球人　現代に生きる伝統①　ホッキョククジラ猟」『毎日新聞』２月４日夕刊。

2016 「寒い地域に生きる人々　アラスカの生活」『中学社会地理的分野』（文部科学省検定済教科書中学校社会科用）pp.20-21，大阪：日本文教出版。

2016 「旅・いろいろ地球人　現代に生きる伝統②　クジラを解体するハンターたち」『毎日新聞』２月18日夕刊。

2016 「旅・いろいろ地球人　現代に生きる伝統③　ナルカタックの様子」『毎日新聞』２月25日夕刊。

2016 「旅・いろいろ地球人　現代に生きる伝統④　ドラムダンス」『毎日新聞』３月３日夕刊。

2016 「グリーンランドとアイスランドの捕鯨」小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』pp.233-238，東京：明石書店。

2016 「アイスランドとグリーンランドの現代芸術――音楽・映画・文学」小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』pp.249-253，東京：明石書店。

2016 「グリーンランドの音楽（コラム⑥）」小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』pp.270-272，東京：明石書店。

2016 「日本におけるグリーンランド展示――北海道立北方民族博物館と国立民族学博物館」（山田祥子との共著）小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章』pp.375-379，東京：明石書店。

2016 「息子に「おばあちゃん」（カナダ，イヌイット）」岩波書店辞典編集部編『世界の名前』（岩波新書）pp.142-144，東京：岩波書店。

Kishigami, N.

2015 A Comparative Study of Contemporary Indigenous Whale Hunts in North America. Abstract of Session 42, CHAGS 11.（September 9, 2015）http://chags.univie.ac.at/fileadmin/user_upload/DOEVL_events/Kongressservice/Chags_Final/ChagsPDF/Session42.pdf

2015 'Inuit in Urban Centers: A Case Study from Montreal, PQ, Canada' In The Japan Studies Association of Canada（ed.), Programme/Abstract of 2015 Integrated International Conference of the Japan Studies Association of Canada（JSAC), Japanese Association for Canadian Studies（JACS), and Japan-Canada Interdisciplinary Research Network（JCIRN), pp.34. Vancouver: The Japan Studies Association of Canada.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年２月11日　「民博のフォーラム型情報ミュージアム構想」国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて――オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年４月11日　「「氷の島」に生きる人びと――グリーンランド・イヌイットの歴史と文化」「第111回国立民族学博物館友の会東京講演会」モンベル渋谷ビル５Ｆサロン

2015年４月30日　'The Impact of Climate Change on Aboriginal Subsistence Whaling in Northwest Alaska: Inupiat Whalers, Bowhead Whales and Oil/Gas Development.' Session B8: From Human Security to Geopolitical Dynamics in the Global Arctic: The Global Implications of Rapid

Environmental, Economic, and Societal Change. The Fourth International Symposium on the Arctic Research（ASSW 2015), Toyama International Conference Center, Toyama, Japan

2015年５月21日　'Inuit in Urban Centers: A Case Study from Montreal, PQ, Canada.' 2015 Integrated International Conference of the Japan Studies Association of Canada（JSAC), Japanese Association for Canadian Studies（JACS), and Japan-Canada Interdisciplinary Research Network（JCIRN）at Embassy of Canada in Tokyo

2015年５月31日　「アラスカ・イヌピアット社会における使者祭りの変化と現状について」日本文化人類学会第49回研究大会、大阪国際交流センター

2015年９月９日　'A Comparative Study of Contemporary Indigenous Whale Hunts in North America.' Session 42 "Aboriginal Whaling and Identity in the Twenty-First Century" of CHAGS 11, University of Vienna, Austria

2015年10月24日　「北アメリカの北太平洋沿岸地域と極北・亜極北地域の先住民文化に関する文化人類学研究の動向：日本人人類学者および日本の博物館・大学による貢献」第30回北方民族文化シンポジウム網走「第30回記念大会　北方民族研究30年――成果・課題・博物館の役割」、オホーツク・文化交流センター、網走

・その他

2015年７月31日　「グリーンランドの人びとの暮らし」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」

2016年１月15日　「地球温暖化とイヌイット」大阪府高齢者大学「世界の文化に親しむ科」

2016年２月26日　「カナダ先住民のアート――イヌイットと北西海岸先住民の版画と彫刻」園田・みんぱく連携講座「世界の造形・芸能にみる"美"の文化」園田女子学園大学生

◎調査活動

・海外調査等

2015年８月３日～８月22日―カナダ（カナダ・イヌイットの捕鯨に関する調査）

2015年９月５日～９月13日―オーストリア（ウィーン大学で開催された第11回狩猟採集社会国際会議（CHAGS 11）への出席と研究発表）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

主任指導教員（１人）、副指導教員（１人）

・大学院ゼミでの活動

比較社会研究特論Ⅱ（前期）、比較社会研究演習Ⅱ（後期）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

第23期日本学術会議連携会員（地域研究）、第23期日本学術会議地域研究多文化共生部会幹事、第26期日本文化人類学会理事、日本カナダ学会理事、民族藝術学会理事、2015年度澁澤賞選考委員長、京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）共同研究課題選考委員、北極域研究推進プロジェクト推進評議会委員、北海道立北方民族博物館研究協力員、Japanese Review of Cultural Anthropology 編集委員、Journal of Anthropological Research の Associate Editor。

◎学会の開催（民博が開催校）

日本文化人類学会大49回研究大会、副実行委員長、５月30日～31日、大阪国際交流センター

吉田憲司［よしだ　けんじ］――――――――――――副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

1955年生。**【学歴】**京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）**【職歴】**ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター長（2006）、放送大学客員教授（2010）国立民族学博物館副館長（2015）**【学位】**学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**文化人類学、博物館人類学**【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族藝術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、

アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

【主要業績】

［単著］

吉田憲司

2014 『宗教の始原を求めて――南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。

1999 『文化の「発見」――驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。

1992 『仮面の森――アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

2004　第１回木村重信民族藝術学会賞

2000　第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）

1993　日本アフリカ学会研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。本研究は、文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を実践的に考究することを目的としている。

・成果

本年度は、過去30年間調査を継続してきた南部アフリカ、チェワ社会における文化の伝統とその創造的継承の実態について、１月から２月にかけて現地調査を実施するとともに、その一連の成果を取りまとめ、『仮面の世界をさぐる――アフリカとミュージアムの往還』（臨川書房、2016）を刊行した。

また、文化遺産の表象の新たな手法に関する研究成果を反映して実現した展示、「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」を郡山市立美術館【会期：2015年６月27日～８月23日】にて、「武器をアートに――モザンビークにおける平和構築」展を東京藝術大学大学美術館【会期：2015年10月17日～11月23日】にて巡回開催し、文化の表象の問題と可能性を展示の実践を通じて考究した。

◎出版物による業績

［単著］

吉田憲司

2016 『仮面の世界をさぐる――アフリカとミュージアムの往還』（フィールドワーク選書19）京都：臨川書店。

［編著］

吉田憲司編著

2016 『武器をアートに――モザンビークにおける平和構築（増補版）』京都：中西印刷。

［論文］

吉田憲司

2015 「人類学の視点から見る仮面――仮面という装置が明かす人類の普遍性」神戸女子大学古典芸能研究センター編『能面を科学する――世界の仮面と演劇』pp.151-171，東京：勉誠出版。

2015 「人類学からみた『イメージ人類学』」『言語文化研究』27(4)：11-20，京都：立命館大学国際言語文化研究所。

［その他］

吉田憲司

2015 「博物館建設競争」『毎日新聞』８月13日夕刊。

2016 「旅・いろいろ地球人　文化の創造と継承①　伝統の祭りの創成競争」『毎日新聞』３月10日夕刊。

2016 「旅・いろいろ地球人　文化の創造と継承②　父の遺産の返還運動」『毎日新聞』３月17日夕刊。

2016 「旅・いろいろ地球人　文化の創造と継承③　生活に根ざす黒川能」『毎日新聞』３月24日夕刊。
2016 「旅・いろいろ地球人　文化の創造と継承④　新たな伝統の誕生」『毎日新聞』３月31日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2015年９月９日～12日　招待講演「生活文化と博物館」国立台北藝術大学博物館研究所、台北

・展示

2015年６月27日～2015年８月23日　「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」郡山市立美術館、郡山
2015年10月17日～2015年11月23日　「武器をアートに」東京藝術大学、東京

・広報・社会連携活動

2015年５月27日　「シリーズのねらい」（連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――世界の『民芸』」開催にあたって）、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル１F
2015年７月22日　「武器をアートに――アフリカ・モザンビークにおける平和構築の営み」カレッジシアター『地球探検紀行』あべのハルカス近鉄本店
2015年８月８日　「イメージの力――みんぱくのコレクションが語るもの」郡山市立美術館、郡山

◎調査活動

・国内調査

2015年４月19日～４月20日―東京都美術館（博物館資料を通じた歴史表象の動向に関する調査）
2015年４月23日～４月26日―新潟日報メディアシップ、小俣集落、村上市町屋地区（民族藝術学会理事会、第31回大会に参加したのち、出羽街道・村上地区における文化遺産の継承の動向調査）
2015年５月20日―東京国立博物館（文化遺産についての研究動向調査）
2015年５月23日～５月24日―犬山国際観光センター“フロイデ”（日本アフリカ学会第52回学術大会参加によるアフリカ研究動向の調査）
2015年６月20日～６月22日―郡山市立美術館（巡回展「イメージの力」の設営及び展示表象の実践的研究）
2015年６月25日～６月28日―郡山市立美術館、野口英世記念館（日本国内におけるアフリカの文化遺産の表象に関する調査）
2015年７月31日～８月１日―九州国立博物館、福岡市美術館（国内におけるアフリカの文化遺産の表象に関する調査）
2015年８月７日～８月９日―郡山市立博物館（巡回展「イメージの力」に関する展示表象の実践的研究）
2015年10月13日～10月16日―東京藝術大学（「武器をアートに」展にあわせ、国内におけるアフリカ文化遺産の表象と受容に関する調査）

・海外調査

2015年９月９日～９月12日―台湾（「生活文化と博物館」の研究に向けての学術協力）
2015年11月25日～12月９日―イギリス（スイスにおいて開催される日本古美術展にみる日本観に関する基礎的研究及びイギリスにおける拠点博物館との学術ネットワーク構築と関連資料調査）
2016年１月７日～１月24日―ザンビア（ザンビアにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成についての調査）

◎大学院教育

主任指導教員（５人）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

文化遺産国際コンソーシアム アフリカ分科会会長、UCLA *African Arts* Consulting Editor、ICOM 大会招致準備委員

・非常勤講師

沖縄県立芸術大学「民族芸術学特論」（集中講義）

民族社会研究部

西尾哲夫［にしお　てつお］ 部長（併）教授

1958年生。**【学歴】**大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程言語学専攻修了（1984）、京都大学大学院文学研究科博士後期課程言語学専攻満期退学（1987）**【職歴】**東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第２研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2011）、国立民族学博物館副館長（2012）民族社会研究部長（2015）**【学位】**文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）**【専攻・専門】**言語学・アラブ研究 1）アラブ遊牧民の言語人類学的研究、2）アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究**【所属学会】**日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

［単著］

西尾哲夫

2013 『ヴェニスの商人の異人論――人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。

2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。

2007 『アラビアンナイト――文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2011　第28回田邉尚雄賞（東洋音楽学会）

1992　オリエント学会奨励賞

1992　新村出記念財団研究助成賞

1992　流沙海西奨学会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・**研究課題**

アラブ世界の言語社会的位相と文学伝統の変容

・**研究の目的、内容**

2010年、エジプト検察当局は、イスラーム系弁護士団体による「アラビアンナイト発禁処分申し立て」を「古くから読まれており芸術家にも影響を与えてきた」という理由で却下した。近世エジプトでは、都市部中流層の台頭などによる中間アラビア語の誕生にともない、中世シリアの伝承物語集に民間説話が付加されて現在のアラビアンナイトが成立した。この過程ではキリスト教徒も関与しており、挿絵入りエジプト系写本が新たに発見された。近世エジプト系写本の物語および言語分析を通し、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また、中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられるアラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

・**成果**

①著書として、『言葉から文化を読む――アラビアンナイトの言語世界』（フィールドワーク選書、臨川書店、2015）を刊行した。

②研究発表として、「アラブ世界の言語社会的位相と個人空間の再世界化」国立民族学博物館共同研究（代表者・斎藤剛・神戸大学准教授）（於・国立民族学博物館、2015年10月18日）をおこなった。また、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究推進事業」キックオフ・国際シンポジウム「中東における「民衆文化」の編成と「民衆」概念の再検討」において、「アラビアンナイトは民衆文学か？――アラブ世界の言語社会的位相からみた「民衆」概念」（主催・人間文化研究機構、於・国立民族学博物館、2016年２月27日）の発表をおこなった。

③一般向けの研究広報として、「なぜ「イスラムの語源は平和」という誤解が流布するのか？――マスコミと御用学者の功罪」（みんぱくウィークエンド・サロン、2015年５月31日）を講義した。また、毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」に「アラビアンナイト断章」と題して４回にわたって連載した。

④研究成果の社会還元として、劇団四季によるブロードウェイミュージカル「アラジン」の日本公演に協力した。

⑤科学研究費助成事業（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト――エジプト系伝承形成の謎を解く」（代表・西尾哲夫）による国内調査ならびに文献調査をおこなった。

◎出版物による業績

［単著］

西尾哲夫

2105 『言葉から文化を読む――アラビアンナイトの言語世界』212p.（フィールドワーク選書15）京都：臨川書店。［書評有：朝日新聞（2015年９月14日夕刊）］

［その他］

西尾哲夫

2015 「アラジン、世界を駆ける」劇団四季『ディズニー・アラジン（Broadway's New Musical Comedy）』公演パンフレット，pp.32-35，５月24日。

2015 「旅・いろいろ地球人　アラブの美徳」『毎日新聞』７月16日夕刊。

2015 「みんぱく　食の民族誌　考える舌㉓　砂漠のバター」『京都新聞』11月18日。

2016 「「砂漠の船」の乗り心地」『月刊みんぱく』40(1)：10-11。

2016 「旅・いろいろ地球人　アラビアンナイト断章①　写本をめぐる旅」『毎日新聞』１月７日夕刊。

2016 「旅・いろいろ地球人　アラビアンナイト断章②　戦火のシンドバッド」『毎日新聞』１月14日夕刊。

2016 「旅・いろいろ地球人　アラビアンナイト断章③　幻の木馬」『毎日新聞』１月21日夕刊。

2016 「旅・いろいろ地球人　アラビアンナイト断章④　墓がとりもつ縁」『毎日新聞』１月28日夕刊。

2016 「クレオパトラの眼　エジプト美女列伝第１回」『ベリーダンス・ジャパン』35：100-101，２月29日。

2016 展示図録解説「文字ハンター中西亮が遺したもの」『文字の博覧会――旅して集めた“みんぱく”中西コレクション』（LIXIL ギャラリー）pp.2-3，３月15日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年２月27日　「アラビアンナイトは民衆文学か？――アラブ世界の言語社会的位相からみた「民衆」概念」人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究推進事業」キックオフ・国際シンポジウム「中東における「民衆文化」の編成と「民衆」概念の再検討」（主催：人間文化研究機構，国立民族学博物館）

・共同研究会での報告

2015年10月18日　「アラブ世界の言語社会的位相と個人空間の再世界化」『個ー世界論：中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム』国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年５月31日　「なぜ『イスラムの語源は平和』という誤解が流布するのか？――マスコミと御用学者の功罪」第385回みんぱくウィークエンド・サロン研究者と話そう

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

特別共同利用研究員の研究指導教員（１名）

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト――エジプト系伝承形成の謎を解く」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「中東・北アフリカ地域における音文化の越境と変容に関する民族音楽学的研究」（研究代表者：水野信男・兵庫教育大学・名誉教授）・研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員、日本学術振興会科学研究費審査委員

・非常勤講師

京都大学文学部「アラブ語」

朝倉敏夫［あさくら　としお］―― 教授

1950年生。**【学歴】**武蔵大学人文学部社会学科卒（1974）、明治大学大学院政治経済学研究科修士課程修了（1977）、明治大学大学院政治経済学研究科博士後期課程満期退学（1985）**【職歴】**国立民族学博物館第４研究部助手（1988）、国立民族学博物館第１研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2006）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2008）国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2010）**【学位】**政治学修士（明治大学大学院政治経済学研究科 1977）**【専攻・専門】**社会人類学、韓国社会論**【所属学会】**日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、韓国文化人類学会

【主要業績】

［単著］

朝倉敏夫

2005 『世界の食文化１　韓国』東京：社団法人農山漁村文化協会。

［編著］

朝倉敏夫編

2003 『「もの」から見た朝鮮民俗文化』東京：新幹社。

［共編］

朝倉敏夫・嶋 陸奥彦編

1998 『変貌する韓国社会――1970～80年代の人類学調査の現場から』東京：第一書房。

【受賞歴】

2013　大韓民国玉冠文化勲章

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「食」の文化人類学――日韓比較

・研究の目的、内容

韓国の食文化について、日本の食文化との比較を通して考察する。

この50年間の日韓における食文化の変化を概観し、日韓における食の世界について、食器、台所といった物質文化とともに、食の思想、食と人生儀礼、食と歳時風俗など、食の背景にある精神文化について考察した。

・成果

2015年度に開催した特別展「韓日食博――わかちあい・おもてなしのかたち」において、その研究成果を展示するとともに、図録として『韓国食文化読本』を刊行した。

展示および図録の作成にあたって、韓国国際文化財団、日韓文化交流基金からの助成を受けた。

◎出版物による業績

［論文］

朝倉敏夫

2015 『コリアン社会の変貌と越境』228p,（フィールドワーク選書17）京都：臨川書店。

朝倉敏夫・林史樹・守屋亜記子

2015 『韓国食文化読本』224p, 大阪：国立民族学博物館。

［その他］

朝倉敏夫

2015 「みんぱく　食の民族誌　考える舌⑧　韓国の『トンカス』」『京都新聞』７月８日。

2015 「『韓日食博』のいきさつとねらい」『月刊みんぱく』3(9)：2-3。

2015 「朝鮮半島の文化」ビデオテーク作品の制作と焼酎のアルコール度数」『みんぱく e-news』171号, ９月１日。

2015 「『食』の文化遺産――和食とキムジャン」『月刊みんぱく』39(10)：16-17。

2015 「食がつなぐ日本と韓国の50年」『栄養と料理』81(10)：156-157。

2015 「旅・いろいろ地球人　韓国の食①　赤だけでない料理いろいろ」『毎日新聞』10月１日。
2015 「旅・いろいろ地球人　韓国の食②　オノマトペ」『毎日新聞』10月８日。
2015 「旅・いろいろ地球人　韓国の食③　混ぜて分かちあう」『毎日新聞』10月15日。
2015 「旅・いろいろ地球人　韓国の食④　ハングル」『毎日新聞』10月22日。
2015 「旅・いろいろ地球人　韓国の食⑤　キムチとキムウチ」『毎日新聞』」10月29日。
2015 「みんぱく世界の旅　韓国①　似ているからこそちがいがわかる」『毎日小学生新聞』11月14日。
2015 「みんぱく世界の旅　韓国②　今年もそろそろ『キムジャン前線』」『毎日小学生新聞』11月21日。
2015 「みんぱく世界の旅　韓国③　心身共にきたえられる韓国の格闘技」『毎日小学生新聞』11月28日。
2015 「みんぱく世界の旅　韓国④　給食でいろいろな試み」『毎日小学生新聞』12月５日。
2015 Minpaku's Joint Research Projects on Korean Society: History and Accomplishments, *MINPAKU Anthropology Newsletter* 41: 1–2.
2015 Food Culture in Korea and Japan: The Tastes of NANUM and OMOTENASHI, *MINPAKU Anthropology Newsletter* 41: 13.
2015 「『韓日食博』におけるカリグラフィー・ワークショップ」『日韓文化交流基金NEWS』76：7。
2016 「『ケンカ』のすすめ」『月刊みんぱく』40(3)：10–11。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

［ビデオテーク］

2015　江原大学校チーム番組番号 2813, 8031『江原道のソバ料理』
2015　安東大学校チーム番組番号 2814, 8032『自動車告祀：交通安全を願う韓国人』
2015　梨花大学校チーム番組番号 2815, 8033『韓国の初誕生祝い』

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2015年９月19日　朝倉敏夫・大野木啓人・佐野睦夫・金炅均「博物館は食をどう展示するか」第448回みんぱくゼミナール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年８月30日　「日本の焼肉文化考」第396回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう
2015年11月８日　「石毛さんに聞く――日韓の食文化研究」第404回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・研究講演

2015年４月10日　「韓国人にとってご飯とは何か」フロンティア3000研究会
2015年５月８日　「食文化って何？――その研究について」兵庫県立伊丹高校スーパーグローバルハイスクール事業
2015年５月14日　「韓国の食文化――モノの見方」京都学園高校
2015年５月20日　「食文化領域における体系的な高等教育の可能性と必要性――管見的展望」立命館大学
2015年６月９日　「和食と食文化研究」神戸シルバーカレッジ
2015年７月31日　「食文化を通して見る韓日比較――ご飯の食べ方」韓国文化院、東京
2015年９月４日　「民博夜話 韓国のごはん」吹田歴史文化まちづくりセンター浜屋敷、吹田
2015年９月13日　みんぱく × MBS ラジオ presents「『韓日食博』を極める！」国立民族学博物館
2015年９月19日　ワークショップ「食のオノマトペとカリグラフィー」国立民族学博物館エントランスホール
2015年９月28日　「『韓日食博――わかちあい・おもてなしのかたち』への思い」全日本博物館学会2015年度第３回研究会・JMMA 近畿支部第３回研究会
2015年10月20日　「“薬食同源”の韓国料理」産経新聞ウェーブ
2015年10月27日　「コメント『医食同源――東洋と西洋の視点』」ル・コルドンブルー × 国立民族学博物館 × 立命館大学　シンポジウム「食の未来」立命館大学
2015年11月26日　「日韓の食文化比較」総研大－UST 共同セミナー
2015年12月２日　「韓国のお菓子事情」千里文化財団佐賀研修旅行

◎調査活動

・海外調査

2015年４月20日～４月22日―大韓民国（特別展「韓日食博」の事前協議）

2015年７月９日～７月12日―大韓民国（「朝鮮半島の文化」に関する映像作品の作成についての研修会に参加）
2015年７月26日～７月28日―大韓民国（特別展「韓日食博」資料点検・搬送）
2015年10月15日～10月17日―中華人民共和国（第５回亜洲食学論壇に参加及び第６回開催にかかる事前協議）
2015年11月19日～11月21日―大韓民国（特別展「韓日食博」資料の返却及び点検）
2015年12月７日～12月12日―大韓民国（韓国国立民俗博物館特別展開幕式典へ参加及びフォーラム型ミュージアムにかかる協議）
2016年２月４日～２月６日―大韓民国（韓国国立民俗博物館における展示方法等に関する調査研究）
2016年２月15日～２月17日―大韓民国（「食の展示」にかかる会議に参加）
2016年２月20日～２月23日―大韓民国（韓国国立民俗博物館においてフォーラム型情報ミュージアムにかかる調査研究）
2016年３月10日～３月12日―大韓民国（韓国国立民俗博物館からの特別展貸し出し資料の返却作業）

◎大学院教育

・主任指導教員

２人

・特別共同利用研究員の研究指導教員

１人

・論文審査

博士論文審査委員（１件）、予備審査委員（１件）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員

高麗美術館理事

・非常勤講師

神戸女子大学「衣・食・住Ⅰ」、「世界の食文化」

印東道子［いんとう　みちこ］―――― 教授

【学歴】東京女子大学文理学部史学科卒（1976）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部修士課程修了（1982）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部大学院博士課程修了（1988）**【職歴】**東京女子大学文理学部史学科研究助手（1976）、北海道東海大学国際文化学部助教授（1988）、北海道東海大学国際文化学部教授（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2004）、放送大学客員教授（2006）**【学位】**Ph.D.（オタゴ大学人類学部大学院博士課程 1989）、M.A.（オタゴ大学人類学部大学院修士課程 1982）**【専攻・専門】**オセアニア先史学・民族学 1）オセアニアの土器文化、2）島嶼環境における人間居住**【所属学会】**日本オセアニア学会、日本人類学会、日本考古学協会、New Zealand Archaeological Society、Indo-Pacific Prehistory Association

【主要業績】

［単著］

印東道子

2014 『南太平洋のサンゴ島を掘る――女性考古学者の謎解き』（フィールドワーク選書４）京都：臨川書店。
2002 『オセアニア　暮らしの考古学』（朝日選書715）東京：朝日新聞社。

［編著］

印東道子編著

2013 『人類の移動誌』京都：臨川書店。

【受賞歴】

2006　大同生命地域研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

島嶼環境への人類の移動と適応

・研究の目的、内容

1）ファイス島で行ってきた発掘調査と出土遺物の化学分析、骨類分析などの結果がほぼ出そろったので、総合報告書の作成を継続して行っている。

2）科学研究費助成事業（基盤研究（B）（海外））「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表者：小野林太郎）の研究分担者として、主としてインドネシア多島海地域とオセアニアの物質文化の比較研究を行った。

3）共同研究会「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究：資源利用と物質文化の時空間比較」（研究代表者：小野林太郎）において、海域世界を特徴とするオセアニアへ拡散した初期の人々の物質文化がどのように変化したかを海洋適応との関連で研究した。

・成果

1）オセアニアへの人類の移動を多角的に検討する国際研究集会 “Integrating inferences about our past: New findings and current issues in the peopling of the Pacific and South East Asia.”が、ドイツのマックスプランク研究所で開催され、‘Cultural roll of prehistoric coral islanders in Micronesia.’と題した招待発表を行った（於 Jena　2015年６月22日-23日）。

2）科学研究費助成事業（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表者：松村博文）の研究成果をColonization and/or cultural contacts: A discussion of the western Micronesian case.（In P. Piper, H. Matsumura and D. Bulbeck（eds.), *New Perspectives in Southeast Asian and Oceanian Prehistory*）としてまとめ、オーストラリア国立大学から本年中に出版予定である。

3）日本オセアニア学会第33回研究大会において「ファイス島からみたカロリン諸島の先史文化」と題する発表を行った。

4）その他、民博が共催しているカレッジシアターやナレッジキャピタルでオセアニアにおける調査研究に関する発表を行い、京都新聞紙上で連載されている民博「考える舌」シリーズ、および『毎日小学生新聞』で連載されている「みんぱく世界の旅」シリーズに寄稿した。

◎出版物による業績

［その他］

印東道子

2015 「みんぱく世界の旅　オセアニア①　特殊なカヌーで大航海」『毎日小学生新聞』４月４日。

2015 「みんぱく世界の旅　オセアニア②　島の生活とココヤシ」『毎日小学生新聞』４月11日。

2015 「みんぱく世界の旅　オセアニア③　石で蒸し焼きウム料理」『毎日小学生新聞』４月18日。

2015 「みんぱく世界の旅　オセアニア④　ちょっと変わった魚つり」『毎日小学生新聞』４月25日。

2015 「世界のうちわ」『月刊みんぱく』39(8)：10-11。

2016 「みんぱく食の民族誌　考える舌㉗　変容するオセアニアの食卓」『京都新聞』１月13日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年６月22日～６月23日　‘Cultural roll of prehistoric coral islanders in Micronesia.’ International Symposium “Integrating inferences about our past: New findings and current issues in the peopling of the Pacific and SouthEast Asia.” Presented at an Max Planck Institute for the Science of Human History. Jena, Germany

2015年７月１日　「メイド イン オセアニア――素材を生かした機能美」連携講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――世界の民芸」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル１F

2016年２月24日　「南太平洋のサンゴ島を掘る――女性考古学者の謎解き」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

2016年３月18日　「ファイス島からみたカロリン諸島の先史文化」日本オセアニア学会第33回研究大会発表、マホロバ・マインズ三浦

・広報・社会連携活動

2015年６月26日　「オセアニアの島々に渡った人々」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年７月３日　「巨石像モアイとイースター島の人びと」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（３人）

特別共同利用研究員の研究指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表者：松村博文）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（海外））「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表者：小野林太郎）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本学術会議第23期連携会員、日本オセアニア学会評議員、日本人類学会評議員、大同生命地域研究賞審査委員、りそなアジア・オセアニア財団環境事業選考委員

韓 敏［ハン　ミン］―――― 教授

【学歴】中国吉林大学外国語学部日本語科卒（1983）、中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科日本文学専攻修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1989）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了（1993）**【職歴】**武蔵大学人文学部非常勤講師（1992）、東京大学教養学部客員研究員（1994）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）**【学位】**学術博士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1993）、学術修士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科1989）、文学修士（中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科 1986）**【専攻・専門】**文化人類学、現代中国の漢族研究**【所属学会】**日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

韓 敏

2015　『大地の民に学ぶ　激動する故郷、中国』225p.（フィールドワーク選書18）京都：臨川書店

Han, M.

2001　*Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform*（Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology. 313p.

2007　『回応革命与改革――皖北李村的社会変遷与延続』311p.（陸益龍・徐新玉訳）南京：江蘇人民出版社。

［編著］

韓 敏編

2009　『革命の実践と表象――現代中国への人類学的アプローチ』540p.　東京：風響社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国の社会と文化の再構築に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、聖地作りと英雄崇拝に焦点を当てることにより、国家と社会の多様な関係性を考察し、文化の連続性と非連続性のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

1）引き続き共同研究「聖地の政治経済学――ユーラシア地域大国における比較研究」（代表者：杉本良男）の分担者として、ユーラシアという枠組みの中で、近代中国の聖地作りのプロセスとメカニズムを明らかにする。

2）科研「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（代表者：塚田誠之）の分担者として、漢族の英雄崇拝の変遷と現状を調査し、歴史を資源化する行為の諸主体間のせめぎあいとアイデンティティの再構築の関連性を調べる。

3）中国の社会と文化の再構築について、終了した機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の成果を執筆し、代表者として論文集を編集する。

・成果

1）アジア歴史研究助成（JFE財団）により、「中国東北地区の民族雑居地域における民族関係をめぐる社会史的考察」（代表者：李海燕）の分担者として、８月12日～17日シボ族の集中している瀋陽市瀋北新区で調査を行い、シボ家廟というシボ族の民族聖地の実態を考察した。

2）８月３日～９日に科学研究費助成事業「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（基盤研究Ａ　代表者：塚田誠之）の分担者として浙江省杭州市で、南宋の英雄、岳飛の遺骨が埋葬されているとされる岳廟、当廟の運営にあたる行政部門、浙江大学岳飛研究会、道教の大資福寺などを訪ね、英雄崇拝の変遷と現状を調べた。

3）終了した機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」の成果について、代表者として論文集、『Continuity and Change of Chinese Culture: Family, Ethnicity and State under Globalization』（HAN Min ＆ KAWAI Hironao）を編集して、アメリカのBridge21 Publications, LLC出版社に提出した。同機関研究の日本語版の編集も行った。

また、国家・社会の多様な関係性や文化の連続性・非連続性について、以下の著書と論文も刊行した。

韓 敏著『大地の民に学ぶ　激動する故郷、中国』フィールドワーク選書18　225p. 京都：臨川書店（2015.11.30）

韓 敏 「項羽の歴史記憶の資源化と観光開発」塚田誠之（編）『民族文化資源とポリテイクス――中国南部地域の分析から』pp.353-374　東京：風響社（2016.03.30）［査読有］

日本の文化人類学とグローバル化について論文を執筆した。

2015 Using Multiple Languages to Make Japanese Anthropology More Relevant to the World. The 2nd JASCA International Symposium, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 16: 121-130, Tokyo: Japanese Society of Cultural Anthropology.

◎出版物による業績

［単書］

韓 敏

2015 『大地の民に学ぶ――激動する故郷、中国』（フィールドワーク選書18）225p. 京都：臨川書店。［書評有］

［論文］

韓 敏

2016 「項羽の歴史記憶の資源化と観光開発」塚田誠之編『民族文化資源とポリテイクス――中国南部地域の分析から』pp.353-374, 東京：風響社。［査読有、共同研究の成果］

Han, M

2015 Using Multiple Languages to Make Japanese Anthropology More Relevant to the World. The 2nd JASCA International Symposium, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 16: 121-130, Tokyo: Japanese Society of Cultural Anthropology.

［その他］

韓 敏

2015 「旅・いろいろ地球人　ミュージアム④　月によせる中国人の思い」『毎日新聞』７月30日夕刊。

2015 「中国の農民画――漁家楽（漁師の喜び）」『みんぱく e-news』170号, ８月１日。

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌⑲　中国のシュウマイ考える舌」『京都新聞』10月14日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年12月12日　‘Using Multi-languages to Make Japanese Anthropology More Relevant to the World’ シンポジウム：国際化／グローバル化する文化人類学と日本（The Internationalization/Globalization of Cultural Anthropology and Japan）日本文化人類学会主催、首都大学東京国際交流会館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年６月28日　「伝承される伝統中国の冠婚葬祭」第388回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2015年９月４日　「漢字文化の担い手――日本と中国の創意と交流」大阪高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年９月11日　「『今年の漢字』からみた中国の社会変化」大阪高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎調査活動

・海外調査

2015年８月３日～８月９日―中華人民共和国（民族英雄・岳飛の祭祀についての調査）

2015年８月12日～８月17日―中華人民共和国（瀋陽における錫伯家廟からみる文化伝承及びシボ（錫伯）族・満族・漢族の交流についての調査）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

主任指導教員（２人）、副指導教員（２人）

特別共同利用研究員の研究指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

アジア歴史研究助成（JFE 財団）「中国東北地区の民族雑居地域における民族関係をめぐる社会史的考察――漢・満・モンゴル・朝鮮族雑居地域でのフィールドワークを通じて」（代表者：李海燕）研究分担者（８月12日～17日シボ族の集中している瀋陽市瀋北新区で調査を行い、シボ家廟というシボ族の民族聖地の実態を考察した。）

小長谷有紀［こながや　ゆき］――教授（併）

1957年生。**【学歴】**京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）**【職歴】**京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第１研究部助手（1987）、国立民族学博物館第１研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009–2011）、人間文化研究機構理事（2014）**【学位】**文学修士（京都大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**人文学**【所属学会】**日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

［単著］

小長谷有紀

2014　『人類学者は草原に育つ――変貌するモンゴルとともに』（フィールドワーク選書９）224p.　京都：臨川書店。［書評有］

［編著］

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005　『中国の環境政策「生態移民」――緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』京都：昭和堂。［書評有］

小長谷有紀編

2004　『モンゴルの二十世紀――社会主義を生きた人びとの証言』（中公叢書）東京：中央公論新社。［書評有］

【受賞歴】

2015　モンゴル国科学アカデミー　名誉博士

2013　紫綬褒章

2013　教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章（モンゴル国教育文化科学省）

2009　大同生命地域研究奨励賞

2007　モンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴルにおける社会主義的近代化

・研究の目的、内容

＜目的＞これまで、「モンゴルにとって20世紀とはなんであったか？」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化」とはなんであったか？」という問いへと問題を鋭角に転換して、各個研究ではモンゴルおよび中国内モンゴル自治区についての事例研究を目的とする。

＜内容＞社会主義的近代化を体現した当事者たちによるナラティブ（語り）を収集し、それらを多声的に構成して近代化という時空間に関するモノグラフ（民族誌的歴史）を描くことによって、正当な歴史記述とは異なるテクストをナラティブから構成する。

・成果

1）すでに実施した口述史資料について、モンゴル語、邦訳、英訳を整備し、刊行を準備した。

2）諸地域との比較研究の成果を、中央アジア・北アジア展示の新構築に反映させた。

3）科研で収集したポスター資料について整理し、刊行を準備した。

4）2014年に実施した国際シンポジウムの成果を英語論文集として刊行した。

◎出版物による業績

［共編著］

Konagaya, Y. and O. Shaglanova（eds.）

2016 *Northeast Asian Borders: History, Politics, and Local Societies*（Senri Ethnology Studies 92). Osaka: National Museum of Ethnology.

［共著］

鈴木康平・上條隆生・JAMSRAN Undarmaa・小長谷有紀・田村憲司

2015 「モンゴルの森林ステップと典型ステップにおける耕作放棄地の植生回復」植生学会誌 *Vegetation Science* 32：37-48，植生学会。［植生学会論文賞受賞］

［その他］

小長谷有紀

2015 「梅棹忠夫探訪記⑬　進化し続けるアーカイブズ」『ミネルヴァ通信「究」』49：12-15。

2015 「みんぱく、こぼれ話⑨　アジア生まれの博物館をつくろう」『TOYRO BUSINESS』168：30。

2015 「北京の青空」総合地球環境学研究所　中国環境問題研究拠点『天地人』26：2-3。

2015 「梅棹忠夫探訪記⑭　幻のベストセラー「人類の未来」」『ミネルヴァ通信「究」』50：12-15。

2015 「山にはじまり、山におわる山をたのしむ」pp.432-439，東京：山と渓谷社。

2015 「家畜化と搾乳、起源を追う」（京都大学公開シンポで活発議論）『京都新聞』 6 月 5 日。

2015 「梅棹忠夫探訪記⑮　生涯の兄貴分――吉良竜夫」『ミネルヴァ通信「究」』51：12-15。

2015 「梅棹忠夫探訪記⑯　ヒマラヤへの執念」『ミネルヴァ通信「究」』52：12-15。

2015 「みんぱく、こぼれ話⑩　『みんぱくの全国巡回いたします！』」『TOYRO BUSINESS』169：30。

2015 「梅棹忠夫探訪記⑰　山に始まり、山に終わる」『ミネルヴァ通信「究」』53：12-15。

2015 「梅棹忠夫探訪記⑱　未来を語る人びと」『ミネルヴァ通信「究」』54：12-15。

2015 「みんぱく、こぼれ話⑪　「研究倫理を学ぶはずのビデオで、この世の不条理を学ぶ」」『TOYRO BUSINESS』170：30。

2015 「梅棹忠夫探訪記⑲　『日本の成功体験「万博」からみんぱくへ』」『ミネルヴァ通信『究』』55：12-15。

2015 書評「北川秀樹・窪田順平編著『流域ガバナンスと中国の環境政策』「中国における水環境問題との奮闘を知る」」東方　416：22-25，大阪：東方書店，10月 5 日。

2015 書評「クロード・レヴィ＝ストロース著『野生の思考』」vesta №100　公益財団法人 味の素食の文化センター　p.9，11月 1 日。

2015 「梅棹忠夫探訪記⑳　エスペラントの夢」『ミネルヴァ通信「究」』56：12-15。

2015 「梅棹忠夫探訪記㉑　『文明の生態史観』の誕生」『ミネルヴァ通信第「究」』57：12-15。

2015 「梅棹忠夫アーカイブスにおけるエスペラント関連資料」『エスペラント』一般財団法人日本エスペラント協会83-12：12-13，12月 1 日。

2016 「みんぱく、こぼれ話⑫ 『みんぱくを国際交流の拠点に！』」『TOYRO BUSINESS』171：30。

2016 「梅棹忠夫探訪記㉒　梅棹忠夫の女問題」『ミネルヴァ通信「究」』58：12-15。

2016 「梅棹忠夫探訪記㉓ 『日本探検』」『ミネルヴァ通信「究」』59：12-15。

2016 「梅棹忠夫探訪記（最終回）　最期のデザイン」『ミネルヴァ通信「究」』60：12-15。

2016 「みんぱく、こぼれ話⑬ 『中央・北アジア展示場リニューアル・オープン』」『TOYRO BUSINESS』172：30。

［映像］

小長谷有紀監修

2016 『南シベリアに住むトゥバの人々　みんぱく映像民俗誌　第20集』国立民族学博物館

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2015年９月15日　「日本国立民族学博物館におけるモンゴル研究蓄積」モンゴル科学アカデミー、ウランバートル

2015年11月14日　「チベットから学ぶ――モンゴル学界の新しい動きから」第63回日本チベット学会大会、四天王寺大学

2015年12月11日　「食のコミュニケーション」比叡会議、比叡ホテル

◎上記以外の研究活動

2015年４月10日、24日、５月15日、29日、６月５日、９日　講師　第35期 KEIBUN 文化講座「モンゴル遊牧文化いまむかし」旧大津公会堂

2015年７月23日　講師「世界で活躍する女性たち」ソロプチミスト　ユースホーラム2015　国立民族学博物館

2015年11月21日　コメンテーター　日本モンゴル学会2015（平成27）年度秋季大会、国立民族学博物館

◎社会活動・館外活動等

日本モンゴル学会理事、生き物文化誌学会理事、NPO 法人モンゴルパートナーシップ研究所理事長、日本学術会議第一部連携会員、文化審議会委員、中央環境審議会自然環境部会臨時委員、国立大学法人京都大学経営協議会委員、東瀬戸内海文化圏「世界遺産化」有識者会議委員、JRA 馬事文化賞選考委員等

關　雄二［せき　ゆうじ］―――― 教授

1956年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1983）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院 1982）**【専攻・専門】**アンデス考古学、文化人類学 1）古代アンデス文明の形成過程、2）現代ペルーの文化行政、3）考古学と国民国家形成、4）世界遺産と国別の文化遺産との相互関係**【所属学会】**日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

【主要業績】

［単著］

関 雄二

2010 『アンデスの考古学　改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス――権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

［共編］

大貫良夫・加藤泰建・関 雄二編

2010 『古代アンデス――神殿から始まる文明』（朝日選書863）東京：朝日新聞出版。

【受賞歴】

2015　ペルー共和国文化功労者表彰

2008　濱田青陵賞

2008　科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）
2008　クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈を行う。具体的には、ペルー北部山中パコパンパ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C. 2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費助成事業基盤研究（S）をあてた。

・成果

2011年度から科学研究費助成事業（基盤研究（S））を取得し、フィールドワークを含め、計画通りに研究を推進した。とくに、発掘調査においては、金製品を副葬した「ヘビ・ジャガー神官の墓」を発見し、文明初期における権力者の存在を確認することができた。成果としては、『古代文明アンデスと西アジア　神殿と権力の生成』（朝日新聞出版）を編集し出版したほか、論文を３本出版した。このほか内外の国際学会、研究集会、シンポジウムにおいて８本の研究発表をおこない、55º Congreso Internacional de Americanistas（第55回国際アメリニスト会議 2015.7.12-17）では Richard Burger とともにシンポジウム Tradiciones tempranas de arquitectura pública de los Andes Centrales（中央アンデスにおける公共建造物の初期伝統）を、II Congreso Nacional de Arqueología（第２回ペルー考古学者会議）ではSimposio “Conmemoritavo por el centenario del nacimiento de Seiichi Izumi”（泉靖一生誕100周年記念シンポジウム）を組織した。

◎出版物による業績

［編著］

関 雄二

2015 『古代文明アンデスと西アジア　神殿と権力の生成』東京：朝日新聞出版。［書評有］

［論文］

関 雄二

2015 「古代アンデスにおける神殿の登場と権力の発生」関 雄二編『古代文明アンデスと西アジア　神殿と権力の生成』pp.125-166, 東京：朝日新聞出版。

2015 「アンデスと西アジア　揺れ動く古代文明への眼差し」関 雄二編『古代文明アンデスと西アジア　神殿と権力の生成』pp.3-39, 東京：朝日新聞出版。

Seki, Y.

2016 Participation of the Local Community in Archaeological Heritage Management in the North Highlands of Peru. In Anne P. Underhill and Lucy C. Salazar (eds.), *Finding Solutions for Protecting and Sharing Archaeological Heritage Resources*, pp.103-119. Cham; Heidelberg; New York; Dordrecht; London: Springer.［査読有］

［その他］

関 雄二

2015 「わが友ウーゴ津田」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』51：3, 東京：アムプロモーション。

2015 「泉靖一生誕100年　①生い立ちとアンデス調査前夜」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』51：14-15, 東京：アムプロモーション。

2015 「帰納的アプローチと演繹的アプローチの統合　アンデス考古学からの視点」『民博通信』150：4-9, 大阪：国立民族学博物館。

2015 「20年の意味」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』52：4, 東京：アムプロモーション。

2015 「ヘビ・ジャガー神官の墓」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』52：5-9, 東京：アムプロモーション。

2016 「みんぱく世界の旅　ペルー①　葦舟を使う伝統の漁法」『毎日小学生新聞』１月16日。

2016 「みんぱく世界の旅　ペルー②　お祭りにかかせないチチャ・デ・ホーラ」『毎日小学生新聞』１月23日。

2016 「みんぱく世界の旅　ペルー③　１週間続くパコパンパ村の祭り」『毎日小学生新聞』１月30日。
2016 「みんぱく食の民族誌　考える舌㉙　古代文明と移民の食が融合　ペルーのクレオール料理」『京都新聞』２月３日。
2016 「みんぱく世界の旅　ペルー④　アルパカ・リャマ・モルモット……さまざまな家畜」『毎日小学生新聞』２月６日。
2016 「雲上の民チャチャポヤの足跡」『季刊民族学』155：49-64。
2016 「王の名の使い道　インカ帝国」 岩波書店辞典編集部編『世界の名前』pp.108-110、東京：岩波書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年７月14日 ‘Arquitectura pública y el establecimiento del poder en la sociedad formativa de Pacopampa en la sierra norte del Perú.’（Yuji Seki y Daniel Morales Chocano）55° Congreso Internacional de Americanistas “Conflicto, paz y construcción de identidades en las Américas”, Universidad Francisco Gavidia, San Salvador, El Salvador

2015年８月４日 ‘Aparición de la arquitectura ceremonial: Desde una perspectiva de las excavaciones en Kotosh.’（Yuji Seki）II Congreso Nacional de Arqueología, Biblioteca Nacional, Lima, Perú

2015年８月６日 ‘El porceso de sello de la Plaza Cuadrangular Hundida ubicada en la Tercera Plataforma de Pacopampa, sitio arqueológico del Periodo Formativo en Cajamarca.’（Diana Alemán Paredes, Santiago Andia Roldán, Juan Pablo Villanueva, Megumi Arata, Nagisa Nakagawa, Yuji Seki y Daniel Morales Chocano）II Congreso Nacional de Arqueología, Biblioteca Nacional, Lima, Perú

2015年12月６日 「同位体分析によるラクダ科動物飼育の検証：ペルー北部高地パコパンパ遺跡の事例」（瀧上 舞、鵜澤和宏、関 雄二、ダニエル・モラーレス、米田 穣）古代アメリカ学会第20回研究大会、東京大学理学部

2015年12月６日 「ペルー北高地パコパンパ遺跡における『ヘビ・ジャガー神官の墓』の発見」（関 雄二、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、ダニエル・モラーレス）古代アメリカ学会第20回研究大会、東京大学理学部

2015年12月６日 「パコパンパ遺跡の儀礼的コンテキストから出土した動物骨資料：饗宴行為の動物考古学的復元」（鵜澤和宏、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、長岡朋人、関 雄二）古代アメリカ学会第20回研究大会、東京大学理学部

2015年12月６日 「アンデス形成期パコパンパにおける饗宴」（中川 渚、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、関 雄二、ダニエル・モラーレス）古代アメリカ学会第20回研究大会、東京大学理学部

2015年12月６日 「ペルー、パコパンパ遺跡から出土した人骨の生老病死の復元」（長岡朋人、森田 航、関 雄二、鵜澤和宏、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、マウロ・オルドーニェス、ディアナ・アレマン、ダニエル・モラーレス）古代アメリカ学会第20回研究大会、東京大学理学部

2016年１月30日 「パコパンパ遺跡における建築の変遷からみた権力形成」（関 雄二）公開シンポジウム「アンデス文明初期の神殿と権力生成」キャンパス・イノベーションセンター東京

・広報・社会連携活動

2015年４月18日 「アンデスで神殿はどのように生まれたのか？」アンデス文明研究会

2015年11月11日 「インカ帝国と首都クスコ、マチュ・ピチュ遺跡」公民館講座　テーマ「南米、アンデス文明の世界遺産を訪ねる」川西市清和台公民館

2015年11月13日 「マチュ・ピチュ遺跡の発見――文化遺産と政治」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年11月14日 「古代文明と権力」（古代文明にみる権力の誕生　第１回）朝日カルチャーセンター新宿

2015年11月24日 「アンデスの文化遺産の保存と活用」阪神シニアカレッジ

2015年11月25日 「ペルー、ナスカの地上絵の謎に迫る」公民館講座　テーマ『南米、アンデス文明の世界遺産を訪ねる』川西市清和台公民館

2015年12月２日 「南米アンデス文明における金の利用」連続講座『みんぱく × ナレッジキャピタル――世界

の天然素材』、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル１F

2016年１月22日　「アンデスの古代遺跡と暮らす――文化遺産と現代社会」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2016年３月３日　「コンソーシアムの意義と協力活動の課題」第18回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会『文化遺産保護の国際動向』、主催：文化遺産国際協力コンソーシアム、東京文化財研究所

・番組監修

2016年３月20日　TBS「世界遺産　マチュピチュ歴史保護区（ペルー）」監修（2016.3.20　18：00～18：30放送）

・海外調査

2015年４月４日～４月13日―ペルー（ペルー国文化省主催国際会議「先スペイン期ペルーの研究最前線」に出席）

2015年６月24日～10月11日―ペルー、エルサルバドル（中央アンデス地帯における発掘調査および国際会議・研究集会に出席し研究発表をおこなう）

2016年２月５日～２月26日―ペルー、スペイン（パコパンパ発掘調査出土遺物の分析および保存遺構のモニタリング、バルセロナ自治大学研究者と国際シンポジウムの成果報告の打ち合わせ）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（３人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（S））「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、ペルー全国学長会議編集局理事、ペルー国クントゥル・ワシ文化協会（NPO）クントゥル・ワシ博物館監査役、アンデス文明研究会顧問、金沢大学国際文化資源学研究センターアドバイザー

・非常勤講師

熊本大学　集中講義「歴史資料学特殊講義Ｂ」

MATTHEWS, Peter Joseph［マシウス、ピーター・ジョセフ］――教授

1959年生。**【学歴】**オークランド大学卒（1981）、オークランド大学大学院修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院博士課程修了（1990）**【職歴】**科学技術庁特別研究員（農水省野菜茶業試験場）（1990）、日本学術振興会特別研究員（京都大学理学部）（1993）、国立民族学博物館第４研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）**【学位】**Ph. D.（オーストラリア国立大学 1990）、M. Sc.（オークランド大学 1984）**【専攻・専門】**先史学、民族植物学**【所属学会】**Society for Economic Botany, Indo-Pacific Prehistory Association, Society of Writers, Editors and Translators, International Aroid Society, European Association of Science Editors, World Archaeology Congress, Royal Society of New Zealand

【主要業績】

［単著］

Matthews, P. J.

2014　*On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History*（Senri Ethnological Studies 88）. Osaka: National Museum of Ethnology.

［編著］

Spriggs, M., D. Addison and P. J. Matthews（eds.）

2012 *Irrigated Taro*（*Colocasia esculenta*）*in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historica Perspectives*（Senri Ethnological Studies 78）. Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Ahmed, I., P. J. Matthews, P. J. Biggs, M. Naeem, P. A. McLenachan, and P. J. Lockhart.

2013 Identification of chloroplast genome loci suitable for high-resolution phylogeographic studies of *Colocasia esculenta*（L.）Schott（Araceae）and closely related taxa. *Molecular Ecology Resources* 13（5）, 929-937.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1. Wild Taro Research Project（Matthews project）
2. Conservation of Traditional Plant Knowledge Among Ethnic Minorities in Marginal Areas, and Assessment of the Impacts of Local and Global Development. Collaborative research project led by Kazuo Watanabe, Tsukuba University.
3. Natural and Cultural History of the Paper Mulberry（*Broussonetia papyrifera*）in Asia and the Pacific（Matthews project）.
4. George Brown Collection Info-Forum Project（2014-15）. Project leader: Isao Hayashi, National Museum of Ethnology.

・研究の目的、内容

The main focus points for 2015 were（a）further studies of taro and its relatives（Araceae）in Southeast Asia,（b）research related to the George Brown Collection held at the National Museum of Ethnology, and（c）preparation for the 8th World Archaeology Congress, Kyoto（FY 2016）. For the Congress, I was appointed co-organiser for the Art and Archaeology theme, and began preparation with the theme co-organisers of an exhibition to be held in Kyoto during the Congress（"Garden of Fragments"）.

・成果

1. Wild Taro Research Project

（a）Samples of *C. formosana* from Taiwan have been preserved at the Field Sciences Laboratory, Minpaku, for future analysis together with colleagues in Taiwan.

（b）In 2013, new DNA sequence data was obtained for chloroplast genome loci using samples of *Colocasia esculenta* and *Alocasia macrorrhizos*（central-southern Philippines）. In 2014, new field samples of *C. formosana* were obtained in Taiwan. Discussion of these field surveys and planning for analysis continued.

2. Conservation of Traditional Plant Knowledge.

My focus here is on ethnobotanical field studies of edible aroids and their wild relatives in Northeast India and elsewhere in Southeast Asia. In addition to conducting fieldwork supported by the Project, Dr. Matthews gave lectures on various occasions while supported by the Project and the National Museum of Ethnology.

In July 2015, I gave a presentation at the 15th Int. Conf. of the European Association of Southeast Asian Archaeologists, Paris. In Oct 2015, I visited the office of Bioversity International in New Delhi, and the Central Tuber Crops Research Institute（CTCRI）in Trivandrum, Kerala, in order to discuss possible future research collaborations. I also carried out further field surveys in Assam, and spoke at a G. L. Choudhury College in Barpeta, Assam.（Travel supported by Watanabe Project）. In Dec. 2015, I visited the United Kingdom, and gave research lectures at Oxford University and Kew Gardens. In Jan. 2016, I visited China, and gave a research lecture at Xishuangbanna Tropical Botanical Garden, Menglun.

List of lectures:

（a）9th July, 2015 "Sympatry of taro（*Colocasia esculenta*）and its wild relatives in northern Vietnam."（coauthors Ibrar Ahmed and Van Dzu Nguyen）. Paper presented for the session "Interdisciplinary

approaches to the early history of plants and animals in Southeast Asia", 15th Int. Conf. of the European Association of Southeast Asian Archaeologists, 6. - 10. July 2015, Université Paris Ouest Nanterre la Défense, Paris.

(b) 29th October, 2015 "Recent Research on the Origins and Dispersals of Taro (*Colocasia esculenta*)." Talk for Central Tuber Crops Research Institute (CTCRI) in Trivandrum, Kerala, India.

(c) 3rd November, 2015 "Environment & Heritage: Following the Trail of Paper Mulberry to Easter Island, Polynesia." Talk for the Environment & Heritage Seminar, G. L. Choudhury College, Barpeta, Assam, India.

(d) 9th Dec. 2015 "Testing models for the domestication of taro (*Colocasia esculenta*) in Asia and the Pacific." Institute of Archaeology, Oxford University, United Kingdom.

(e) 10th Dec. 2015 "Phylogeography of Taro in Asia and the Pacific: Walking Blind in a Very Large Jungle." (coauthor Ibrar Ahmed) Jodrell Laboratory, Royal Botanic Gardens, Kew, United Kingdom.

(f) 19th Dec. "Taro in Japan: morphological, genetic, and functional diversity". Sokendai Project: Origins of Japonesians, Mini-Symposium, 19th Dec. 2015.

(g) 26th Feb. 2015 "On the Trail of Taro (*Colocasia esculenta*, Araceae): unexpected encounters in Asia, Pacific, and Mediterranean" (coauthor Ibrar Ahmed). Xishuangbanna Tropical Botanical Garden, Menglun, China.

3. Natural and Cultural History of Paper Mulberry.

Collaboration continued with counterparts in Taiwan and Chile (see list above) to study the phylogeography of this culturally important plant.

4. George Brown Collection Info-Forum Project

In Osaka, I helped to host research visits by Rhys Richards (Parematta Press, Wellington, New Zealand) and Roderick Ewins (University of Tasmania, Australia).

During a first visit to the United Kingdom, I visited the British Museum, London, the Sainsbury Institute, Norwich, Pitt Rivers Museum Oxford, and Discovery Museum, Newcastle upon Tyne. At these locations, I examined documents and objects related to the George Brown Collection, and discussed procedures for information exchange with the corresponding institutions. (Dec. 2015).

During a second visit to the United Kingdom, I visited the Anthropology Library, British Museum in London, and the Hancock Museum in Newcastle upon Tyne, and prepared a digital record of historical documents related to the George Brown Collection during the period of its location in the United Kingdom (Feb. 2016).

◎出版物による業績

［論文］

Matthews, P. J., V. D. Nguyen, D. Tandang, E. M. Agoo, and D. A. Madulid

2015 Taxonomy and ethnobotany of *Colocasia esculenta* and *C. formosana* (Araceae): implications for evolution, natural range, and domestication of taro. *Aroideana Supplement* 38E (1): 153–176.

［その他］

2015 「世界をスケッチする」『月刊みんぱく』39(9)：10–11

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年7月9日 "Sympatry of taro (*Colocasia esculenta*) and its wild relatives in northern Vietnam" (coauthors Ibrar Ahmed and Van Du Nguyen). Paper presented for the session "Interdisciplinary approaches to the early history of plants and animals in Southeast Asia", 15th Int. Conf. of the European Association of Southeast Asian Archaeologists, 6.–10. July 2015, Université Paris Ouest Nanterre la Défense, Paris, France.

2015年10月29日 "Recent Research on the Origins and Dispersals of Taro (*Colocasia esculenta*)." Talk for Central Tuber Crops Research Institute (CTCRI) in Trivandrum, Kerala, India.

2015年11月3日 "Environment & Heritage: Following the Trail of Paper Mulberry to Easter Island, Polynesia." Talk for the Environment & Heritage Seminar, G. L. Choudhury College, Barpeta, Assam, India.

2015年12月９日　“Testing models for the domestication of taro（*Colocasia esculenta*）in Asia and the Pacific.” Institute of Archaeology, Oxford University, United Kingdom.

2015年12月10日　“Phylogeography of Taro in Asia and the Pacific: Walking Blind in a Very Large Jungle.”（coauthor Ibrar Ahmed）Jodrell Laboratory, Royal Botanic Gardens, Kew, United Kingdom.

2015年12月19日　“Taro in Japan: morphological, genetic, and functional diversity”. Sokendai Project: Origins of Japonesians, Mini-Symposium, Japan.

2016年２月26日　“On the Trail of Taro（*Colocasia esculenta*, Araceae): unexpected encounters in Asia, Pacific, and Mediterranean”（coauthor Ibrar Ahmed). Xishuangbanna Tropical Botanical Garden, Menglun, China.

・広報・社会連携活動

2015年７月18日～９月23日　Provided support for the Exhibition: ‘Captain Cook’s Voyage and Bank’s Florilegium’, Onomichi City Museum of Art, Hiroshima（a collaboration with Tokyo Bunkamura Museum of Art, Onomichi City Museum of Art, and National Museum of Ethnology).

［Website Administration］

The Research Cooperative（http://researchcooperative.org). This is an international, open-access social network and meeting place for researchers, students, editors, translators, illustrators and educational publishers.

◎調査活動

・海外調査

2015年７月４日～７月13日―フランス（東南アジア考古学ヨーロッパ会合第15回国際会議「東南アジアにおける動植物の初期の歴史への学際的アプローチ」に参加及び発表）

2015年10月24日～11月14日―インド（「辺境少数民族地帯での植物利用及び伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価」にかかる調査研究）

2015年12月１日～12月12日―イギリス（ジョージ・ブラウン・コレクションにかかる調査研究）

2016年２月24日～２月29日―中華人民共和国（中国科学院西双版納熱帯植物園において雲南におけるサトイモ科植物にかかる調査研究）

2016年３月５日～３月16日―イギリス（ネットワーク型博物館学の創成にかかる調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

指導教員（１人）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ「比較技術研究演習Ⅰ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「辺境少数民族地帯での植物利用および伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価」（研究代表者：渡邊和男）研究分担者

横山廣子［よこやま　ひろこ］―――――――――――――――――――――――――――――――――――― 教授

【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒（1977）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1981）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1981）、東洋英和女学院短期大学国際教養科専任講師（1986）、東洋英和女学院大学人文学部社会科学科助教授（1989）、国立民族学博物館第２研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2015）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1981）**【専攻・専門】**文化人類学 1）雲南省大理ペー族社会の研究、2）中国における国家とエスニシティに関する研究、3）中国西南部から東南アジア大陸部における民族集団の移動と包摂に関する研究**【所属学会】**日本文化人類学会、American Anthropological Association

【主要業績】

［編著］

横山廣子編

2004 『少数民族の文化と社会の動態――東アジアからの視点』（国立民族学博物館調査報告 50）大阪：国立民族学博物館。

2001 『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告 20）大阪：国立民族学博物館。

［共編］

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

2001 『流動する民族――中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東アジアにおける文化と社会の動態に関する人類学的研究

Anthropological Study on the Dynamics of Culture and Society in East Asia

・研究の目的、内容

中国や日本など東アジアにおいては近年、政治・経済・科学技術・環境の変化などにともない、人々の生活のあり方が大きく変化してきている。現地調査や民族誌的データに基づき文化や社会がどのように変化し、どのような社会的課題が生じているのかを実証的に明らかにし、それらを比較考察することにより、東アジアの文化と社会の動態を分析・解明する視座を提供する。

・成果

社会経済の変化によって変化が生じている伝統的文化とその保存・継承について、従来から調査をしてきた、大阪府の富田林市の町並み保存の事例に関して、文化を継承する主体側の要因を考察し、中国の社会人類学者、費孝通が提示した「文化自覚」の概念の具体化について検討した。その成果は、2015年10月18日～10月19日に北京市で開催された「民族学・人類学理論と方法論の創新と発展国際フォーラム」において「从日本传统建筑物群保护政策来看费孝通的“文化自觉”――以富田林寺内町为例（日本の伝統建築物群保護政策から見た費孝通の『文化自覚』――富田林寺内町を例として）」と題した研究報告において発表した。

雲南省の少数民族であるペー族の伝統文化と近年の状況に関する民族誌的研究の一端として、民博ビデオテーク番組、「安龍謝土――雲南省ペー族の家屋完成後の儀礼」（22分４秒）、「雲南省ペー族の上棟式の今」（19分59秒）、「周城村の本主節――雲南省ペー族の祭り」（19分29秒）」の３本を編集し、完成させた。

◎出版物による業績

［その他］

横山廣子

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌⑥　中国雲南の梅仕事」『京都新聞』６月17日。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

ビデオテーク番組

2016 『安龍謝土――雲南省ペー族の家屋完成後の儀礼』国立民族学博物館海外映像音響資料（22分04秒、2010年撮影、2016年製作）

2016 『雲南省ペー族の上棟式の今』国立民族学博物館海外映像音響資料（19分59秒、2012年撮影、2016年製作）

2016 『周城村の本主節――雲南省ペー族の祭り』国立民族学博物館海外映像音響資料（19分29秒、2012年撮影、2016年製作）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年10月18日 「从日本传统建筑物群保护政策来看费孝通的“文化自觉”（日本の伝統建築物群保護政策から見る費孝通の『文化自覚』――富田林寺内町を例として）」中国社会科学院民族学・人類学研究所主催国際学術シンポジウム「社会学・人類学の理論・方法論と新たな発展」中国：北京

・**研究講演**

2016年２月16日　「中国西南部の少数民族の装い」、「中国西南部の少数民族の手仕事」園田・みんぱく連携講座「世界の造形・芸能にみる“美”の文化」園田学園女子大学

・**広報・社会連携活動**

◎調査活動

・**海外調査**

2015年10月17日～10月31日―中華人民共和国（中国社会科学院民族学・人類学研究所主催国際学術シンポジウム「社会学・人類学の理論・方法論と新たな発展」での研究成果報告及び中国雲南省大理市においてペー族の文化と社会の変化に関する現地調査）

◎大学院教育

地域文化学専攻長

・**指導教員**

主任指導教員（２人）

博士論文審査委員（３件）

◎社会活動・館外活動等

・**他の機関から委嘱された委員など**

日本文化人類学会「学会賞検討委員会」委員、総合研究大学院大学教育研究評議会評議員、総合研究大学院大学教育研究委員会委員、総合研究大学院大学学長選考会議委員、総合研究大学院大学国際連携推進委員会委員

宇田川妙子［うだがわ　たえこ］――――――――――――――――――――――――――――――― 准教授

1960年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科第一卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1984）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退（1990）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1990）、中部大学国際関係学部講師（1992）、中部大学国際関係学部助教授（1995）、国立民族学博物館第３研究部併任助教（1997）、金沢大学文学部助教授（1998）、国立民族学博物館先端民族学研究部併任助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2010）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院社会学研究科1984）**【専攻・専門】**文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究・ジェンダーとセクシャリティ研究・ヨーロッパ近代をめぐる問題群**【所属学会】**日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

［単著］

宇田川妙子

2015年　『城壁内からみるイタリア――ジェンダーを問い直す』京都：臨川書店。

［共編］

宇田川妙子・中谷文美編

2007年　『ジェンダー人類学を読む――地域別・テーマ別基本文献レヴュー』京都：世界思想社。

2016年　『仕事の人類学――労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・**研究課題**

公共性と親密性の再検討と再編

・**研究の目的、内容**

本研究は、本年度、公共性と親密性（私性）という概念を、近年さらに注目を浴びているローカリティとむすびつけながら再検討していくことを目的とした。具体的には、長年調査を続けているイタリアの町（ローマ近郊）で再度フィールドワークを行うとともに、ここ30年の変遷について分析を行ない、とくに公共性のあり方の変化と観点から考察を行った。

・**成果**

ローカリティ性の問題については、すでに科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「現代イタリア社会におけるロ

ーカリティに関する文化人類学的研究」（2014-2017）を取得し、本年度はその２年目として、９月半ばから約４週間ローマ近郊での現地調査を行い、地域性をめぐる人々の意識の変容にかんして具体的な資料収集をおこなった。

また、その成果の一端として、本年９月に『城壁内からみるイタリア――ジェンダーを問い直す』（臨川書店）を出版した。

◎出版物による業績

［単著］

宇田川妙子

2015 『城壁内からみるイタリア――ジェンダーを問い直す』（フィールドワーク選書16）京都：臨川書店。

［共編］

宇田川妙子・中谷文美編

2016 『仕事の人類学――労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社。［査読有、共同研究成果］

［論文］

中谷文美・宇田川妙子

2016 「仕事への人類学的アプローチ」中谷文美・宇田川妙子編『仕事の人類学――労働中心主義の向こうへ』pp.1-21，京都：世界思想社。［査読有、共同研究成果］

石原 理・宇田川妙子

2016 「生殖医療の法的規制のあり方――イタリアとフィンランドに注目して」『（2015年度厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業）諸外国の生殖補助医療における補規制の時代的変遷に関する研究』pp.3-15。

宇田川妙子

2016 「労働に埋め込まれた社会関係、社会関係に埋め込まれた労働――「仕事嫌い」なイタリア人の働き方」中谷文美・宇田川妙子共著『仕事の人類学――労働中心主義の向こうへ』pp.204-231，京都：世界思想社。［査読有、共同研究成果］

2016 「イタリアの生殖医療の変遷――40号法とその後」日比野由利編 『（2015年度厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業）諸外国の生殖補助医療における補規制の時代的変遷に関する研究』pp.16-37。

［その他］

宇田川妙子

2015 「世界のシングル・シリーズ　家族・友人と助け合い　イタリア」『読売新聞』４月９日夕刊。

2015 「みんぱく世界の旅　イタリア①　国家よりも長い町の歴史」『毎日小学生新聞』８月22日。

2015 「みんぱく世界の旅　イタリア②　伝統的な農業や食材を大事に」『毎日小学生新聞』８月29日。

2015 「みんぱく世界の旅　イタリア③　日曜日の食卓」『毎日小学生新聞』９月５日。

2015 「みんぱく世界の旅　イタリア④　広場でのコミュニケーション」『毎日小学生新聞』９月12日。

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌⑯　イタリアのパスタ」『京都新聞』９月16日。

2015 「イタリアの食と社会関係」『TASC Monthly』480：3。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2015年12月12日 「イタリアでの生活用品試行調査（予備調査）」『生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究』国立民族学博物館

・その他

2016年１月９日 「生殖医療と親族・家族関係――イタリアの事例とともに」ジェトロ・アジア研究所研究会「中東イスラーム諸国における生殖医療と家族」東京大学東京文化研究所

・第441回　国立民族学博物館友の会講演会

2015年４月４日 「つくられる地域の食――スローフード発祥の地、イタリアから考える」

・みんぱくトークイベント

2015年11月28日 「みんなで食べる――イタリアの食」産経新聞主催『イタリアの食と社会』国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2015年９月21日～10月22日―イタリア（「現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究」にかかる現地調査及び文献調査）

2016年２月１日～２月14日―イタリア（イタリアの家族にかかわる現状及び現代イタリアにおけるローカリティに関する調査研究）

◎大学院教育

副指導　１名

◎上記以外の研究活動

2015年度厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業（研究代表者：金沢大学　日比野由利）

◎社会活動・館外活動等

Journal of Ethnic Foods（Korea Food Research Institute）の編集委員

太田心平［おおた　しんぺい］―――― 准教授

1975年生。**【学歴】**大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2007）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、アメリカ自然史博物館上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻併任准教授（2014）**【学位】**博士（人間科学）（大阪大学 2007）、修士（人間科学）（大阪大学2000）**【専攻・専門】**社会文化人類学、北東アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、Association for Asian Studies（米国）、韓国・朝鮮文化研究会

【主要業績】

［論文］

太田心平

2012　「国家と民族に背いて――アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学――21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304-336，京都：昭和堂。

2008　「センセーショナリズムへの冷笑――移行の言説としての韓国『民主化』と元労働運動家たちの懐古」石塚道子・田沼幸子・冨山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』pp.161-186，京都：人文書院。

Ota, S.

2006　Ryohan: Anthropology of Knowledge and the Japanese Representation of Korean Yangban underColonialization. *Korean Cultural Anthropology* 39(2)：85-128（韓国語）。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に２つの柱を立て、それらを中心として研究を推進した。

第１の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ-ミクロ双対性をもっていたのかを明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとした。援用したのは、イデオロギーへの着目の反面で

軽視されてきたユートピアという概念であり、対象化したのは、民衆に寄り添うあまり蔑ろにされてきた知識人社会である。

第２の柱は、現在進行形の事象を研究対象とするものであり、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、科学研究費助成事業（若手研究(B)）（課題番号：25871066、2013～2016年度）を研究代表者として受諾した。また、研究者はアメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業しているが、この兼業の研究課題はこの分野とする。日米韓の３ヶ国においてフィールドワークをはじめたが、並行して文献研究を進め、欧州諸国における比較調査も進めることで、研究の効率化をはかった。

・成果

第１の柱、韓国・朝鮮の社会文化の「民主化」前後のマクロ－ミクロ双対性の研究に関しては、これまでの成果の一部を、『SES (Senri Ethnology Studies)』誌上にて英文公刊した。また、それとは別の成果の一部を、東洋大学アジア文化研究所で招待講演し、その内容を『国境をまたぐ生活スタイル――アジアにおける広域調査と事例調査に向けて』（同研究所編／刊）に、和文論文「移住への渇望――21世紀の韓国人外国移住者のユートピア性」を寄稿した。また、別の内容を米国シアトル市でおこなわれたアジア学会（Association for Asian Studies）の年次大会でパネルを組織して採択され、学術発表した。

第２の柱、韓国・朝鮮の社会文化の現在進行形の編成メカニズムに関しても、一昨年度と昨年度に国際ワークショップでおこなった２本の学術発表の内容をとりまとめ、英文の論文を作成し、刊行を目指している。また、我が国のなかでの社会的貢献を考え、『日本はどのように語られたか――海外の文化人類学的・民俗学的日本研究』（桑山敬己編・昭和堂刊）に、「韓国における日本文化論の再生産――韓国の大学の学科目と研究者育成の分析から」を寄稿した。

◎出版物による業績

［論文］

Ota, S. C.

2015　Collection or Plunder: The Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement, *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91), pp.179-193. Osaka: National Museum of Ethnology.

太田心平

2016　「韓国における日本文化論の再生産――韓国の大学の学科目と研究者育成の分析から」，桑山敬己編『日本はどのように語られたか――海外の文化人類学的・民俗学的日本研究』pp.407-434，京都：昭和堂。

2016　「移住への渇望――21世紀の韓国人外国移住者のユートピア性」東洋大学アジア文化研究所編『国境をまたぐ生活スタイル――アジアにおける広域調査と事例調査に向けて』pp.36-44，東京：東洋大学アジア文化研究所。

［その他］

太田心平

2015　「飲み物の首都――移入、混交、錯綜するニューヨーク」『Vesta（食の文化誌ヴェスタ）』99：4-12，東京：味の素食の文化センター。

2015　「旅・いろいろ地球人　ミュージアム⑨　負の歴史を現場で見る」『毎日新聞』９月３日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

太田心平監修（韓国語）

2015　『オセアニア』『アメリカ』『ヨーロッパ』『アフリカ』『西アジア』『南アジア』『東南アジア』『中央・北アジア』『東アジア（朝鮮半島の文化、中国地域の文化、アイヌの文化、日本の文化）』

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年１月24日　'Goryeo Celadon Porcelain Restoration Projects in Colonial Korea and the Outflow to Other Countries', Kick-off Symposium of NIHU Area Studies Program for Northeast Asia "Rediscovery of Northeast Asia," National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年６月23日　'The Utopist Genealogy of South Korean Immigrants in New York in 21st Century,'

SIEF2015（12th Congress of Société Internationale d'Ethnologie et de Folklore）"Utopias, Realities, Heritages: Ethnographies for the 21st Century," University of Zagreb, Zagreb

2015年７月25日　招待発表「移住への渇望――21世紀の韓国人海外居住者のユートピア性」, 2015年度東洋大学アジア文化研究所研究集会／2015年度白山社会学会大会『国境をまたぐ生活スタイル――東アジア・東南アジア・南アジアの事例を通じて』東洋大学、東京

2016年３月31日　'The 386 Literature and 386 Sentiments: A Case Study of a Book Club in Seoul,' Association for Asian Studies Annual Conference 2016, Washington State Convention Center, Seattle

・展示

常設展示「朝鮮半島の文化」部分改修担当者

・広報・社会連携活動

2015年11月13日　「似て非なる国・韓国の過去」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年11月27日　「似て非なる国・韓国の現在」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎調査活動

・海外調査

2015年４月14日～５月24日―アメリカ合衆国（標本管理者のエージェンシーに関する調査研究）

2015年６月20日～７月５日―クロアチア（国際民族学・民俗学会（SIEF）2015年研究大会において論文発表及び成果公刊にかかる調査）

2015年７月29日～10月29日―アメリカ合衆国（博物館展示担当者のエージェンシーに関する調査研究）

2015年12月15日～１月11日―アメリカ合衆国（博物館における展示構築担当者をめぐるエージェンシーの調査研究）

2016年３月４日～３月24日―大韓民国、アメリカ合衆国（北東アジア地域研究プログラムにかかる調査研究）

2016年３月28日～４月11日―アメリカ合衆国、カナダ（アジア学会年次大会において発表及び博物館展示の調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

リサーチプロポーザルの指導（１名）

・指導教員

主任指導教員（１人）

・総研大の開講科目

博物館研究演習Ⅰ（前期）、文化人類学基礎講読（後期）

・審査委員

博士論文審査委員（１件）、予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（若手研究(B)）「博物館展示の再編過程の国際比較による『真正な文化』の生成メカニズムの解明」研究代表者、機関研究「文化遺産の人類学――グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（研究代表者：飯田 卓）研究分担者、人間文化研究機構地域研究ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア」ワーキングメンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

アメリカ自然史博物館人類学部門（アメリカ合衆国）上級研究員、味の素食の文化研究所責任編集委員

・非常勤講師

大阪大学大学院人間文化研究科「人類学原書講読／人類学原書講読特別演習」、宮崎公立大学「韓国文化論」（集中講義）

佐藤浩司［さとう　こうじ］―――――――――― 准教授

【学歴】東京大学工学部卒（1977）、東京大学大学院修士課程修了（1983）、東京大学大学院博士課程単位取得（1989）**【職歴】**国立民族学博物館助手（1989）、国立民族学博物館助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）**【学位】**工学修士（東京大学工学部 1989）**【専攻・専門】**建築史学、民族建築学**【所属学会】**建築史学会、民俗建築学会、家具道具室内史学会

【主要業績】

［編著］

佐藤浩司編

1998～1999 『シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1～4』京都：学芸出版社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・**研究課題**

東南アジア木造建築史の再構築

・**研究の目的、内容**

東南アジアの木造建築史を概観するための資料の作成、東南アジア史の再構築。

・**成果**

・調査研究成果はweb上で随時公開。http://www.sumai.org

・文資プロジェクト「三次元CGを利用した民族建築デジタルアーカイブの構築」完成部分については随時公開 http://www.sumai.org/3dcgproj/
最終的な一般公開のためのデータを準備中。

・基調講演 “Introduction to the manifestation of Indonesian wooden Architecture” in International Conference : Manifestation of Architecture in Indonesia, Institut Teknologi Sepuluh Nopember（スラバヤ工科大学）+ Lembaga Sejarah Arsitektur Indonesia（インドネシア建築史学会）, Surabaya 2015.8.1‒8.2

◎出版物による業績

・**広報・社会連携活動**

2015 「旅・いろいろ地球人　ミュージアム⑪島民の心のよりどころ」『毎日新聞』9月17日夕刊。

◎口頭発表、展示、その他の業績

・**研究講演**

2015年8月1日～8月2日 基調講演 ‘Introduction to the manifestation of Indonesian wooden Architecture’ in International Conference: Manifestation of Architecture in Indonesia, Institut Teknologi Sepuluh Nopember（スラバヤ工科大学）+ Lembaga Sejarah Arsitektur Indonesia（インドネシア建築史学会）, Surabaya

◎調査活動

・**海外調査**

2015年8月18日～8月25日―インドネシア（インドネシア、ニアス島における伝統的木造建造物の保存に関する調査研究）

2015年8月31日～9月9日―インドネシア（国際シンポジウム「インドネシア建築の出現」に参加及びバリ島、ロンボック島の伝統的木造建築物の保存に関する調査）

2016年3月18日～3月27日―インドネシア（災害展示に関する調査研究）

三島禎子［みしま　ていこ］―――――――――― 准教授

1963年生。**【学歴】**セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、津田塾大学大学院国際関係学研究科博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第2課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第3課程修了（1993）**【職歴】**国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）**【学位】**D.E.A. Sci. Soc（パリ第

５大学大学院社会科学研究科 1993)、M. Soc.（パリ第５大学大学院社会科学研究科 1992)、国際関係学修士（津田塾大学大学院国際関係学研究科 1992）**【専攻・専門】**文化人類学（西アフリカ研究）**【所属学会】**アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

［編著］

Charbit, Y. et T. Mishima（éds.）

2014 *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

［論文］

Mishima, T.

2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké: Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima（éds.), *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

三島禎子

2011 「民族の離散と回帰――ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井 洋監修・編，小川充夫編『グローバル・ディアスポラ』pp.105-130，東京：明石書店。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカ商業民の財の形成と継承に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

アフリカ商業民によるアジア・アフリカ間貿易は、中国経済の拡大とともに今日のアフリカ経済の主要な現象のひとつになっている。西アフリカに故地をもつソニンケ民族は、地球規模の民族ネットワークでつながり、他の集団に先駆けてこの新しい経済機会をとらえた。その経済倫理には民族文化の伝統が受け継がれている。

10世紀以上前から商業民として知られるソニンケ民族は、民族文化とともにある種の「財」を継承してきたと考えられる。この有形・無形の「財」の本質と、継承の形態について調査し、移動と商業を生業とするソニンケの民族文化について考察を深めるのが本研究の目的である。

以下の科研において現地調査をおこなうとともに、文献調査では歴史的背景を把握する。

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）『日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア－アフリカ関係の都市人類学的研究』(2014～2016年：代表・和崎春日）

・成果

下記の科学研究費助成事業において、セネガルで現地調査をおこなった。中部大学での研究会においては、「民族の離散と回帰――都市空間における集住のあり方への疑問提示」と題して、個別の研究と科学研究費助成事業の課題をつなぐ問題を提起した。第一に、移民の集住できる条件を地域の経済規模、宗教ネットワーク、移民政策から検討する視点、第二に同じ地域に進出する他のムスリム商人や商業民族との比較の視点、第三に故地での動向に注目する視点の重要性を指摘した。

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）『日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア－アフリカ関係の都市人類学的研究』(2014～2016年：代表・和崎春日）

最終年度の下記科学研究費助成事業においては、成果報告として論文を執筆し、栗田和明編『流動する移民社会――環太平洋地域を巡る人びと』昭和堂が出版された。

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）『環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究――近年の変遷に注目して』(2013年～2015年：代表・栗田和明）

◎出版物による業績

［論文］

三島禎子

2016 「アフリカ系商人の富裕化への奇跡――ソニンケ人商人の移動と生活の営み」栗田和明編『流動する移民社会――環太平洋地域を巡る人びと』pp.87-110，京都：昭和堂。

［その他］

三島禎子

2015 「遅れてきた手紙」『毎日新聞』 4月9日夕刊。

2015 「砂漠を越え陸海を渡る商人」『産経新聞』 6月9日。

2015 「はるかかなたへ」『清高同窓会報』27：13, 9月5日。

2015 「市に集う」『月刊みんぱく』459：2-3, 12月1日。

2016 「みんぱく世界の旅　セネガル①　米を食べるようになった訳とは」『毎日小学生新聞』 2月13日。

2016 「みんぱく世界の旅　セネガル②　好きな布で服を仕立てる」『毎日小学生新聞』 2月20日。

2016 「みんぱく世界の旅　セネガル③　プリント布が生まれた歴史的背景」『毎日小学生新聞』 2月27日。

2016 「みんぱく世界の旅　セネガル④　アフリカにある商品、その流れをたどると……」『毎日小学生新聞』 3月5日。

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CDなどの制作・監修

三島禎子監修

2016 「セネガルの生活と文化」『みんぱく映像民族誌』第21集（撮影・制作　国立民族学博物館）日本語、65分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2015年6月5日 「商人と布の移動からみる西アフリカ経済の変遷」カレッジシアター『地球探検紀行』あべのハルカス近鉄本店

2015年7月13日 「移民について考える――アフリカから世界へ広がる商人たち」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年10月18日 「作られたアフリカ的なもの」第401回みんぱくウイークエンド・サロン 研究者と話そう

・その他

2015年5月22日 「民族の離散と回帰――都市空間における集住のあり方への疑問提示」科学研究費助成事業（基盤研究（A））『日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア――アフリカ関係の都市人類学的研究』研究会、中部大学

◎調査活動

・海外調査

2015年6月12日～6月24日―セネガル（セネガル都市部におけるソニンケ商人と中国人商人の競合についての調査）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ（テーマシリーズ）「問題設定に向けて」

「アフリカ文化研究」担当

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業（基盤研究（A））『Frequent travelerがつくるコミュニティの研究――環太平洋地域と日本』（代表・立教大学・栗田和明）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））『日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア――アフリカ関係の都市人類学的研究』（代表・中部大学・和崎春日）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

『Revue Européenne des Migrations Internationales』編集委員（アジア担当）、『アフリカ研究』編集委員

吉岡 乾［よしおか　のぼる］――助教

1979年生。**【学歴】**東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程（アジア第三専攻）修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了（2012）**【職歴】**国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員PD（2013）、東京外国語大学世界教養プログラム非常勤講師（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）**【学位】**博士（学術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）**【専攻・専門】**言語学、記述言語学、ブルシ

ャスキー語、ドマーキ語、シナー語、南アジア（パキスタン）研究**【所属学会】**日本言語学会、関西言語学会、日本南アジア学会

【主要業績】

［博士論文］

Yoshioka, N.

2012　A Reference Grammar of Eastern Burushaski. 東京外国語大学大学院地域文化研究科.

［論文］

吉岡 乾

2014 「格配列パタンを決める動詞的要素と名詞的要素――パキスタンの言語を対照して」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』10：159-202.

Yoshioka, N.

2010　The Interrogative Element in Burushaski. *Language, Area and Cultural Studies* 16: 383-391.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、北パキスタンのギルギット・バルティスタン自治州フンザ・ナゲル県モミナバード村などで話されている、消滅の危機にある言語であるドマーキ語を中心にしつつ、ブルシャスキー語、シナー語といった周辺言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。この研究は主に、科学研究費助成事業（若手研究（A））「北パキスタン諸言語の記述言語学的研究」により進める。

・成果

2015年度は夏に現地調査へ行って、ドマーキ語、ブルシャスキー語、シナー語について調べた。年度初めの予定よりも調査期間を短くしたため、昨年度までと同じ地域のみでの現地調査となった。ブルシャスキー語については参照文法執筆のための充分なデータが得られた。ドマーキ語については、新たに物語が１篇、文字起こしを終えられた。

研究の成果は、単行本収録論文、国際学会、国際ワークショップ、国内学会での発表という形で公表した。

◎出版物による業績

［編著書］

Nakayama, T., N. Yoshioka and K. Otsuka（eds.）

2015　*Grammatical Sketches from the Field 2*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

［論文］

吉岡 乾

2015 「北パキスタン諸言語のコピュラ」大西正幸・千田俊太郎・伊藤遊馬編『地球研言語記述論集』７. pp.207-223.［査読有］

2015 「ブルシャスキー語の動詞語幹と他動性」パルデシ プラシャント・桐生和幸・ナロック ハイコ編『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』pp.321-334, 東京：くろしお出版.［査読有］

Yoshioka, N.

2015　Hunza Burushaski. In T. Nakayama, N. Yoshioka and K. Otsuka（eds.）*Grammatical Sketches from the Field 2*, pp.143-178. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.［査読有］

［その他］

吉岡 乾

2015 「旅・いろいろ地球人　驚く③　あの日見た花の名前は」『毎日新聞』４月２日夕刊.

2015 「滋味深い、ことばの寄せ鍋」『月刊みんぱく』39(6)：9.

2015 「文化遺産 おもて・うら　危機言語を救わない」『月刊みんぱく』39(8)：16-17.

2015 「評論・展望　世界の屋根の言語事情・研究事情――系統を越えた言語接触の現場」『民博通信』151：4-9.

2016 「みんぱく世界の旅　パキスタン①　フンザ谷 季節ごとの表情」『毎日小学生新聞』 3月12日.

2016 「みんぱく世界の旅　パキスタン②　大きな谷ごとに異なる言語」『毎日小学生新聞』 3月19日.

2016 「みんぱく世界の旅　パキスタン③　独自の宗教を信仰」『毎日小学生新聞』 3月26日.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2015年10月3日 「ブルシャスキー語：連辞性」『アルタイ型言語に関する類型的研究』2015年度第2回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2015年10月4日 '"Sun" in Language Families of SA -Indo-Aryan, Iranian, Dravidian, &c.-'. 『アジア地理言語学研究』2015年度第1回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2015年12月6日 「ブルシャスキー語の長短差のある自由変異に踏み込む算段」. 『複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性』2015年度第1回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2016年3月1日 '"Riceplant" and "Milk" in SA -Aryan, Iranian, Dravidian, &c.-'. 『アジア地理言語学研究』2015年度第3回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月5日 'On the Copulae of Languages in Northern Pakistan.' 2nd Kashmir International Conference on Linguistics. The University of Azad Jammu and Kashmir, Muzaffarabad（Pakistan）

2015年6月20日 「ブルシャスキー語の空間参照枠」日本言語学会第150回大会、大東文化大学、東京

2015年9月27日 「ドマーキ語の言語状況について――消滅の危機に瀕した北パキスタンの印欧語」日本南アジア学会第28回大会、東京大学、東京

2015年11月29日 「パキスタンの山奥で言語を調べる」大学共同利用機関シンポジウム2015 研究者に会いに行こう！、秋葉原UDX アキバ・スクエア、東京

2015年12月22日 'Noun Modifying Expressions in Eastern Burushaski.' International workshop on Noun Modifying Expressions in South Asian Languages. Deccan College, Pune（India）

2015年12月26日 「International workshop on Noun Modifying Expressions in South Asian Languages の報告」記述言語学研究会第68回例会、京都大学、京都

・みんぱくゼミナール

2015年7月18日 「大陸中央の末端へ――パキスタンの山奥で言語を探す」第446回みんぱくゼミナール

・研究講演

2015年4月25日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第1回　言語学とは何か」『みんぱく発 手話言語学講義 みんぱくで言語学を学ぼう』国立民族学博物館第5セミナー室

2015年5月17日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第2回　音のつくり（音声・音韻）」『みんぱく発 手話言語学講義　みんぱくで言語学を学ぼう』国立民族学博物館第7セミナー室

2015年6月6日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第3回　語のつくり（形態）」『みんぱく発 手話言語学講義　みんぱくで言語学を学ぼう』国立民族学博物館第7セミナー室

2015年6月27日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第4回　文のつくり（統語）」『みんぱく発 手話言語学講義　みんぱくで言語学を学ぼう国立民族学博物館第3セミナー室

2015年7月11日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第5回　言語で伝えるもの（意味・語用）」『みんぱく発 手話言語学講義　みんぱくで言語学を学ぼう』国立民族学博物館第3セミナー室

2015年8月8日 「楽しい言語学を学ぶ会（たのげん）第6回　色々な言語学」『みんぱく発 手話言語学講義 みんぱくで言語学を学ぼう』国立民族学博物館第3セミナー室

・広報・社会連携活動

2016年2月3日 「パキスタンの山奥でことばを調べる――大陸中央の『末端』へ」カレッジ・シアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年7月26日 「言語から歴史を読み解く――南アジアを例にして」第392回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年８月14日～９月18日―パキスタン（ドマーキ語・ブルシャスキー語・シナー語に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（代表者：三尾 稔）拠点構成員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性」（代表者：中山俊秀）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「「アルタイ型」言語に関する類型的研究」（代表者：山越康裕）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」（代表者：遠藤光暁）研究協力者

民族文化研究部

池谷和信［いけや　かずのぶ］―― 部長（併）教授

1958年生。**【学歴】**東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）**【職歴】**北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手（1990）、国立民族学博物館第１研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2009～2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2014）**【学位】**理学博士（東北大学大学院理学研究科 2003）**【専攻・専門】**環境人類学・人文地理学・地球学・生き物文化誌学 1）世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、2）植民地時代における民族社会の変容に関する研究、3）地球環境問題および地球環境史に関する研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合（IUAES）、アメリカ人類学会（American Anthropological Association）、日本生態学会、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会、日本タイ学会、国際考古学会議（World Archaeology Congress）

【主要業績】

［単著］

池谷和信

2003 『山菜採りの社会誌――資源利用とテリトリー』宮城：東北大学出版会。

2002 『国家のなかでの狩猟採集民――カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書4）大阪：国立民族学博物館。

［編著］

池谷和信編

2009 『地球環境史からの問い――ヒトと自然の共生とは何か』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2007　日本地理学会優秀賞

1998　日本アフリカ学会研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンスーンアジアにおける家畜化に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

モンスーンアジアの大陸部は、世界の家畜化センターの一つであるといわれる。野鶏、イノシシ、野生の水牛などが、この地で家畜化や家禽化された。しかしながら、アンデスや西アジアなどの他のセンターに比べて、動物の骨があまり見つかっていないために考古学的研究は進んでいない。そこで、本研究では、現存する民族の暮らしのなかで、野生動物の飼い慣らしの行動を体系的に記述・分析することを目的とする。飼い慣らしは、野生から家畜への過程の中で、半家畜ともいわれており、注目すべき段階である。この研究では、どのようにして住民は飼い慣らしに成功したり失敗してきたのか、その技術の違いを見い出すことをねらいとした。

・成果

上述の研究成果は、以下のような２つの論文を刊行することで結実した。まず、イノシシからブタへの課程については、「人類による動物利用の諸相――モンスーンアジアのブタ・人関係の事例」という、本のなかの分担執筆の論文になった。これは、バングラデシュのブタ飼いについての民族誌となっており、ブタ群の群れ管理や移動の範囲については、基礎データを提示している。また、ファルーク氏ほかの連名であるが、ウシ科のガヤルについての行動、生態、社会（人々とのかかわり）などの全体像を示した。この家畜は、半家畜とみなされおり家畜化の際のプロトタイプを考えるうえでも貴重な素材となっている。“Present status of gayal（*Bos frontalis*）in the home tract of Bangladesh”が、その論文名である。

◎出版物による業績

［論文］

池谷和信

2015 「供犠される動物、供養される生き物――多様な動物観の共存を求めて」『ビオストーリー』23：16-23，生き物文化誌学会。

2015 「国立民族学博物館における食文化の展示」『社会システム研究』特集号，pp.71-83，立命館大学社会システム研究所。

2015 「人類による動物利用の諸相――モンスーンアジアのブタ・人関係の事例」松井章編『食の文化フォーラム33　生から家畜へ』pp.88-111，東京：ドメス出版。

2016 「民族文化の展示――国立民族学博物館の舞台裏」稲村哲也編『新訂 博物館展示論』pp.107-124，放送大学教育振興会。

2016 「世界の様々な気候帯における人間活動と微地形――狩猟，採集，農耕，家畜飼育からみた枠組み」藤本潔・宮城豊彦・西城潔・竹内裕希子編『微地形学――人と自然をつなぐ鍵』pp.276-299，東京：古今書院。

Faruque, M. O., M. F. Rahaman, M. A. Hoque, K. Ikeya, T. Amano, J. L. Han, T. Torji, and A. I. Omar

2015 Present status of gayal（*Bos frontalis*）in the home tract of Bangladesh, *Bangladesh Journal of Animal Science* 44(1): 75-84.

Ikeya, K.

2016 From Subsistence to Commercial Hunting: Changes of Hunting Activities among the San in Botswana, *African Study Monographs Supplementary Issue* 52: 41-59. Kyoto: The Center for African Area Stuides, Kyoto University.

［その他］

池谷和信

2015 「人と家畜のエピソード37　冬のモンゴルでみた野生動物の毛皮」JVM 獣医畜産新報68(4)：245，東京：文永堂出版，４月１日。

2015 「人と家畜のエピソード38　アッサムで出会った野鶏」JVM 獣医畜産新報68(5)：325，東京：文永堂出版，５月１日。

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌①　アマゾンの『ピラルク』」『京都新聞』５月13日。

2015 「旅・いろいろ地球人　踊る②　病気治しのダンス」『毎日新聞』５月21日夕刊。

2015 「生き物の死へのまなざし――生き物文化誌からの視点」『ビオストーリー』23：6-７，生き物文化誌学会，６月１日。

2015 「人と家畜のエピソード39　アッサムで出会った水牛」JVM 獣医畜産新報68(6)：405，東京：文永堂出版，６月１日。

2015 「人と家畜のエピソード40　家畜化できない動物エランド」JVM 獣医畜産新報68(7)：485，東京：文永堂出版，７月１日。

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌⑨　魅惑の果実『カムカム』」『京都新聞』 7月15日。
2015 「人と家畜のエピソード41　馬と人とのかかわり」JVM 獣医畜産新報68(8)：565，東京：文永堂出版，8月1日。
2015 「アフリカのスイカ」『産経新聞』 8月3日夕刊。
2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌⑬　カラハリ砂漠のスイカ」『京都新聞』 8月19日。
2015 「人と家畜のエピソード42　クマと人とのかかわり」JVM 獣医畜産新報68(9)：696，東京：文永堂出版，9月1日。
2015 「関西シンポジウム2015／野生動物から家畜への道――趣旨説明」『ヒトと動物の関係学会誌』41(9)：10-12，ヒトと動物の関係学会。
2015 「関西シンポジウム2015／野生動物から家畜への道　家畜になったイノシシ，ならなかったペッカリー：熱帯」『ヒトと動物の関係学会誌』41(9)：22-26，ヒトと動物の関係学会，9月1日。
2015 「関西シンポジウム2015／野生動物から家畜への道　野生動物から家畜への道 総合自由討論」『ヒトと動物の関係学会誌』41(9)：33-42，ヒトと動物の関係学会，9月1日。
2015 「自然災害と民俗」市川秀之・中野紀和・篠原徹・常光徹・福田アジオ編『はじめて学ぶ民俗学』pp.193-194，京都：ミネルヴァ書房。
2015 「人と家畜のエピソード43　モンゴルのヤク」JVM 獣医畜産新報68(10)：791，東京：文永堂出版，10月1日。
2015 「人と家畜のエピソード44　北上山地の移牧」JVM 獣医畜産新報68(11)：805，東京：文永堂出版，11月1日。
2015 「アフリカのスイカ」『切抜き速報 食と生活版』2015年11号。
2015 「旅・いろいろ地球人　世界の都市化①　アフリカの通勤列車」『毎日新聞』11月5日夕刊。
2015 「旅・いろいろ地球人　世界の都市化②　中国の夜行列車の風景」『毎日新聞』11月12日夕刊。
2015 「旅・いろいろ地球人　世界の都市化③　エキスポシティの誕生」『毎日新聞』11月19日夕刊。
2015 「旅・いろいろ地球人　世界の都市化④　アマゾンの港町の風景」『毎日新聞』11月26日夕刊。
2015 「人と家畜のエピソード45　ミラノ万博と家畜文化」JVM 獣医畜産新報68(12)：885，東京：文永堂出版，12月1日。
2016 「サルと人の絆」『月刊みんぱく』40(1)：2-3，国立民族学博物館。
2016 「人と家畜のエピソード46　世界のサル類と人」JVM 獣医畜産新報69(1)：5，東京：文永堂出版，1月1日。
2016 「東日本大震災以降の三陸漁村でのアワビ採取」『小規模経済プロジェクト NEWSLETTER』pp.3-8。
2016 「松井章さんと HCMR（日本・タイ鶏プロジェクト）」家畜資源研究会報15：34-37，家畜資源研究会。
2016 「人と家畜のエピソード47　闘う牛と人とのかかわり」JVM 獣医畜産新報69(2)：146，東京：文永堂出版，2月1日。
2016 「みんぱく食の民族誌　考える舌㉛　サルの肉」『京都新聞』 2月17日。
2016 「人と家畜のエピソード48 カンボジアの牛車　その1」JVM 獣医畜産新報69(3)：165，東京：文永堂出版，3月1日。

Ikeya, K.
2015 “Rock Art in the Namibian Wilderness”（Photo text）Newton, April（for iPad）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年1月10日 「熱帯アジアにおける狩猟採集民の環境文化史」総研大・学融合推進センター・戦略的共同研究・学内公開セミナー「料理の環境文化史：生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト」国立民族学博物館（代表：野林厚志）

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月17日 「考古学の4研究報告へのコメント――ヤギと人、ブタと人」公開シンポジウム『家畜化と乳利用　その地域的特性をふまえて――搾乳の開始をめぐる谷仮説を手がかりにして』京都大学

2015年6月20日 「モンスーンアジアにおける狩猟活動について――野鶏猟の事例」日本熱帯生態学会25周年記

念大会（ポスター発表）京都大学

2015年７月４日　「野鶏から家鶏への道――飼い慣らし技術の比較研究」日本動物考古学会、奈良文化財研究所

2015年７月15日　'How have local people shaped spaces in the Kalahari Desert?: place names, mobility, territoriality' IUAES. Thammasat University, Bangkok, Thailand

2015年７月29日　'Peccary hunting among Local People and animal management in the Peruvian Amazon.' Vth International Wildlife Management Congress. Sapporo, Japan

2015年９月８日　'Sedentarization among nomadic San hunter-gatherers in Central Botswana.' CHAGS11（11th Conference on Hunting and Gathering Societies）University of Viena, Viena, Austria

2015年９月26日　Humanity group in HCMR, Tokyo HCMR（Human-Chicken Multi-Relationships Research Project）Seminar, Toshi Center Hotel, Tokyo, Japan

2015年10月９日　（池谷和信・黒澤弥悦の連名）「「イノシシ型在来ブタ」の放牧管理について――バングラデシュとインドの比較」第103回日本養豚学会、岐阜市じゅうろくプラザ

2015年10月９日　（黒澤弥悦・渡辺和之・池谷和信の連名）「ネパールとインドで観察した「イノシシ型在来ブタ」――特にその無人移動放牧の群れについて」第103回日本養豚学会、岐阜市じゅうろくプラザ

2015年12月13日　「アフリカ狩猟採集民を対象にした狩猟研究の動向：カラハリ砂漠の事例」第14回教育・学習の人類学セミナー　セントラル・カラハリ・サン（ブッシュマン）におけるコミュニケーションの自然誌、京都大学

2016年１月９日　「考古・民族・実践班の統合へ向けて：岩手県の漁村の事例」地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性プロジェクト研究会、総合地球環境学研究所。

2016年１月24日　Comment, Kick-off Symposium of NIHU Area Studies Program for Northeast Asia "Rediscovery of Northeast Asia," National Museum of Ethnology

2016年３月13日　「コメント：食と農のアフリカ史――現代の基層に迫る」東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所

2016年３月22日　池谷和信・渡辺和之「富士山麓における茅場利用と財産区」2016年日本地理学会春季学術大会・シンポジウム『山岳地域における資源利用と観光化――ヒマラヤ・ヨーロッパ・日本』早稲田大学

2016年３月29日　「バングラデシュ及びインド・アッサム州の豚飼育研究の最新動向」第16回熱帯家畜利用研究会、国立民族学博物館

・研究講演

2015年10月28日　基調講演「私たちと家畜とのかかわりの原点を求めて――世界をフィールドワークする」九州（産業動物）連絡会・畜産技術協会・第２回合同シンポジウム（アニマルウェルフェアシンポジウム「産業動物のアニマルウェルフェア：身近な所在事例を考える」）熊本市男女共同参画センターはあもにい

2015年12月５日　基調講演「狩猟採集民からみた人類の社会進化――移動、分配、人・動物関係」日本人間行動進化学会、総合研究大学院大学

2016年２月21日　基調報告「狩猟採集、漁撈、農耕からみた環境と文化」第44回　近畿民俗学会・年次研究大会、大阪市立歴史博物館

・広報・社会連携活動

2015年４月17日　「総論、アフリカにおける動物と人」NPO法人大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年４月24日　「アフリカの都市化と地域社会」NPO法人大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年５月19日　「ラクダの文化誌」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

2015年５月22日　「ブタの文化誌――ブタと人との絆」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

2015年10月20日　「クジラ、イルカの文化誌：異文化を理解する」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

2015年10月22日　「世界の鳥と人とのかかわり――羽の美しさを求めて」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――世界の天然素材」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル１Ｆ

2015年11月20日　「拡大する文明、継承される伝統文化」NPO法人大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年11月28日　「拡大する文明と継承される伝統文化」無印・民博ウールツアー　館内ツアー「みんぱくって？　ウールって？」国立民族学博物館

2016年１月11日　「世界の諸文化からみた生き物と人――地球をフィールドワークする」トークイベント「みんぱく×ニフレル――人と生き物をつなぐ」国立民族学博物館
2016年１月29日　「狩猟採集民文化と岩絵」園田・みんぱく連携講座「世界の造形・芸能にみる“美”の文化」園田女子学園大学総合生涯学習センター
2016年１月29日　「美しさを求めて――ビーズをめぐる人類の旅」園田・みんぱく連携講座「世界の造形・芸能にみる“美”の文化」園田女子学園大学総合生涯学習センター
2016年２月６日　「世界の食文化――みんぱくの展示から」第451回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年８月23日　「みんぱくで世界一周！――世界のいきものたちに会いに行こう」第395回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・ラジオ・テレビ

［ラジオ番組］

2015年５月13日　『人間にとってスイカとは何か』TOKYO FM「中西哲生のクロノス」

［TV 番組］

2015年９月14日　おちゃのこ SaiSai「いらっ sai」J：COM チャンネル

◎調査活動

・国内調査

2015年８月９日～８月12日―岩手県山田町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）
2015年10月14日―山形県鶴岡市（アマゾンの文化に関する資料収集）
2016年１月30日～２月２日―岩手県山田町・大槌町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）
2016年３月18日～３月19日―熊本県五木村（九州山地の資源利用に関する研究）

・海外調査

2015年７月14日～７月22日―タイ（国際人類学・民族学会議参加。研究報告及び闘鶏に関する資料収集）
2015年９月５日～９月13日―オーストリア（第11回国際狩猟採集社会会議に参加及び研究報告）
2015年10月16日～10月19日―中華人民共和国（第５回アジア食文化会議へ参加）
2015年10月28日～11月４日―イタリア（高地における環境開発に関する資料収集）
2015年12月６日～12月12日―ラオス（狩猟採集民の食文化に関する資料収集）
2016年１月15日～１月21日―カンボジア（熱帯における家畜資源に関する資料収）
2016年２月７日～２月15日―エクアドル（熱帯における森林生態資源の利用に関する資料収集）
2016年３月23日～３月28日―バングラディッシュ、タイ（熱帯の豚飼育に関する資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（２人）副指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「熱帯高地における環境開発の地域間比較研究――『高地文明』の発見に向けて」（研究代表者：山本紀夫）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「森林生態資源の地域固有性とグローバルドメスティケーション化に関する研究」（研究代表者：小林繁男）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「乳文化の視座からの牧畜論考――全地球的地域間比較による新しい牧畜論の創生」（研究代表者：平田昌弘）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「多起源的家畜化モデルの構築と学融合型資料収蔵システムの確立」（研究代表者：遠藤秀紀）研究分担者、総合研究大学院大学学融合推進センター研究事業「戦略的共同研究Ｉ」（代表者：野林厚志）研究分担者、総合地球環境学研究所研究プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性――歴史生態学からのアプローチ」（代表者：羽生淳子）研究分担者、家畜資源研究会（HCMR）研究分担者、牛車研究会（代表者：池内克史）研究分担者、味の素食の文化センター食のフォーラムメンバー

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

Nomadic Peoples 編集委員、Museum Anthropology（USA）編集委員、Tribes and Tribals（India）編集委員、日本アフリカ学会評議員、人文地理学会理事、生き物文化誌学会副会長、静岡県文化・観光部世界遺産センター選考委員、ヒトと動物の関係学会評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所運営委員、ビオストーリー編集委員

・非常勤講師

広島大学大学院国際協力研究科「途上国農村地域研究」（集中講義）

名古屋大学文学部および大学院文学研究科「生き物文化の研究」（集中講義）

笹原亮二［ささはら　りょうじ］―――― 教授

1959年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部卒（1982）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程前期修了（1995）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程後期退学（1995）**【職歴】**相模原市立博物館学芸員（1982）、国立民族学博物館第１研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）**【学位】**博士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 2001）、修士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 1995）**【専攻・専門】**民俗学、民俗芸能研究 1）日本の獅子舞の民俗学的研究、2）日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、3）民俗学における資料論**【所属学会】**日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

［単著］

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

［編著］

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化――文字の民俗学　声の歴史学』京都：思文閣出版。

［論文］

笹原亮二

2005 「用と美――柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司共編『柳 宗悦と民藝運動』pp.273-294，京都：思文閣出版。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の祭と民俗芸能における装飾性の諸相

・研究の目的、内容

我々の生活の場には、衣類や食器や家具など様々なモノが存在し、我々はそれらを所有し、用いて生活を営んできた。そうしたモノに対し、我々は道具としての利便性や実用性に関心を向けがちである。しかし、現実の生活の場には、道具としての利便性や実用性が必ずしも問題とされないモノも存在する。それは、祭や民俗芸能において見られる御幣・仮面・笠・曳山などの品々である。それらは、形態や色彩などに殊更に趣向が凝らされ、日々の生活の場のモノとは大いに趣を異にする。また、こうしたモノを使用して行う儀礼や芸能といった身体行為も、家庭内の日々の労働や生産生業の際に実用的な道具類を用いて行う身体行為とは、大いに趣を異にしている。そうしたモノや身体行為の最たるものが、祭や年中行事の際に、人々が趣向を凝らして作り、見物の観覧に供する造形物、「造り物」であり、非日常的な身体技術を駆使して見物を魅了する芸能、「軽業」や「曲芸」である。こうした各地の祭や民俗芸能における、モノと身体技術の両面で見られる装飾性に富んだ多種多様な趣向を、人々の願いや喜びや晴れがましさといったハレの機会における闊達な精神活動の所産として捉えて実態の把握を試みる。そして、それらを通じ、各地で様々な祭や民俗芸能を脈々と営んできた人々の心性や感覚、即ち「ハレのこころ」のありようや歴史を考える。

本研究の実施にあたっては、申請者が研究代表者の科学研究費助成事業（基盤研究（C））「本州とその周辺の

島々及び多島海的海域における民俗芸能の研究」も活用するほか、申請者が来年度開催を予定している特別展「見世物大博覧会」の準備のための準備調査と連携して進める。

・成果

祭や民俗芸能に関わるモノの装飾性については、鳥取県南部町法勝寺の春祭の一式飾、島根県出雲市平田町の平田天満宮祭の平田一式飾など、陶磁器・金属食器・竹細工・餅搗き道具などの同類・同種の器物を用いて様々な造形を作り上げる一式造り物、東京都荒川区南千住の素棧雄神社の天王祭の山車人形「稲田姫」、群馬県桐生市の祇園祭の山車人形「須佐之男命」、香川県高松市愛宕神社祭の山車人形「源為朝鬼退治」、岡山県倉敷市の祭礼人形飾り由来の化物人形、大阪府大阪市西区阿波座通りの陶器神社夏祭の瀬戸物人形などの各種の人形造り物、三重県伊勢市園部町上條の大念仏の仕掛花火と手筒花火、同市同町小林の大念仏の手筒花火といった花火の風流、三重県大紀町錦の八幡祭の山車、愛知県蒲郡市三谷町の三谷祭の「ヤマ」、島根県隠岐の島町五箇の水若酢神社祭礼風流の「ヤマ」、宮城県石巻市雄勝町の「おめつき」祭の山車など、祭に登場する山・山車・鉾・屋台などの大型の構造物について、全体で蓬莱山などの縁起物を模した形状を作ったり、魚や団子といった海山の収穫物を見物人に誇示するように内部に飾り付けたりする構造物自体の造形や、それらに付加する造花・常緑樹・鶴亀などの縁起物を象った造形物などの装飾、三重県伊勢市園部町上條の大念仏のかんこ踊や同市同町小林の大念仏のかんこ踊における太鼓や桴の五色の紙の飾り、三重県志摩市大王町波切の大念仏における故人の遺品や所縁の品が吊り下げられた「カサブク」、島根県隠岐の島町中村の武良祭の軍配や鉾や流鏑馬の射手の笠や弓矢、同県同町五箇の祭の流鏑馬の射手の笠や弓矢、新潟県佐渡市小比叡の田遊びの餅製の農具といった、祭や民俗芸能において用いられる様々な趣向を凝らした祭具や用具類などについて、現地調査・記録作成・資料化を行った。

祭や民俗芸能に関わる身体技術の装飾性については、直立した柱に舞手が登り、天辺で逆立ちをしたり、柱から地面に張り渡した綱を様々な姿勢をとりながら滑り降りたりする、茨城県龍ケ崎市上町の八坂神社の祇園祭の撞舞、舞手が３～４段に肩車を組んで獅子舞を演じる愛媛県今治市の継ぎ獅子、柱の上部に取り付けた横木にぶら下がって舞う、千葉県多古町多古の八坂神社祭のしいかご舞、米俵や木箱を投げ上げたり、頭上で組み上げたり、腹上で臼と杵を用いて餅搗きをしたりする、神奈川県川崎市中原区の新城神社秋祭の囃子曲持、舞手が逆立ちしたり反り返ったまま動き回る一人芸や２人で組み合っての連続回転や肩車などの二人芸を演じる、新潟県新潟市南区月潟の白山神社祭（地蔵祭）の角兵衛獅子、獅子頭を遣う舞手と後ろ足を受け持つ舞手が幌の中で肩車をしたり組み合って回転したり碁盤の上で逆立ちをしたりして獅子舞を行う、京都府京都市上京区の小山郷の六歳念仏、獅子頭を遣う舞手と後ろ足を受け持つ舞手が幌の中で組み合って逆立ちをする「逆抱き」や肩車をして背高になる（「あぶになる」）演技を行う「曲獅子」を演じる、岐阜県飛騨市古川町数河の白山神社祭の数河獅子舞、直立した梯子に虎（獅子）が登って先端で舞う岩手県大船渡市神坂の熊野神社式年大祭の梯子虎舞、八郎潟に浮かべた船上に４本柱を立てて櫓を組み、そこに張り渡した綱の上で舞手が回転する、秋田県潟上市天王町・男鹿市船越の八坂神社祭の蜘蛛舞について、現地調査・記録作成・資料化を行った。

各地の祭や民俗芸能で見られた祭具や用具類や身体技術の装飾性は、それぞれの祭や民俗芸能ごとに独特な趣向や意匠や形象が認められ、具体的な様相は様々であるが、そうした多様性の一方で、それらの装飾性全体に関わる問題の所在も明らかになった。

そうした問題の１つとして、それらの装飾性を巡る専業者の関与と一般の人々の関係が挙げられる。祭具や用具類などのモノの装飾性を巡っては、それぞれの祭や民俗芸能の執行の当事者である地域の一般の人々が、一式造り物や人形造り物などの趣向を凝らした造形物を製作したり、山車や太鼓や桴などの祭具や用具類に装飾を施したり、基本的には自ら装飾製作の実施主体となっていたが、人形造り物の頭部や山車人形は専業の人形師が製作していたり、祭具や用具類の装飾に用いる紙の意匠が元々は陰陽道の五行説に由来するなど専業の宗教者である陰陽師が管理していた知識に基づいていたり、様々なかたちで専業者の関与が認められた。また、一式造り物や人形造り物では、地域で非専業的に製作に従事していた一般の人々が、後に専業の人形師として活動するようになった場合もあった。これらは、モノの装飾性を巡っては、専業者の関与と一般の人々の実践とは厳密に区別されるわけではなく、実際は一定程度の共通性や連続性が存在していたことを示している。

祭や民俗芸能の身体技術の装飾性を巡っても同様の傾向を見て取ることができる。各地の芸能で見られた装飾性の高い身体技術が駆使された芸態は、軽業や曲芸を専らとしていた専業芸能者の技芸に由来すると考えられるものが少なくない。撞舞、しいかご舞、蜘蛛舞と類似の芸能は、江戸時代に見世物小屋で専業芸能者による軽業として興行されて人気を博していたことが知られる。新潟市南区月潟の角兵衛獅子は、江戸時代から明治・大正にかけて全国各地を巡って軽業や曲芸を演じていた専業芸能者による芸能が、地域の人々が演じるかたちで民俗芸能化したものである。曲芸や軽業的な芸態を有する各地の獅子舞は、江戸時代以降、全国各地を

巡って曲芸や軽業的な芸能を演じて人気を博した大神楽や角兵衛獅子といった専業芸能者の芸能を真似たり習得したりして始まったと考えられ、実際に大神楽や角兵衛獅子に由来する創始伝承を有するところも見られる。

こうしたことは、各地で様々な祭や民俗芸能を演じ、伝えてきた人々の心性や意識や感覚、即ち「ハレのこころ」の形成に、芸能や宗教などに通じた専業者の知識や技術が深く関わっていることを示している。

また、こうした専業者の知識や技術が最も効果的に発揮された場の１つが、江戸時代後期から明治・大正にかけて都市部の盛り場を中心に盛行し、人々を魅了した細工物や身体技芸などの見世物興行であり、それらが都市部に止まらず、それ以外の地域においても、一般の人々によって祭や年中行事などのハレの場を通じて受容され、定着を見たことを考えると、見世物の文化としての広範な伝播が、各地の人々のハレの心性や感覚や美意識の形成にいかなる影響を与えたかといった問題が、改めて浮かび上がってくる。

本研究の実施にあたっては、特に、三重県伊勢志摩地方、新潟県佐渡島、宮城県牡鹿半島における現地調査は、申請者が研究代表者の科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「本州とその周辺の島々及び多島海的海域における民俗芸能の研究」の一環として行った。また、各地の一式造り物や人形造り物、軽業系民俗芸能の現地調査は、申請者が2016年に開催を予定している特別展「見世物大博覧会」の準備のための準備調査の一環として行った。本調査の成果は、同特別展の開催、カタログなどの関連出版物の刊行、講演会などの関連催し物の実施などを通して公表を図る予定である。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2016年３月23日　「ダンジリの系譜」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

島根県古代文化センター資料評価委員・同客員研究員、鳥取県文化財保護審議会専門委員

・非常勤講師

関西学院大学文学部「地理学地域文化学特殊講義」

杉本良男［すぎもと　よしお］―― 教授

1950年生。**【学歴】**東京都立大学人文学部人文科学科卒（1974）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1977）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（1980）**【職歴】**国際基督教大学教養学部社会科学科非常勤助手（1979）、南山大学文学部講師（1981）、南山大学人類学研究所第一種研究所員併任（1984）、南山大学文学部助教授（1986）、国立民族学博物館第３研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1999）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）**【学位】**博士（社会人類学）（東京都立大学 1995）、文学修士（東京都立大学 1977）**【専攻・専門】**社会人類学、南アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、日本南アジア学会

【主要業績】

［単著］

杉本良男

2015　『スリランカで運命論者になる――仏教とカースト制が生きる島』（フィールドワーク選書14）京都：臨川書店。

［編著］

杉本良男編

2014　『世界民族百科事典』（国立民族学博物館編、編集委員長）東京：丸善出版

2014　『キリスト教文明とナショナリズム――人類学的比較研究』（国立民族学博物館論集２）東京：風響社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

キリスト教文明と南アジア・ナショナリズム

・研究の目的、内容

本研究は、主としてフランス革命期以後の「キリスト教文明」の展開が、南アジア地域においてどのような影響を与え、またそれがどのような問題を引き起こしているのかについて、文献研究と現地調査によって系譜論的に明らかにしようとするものである。

本年度は、グローバル化と急速な経済発展が進む南インドにおいて、都市・村落社会にどのような構造変動及んでいるかを実証的に明らかにしようとする系譜学的研究の総まとめの段階にあたる。

本年度は、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（代表者・杉本良男）および科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環：生活文化の視点から」（代表者・杉本大三）によって実施した都市・農村部における共同調査資料のとりまとめと執筆作業を進める。さらに、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究――東西融和と民族主義の相克」（代表者・安藤礼二）により、神智（学）協会と南アジア・ナショナリズムとの関連についての系譜学的研究を実施し、現在の過激化するナショナリズムの淵源を明らかにしつつ、その現代的意義についての研究を進める。

・成果

本年度は、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（代表者・杉本良男）および科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環：生活文化の視点から」（代表者・杉本大三）によって実施した都市・農村部における共同調査資料のとりまとめと執筆作業を進め、日本南アジア学会年次大会（東大）において共同で中間報告を行い、さらに共同研究者とともに研究成果とりまとめの作業を行った。また、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究――東西融和と民族主義の相克」（代表者・安藤礼二）により、神智（学）協会と南アジア・ナショナリズムとの関連についての系譜学的研究を実施し、『国立民族学博物館研究報告』40巻２号に特集「マダム・ブラヴァツキーとチベット」を組み、３名の若手研究とともに研究成果を公開した。

◎出版物による業績

［単著］

杉本良男

2015 『スリランカで運命論者になる――仏教とカースト制が生きる島』（フィールドワーク選書14）京都：臨川書店。

［共編］

杉本良男・三尾稔編

2015 『現代インド６　環流する文化と宗教』東京：東京大学出版会。

［論文］

杉本良男

2015 「「インド」をめぐる知の変容」三尾稔・杉本良男編『現代インド６　環流する文化と宗教』pp.219-241，東京：東京大学出版会。

2015 「映画の21世紀」三尾稔・杉本良男編『現代インド６　環流する文化と宗教』pp.153-157，東京：東京大学出版会。

2015 「特集：マダム・ブラヴァツキーのチベット――序論」『国立民族学博物館研究報告』40(2)：199-213，大阪：国立民族学博物館。

2015 「闇戦争と隠秘主義――マダム・ブラヴァツキーと不可視の聖地チベット」『国立民族学博物館研究報告』40(2)：267-309，大阪：国立民族学博物館。

［その他］

杉本良男

2015 「聖・聖性、場所・空間」『民博通信』150：24-25。

2015 「インド映画の新潮流――多言語での製作充実」『産経新聞』（大阪）７月14日夕刊。

2015 「みんぱく世界の旅　インド①　民族衣装サリー」『毎日小学生新聞』10月17日。

2015 「みんぱく世界の旅　インド②　映画が娯楽の王様」『毎日小学生新聞』10月24日。

2015 「みんぱく世界の旅　インド③　経済の発展によりさまざまな変化」『毎日小学生新聞』10月31日。

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌㉑　聖人ガンディーの誤算」『京都新聞』11月４日。

2015 「みんぱく世界の旅　インド④　教育の水準 大きく変化」『毎日小学生新聞』11月７日。

2015 「<特集市に集う>インドのショッピング・モール」『月刊みんぱく』39(12)：7-8。
2015 Twenty Years of Indian Films at Minpaku, *MINPAKU Anthropology Newsletter* 41: 7-8.
2016 「<味の根っこ>サンバル」『月刊みんぱく』40(3)：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年9月27日 「南インド農村における宗教の消費」セッション「現代インドの消費行動と社会システム」(代表者・杉本大三) 日本南アジア学会第28回全国大会、東京大学

・研究公演

2015年7月20日 『ファンドリー』みんぱく映画会／インド映画特集
2015年7月25日 『カンーチワラム サリーを織る人』みんぱく映画会／インド映画特集
2015年8月2日 『Mr & Mrs アイヤル』みんぱく映画会／インド映画特集
2015年8月8日 『DDLJ 勇者は花嫁を奪う』みんぱく映画会／インド映画特集

◎調査活動

・海外調査

2015年10月1日～10月6日―韓国（韓国におけるインド文化受容に関する調査研究）
2016年1月12日～1月24日―インド（南インド社会の構造変動についての調査研究）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環：生活文化の視点から」(研究代表者：杉本大三) 研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究――東西融和と民主主義の相克」(研究代表者：安藤礼二) 研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

公益信託「澁澤民族学振興基金」運営委員、日本学術会議連携会員、神戸大学附属中等教育学校文部科学省指定研究開発に係る運営指導委員

竹沢尚一郎 [たけざわ しょういちろう]――教授

1951年生。**【学歴】**東京大学文学部宗教学専攻卒（1976)、東京大学大学院人文科学研究科宗教学専攻修士課程修了（1978)、フランス社会科学高等研究院社会人類学専攻博士課程修了（1985）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（1985)、九州大学文学部助教授（1988)、国立民族学博物館併任助教授（1996)、九州大学大学院人間環境学研究院教授（1998)、国立民族学博物館民族学研究部教授（2001)、九州大学大学院併任教授（2001)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002)、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2007）**【学位】**民族学博士（フランス社会科学高等研究院 1985)、文学修士（東京大学 1978）**【専攻・専門】**宗教人類学、アフリカ史、人類学学説史**【所属学会】**日本宗教学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会

【主要業績】

［単著］

竹沢尚一郎
2013 『被災後を生きる――吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』東京：中央公論社。
2010 『社会とは何か――システムからプロセスへ』(中公新書) 東京：中央公論社。
2007 『人類学的思考の歴史』京都：世界思想社。

【受賞歴】

1988 日本宗教学会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1）西アフリカ史研究

2）被災のコミュニティ研究

・研究の目的、内容

1）2012～2015年度の日本学術振興会の科学研究費助成事業を得て、アフリカ史研究を遂行する。具体的には、西アフリカ・マリ国で考古学発掘調査を実施し、その成果を素に西アフリカ史記述をおこなう。また、他のアフリカ史研究者と共同研究を推進する。

2）岩手県大槌町をテーマとして、被災前の三陸の沿岸文化と、被災後の人びとの行動を中心に、企画展示「人類学者の見た東日本大震災」を実施する予定である。そのために、総合研究大学院大学の学融合プロジェクトに応募するなどして、準備を進める。

・成果

1）日本学術振興会の科学研究費を得て、西アフリカで考古学発掘とこれまでの研究成果の精査を行った。その成果を仏語の論文集のかたちで、マリの研究機関人文科学研究所の機関誌『Etudes maliennes』誌の特別号として出版する予定であった。ところが、マリの出版社側の事情により出版することができなかった。校正作業はすべて完了しているので、日本で2016年５月までに出版する予定である。そのほか、論文「世界の中のアフリカ史」を山川出版社の『歴史と地理』に寄稿したほか、『マリを知るための58章』を編著の形で明石書店より出版した。

2）国立民族学博物館で2016年１月より４月まで企画展を実施する予定であり、それに向けて、民俗資料の選び出しや、展示予定の写真の選び出しなどの準備を進めた。そのほか、編著『ミュージアムと負の記憶』を東信堂より出版した。

◎出版物による業績

［編著］

竹沢尚一郎編

2015 『ミュージアムと負の記憶――戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』東京：東信堂。［査読有、民博機関研究「モノの崇拝」の成果］

2015 『マリを知るための58章』東京：明石書店。

［論文］

竹沢尚一郎

2015 「世界のなかのアフリカ史」『歴史と地理』689：1-14，東京：山川出版社。

［その他］

竹沢尚一郎

2015 「震災遺構とコミュニティー」『聖教新聞』４月２日。

2015 「旅・いろいろ地球人　ミュージアム⑫　負の記憶を伝えること」『毎日新聞』９月24日。

2015 「東日本大震災の避難所が教えてくれるもの」『月刊みんぱく』39(10)：8-9。

2016 「ミュージアムと負の記憶」『民博通信』152：26。

2016 「展示でつくる被災地の未来」『京都新聞』３月25日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2015年４月18日 「10世紀の西アフリカに伝わった中国製磁器――アフリカから世界史を考える」第443回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

2015年10月23日 「アフリカの歴史を考える」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年10月30日 「西アフリカ、マリの現在」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年９月27日 「アフリカ史の謎を解く」第398回みんぱくウィークエンド・サロン研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2015年９月13～９月18日―岩手県大槌町（企画展「東日本大震災の展示（仮）」の準備のための調査）

2015年10月31～11月６日―岩手県大槌町（企画展「東日本大震災の展示（仮）」の準備のための調査）
2016年３月７～３月12日―岩手県大槌町（企画展「東日本大震災の展示（仮）」の準備のための調査）

・**海外調査**

2015年８月15日～９月２日―フランス、マリ（出版打ち合わせ及び資料収集）
2015年11月27日～１月17日―フランス、マリ（考古学の発掘作業と資料収集）
2016年３月18日～３月27日―インドネシア（災害展示に関する調査研究）

◎大学院教育

・**論文審査**

主任指導教員（１人）、副指導教員（１人）

出口正之［でぐち　まさゆき］――教授

1955年生。**【学歴】**大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）**【職歴】**ジョンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教授（1995）、総合研究大学院大学学長補佐（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）**【専攻・専門】**NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学**【所属学会】**国際NPO・NGO学会（ISTR = International Society for Third Sector Research）、米国NPO学会（ARNOVA = The Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action）、非営利法人研究学会、日本文化人類学会

【主要業績】

［著書］

出口正之
1993 『フィランソロピー』東京：丸善出版

［共編著］

Vinken, H., Y. Nishimura, B. L. J. White, and M. Deguchi（eds.）
2010 *Civic Engagement in Contemporary Japan Civic Engagement in Contemporary Japan*. New York/Dordrecht/Heidelberg/London: Springer.

本間正明・出口正之編著
1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

［分担執筆］

Deguchi, M.
2001 The Distortion between Institutionalized and Noninstitutionalized NPO: New Policy Initiative and the Nonprofit Organizations in Japan. In H. K. Anheier and J. Kendall（eds.）*Third Sector Policy at the Crossroads: An International Nonprofit Analysis*, pp.277-301. London and New York: Routledge.

【受賞歴】

1988　東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞
1988　日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞
1995　ESP大来佐武郎賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・**研究課題**

公益法人その他の民間非営利公益団体の総合的研究

・**研究の目的、内容**

科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究「法・会計・文化融合型の公共政策国際比較研究 チャリティ制度を事例に」に基づき、公益認定等委員会制度及び　公益法人その他の民間非営利公益団体（＝チャリティ）の国際比較研究を行った。家元組織、スポーツ団体、学会等独自の組織文化を持つチャリティ組織の研究を実施した。

また、ニュージーランド、イギリスや中国の制度を国際比較的に研究を行った。

・成果

招待講演

「第三回中国公益慈善プロジェクト交流展示会」（THE FORTH CHINA CHARITY FAIR）における「公益慈善に関する国際シンポジウム」において招待講演「日本の公益慈善に関する法律と政策」

発表論文

2015 「公益法人制度の昭和改革と平成改革における組織転換の研究」『非営利法人研究学会誌17：49-60』非営利法人研究学会。［査読有］

2015 「寄附は心の投票 インパクトのある公益活動こそ寄附の源（特集 いま，知っておきたい公益・一般法人の「寄附」）『公益・一般法人』890：46-49。

2015 「特定費用準備資金について」『公益・一般法人』894：30-36。

2015 「収支相償と「適正な費用」の範囲」『公益・一般法人』896：34-42。

2015 「定款の目的，経理的基礎，技術的能力」『公益・一般法人』898：24-30。

2015 「特別の利益の３つの留意点」『公益・一般法人』900：34-40。

2015 「投機的取引・公序良俗及び収益事業等」『公益・一般法人』902：34-40。

2015 「公益目的事業比率について」『公益・一般法人』904：80-86。

2015 「遊休財産保有制限について」『公益・一般法人』906：70-79。

2016 Policy change making the biggest Corporate Philanthropy in Japan: Yamato Welfare Foundation and “the service-related philanthropy”『政策科学』23(3)：67-80　立命館大学政策科学会。

2016 「不可欠特定財産の考え方」『公益・一般法人』908：60-64.

2016 「３分の１規制と会計監査人設置原則」『公益・一般法人』910：60-66.

2016 「役員等の報酬等の支給基準と社員資格の得喪条件」『公益・一般法人』912：54-58.

学会口頭発表

・European Research Network On Philanthropy での口頭論文発表（パリ）。

・International Society for Third Sector Research Asia Pacific regional conference（東京）での論文口頭発表。

・非営利法人研究学会での口頭論文発表。

上記研究は科学研究費助成事業挑戦的萌芽研究「法・会計・文化融合型の公共政策国際比較研究」（研究代表者出口正之）の一環として実施した。

◎出版物による業績

［論文］

出口正之

2015 「寄附は心の投票 インパクトのある公益活動こそ寄附の源」『公益・一般法人』890：46-49。

2015 「編集員が訊く」出口正之 ＆ 島村真佐利（対談）『公益・一般法人』892：14-21。

2015 「特定費用準備資金について」『公益・一般法人』894：30-36。

2015 「収支相償と「適正な費用」の範囲」『公益・一般法人』896：34-42。

2015 「定款の目的，経理的基礎，技術的能力」『公益・一般法人』898：24-30。

2015 「特別の利益の３つの留意点」『公益・一般法人』900：34-40。

2015 「投機的取引・公序良俗及び収益事業等」『公益・一般法人』902：34-40。

2015 「公益目的事業比率について」『公益・一般法人』904：80-86。

2015 「遊休財産保有制限について」『公益・一般法人』906：70-79。

2015 「公益法人制度の昭和改革と平成改革における組織転換の研究」『非営利法人研究学会誌』17：49-60.［査読有］

2016 「不可欠特定財産の考え方」『公益・一般法人』908：60-64。

2016 「３分の１規制と会計監査人設置原則」『公益・一般法人』910：60-66。

2016 「役員等の報酬等の支給基準と社員資格の得喪条件」『公益・一般法人』912：54-58.

［その他］

出口正之

2015 「旅・いろいろ地球人　ミュージアム⑤　海外展開の意味すること」『毎日新聞』８月６日。

2016 「フイランソロピー首都とディアスポラ・フィランソロピー」『みんぱく e-news』176号，２月１日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年７月９日～７月10日　‘Policy change making the biggest Corporate Philanthropy in Japan, The 7th International Conference of the European Research Network On Philanthropy’, ESSEC Business School, Cergy Campus, Paris, France

2015年８月27日～８月28日　‘Paternalism and Compliance Creep: Before and After the Public Interest Corporation Reforms in Japan’, 9th ISTR Asian Pacific regional conference/Nihon Univ., Tokyo

2015年９月16日～９月17日　「“クリープ現象”としての収支相償論」非営利法人研究学会第19回大会

2015年９月18日～９月20日　招待講演「日本公益慈善に関する法律と政策」第四届中国公益慈展会专题论坛深圳大学社会管理创新研究所他深圳，中国

2016年１月22日　「フィールドから拾う現代の『日本語』とその特質」総合研究大学院大学学術シンポジウム「学術とことば」

・広報・社会連携活動

2015年９月16日　「政府をフィールドワークする ⁉ ――明治以来の110年ぶりの大改革と日本の官僚文化」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年６月14日　「次週開催！「音楽の祭日」を10倍楽しむ法」第387回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年７月８日～７月12日―フランス（第７回フィランソロピーに関する欧州研究ネットワーク国際会議に参加及び発表）

2015年９月18日～９月20日―中華人民共和国（中国政府主催第４回中国慈善展示交流会において招待講演

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人助成財団センター評議員、茨木市文化振興施策推進委員会委員長

・非常勤講師

放送大学（面接授業担当）「ボランティアと社会」

森　明子［もり　あきこ］――教授

【学歴】筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学（1989）**【職歴】**筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第３研究部助手（1990）、国立民族学博物館第３研究部助教授（1997）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2009）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）**【学位】**文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）**【専攻・専門】**文化人類学 1）ヨーロッパ人類学、2）ドイツ、オーストリアの民族誌研究、3）民族学・民俗学の歴史的展開**【所属学会】**日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族――オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

［編著］

森 明子編

2014 『ヨーロッパ人類学の視座――ソシアルなるものを問い直す』京都：世界思想社。

2004 『ヨーロッパ人類学――近代再編の現場（フィールド）から』東京：新曜社。

2002 『歴史叙述の現在――歴史学と人類学の対話』京都：人文書院。

Mori, A.(ed.)
2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学的比較の再考

・研究の目的、内容

比較は、文化人類学研究を、基底的に性格づけている。ポストモダン人類学は、比較のための単位を実体的・硬直的にとらえる文化の理解を批判したが、これに対して最近、超越的な比較ではない水平的な比較という議論が起こってきた。全体を見通すのではない部分的なヴィジョンに着目して、人類学的な比較を説明しようとするものである。本研究は、こうした議論を参照しながら、ヨーロッパ人類学の実践において、民族誌記述と人類学的比較が、いかに照射しあっているのか、検討するものである。

研究は、ケアをめぐる民族誌的研究と、ディシプリンのあり方に焦点をあてるものの二方向から展開し、それを複数のプロジェクトのもとにすすめる。第一のケアをめぐる民族誌研究については、昨年度後期から開始した本館の共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究――保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」(研究代表者　森）において推進する。さらに、本年から開始する科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」(研究代表者　森）の初年度として、海外学術調査に基づく共同研究を推進する。第二の、ディシプリンのあり方に焦点をあてる研究については、10月に来日するドイツの民族学研究者を迎えて、文化人類学・民族学・民俗学に関わるコロッキアムを開催する計画である。また、研究分担者として参加する科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて：日中韓と独との研究協業網の形成」(研究代表者　岩本-東京大学）において、ドイツと日中韓の民俗学・民族学の比較という見地から人類学的比較を再考する。

・成果

1）ケアをめぐる民族誌研究として、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」(研究代表者・森明子）の資金によって、ベルリンおよびウィーンにおいて調査研究を行った。保育園やベビーシッターなど保育をめぐるケアのあり方、歴史的展開、現在の実態について、関連する資料を収集し、インタビュー調査と参与観察を行った。また、ベルリン、ウィーンを拠点に、研究者ネットワークの構築・強化・拡大をはかった。

2）ケアをめぐる民族誌研究の一環として、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」(研究代表者・森明子）の資金により、学術研究企画 ラウンド・テーブル・ディスカッション「東アジアにおける家族の境界とケア実践――社会政策のもとでの家族」を開催（2015年10月12日、於国立民族学博物館）した。

3）研究分担者として参加する科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて：日中韓と独との研究協業網の形成」(研究代表者　岩本-東京大学)、日本民俗学会第67回年会、国立民族学博物館機関研究「文化遺産の人類学」の資金によって、国際フォーラム“Thinking about Cultural Heritage Regimes. A Discussion with Prof. Regina Bendix”を企画・開催し（2015年10月13日、於国立民族学博物館)、ディシプリンのあり方に焦点をあてた議論を展開するとともに、国内外の研究ネットワークを構築・進展させた。

4）ケアをめぐる民族誌研究の一環として、大阪市立大学2015年度国際学術シンポジウム「EU 諸地域における環境・生活圏・都市　文化接触のコンテクストとコンフリクト」に、企画段階から参加協力し、基調講演とセッション講演を行った。

◎出版物による業績

［報告］

森 明子

2015 「パースペクティヴを展示する――ベルリン、ヨーロッパ諸文化博物館の試み」『民博通信』151：24

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国際フォーラムでの報告

2015年10月13日 ‘Introduction to Thinking about Cultural Heritage Regimes,’ The International Forum

-Thinking about Cultural Heritage Regimes. A Discussion with Prof. Regina Bendix. National Museum of Ethnology, Osaka.

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年12月4日　基調講演「街区はいかにつくられたか――開発・再開発と保育園」大阪市立大学2015年度国際学術シンポジウム「EU 諸地域における環境・生活圏・都市 文化接触のコンテクストとコンフリクト」、大阪歴史博物館講堂

2015年12月6日　「移民が語る都市空間」大阪市立大学2015年度国際学術シンポジウム「EU 諸地域における環境・生活圏・都市 文化接触のコンテクストとコンフリクト」、大阪市立大学田中記念館

◎調査活動

・海外調査

2015年11月2日～11月30日―ドイツ（「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」に関わる調査研究）

2016年1月29日～2月26日―オーストリア（「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」に関わる調査研究）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ委員として論文指導

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「東アジア＜日常学としての民俗学＞の構築に向けて――日中韓と独との研究協業網の形成」（研究代表者：岩本通弥）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

独立行政法人大学評価・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員、京都大学人文科学研究所 共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員、日本民俗学会国際交流特別委員会委員、人間文化研究機構男女共同参画委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von Historische anthropologie: Kultur-Gesellschaft-Alltag（Köln, Weimar, Wien）（ドイツ・オーストリアで刊行されている学術雑誌の研究顧問）

新免光比呂［しんめん　みつひろ］―――――――――――――――――――准教授

1959年生。**【学歴】**早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（1992）**【職歴】**東方研究会専任研究員（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、帝京大学非常勤講師（1992）、国立民族学博物館第3研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2004）**【学位】**文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）**【専攻・専門】**宗教学・東欧研究**【所属学会】**東方研究会

【主要業績】

［単著］

新免光比呂

2000　『祈りと祝祭の国――ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

［共著］

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998　『比較宗教への途3　人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

［論文］

新免光比呂

1999　「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教――民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1-42。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

バルカン地域における大衆音楽に関する比較社会的研究

・研究の目的、内容

バルカン地域において、ひとびとがオスマン帝国時代からの文化的影響と現代のワールドミュージックの影響をどのように受容してきたのかをテーマに大衆音楽の比較社会的研究を行うことであった。

・成果

本年度は、バルカン地域における大衆音楽の比較社会的研究の基礎的作業として、西欧音楽の史的理解と構造的理解に努めた。一方、研究の成果発表としては、大阪府高齢者大学において、「バルカン地域とルーマニア――共通する歴史と文化」（2015年12月４日）「バルカン地域とルーマニア――共通する現代の音楽」（2015年12月11日）と題して、オスマン帝国時代からの文化的影響と現代のワールドミュージックの影響について講演を行った。

◎出版物による業績

［その他］

新免光比呂

2015 「みんぱく世界の旅　ルーマニア①　年間の節目の行事」『毎日小学生新聞』５月30日

2015 「みんぱく世界の旅　ルーマニア②　村ごとにデザインちがう民族衣装」『毎日小学生新聞』６月６日

2015 「みんぱく世界の旅　ルーマニア③　日常にとけ込む神への信仰心」『毎日小学生新聞』６月13日

2015 「みんぱく世界の旅　ルーマニア④　村人は皆　働き者　そして歌が大好き」『毎日小学生新聞』６月20日。

2015 「旅・いろいろ地球人　ミュージアム①　昼下がりの憩いは博物館で」『毎日新聞』７月９日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2015年12月４日 「バルカン地域とルーマニア――共通する歴史と文化」『世界の文化に親しむ科』大阪府高齢者大学

2015年12月11日 「バルカン地域とルーマニア――共通する現代の音楽」『世界の文化に親しむ科』大阪府高齢者大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年２月７日 「一神教の宗教、多神教の宗教」第413回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2015年５月23日～５月24日―国学院大学（科学研究費助成事業「ファシズム期の古代理解に関する総合的研究」研究会に参加）

2015年７月14日～７月15日―蒜山郷土博物館・真庭ふるさとセンター（ルーマニアと日本の山村文化比較研究のための資料収集）

2015年９月28日～９月28日―TYP 赤坂駅カンファレンスセンター（文化科学研究科教授会に出席）

2015年11月６日～11月６日―津和野カトリック教会、萩カトリック教会（カクレキリシタンに関する資料収集）

2015年11月11日～11月13日―鳥取県立博物館（伝統芸能の音声を中心とした資料収集）わらべ館（世界の玩具に関する資料を収集、鳥取県における代表的な音楽家の資料収集）

2015年12月１日～12月２日―美星吉備高原神楽民俗伝承館（中国地方南部における伝承文化に関する調査と資料収集）

2015年12月11日～12月12日―やかげ町家交流館（伝統芸能「備中神楽」の実演の鑑賞と聞き取り）。美星吉備高原神楽民俗伝承館（伝統芸能「備中神楽」に関する資料収集）

2016年１月８日～１月９日―津山郷土博物館（中国地方美作の音文化と社会的背景に関する調査と資料収集）

2016年１月12日～１月14日―三原市立歴史民俗資料館、芸北民俗芸能保存伝承館（中国地方の音文化と社会背景に関する調査と資料収集）

2016年２月９日～２月11日―久賀歴史民俗資料館、しらかべ学遊館、光ふるさと郷土館（中国地方の民俗文化の調査と資料収集）

2016年２月26日～２月26日―メルパルク京都（文化科学研究科教授会に出席）
2016年２月17日～２月19日―相生市立歴史民俗資料館、赤穂市立海洋科学館（瀬戸内海沿岸地方の民俗文化の調査と資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（１人）

博士論文審査委員（件数　1）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「ファシズム期の古代理解に関する総合的研究」（研究代表者：平藤喜久子）連携研究者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「旧東欧地域における「演歌型」大衆音楽の比較研究」（研究代表者：伊東信宏）研究分担者

鈴木　紀［すずき　もとい］――准教授

1959年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）**【職歴】**ニューヨーク州立大学ビンガムトン校人類学科教務助手（1992）、千葉大学文学部助教授（1996）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院 1985）**【専攻・専門】**開発人類学・ラテンアメリカ文化論 1) 開発援助プロジェクト評価、2) フェアトレード、3) マヤ・ユカテコ民族の社会変化、4) 先住民族文化の比較展示学**【所属学会】**日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for Applied Anthropology、American Anthropological Association

【主要業績】

［編著］

鈴木 紀・滝村卓司編

2013　『国際開発と協働――NGOの役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ８）東京：明石書店。

［論文］

鈴木 紀

2014　「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84, 東京：東京大学出版会。

2011　「開発人類学の展開」佐藤 寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学：冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp.45-66, 東京：明石書店。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国際開発のための実践人類学

・研究の目的、内容

本研究の目的は、社会問題の解決に寄与するための文化人類学である実践人類学を、国際開発活動の分野で推進することにある。とくに開発プロジェクトが、その対象社会で持続、発展していくための条件を、プロジェクトのインパクト（事前に予期された影響および予期されていなかった影響）に関する民族誌的調査を通じて明らかにしていく。

今年度は、メキシコの農村開発に関する研究成果の取りまとめ、およびフェアトレード研究を行う。後者では、フェアトレードのインパクトを調査するため、中央アメリカのカカオ栽培を事例に、カカオ栽培に起因する地域振興としての観光業の展開について現地調査をおこなう。この調査には、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の資金を充当する。

・成果

国際協力機構がメキシコで実施した農村開発プロジェクトの地域住民へのインパクトに関する研究を発表した。

鈴木 紀

2015 「オーナーシップ論再考――農村開発における妬みと嫉妬」関根久雄編『実践と感情――開発人類学の新展開』pp.117-142、横浜：春風社。

フェアトレードに関する海外調査は、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表：池上甲一）の資金を用いて2016年２月８日から２月19日まで、ベリーズおよびアメリカ合衆国で実施した。ベリーズ国南部のマヤ系先住民族のカカオ栽培およびそれに関する文化が、フェアトレードを端緒とするグローバル経済によってどのように変化しているかを調査した。

またフェアトレードに関して国立民族学博物館で実施した２つの国際シンポジウム（「フェアトレード・コミュニケーション：商品が運ぶ物語」（2010年３月２日）および「グローバルな倫理的消費：フェアトレードの新展開」（2012年３月24日～25日））の成果をとりまとめ、フェアトレードに関する近年の動向を付加して以下の形で出版した。

1）鈴木 紀（編）『フェアトレードによる支援　第１巻　フェアトレード・コミュニケーション：商品が運ぶ物語』国立民族学博物館・鈴木 紀研究室、2016。

2）鈴木 紀（編）『フェアトレードによる支援　第２巻　グローバルな倫理的消費：フェアトレードの新展開』国立民族学博物館・鈴木 紀研究室、2016。

◎出版物による業績

［編著］

鈴木 紀編

2016 『フェアトレードによる支援　第１巻　フェアトレード・コミュニケーション――商品が運ぶ物語』大阪：国立民族学博物館・鈴木 紀研究室 （機関研究プロジェクト「支援の人類学――グローバルな互恵性の構築に向けて」（2009年～2012年度）の成果）

2016 『フェアトレードによる支援　第２巻　グローバルな倫理的消費――フェアトレードの新展開』大阪：国立民族学博物館・鈴木 紀研究室 （機関研究プロジェクト「支援の人類学――グローバルな互恵性の構築に向けて」（2009年～2012年度）の成果）

［論文］

鈴木 紀

2015 「オーナーシップ論再考――農村開発における妬みと嫉妬」関根久雄編『実践と感情――開発人類学の新展開』pp.117-142，横浜：春風社。

2015 「資源化される古代文明――遺跡の調査と活用に関わるアクター分析　序論」『古代アメリカ』18：95-102，古代アメリカ学会。［査読有］

2016 「序　フェアトレード・コミュニケーション：商品が運ぶ物語」鈴木 紀編『フェアトレードによる支援　第１巻　フェアトレード・コミュニケーション：商品が運ぶ物語』pp.1-3，大阪：国立民族学博物館・鈴木 紀研究室。（機関研究プロジェクト「支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて」（2009年～2012年度）の成果）

2016 「序　グローバルな倫理的消費：フェアトレードの新展開」鈴木 紀編『フェアトレードによる支援　第２巻　グローバルな倫理的消費：フェアトレードの新展開』pp.1-6，大阪：国立民族学博物館・鈴木 紀研究室。（機関研究プロジェクト「支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて」（2009年～2012年度）の成果）

2016 「UCIRIとフランシスコ・ヴァンデルホフ氏の関わり」鈴木 紀編『フェアトレードによる支援　第１巻　フェアトレード・コミュニケーション：商品が運ぶ物語』pp.63-66，大阪：国立民族学博物館・鈴木 紀研究室。（機関研究プロジェクト「支援の人類学：グローバルな互恵性の構築に向けて」（2009年～2012年度）の成果）

［その他］

鈴木 紀

2015 「旅・いろいろ地球人　驚く⑦　マヤ文明を活用する」『毎日新聞』４月30日夕刊。

2015 「自然の恵みを凝縮「元祖チョコラテ」」『産経新聞』７月７日夕刊。

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌⑩　コスタリカのチョコレート」『京都新聞』７月22日。

2015 「旅・いろいろ地球人　ミュージアム⑦　三つの太陽の石」『毎日新聞』 8月20日夕刊。
2016 「移民／難民について考えるための映画案内」『社会科NAVI』12：18-19。
2016 「ミュージアムの中の古代アメリカ文明」『民博通信』152：4-9。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

伊藤敦規・鈴木 紀監修

2016 『みんぱく映像民族誌第18集　米国南西部の先住民の宝飾品』（日本語、51分）国立民族学博物館製作

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年4月18日 「展示の中のマヤ文明とマヤ民族―メキシコ、グアテマラの博物館比較」日本ラテンアメリカ学会西日本部会研究会、京都大学
2015年6月2日 公開フォーラム「タイムマシンとしてのアステカのモニュメント：考古学的石碑の新しい解釈」国立民族学博物館
2015年6月6日 公開講演会「博物館の中の古代アメリカ文明」科学研究費助成事業新学術領域研究（研究領域提案型）「古代アメリカの比較文明論」国立民族学博物館
2015年11月20日 'Representing pre-Columbian Heritage: a Comparative Study of Museum Exhibitions on Maya Civilization,' The 114th Annual Meeting of the American Anthropological Association. Denver, Colorado.
2015年12月17日 「フェアトレード・チョコレートのカカオ産地へのインパクト：中米ベリーズの事例から」東北人類学談話会、東北大学
2016年1月28日 「博物館展示にみる中米古代文明」文化遺産国際協力コンソーシアム第6回中南米分科会、東京文化財研究所

・広報・社会連携活動

2015年7月8日 「チョコレートの故郷：メキシコと中央アメリカ」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店
2015年10月12日 『長江哀歌』みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ
2016年1月30日 『あの日の声を探して』みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ
2016年3月20日 『サンドラの週末』みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年1月31日 「チョコレート博物館」第412回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年11月17日～11月26日―アメリカ合衆国（アメリカ人類学会における研究発表及びマヤ文明に関する博物館展示研究）
2016年1月10日～1月21日―ペルー（アメリカ大陸先住民文化に関する博物館展示方法の研究）
2016年2月8日～2月19日―ベリーズ、アメリカ合衆国（マヤ民族のカカオ栽培に関する民族誌的調査）
2016年3月2日～3月15日―エクアドル、アメリカ合衆国（アンデス文明の博物館展示に関する研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

比較社会演習III「社会と経済に関する人類学的アプローチ」担当
比較文化学基礎演習I（1年生ゼミ）担当
博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（新学術領域（研究領域提案型））「古代アメリカの比較文明論」A04計画研究「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」研究代表者、科学研究費助成事業（新学術領域（研究領域提案型））「古代アメリカの比較文明論」（代表：茨城大学　青山和夫）総括班研究分担者、科学研究費助成事業（国際共同研究

加速基金（国際活動支援班））「古代アメリカの比較文明論」（代表：茨城大学　青山和夫）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究Ｂ）「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（代表：近畿大学　池上甲一）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・委嘱された委員

文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員

・他大学の客員、非常勤講師

神戸大学大学院国際協力研究科「開発人類学」（集中講義）、神戸大学国際文化学部「開発文化論」（集中講義）、大阪大学「ボランティア論」（10月29日「開発援助とボランティア」担当）、東北大学文学部「開発人類学」（集中講義）

廣瀬浩二郎［ひろせ　こうじろう］――准教授

【学歴】京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校留学（1995）、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学（1997）**【職歴】**京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）**【学位】**文学博士（京都大学大学院文学研究科 2000）、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）**【専攻・専門】**日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）**【所属学会】**日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待――触覚でみる手学問のすゝめ』京都：世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論――出口王仁三郎と近代日本』大阪：解放出版社。

［学位論文］

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」京都大学大学院文学研究科。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

今年度採用の小学４年生の国語教科書（学校図書）に拙文「さわっておどろく」が掲載されている。その関係で小学校での講演、子ども向けワークショップの依頼が増えることが予想される。拙文は民博における10年余の活動を総括する内容となっており、「研究成果の社会還元」と位置づけることができる。「ユニバーサル＝誰もが楽しめる」という観点で、初等・中等教育の現場とも連携しつつ、自身の研究の新展開をめざしたい。

2012～2014年度に行なった共同研究「触文化に関する人類学的研究」は2015年３月に終了したが、プロジェクトの議論を発展させる形で2015年秋に「観光・まちづくりのユニバーサルデザイン」をテーマとして、民博で公開シンポジウムを開催する。これまで積み上げてきたユニバーサル・ミュージアムの実践的研究を継承し、触文化理論を学校教育、観光・まちづくりなどの他分野に応用することが今年度の大きな課題である。

・成果

2015年11月に行なった公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開」には、全国から150名余の参加者が集まった。私が2006年の企画展「さわる文字、さわる世界」で“触文化”“ユニバーサル・ミュージアム”の概念を提唱してから10年が経過し、「さわる展示」の実践を試みる博物館が着実に増えているのは間違いない。博物館関係者のみならず、観光・まちづくり分野の専門家の出席が多かったのも本シンポジウムの特徴だった。シンポの報告書『ひとが優しい博物館』（青弓社）は、2016年６月に刊行される予定である。

言語政策学会（６月）、画像電子学会（９月）など、文化人類学以外の研究団体から講演依頼を受けた事実

は、触文化論に対する関心が各方面で高まっていることを示すものだろう。拙文「さわっておどろく」の国語教科書掲載がきっかけとなり、小学校での特別授業、子ども向けワークショップも各地で実施した。これらの取り組みは新聞・テレビでもしばしば紹介されたので、民博の存在を社会にアピールする上でも有意義だった。

◎出版物による業績

［論文］

廣瀬浩二郎

2015 「盲人文化と視覚障害者支援」『視覚障害教育ブックレット』28：4-9，ジアース教育新社。

2015 「『音にさわる』読書法――盲人文化と視覚障害者支援」『日本言語政策学会第17回大会予稿集』pp.78-81。

2015 「さわる展示の原点を求めて」『視覚障害教育ブックレット』29：4-12，ジアース教育新社。

2015 「触る感動、動く触感」『環境と健康』28(4)：386-406，公益財団法人体質研究会。［査読有］

2016 「体力と気力を養う――ある当事者団体の挑戦」『視覚障害教育ブックレット』30：4-13，ジアース教育新社。

Hirose, K.

2016 The Concept of “Universal Museum”: The Significance and Possibility of Exhibiting Tactile Culture. *Astronomy Museums and Related Activities*, pp.83-89. National Astronomical Observatory of Japan.

［その他］

廣瀬浩二郎

2015 「さわっておどろく」『みんなと学ぶ小学校国語４年下』学校図書，pp.10-19。

2015 「絵にさわる――“頭”で味わうBF絵画の世界」『吹田市立博物館館報』15：53-54。

2015 「マジョリティが失った認識」『毎日新聞』７月25日。

2015 「唄に込められた心波を味わおう」『産経新聞』９月８日夕刊。

2015 「研究成果の公開――シンポジウム『ユニバーサル・ミュージアム論の新展開』」『民博通信』151：2-6。

2016 「触ることで発見」『山陽新聞』１月19日夕刊。

2016 「みんぱく食の民族誌　考える舌㉚　舌は『第三の手』なり」『京都新聞』２月10日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年11月29日 「全盲者の耳、ろう者の目」公開シンポジウム『ユニバーサル・ミュージアム論の新展開』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年４月25日 「触文化研究の最前線」ニコニコ学会βシンポジウム『第８回 研究100連発』幕張メッセ

2015年６月７日 「『音にさわる』読書法」日本言語政策学会大会シンポジウム『マルチリテラシーズと言語政策』椙山女学園大学

2015年９月28日 「The Concept of “Universal Museum”」国立天文台主催『国立天文台ミュージアム国際シンポジウム』国立天文台

2015年10月17日 「障害者アートの呼称をめぐって」東海大学主催公開シンポジウム『ミュージアムのトリセツ（取扱説明書）』東海大学課程資格教育センター

2016年２月11日 「『見えない世界をみる』身体知の探究」京都大学アフリカ地域研究資料センター主催『教育・学習の人類学セミナー』京都大学

・研究講演

2015年４月15日 「見えない世界をみる身体知」岡山大学文学部主催講演会、岡山大学

2015年４月16日 「さわる美術鑑賞の可能性」岡山県立美術館主催講演会、岡山県立美術館

2015年４月23日 「さわる文化への招待」大阪保健福祉専門学校主催特別授業、大阪保健福祉専門学校

2015年５月26日 「ユニバーサル・ミュージアムとは何か」兵庫県立大学主催特別講義、国立民族学博物館

2015年６月18日 特別講義「世界をさわる」京都大学ポケットゼミ「障害とは何か」国立民族学博物館

2015年７月18日 「障害から生まれる新たな風土論」滋賀県立陶芸の森主催講演会、滋賀県立陶芸の森

2015年７月24日 「見えない世界をみる」日本キリスト教団玉出教会主催ワークショップ、玉出教会

2015年８月１日 「瞽女文化と視覚障害教育」日本視覚障害社会科教育研究会主催講演会、直江津学びの交流館

2015年８月７日　「触る感動、動く触感」京都大学総合博物館主催ワークショップ、京都大学総合博物館
2015年８月21日　「博物館における触覚情報」近畿視覚障害者情報提供施設協議会主催講演会、国立民族学博物館
2015年８月23日　「身体でみる異文化」東海大学主催講演会、東海大学松前記念館
2015年９月９日　「さわる文化の可能性」品川区教育委員会主催講演会、品川区立第二延山小学校
2015年９月12日　「見えない世界をみる」豊中市主催人権講演会、豊中市立野畑図書館
2015年９月26日　「触る感動、動く触感」画像電子学会主催「視覚・聴覚支援システム研究会」国立民族学博物館
2015年９月30日　「点字と視覚障害者の文化」大阪女学院中学部主催特別授業、大阪女学院
2015年10月６日　「情報保障から情報変換へ」生駒市図書館主催講演会、生駒市図書館
2015年10月16日　「さわって感じる世界」品川区立第二延山小学校主催特別授業、第二延山小学校
2015年10月24日　「さわって楽しむ考古学」ひたちなか市主催「ふるさと考古学講座」、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
2015年10月31日　「さわって感じる世界」豊中市立少路小学校主催ワークショップ、豊中市・緑丘会館
2015年11月３日　「深めて、伸ばして、新しくなるカラダのふしぎ」視聴覚二重障害者福祉センター・すまいる主催講演会、天王寺区民センター
2015年11月５日　「『見えない世界をみる』感性を育むために」点訳ボランティアグループ連絡会主催講演会、神戸アイライト協会
2015年11月６日　「さわる世界と視覚障害者の文化」鳥取盲学校主催講演会、鳥取盲学校
2015年11月７日　「触る感動、動く触感」わらべ館主催ワークショップ、鳥取市・わらべ館
2015年11月９日　「博物館とバリアフリー」2015年度博物館学集中コース、国立民族学博物館
2015年11月19日　「触文化とは何か」大阪府立大手前高校主催講演会、大手前高校
2015年11月26日　「さわって感じる世界」京都新聞社主催特別授業、京都市立第四錦林小学校
2015年12月11日　「視覚障害者と博物館」高槻市視覚障害者福祉協会主催講演会、国立民族学博物館
2016年１月10日　「さわってつくる、つくってさわる」岡山県立美術館主催ワークショップ、岡山県立美術館
2016年１月20日　「ユニバーサル・ミュージアムの六原則」九州産業大学主催「九州地区学芸員技術研修会」、佐賀県立美術館
2016年２月26日　「触る文化への正体」宇治市主催講演会、宇治市生涯学習センター
2016年２月29日　「さわって感じる世界」豊中市立豊島西小学校主催特別授業、豊島西小学校
2016年３月５日　「さわって楽しむ博物館」株式会社ダスキン主催講演会、ダスキンサーブ近畿
2016年３月12日　「世界をさわる」豊中市主催人権講演会、豊中市・少路地区公民分館
2016年３月13日　「ガタゴト電車『音の旅』」キッズプラザ大阪主催ワークショップ「くらやみ探検」、キッズプラザ大阪
2016年３月19日　「触る感動、動く触感」つくば市民大学主催講演会、筑波学院大学
2016年３月27日　「さわる文化とユニバーサル・ミュージアム」点字民報社主催講演会、点字民報社

・広報・社会連携活動

2015年７月６日　「さわっておどろく」ラジオ大阪「話の目薬ミュージックソン」出演
2015年９月16日　「『聴き語り』の芸能」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店
2015年９月23日　「触文化教育の実践」関西テレビ「みんなのニュース・ワンダー」出演
2015年11月11日　「見えない世界をみる身体知」2015年度みんぱく若手研究者奨励セミナー、国立民族学博物館
2016年１月18日　「アクセス可能な博物館」放送大学「博物館教育論」ラジオ番組収録
2016年２月20日　「点字の力」NHKテレビ「あほやねん!すきやねん!」出演

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年４月26日　「身体でみる異文化」第380回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2015年８月18日～19日―東京都・株式会社アクーブ・ラボ（３Ｄサウンドを活用したアトラクション開発の現状と課題）
2016年１月29日～30日―さいたま市・鉄道博物館（音と振動を利用した体感型プログラムの最新動向）

・海外調査

2015年８月29日～９月８日―イタリア（美術館における「さわる鑑賞法」の調査研究）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

吹田市立博物館協議会委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西学院大学・非常勤講師「障害と人権」、筑波大学理療科教員養成施設・非常勤講師（集中）「視覚障害教育」、東海大学・非常勤講師（集中）「博物館実習」

山中由里子［やまなか　ゆりこ］――准教授

1966年生。**【学歴】**カラマズー大学フランス語／美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退（1993）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（1992）、東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）**【学位】**学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）**【専攻・専門】**比較文学比較文化　西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究、「驚異」の文化史**【所属学会】**日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会、International Society for Iranian Studies

【主要業績】

［単著］

山中由里子

2009　『アレクサンドロス変相――古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

［編著］

山中由里子編

2015　『＜驚異＞の文化史――中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。

［共編］

Yamanaka, Y. and T. Nishio（eds.）

2006　*The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*. London: I. B. Tauris.

【受賞歴】

2011　第７回日本学士院学術奨励賞

2011　第７回日本学術振興会賞

2010　第15回日本比較文学会賞

2010　島田謹二記念学藝賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

・研究の目的、内容

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で mirabilia、アラビア語・ペルシア語で ʻajāʼib と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。本研究で明らかにしようとする問題点は、次の三つの主要な軸にまとめることができる

1）ジャンルの枠組とモチーフの分類

2）知識の伝播と世界観の変遷

3）宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性

・成果

報告者が代表を務めた科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」(2010-2014）と、共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相――中東・ヨーロッパを中心に」(2010.10-2014.3）を連携させて行った調査・報告・討論の成果を、『＜驚異＞の文化史――中東とヨーロッパを中心に』（名古屋大学出版会、2015年）として編集し刊行した。比較文学、比較文明学、東西文化交流史、妖怪・怪異学など、様々な分野の研究者から注目を浴びている。12月18日付『週刊読書人』の2015年回顧欄、さらに12月27日付の朝日新聞の「今年の３点」の欄でとりあげられ、社会的にもインパクトを与えている。

「＜驚異＞を媒介する旅人」を『怪異を媒介するもの』（アジア遊学187、勉誠社 2015.8）に刊行。

また、以下の研究発表を行った：

・「比較怪物命名学――驚異と怪異の名づけと形象化」国際研究集会「東の妖怪・西のモンスター」学習院女子大学、2015.11.1

・「海賊商品としての人魚のミイラ」シンポジウム「海賊・山賊・馬賊・愚連隊：無法者 outlaw の社会史にむけて」国際日本文化研究センター、2016.2.13

◎出版物による業績

［編著］

山中由里子編

2015 『＜驚異＞の文化史――中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。［査読有、共同研究成果］

［論文］

山中由里子

2015 「驚異を媒介する旅人」東アジア怪異学会編『怪異を媒介するもの』（アジア遊学187）pp.287-292, 東京：勉誠出版。

2015 「驚異考」山中由里子編『〈驚異〉の文化史――中東とヨーロッパを中心に』pp.1-24, 名古屋：名古屋大学出版会。［査読有］

2015 「想像の地理と周縁の民族――女人族伝承の東西伝播」山中由里子編『〈驚異〉の文化史――中東とヨーロッパを中心に』pp.256-273, 名古屋：名古屋大学出版会。［査読有］

［その他］

山中由里子

2015 対談　小説に生まれ変わるモノ（いしいしんじ × 山中由里子）『月刊みんぱく』39(5)：3-9。

2015 「旅・いろいろ地球人　驚く⑧　からくりにびっくり」『毎日新聞』５月７日夕刊。

2015 「こうしてわたしはFos信奉者となった…」Fos Alumni Message No.9 日本学術振興会。(http://www.jsps.go.jp/j-bilat/fos/messages/09.html)

2016 「既知の世界の彼方へ」『民博通信』152：20-21。［共同研究成果］

2015-2016 「編集後記」『月刊みんぱく』39(5)～40(3)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2016年１月11日　「趣旨説明」『驚異と怪異――想像界の比較研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年９月15日　‘Alexander and the Wonders of the World in Tūsī’s *ʿAjāʾib al-makhlūqāt*’、ヨーロッパイラン学会、エルミタージュ美術館、サンクト・ペテルブルグ

2015年11月１日　「比較怪物命名学――驚異と怪異の名づけと形象化」国際シンポジウム「東の妖怪・西のモンスター」、学習院女子大学

2016年１月24日　「＜驚異＞としての古代――アジャーイブ文学におけるアレクサンドロス」ワークショップ「中世イスラーム世界から見た古代」筑波大学東京キャンパス

2016年２月13日　「海賊商品としての人魚のミイラ」シンポジウム「海賊・山賊・馬賊・愚連隊：無法者 outlaw の社会史にむけて」国際日本文化研究センター

2016年３月17日　「物質文化を翻訳する――国立民族学博物館における展示解説の多言語化」、シンポジウム「翻訳・翻案と日本文化――テクストの世界展開をめぐって」タシュケント国立東洋学大学、ウズベキスタン共和国

・展示
特別展「見世物大博覧会」実行委員
常設展示新構築総括班
巡回展「イメージの力」郡山市立美術館
・広報・社会連携活動
2015年5月29日　「<驚異>の比較文学」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
2015年6月19日　「博物学と驚異の部屋」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
2015年7月11日　MMP 新規メンバー養成研修、国立民族学博物館第5セミナー室
2015年9月27日　MMP 第三回ステップアップ講座、国立民族学博物館第5セミナー室
2015年11月25日　「みんぱくコレクションにみる世界のイスラーム」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本館
・みんぱくウィークエンド・サロン
2016年2月28日　「人魚のミイラ――驚異と怪異の接点」第416回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう
◎調査活動

◎大学院教育
・指導教員
主任指導教員（1人）
・大学院ゼミでの活動
「西アジア文化研究特論」担当
論文ゼミ
・論文審査
博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）
◎上記以外の研究活動
・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
人間文化研究機構連携研究代表者「驚異と怪異の表象――比較研究の試み」代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「日本現代文学・文化の世界展開の比較文学的研究――<ポップ>なテクストを中心に」（研究代表者：平石典子）研究分担者、国際日本文化研究センター共同研究「21世紀10年代日本文化の軌道修正――過去の検証と将来への提言」（代表：稲賀繁美）共同研究員
◎社会活動・館外活動
・他機関から委嘱された委員など
日本比較文学会国際活動委員会、日本文化人類学会第49回研究大会準備委員会
・他大学の客員、非常勤講師
大阪府高齢者大学、「世界の文化に親しむ科」

齋藤玲子［さいとう　れいこ］―― 助教

1966年生。**【学歴】**北海道大学文学部行動科学科卒（1989）**【職歴】**北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）**【専攻・専門】**文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸**【所属学会】**日本文化人類学会

【主要業績】
［編著］
齋藤玲子編
2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題――国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先

住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告 131）

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶――イヌイットと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

［論文］

齋藤玲子

2012 「アイヌ工芸の200年――その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート（先住民アート・プロジェクト報告書）』pp.45-60，札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化の継承と社会的背景の研究

・研究の目的、内容

アイヌ民族は、江戸時代中ごろから徐々に和人の支配下におかれ、明治・大正・昭和と時代を経るにつれて独自の文化の継承は次第に困難になり、アイヌ文化は途絶えた、とまで言われるような状態になった。しかし、実際は形を変えながらも多くの文化要素が受け継がれている。

引き続き、こうしたアイヌ文化の継承と当時の社会状況との関係について、物質文化と芸能に注目し、研究をおこなう。最終的に、物質文化や芸能が、記録の多く残る江戸時代後期からどう変化してきたかを明らかにし、現代のアイヌ文化の位置づけを示すことを目指す。

具体的には、2012年にスタートした「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」の共同研究において、各時代・各地域での生活用具や儀礼具などの製作・使用の状況と、それらを収集者に譲った経緯等を明らかにすることにより、アイヌの物質文化の変化を示す。また、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地における織布技術と布の機能」（代表：佐々木史郎　2014～2016）の連携研究者として、アイヌの織物の継承についても引き続き調査をすすめる。

・成果

アイヌの物質文化の継承については、２つの共同研究会のメンバーとしてそれぞれで発表した。１つはおもに男性の手になる木彫に関して「匿名か実名か　アイヌ工芸品の銘／記名をめぐって」、もう１つは女性の手になる「アイヌの織りと縫い――その担い手と継承のあり方について」である。

また、自身が代表の共同研究については、『民博通信』150号で前年度のおもな成果として「坪井正五郎によるアイヌ民族資料の収集」を報告した。さらに、（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構のアイヌ工芸品展の出品資料選定に協力し、同展図録に「博物館に残された『木の文化』」を寄稿した。その共同研究は、報告書となる論集の内容を検討して各自執筆中であり、2016年に出版助成に申請し、2017年度に刊行予定である。

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地における織布技術と布の機能」（代表：佐々木史郎）では、ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵のアイヌの着物をはじめとする資料調査に参加し、報告の準備中である。

◎出版物による業績

［編著］

齋藤玲子編

2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題――国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告 131）。［査読有、共同研究成果］

［論文］

齋藤玲子

2015 「博物館に残された『木の文化』」（財）アイヌ文化振興・研究推進機構編『木と生きる――アイヌのくらしと木の造形』pp.174-179，札幌：（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構。

2015 「北西海岸先住民アートの歴史と現在」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題――国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告 131）pp.187-194。［査読有、共同研究成果］

Сайто Рейко и Накада Ацуси（齋藤玲子・中田篤共著）

2016 Предметы коренных народов Сибири и Дальнего Востока в собрании Хоккайдского музея народов

Севера: опыт сбора и экспозиции. Шагланова Ольга А., Сасаки Сиро（Ред.）*Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях.*（Culture of the peoples of Siberia and the Russian Far East in museum collections.）（Senri Ethnological Reports 136）. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有、機関研究成果］

［その他］

齋藤玲子

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌⑤　アイヌの『ポッチェイモ』」『京都新聞』 6 月10日。

2015 「旅・いろいろ地球人　踊る⑤　交流の場」『毎日新聞』 6 月11日夕刊。

2015 「お茶であり、薬であり――アイヌの飲み物」『Vesta』99：44-45。

2015 「第20回武四郎まつりに参加して」武四郎まつり実行委員会編（宇野文男責任編集）『武四郎まつり20年の歩み』pp.42-44　松阪：武四郎まつり実行委員会。

2015 「坪井正五郎によるアイヌ民族資料の収集」『民博通信』150：18-19。

2015 「北海道アイヌの魚の汁物 チェプオハウ」『月刊みんぱく』39(11)：14-15。

2015 「緒言」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題――国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告 131）pp.3-10。［査読有、共同研究成果］

2015 「国立民族学博物館における1980年代までの北アメリカ先住民資料の収集について――イヌイット版画と北西海岸先住民版画を中心に」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題――国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告 131）pp.13-16。［査読有、共同研究成果］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2015年 4 月25日　「アイヌの織りと縫い――その担い手と継承のあり方について」『現代「手芸」文化に関する研究』国立民族学博物館

2016年 2 月11日　「匿名か実名か――アイヌ工芸品の銘／記名をめぐって」『表象のポリティックス――グローバル世界における先住民／少数者を焦点に』国立民族学博物館

・展示

「アイヌの文化」展示新構築プロジェクトリーダー

・広報・社会連携活動

2015年 7 月 9 日　「アイヌ民族の歴史と文化」プール学院中学校 2 年生、国立民族学博物館

2015年10月 8 日　「日本の先住民族アイヌ」JICA 博物館学コース、国立民族学博物館

2015年11月12日　「ミンパク　オッタ　カムイノミ」司会・解説

◎調査活動

・国内調査

2015年 9 月18日～24日―釧路市阿寒町、札幌市、平取町、新ひだか町（アイヌ工芸および「アイヌの文化」展示に関する聞き取り調査）

2016年 3 月24日―東京都・宮本記念財団（宮本馨太郎氏旧蔵の日本民族学会附属民族学博物館の資料カードならびに北海道・樺太関係写真についての聞取り調査）

・海外調査

2015年 8 月30日～ 9 月 5 日―ロシア連邦（「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」に係る資料調査）

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）連携研究者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）連携研究者

◎社会活動・館外活動等

北海道立北方民族博物館研究協力員

藤本透子［ふじもと　とうこ］——助教

1975年生。**【学歴】**京都大学文学部史学科卒（1998）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修了（2002）、京都大学大学院人間・環境学研究科環境相関研究専攻博士課程研究指導認定退学（2007）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（2006）、京都大学大学院人間・環境学研究科研修員（2008）、国立民族学博物館機関研究員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2012）立命館大学国際関係学部「ロシア・ユーラシア研究Ⅱ」非常勤講師（2015）**【学位】**博士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2010）修士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2002）**【専攻・専門】**文化人類学、中央アジア地域研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、日本イスラム協会

【主要業績】

［単著］

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』東京：風響社。

［編著］

藤本透子編

2015 『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』横浜：春風社。

［論文］

Fujimoto, T.

2011 Kazakh Memorial Services in the Post-Soviet Period: A Case Study of Northern Kazakhstan Villages. In T. Yamada and T. Irimoto (eds.), *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*, pp.117-132. Sapporo: Hokkaido University Press.

［受賞］

2013 人間文化研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・**研究課題**

中央アジアにおけるイスラームと社会再編に関する人類学的研究

・**研究の目的、内容**

中央アジア諸国では、ソ連解体から今日に至るまでイスラームが多様な形で地域社会の再編に深く関わってきた。本研究では、これまで長期の現地調査を行ってきたカザフスタンの事例を、他の中央アジア諸国の事例と幅広く精緻に比較検討することで、イスラームと社会再編の関係を読み解くことを目的とする。特に、宗教に対する国家の関与、宗教政策に対する地域社会の対応、日常生活における宗教実践の展開、国境を越えた移動と宗教動態に着目して研究を行う。また、中央・北アジア展示のリニューアルが予定されており、中央アジア研究の成果を反映した展示に取り組む。

・**成果**

1）中央アジアおよび社会主義を経験した諸地域における宗教動態の比較研究

共同研究（若手）の成果として、『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』（藤本透子編著）を、2015年５月末日に春風社より刊行した。本書では、体制移行と国境を越える移動に着目しながら、日常生活を中心とした宗教実践の（再）活性化が地域社会の再編／分断と緊密に関わっていることを、具体的な事例をもとに実証的に論じた。また、カザフスタンの宗教動態に関して、拙論「イスラームと民族的伝統の布置——社会主義を経たカザフスタンの事例から」が、佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラブ・ユーラシア世界——比較民族誌的研究』の一章として2016年３月に刊行された。

2）共同性の再構築に関する研究

国際ワークショップの成果として、Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectednessというタイトルで SES を編集して申請した（客員教授・山田孝子と共編）。本書では、現代において地域社会がどのように再編され共同性が再構築されるのかという問題を、アジアを中心に先住民、少数民族、移民の事例から幅広く考察している。特に拙論では、Migration to the “Historical Homeland”: Remaking Connectedness in Kazakh Society beyond National Bordersと題して、在外カザフ人のカザフスタンへの「帰還」を取り上

げ、帰還後の共同性の再構築に宗教実践と祝祭が果たした役割について分析した。

3）中央・北アジア展示

33年ぶりとなる中央・北アジア展示のリニューアルに従事した。中央・北アジア新展示は「自然との共生」「社会主義の時代」という２つの共通テーマに基づくセクションと、「中央アジア」「モンゴル」「シベリア・極北」の３つの地域セクションからなる。中央・北アジア展示チームのリーダーとして展示全体に関わったが、特に「中央アジア」セクションの展示を担当した。「カザフ草原のくらし」「オアシス都市の暮らし」「職人の世界」「イスラームと人生儀礼」という４つのサブセクションを構成し、解説パネル、写真パネル、資料キャプションも含めて、展示をほぼ完成させた（2016年６月に公開予定）。また、「地域社会における博物館展示の可能性」と題して、琉球大学におけるワークショップ「地域社会の再生／活性化に向けたフィールド・サイエンスの可能性」で２月12日に発表、「国立民族学博物館における中央アジア展示リニューアル――現地社会との関わりを中心に」と題して、日本中央アジア学会で３月27日に発表した。

◎出版物による業績

［編著］

藤本透子編

2015 『現代アジアの宗教――社会主義を経た地域を読む』横浜：春風社。［査読有、共同研究成果］

［論文］

藤本透子

2016 「イスラームと民族的伝統の布置――社会主義を経たカザフスタンの事例から」佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラブ・ユーラシア世界――比較民族誌的研究』pp.127-150，東京：風響社。［査読有］

2016 「書評　滝澤克彦『越境する宗教――ポスト社会主義モンゴルにおける宗教復興と福音派キリスト教の台頭』東京：新泉社、2015年」『北東アジア地域研究』20：185-192。

［その他］

藤本透子

2015 「みんぱく世界の旅　カザフスタン①　牧畜に適した風土」『毎日小学生新聞』９月19日。

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌⑰　カザフスタンの馬肉食」『京都新聞』９月23日。

2015 「みんぱく世界の旅　カザフスタン②　赤ちゃんぐっすり　伝統的なゆりかご」『毎日小学生新聞』９月26日。

2015 「みんぱく世界の旅　カザフスタン③　村にも普及する携帯電話」『毎日小学生新聞』10月３日。

2015 「みんぱく世界の旅　カザフスタン④　マイナス40度の長く厳しい冬」『毎日小学生新聞』10月10日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年２月12日　「地域社会における博物館展示の可能性」ワークショップ「地域社会の再生／活性化に向けたフィールド・サイエンスの可能性」琉球大学

2016年３月27日　「国立民族学博物館の中央アジア展示リニューアル――現地社会との関わりを中心に」日本中央アジア学会年次大会、藤沢市

・展示

中央・北アジア展示新構築（中央・北アジア展示チームリーダー、「中央アジア」セクション担当）

・広報・社会連携活動

2015年６月30日　「イスラーム入門」阪神シニアカレッジ「国際理解学科」、尼崎市中小企業センター

2015年６月30日　「イスラーム社会の文化人類学」阪神シニアカレッジ「国際理解学科」、尼崎市中小企業センター

2015年７月10日　「カザフ草原に生きる――女性たちの視点から」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年９月25日　「民博の中央アジア展示――現地での資料収集から」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年10月６日　「中央アジアの社会再編とイスラーム」、人間文化研究機構メディア懇談会、人間文化研究機構本部

2015年11月27日　「中央アジアの暮らしとイスラーム」、立花市民大学、尼崎市立中央公民館

2015年12月９日　「カザフの食文化」カレッジシアター「地球探求紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年10月４日　「中央アジアの30年――展示リニューアルへ向けて」第399回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2016年２月14～15日―沖縄県那覇市および座間味村（ライフヒストリーに関する聞き取り調査）

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

立命館大学国際関係学部「ロシア・ユーラシア研究Ⅱ」非常勤講師（2015年10月～2016年３月）。

名古屋大学大学院PhD博士課程教育リーディングプログラム「プロフェッショナル登龍門」の「イスラム文化論」（"Islam in Asia: An Anthropological Perspective"）を担当（2016年１月18日）。

先端人類科学研究部

寺田吉孝［てらだ　よしたか］―― 部長（併）教授

【学歴】ワシントン大学総合学部学士課程修了（1979）、ワシントン大学音楽部修士課程修了（1983）、ワシントン大学音楽部博士課程修了（1992）**【職歴】**ワシントン大学音楽部講師（1994）、ピッツバーグ大学船上大学プログラム講師（1995）、国立民族学博物館第２研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2008）**【学位】**Ph. D.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1992）、M. A.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1983）**【専攻・専門】**民族音楽学**【所属学会】**東洋音楽学会、Society for Ethnomusicology、International Council for Traditional Music、British Forum for Ethnomusicology

【主要業績】

［編著］

Terada, Y. (ed.)

2008　*Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.

2001　*Transcending Boundaries: Asian Musics in North America* (Senri Ethnological Reports 22). Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Terada, Y.

2000　T. N. Rajarattinam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460-490.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

音楽・芸能関連映像音響番組の制作と活用の再検討

・研究の目的、内容

民博が映像音響メディアを用いて蓄積してきた音楽・芸能の情報は膨大な量に達しており、その資料的価値は高い。しかし、活発な収集・制作活動に比べ、映像音響資料の活用に関する議論はこれまで十分に行われておらず、館外での利用、特に取材対象国・地域においての利用は極めて限定的である。本研究は、これまでの番組作成と活用のプロセス（事前調査、取材、編集、上映など）を見直し、音楽・芸能の伝承に寄与することができる映像音響番組の制作方法を検討することを目的とする。特に今年度は、国際的な研究グループ（映像音響民族音楽学 Audiovisual Ethnomusicology）の設立に参加し、研究者のネットワーク構築に努力したい。

・成果

映像音響メディアが音楽・芸能の伝承や活性化に貢献しうる条件について考察を深めるために、複数のプロジ

ェクトを並行して進めた。

1．映像取材：国内取材では、在日コリアンの音楽に関する映像取材を計７回行い、東京・大阪在住の音楽家、音楽家集団３組の演奏およびインタビューを記録した。取材は文化資源プロジェクトとして2016年度も継続することが認められている。国外取材では、ネパール・カトマンドゥ市において楽器製作に関する映像を収集しただけでなく、同ポカラ市近郊にある楽師の村において民博が1980年代に制作した番組を上映し、番組の内容に関する追加情報を得るとともに観衆の反応を記録した。

2．映像番組の編集：2014年度に取材を行った大阪市浪速区の太鼓づくりに関する番組の編集作業を行った。また、福岡正太准教授、サムアン・サム教授（外国人研究員）と共同で、カンボジアの影絵芝居スバエク・トムの英語字幕版を編集した。

3．上映会：イギリス（音楽祭）、カザフスタン（音楽学会）、ネパール（映画祭）で、民博制作番組を上映し、参加者と内容や編集方法などに関する議論を行った。特に、イギリスにおける上映は、映画の対象となった太鼓集団の公演の一部として行われた。

◎出版物による業績

［単著］

寺田吉孝

2016 『音楽からインド社会を知る――弟子と調査者のはざま』（フィールドワーク選書11）京都：臨川書店。

［編書］

Terada Y.（ed.）

2016 *An Audiovisual Exploration of Philippine Music: The Historical Contribution of Robert Garfias* (Senri Ethnological Reports 133). Osaka: National Museum of Ethnology. 124pp.［査読有］

［論文］

Terada Y.

2015 Fusion music in South India. In V. L. Levine and P. V. Bohlman (eds.), *This Thing Called Music: Essays in Honor of Bruno Nettl*, pp.433–446. Lanham: Rowman & Littlefield.

［その他］

寺田吉孝

2015 「みんぱく世界の旅　民族音楽①　入手困難な和太鼓の材料」『毎日小学生新聞』７月25日。

2015 「みんぱく世界の旅　民族音楽②　西アジアから広がるチャルメラ」『毎日小学生新聞』８月１日。

2015 「みんぱく世界の旅　民族音楽③　世界で人気 インドのおどり」『毎日小学生新聞』８月８日。

2015 「みんぱく世界の旅　民族音楽④　受けつがれる「クリンタン」」『毎日小学生新聞』８月15日。

2016 「ジェンダーを超える踊り――ナルタキ・ナタラージ」『月刊みんぱく』40(1)：18–19。

2016 「リズム」増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.19–21，東京：音楽之友社。

2016 「マイノリティ」増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.102–112，東京：音楽之友社。

2016 「映像音響メディアと民族音楽学」『民博通信』152：28。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

［ビデオテーク］

南 真木人・寺田吉孝制作監修

2016 『ネパールの伝統音楽 パンチャイ・バージャ』（日本語、16分）。

Sam, Sam-Ang, Terada, Y., Fukuoka S. 制作監修

2016 Sbaek Thomm Episode 1: Preah Ream Constructing the Causeway（英語、142分）

2016 Sbaek Thomm Episode 2: The Floating Maiden（英語、107分）

2016 Sbaek Thomm Episode 3: Magically Produced Naga-Arrows（英語、136分）

2016 Sbaek Thomm Episode 4: Battle of Kampann and Hanuman（英語、100分）

2016 Sbaek Thomm Episode 5: Powerful Brahman Arrows（英語、143分）

2016 Sbaek Thomm Episode 6: Will of Sukkachar（英語、160分）

2016 Sbaek Thomm Episode 7: Will of Inthochitt（英語、167分）

［マルチメディア番組］

高 正子・寺田吉孝制作監修

2016 『アリラン峠を越えていく――在日コリアン音楽の今』（日本語・英語）

［電子ガイド］

寺田吉孝

2015 『南インドの婚礼』（日本語・英語）

2015 『婚礼と音楽（パンチャイ・バージャ）』（日本語・英語）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年11月１日　パネル『伝統音楽研究における定量的アプローチの可能性と課題――インド音楽世界の動向を事例として』（座長：田森雅一）東洋音楽学会 第66回大会、東京芸術大学

2016年１月７日　"'Indian culture does not exclusively emanate from India': "Circular Flow" and Indian Diasporic Culture" 国際シンポジウム Absences, Silences and the Margin: Restructuring Indian Diaspora Studies マノンマニアム・スンダルナル大学社会学部（インド、カンニャークマリ）

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年５月17日　「南インドの結婚式と音楽」第383回みんぱくウィークエンドサロン 研究者と話そう

・研究公演

2015年11月22日　「時を超える南インドの踊り」国立民族学博物館講堂

・広報・社会連携活動

［映像番組上映］

2015年７月４日　*Angry Drummers: A Taiko Group from Osaka, Japan*（英語、2011年制作）第11回UK太鼓フェスティバル（エクセター、イギリス）

2015年７月21日　*Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalingas Wedding in the Northern Philippines*（英語、2014年制作）および*Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines*（英語、2014年制作）国際伝統音楽学会第43回世界大会（アスタナ、カザフスタン）

2015年11月27日　*Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines*（英語、2014年制作）第５回国際民俗音楽映画祭（カトマンズ、ネパール）

◎調査活動

・国内調査

2015年６月８日―堺市（在日コリアン音楽の映像取材）

2015年６月21日―大阪市生野区（在日コリアン音楽の映像取材）

2015年11月８日―大阪市生野区（在日コリアン音楽の映像取材）

2016年１月31日―大阪市生野区（在日コリアン音楽の映像取材）

2015年12月25日～12月26日―東京都豊島区（在日コリアン音楽の映像取材）

2016年３月18日～３月20日―川崎市川崎区、東京都港区（在日コリアン関連資料収集）

2016年３月24日～３月25日―東京都小平市（在日コリアン音楽の映像取材）

・海外調査

2015年７月２日～７月７日―イギリス（イギリス・エクセター市にて開催された第11回イギリス太鼓祭における民博制作映像番組の上映）

2015年７月12日～７月24日―カザフスタン（国際伝統音楽評議会第43回世界大会における民博製作映画上映と研究発表）

2016年１月４日～１月21日―インド、ネパール（国際シンポジウムへの参加及びネパール関連ビデオテーク番組制作のための海外映像音響資料収集）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

副指導教員（１人）

特別共同利用研究員の研究指導教員（１人）

齋藤　晃［さいとう　あきら］――教授

【学歴】京都大学文学部文学科フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）**【職歴】**国立民族学博物館第４研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2014）**【学位】**学術修士（東京大学大学院総合文化研究科 1991）**【専攻・専門】**文化人類学、ラテンアメリカ研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

［共著］

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

［編著］

齋藤 晃編

2009 『テクストと人文学――知の土台を解剖する』京都：人文書院。

［共編］

Saito, A. et Y. Nakamura（dir.）

2010 *Les outils de la pensée: étude historique et comparative des «textes»*. Paris: Éditions de la Maison des sciences de l'homme.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究

・研究の目的、内容

1570年代、スペイン統治下のアンデスにおいて、世界史上希有な社会工学実験が実施された。第５代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの命令により、かつてのインカ帝国の中核地域で約150万の先住民が碁盤目状に整然と区画された１千以上の町に強制移住させられた。総集住化と呼ばれるこの政策は、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれているが、その内実には不明な点が多い。本研究では、地理情報システムを活用して、副王トレドの総集住化の全体像の解明を目指す。

・成果

民博の機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ――スペイン領アメリカの集住政策の研究」（2011～2013年度、代表者：齋藤 晃）の成果の一部を『*MINPAKU Anthropology Newsletter*』40号特集にまとめ、英語で発信した。また、同研究の最終成果として、スペイン語の論文集の刊行準備を進めた。

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「アンデスにおける植民地的近代――副王トレドの総集住化の総合的研究」（2015～2019年度、代表者：齋藤 晃）の一環として、11月６～８日、米国ヴァンダービルト大学で国際シンポジウム「Rethinking Forced Resettlement in the Colonial Andes」を開催した。また、同シンポジウムの冒頭で研究プロジェクトの趣旨説明を行った。

◎出版物による業績

［論文］

Saito, A.

2015 Guerra y evangelización en las misiones jesuíticas de Moxos. *Boletín Americanista* 70: 35–56.［査読有、研究成果公開プログラム成果］

［その他］

Saito, A.（ed.）

2015 Special Theme: Core Research Project 'State, Community and Identity in the Modern Hispanic World: A Study of Resettlement Policy in Spanish America'. *MINPAKU Anthropology*

Newsletter 40: 1-10［機関研究成果］

Saito, A.

2015　Resettlement Policy: A Success or Failure? *MINPAKU Anthropology Newsletter* 40: 1-3［機関研究成果］

齋藤 晃

2015 「「文化」以前の「文化相対主義」？」『民博通信』149：18-19［共同研究成果］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年11月6日～8日　International Symposium "Rethinking Forced Resettlement in the Colonial Andes."（国際シンポジウムの実行委員長：Steven A. Wernkeと共同）Vanderbilt University, Nashville, TN, USA

2015年11月6日　'Colonial Modernity in the Andes: A Comparative Study of Viceroy Toledo's General Resettlement.'（趣旨説明）International Symposium "Rethinking Forced Resettlement in the Colonial Andes." Vanderbilt University, Nashville, TN, USA

・共同研究会での報告

2015年12月23日　「Jesús López Gay著『*La liturgía en la misión del Japón del siglo XVI*』について」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』国立民族学博物館

2016年2月24日　「合評会の総括」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月28日　'Balance de resultados del proyecto "La política de concentración poblacional y sus efectos sobre la sociedad indígena en los dominios españoles de Sudamérica".'（講演）Seminario extracurricular del Programa de Estudios Andinos. Pontifícia Universidad Católica del Perú, Lima, Perú［機関研究成果］

・広報・社会連携活動

2015年12月16日　「ユートピアの遺跡を訪ねて――ボリビア・パラグアイ・アルゼンチン」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・海外調査

2015年5月20日～5月31日―アメリカ合衆国、ペルー（ヴァンダービルト大学との学術協定締結協議及び副王トレドの総集住化に関する調査研究）

2015年8月1日～8月17日―ペルー（副王トレドの総集住化に関する調査研究）

2015年11月5日～11月10日―アメリカ合衆国（国際シンポジウム「植民地期アンデスの強制移住を再考する」への参加）

2016年3月7日～3月19日―アメリカ合衆国（スペイン領アメリカの集住政策に関する調査研究）

佐々木史郎［ささき　しろう］―――――――

【主要業績】

［単著］

佐々木史郎

2015 『シベリアで生命の暖かさを感じる』（フィールドワーク選書13）京都：臨川書店。

1996 『北方から来た交易民――絹と毛皮とサンタン人』（NHK ブックス772）東京：日本放送出版協会。

［編著］

Sasaki, S.（ed.）

2009 *Human-Nature Relation and Historical-Cultural Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests: Russian Far East and Northeast Japan*（Senri Ethnological Studies 72). Osaka: National Museum of Ethnology.

【受賞歴】

1997　第25回澁澤賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

極東ロシア、日本列島北部における近世から近代への転換

・研究の目的、内容

本研究は、これまで継続してきたアムール川下流域の歴史に関する研究をさらに発展させ、地域、対象民族の幅を広げる。すなわち、アムール川流域だけでなく、樺太（サハリン）、千島列島（クリル列島）、北海道まで対象地域を広げ、そこに暮らしてきた現在の先住民族の祖先たちが近代という時代を迎えて、それにどのように対応したのかという点を検討する。ただし従来のように、受動的な社会や文化の変化（多数派民族文化への同化、あるいは伝統文化、民族文化の衰退、消滅）に着目するのではなく、彼らの変化していく政治経済情勢に対する積極的な対応、適応の過程に着目する。

・成果

まず、2008年度から2011年度まで実施した共同研究「ポスト社会主義以後の社会変容――比較民族誌的研究」の成果の１つとして、『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界　比較民族誌的研究』（国立民族学博物館論集4）東京：風響社、2016年を渡邊日日との共編著で出版した。そこに「年金と自然に生きる村ウリカ・ナツィオナーリノエ――ポスト社会主義以後の時代の極東ロシアの先住民族社会」pp.211-243という論文を執筆し、アムール川流域の先住民族の人々が、社会主義体制時代から1990年代のポスト社会主義の時代を経て、21世紀のポスト・ポスト社会主義時代までの暮らしの実態を追いながら、彼らが近現代の政治経済情勢の変化にどのように対応したのかを明らかにした。

また、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「北方寒冷地における織布技術と布の機能」というプロジェクトを立て、日本と海外の博物館に所蔵されている北海道、樺太、千島の先住民族であるアイヌ民族の織物と着物の詳しい調査を行い、彼らが自分たちの固有の織物の中に外来の織物をどのように取り入れて、その衣文化を構成してきたのか、そしてその構成が近世から近代へと時代が変わる時にどのように変化したのか明らかにした。その成果の一部は口頭発表で公開した。

◎出版物による業績

［共編著］

Shaglanova O. A., Sasaki S.（eds.）（Шагланова О. А. и Сасаки С.（ред.））

2016 *Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях: методы сбора, учета, хранении и экспозиции*（Senri Ethnological Reports 135). Осака: Национальный музей этнологии（редакторы:).

佐々木史郎・渡邊日日編

2016 『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界――比較民族誌的研究』（国立民族学博物館論集４）東京：風響社。

［論文］

佐々木史郎

2015 「北東アジアの中のアイヌ」夷酉列像展実行委員会編『夷酉列像』pp.122-127, 札幌：北海道博物

館。

2016 「年金と自然に生きる村ウリカ・ナツィオナーリノエ――ポスト社会主義以後の時代の極東ロシアの先住民族社会」佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界――比較民族誌的研究』（国立民族学博物館論集４）pp.211-243，東京：風響社。

2016 「あとがき」佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界――比較民族誌的研究』（国立民族学博物館論集４）pp.267-274，東京：風響社。

佐々木史郎・渡邊明

2016 「序論　ポスト社会主義以後という状況と人類学的視座」佐々木史郎・渡邊日日編『ポスト社会主義以後のスラヴ・ユーラシア世界――比較民族誌的研究』（国立民族学博物館論集４）pp.9-43，東京：風響社。

Sasaki, S.（Сасаки С.）

2016 Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях. Шагланова, О. А. и Сасаки С.（ред.）*Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях: методы сбора, учета, хранении и экспозиции*（Senri Ethnological Reports 135), стр.1-10. Осака: Национальный музей этнологии（написана с О. А. Шаглановой).

2016 Экспонаты культуры народов Сибири и Дальнего Востока в Национальном музее этнологии в Японии. Шагланова, Ольга А. и Сасаки С.（ред.）*Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях: методы сбора, учета, хранении и экспозиции*（Senri Ethnological Reports 135), стр.21-39. Осака: Национальный музей этнологии.

［その他］

2015 「コラム　シカチ・アリャン村とナナイの歴史」,「おわりに」『岩に刻まれた古代美術――アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン』図録 pp.61-65，pp.113，東京：NPO ユーラシアンクラブ。

2015 「聖なる遺跡は物語る――アムール河の少数民族ナナイの神話をさぐる」国立民族学博物館「友の会ニュース」No.228　第443回友の会講演実施報告。

2015 「旅・いろいろ地球人　ミュージアム⑩　ロシア最古の博物館」『毎日新聞』９月10日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年６月27日～６月28日　‘The Oak Forest Culture: Examination of K Sasaki’s Hypothesis.’ “The 6th Northeast Asia Ethnic Culture International Forum.” 中央民族大学民族学与社会学学院，北京，中華人民共和国

2015年８月10日　‘A comparative study of the trap names and their distribution among the Tungus-speaking peoples.’ “The 3rd International Conference on Tungus（Altaic）Languages and Culture.” 中国社会科学院民族文学研究所，海拉爾，内モンゴル自治区，中華人民共和国

2015年９月９日　‘Limiting line of farming on the Lower Amur River basins: from historical records on the ancestors of the present indigenous hunter-gatherers.’ Session 12 “Historical ecology of indigenous people in Amur region” 11th International Conference on Hunting and Gathering Societies（CHAGS XI), in the University of Vienna, Vienna, Austria

2015年10月24日～10月25日「シベリア・極東ロシア調査の30年」第30回北方民族文化シンポジウム網走『第30回記念大会　北方民族研究30年――成果・課題・博物館の役割』オホーツク・文化交流センター、網走

・みんぱくゼミナール

2015年５月16日　「先住民が守る古代遺跡――アムール川流域シカチ・アリャン村の岩面画」第444回みんぱくゼミナール

2016年３月19日　「『夷酋列像』の首長たちがまとう衣装」第454回みんぱくゼミナール　国立民族学博物館講堂

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年５月24日　「シカチ・アリャンの岩面画とナナイの神話」第384回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

2015年７月５日　「シカチ・アリャンの岩画面の成立年代と日本の縄文時代」第389回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・研究講演

2015年５月27日　「アムール河の古代岩画と神話――少数民族の聖地シカチ・アリャン」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

2015年６月６日　「聖なる遺跡は物語る――アムール河の少数民族ナナイの神話をさぐる」第443回国立民族学博物館友の会講演、国立民族学博物館

2015年６月19日　「アムール河の古代美術――岩面画と神話」民博夜話、吹田歴史文化まちづくりセンター「浜屋敷」

2015年10月４日　「アムール河の古代遺跡と先住民の神話・世界観」国立民族学博物館巡回展『岩に刻まれた古代美術――アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン』講演会、新潟県立歴史博物館

2015年12月13日　「古代美術と生きる人々――アムール河の先住民族ナナイの神話とアート」国立民族学博物館巡回展『岩に刻まれた古代美術――アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン』講演会、横浜情報文化センター

2016年３月16日　「北方の織布技術」国立民族学博物館定年退職教員記念講演

2016年３月25日　「アイヌの衣服の素材と文様」みんぱく公開講演会『ワールドアートの最前線――アイヌの文様とエチオピアの響き』毎日新聞大阪本社オーバルホール

・展示

2015年５月21日～７月21日　企画展「岩に刻まれた古代美術――アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリャン」実行委員長

2016年２月25日～５月10日　特別展「夷酋列像――蝦夷地イメージをめぐる　人・物・世界」実行委員

2015年４月１日～2016年３月31日　中央・北アジア展示場新構築実行委員、アイヌ展示場新構築実行委員

◎調査活動

・国内調査

2015年４月20日～４月23日―北海道白老町（アイヌ民族博物館）、旭川市（旭川市博物館）、苫小牧（苫小牧市立美術博物館）にて、アイヌの木綿衣と刀掛け帯を中心とした布製品の調査を行う。科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による）。

2015年７月15日～７月17日―北海道札幌市（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園、北海道博物館）にてアイヌの木綿衣と刀掛け帯を中心とした布製品の調査を行う。科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による）。

2015年７月28日～７月29日―東京（東京国立博物館、早稲田大学會津八一記念館）にてアイヌの樹皮衣、木綿衣と刀掛け帯を中心とした布製品の調査を行う。科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による）。

・海外調査

2015年８月30日～９月４日―ロシア、サンクトペテルブルク（ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館、ロシア民族学博物館）にてハンティとアイヌの伝統的な衣服と装身具の調査を行う。科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による）。

2015年12月21日～22日―ロシア、ウラジオストーク（ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学考古学民族学博物館、沿海地方郷土博物館）にて、アイヌの草皮衣（テタラペ）と先史時代の繊維製品の遺物、そして織機の部品の調査を行う。科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による）。

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（３人）、副指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・科学研究費助成事業による研究プロジェクト

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（2014年度～2016年度）研

究代表者

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

人間文化研究機構『日本関連在外資料の調査研究』「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究班共同研究員、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「野生動物の生息域拡大期における都市防衛システムの開発に関する環境学研究」（代表者：田口洋美）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・**他機関から委嘱された委員など**

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構評議員、国立のアイヌ文化博物館（仮称）展示検討委員会座長、島根県古代歴史文化賞推薦委員

飯田　卓［いいだ　たく］――――――

また、年度末の３月11日～13日に締めくくりとなるシンポジウム“Authentic Change in the Transmission in of Intangible Cultural Heritage”を開催し、盛況を博した。このシンポジウムをもとにした成果刊行にむけても準備が進んでおり、現時点ではイギリスの学術出版社から刊行する予定である。

◎出版物による業績

［編著］

河合洋尚・飯田 卓編

2016 『中国地域の文化遺産――人類学の視点から』（国立民族学博物館研究報告 136）大阪：国立民族学博物館。

［共著］

飯田 卓・河合洋尚

2016 「序」河合洋尚・飯田 卓編『中国地域の文化遺産――人類学の視点から』（国立民族学博物館研究報告 136）pp.1-17，大阪：国立民族学博物館。

［論文］

飯田 卓

2015 「和食は誰のものか？――公開フォーラムが投げかけた問い」『民博通信』149：10-11.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2016年３月12日 ‘Regenerative Medicine of Culture: A Perspective Based on the Woodcrafting Knowledge of the Zafimaniry, Madagascar.’ International Symposium “*Authentic Change in the Transmission of Intangible Cultural Heritage*,” National Museum of Ethnology, Suita, Japan

・共同研究会での報告

2015年10月26日 「マダガスカル島の対大陸ネットワークと沿岸ネットワーク」『アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究――資源利用と物質文化の時空間比較』国立民族学博物館

2016年１月10日 「マダガスカル南西部の邪術と祖霊、憑依霊をめぐるエージェンシーの定立」『エージェンシーの定立と作用――コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年８月24日 「地域文化のとらえかた――マダガスカル山間部での調査から考えたこと」追手門学院大学・国立民族学博物館学術交流協定研究会『地域文化の創造と継承』第２回研究会、追手門学院大学、大阪

2015年９月５日 「戦後期南西諸島の漁業における爆薬の流用」日本島嶼学会2015年次大会、奥尻町海洋研修センター、奥尻

2015年12月17日 「漁民のサンゴ礁保全――NGOとの知識交換にみるコミュニケーションとディスコミュニケーション」第215回アフリカ地域研究会、京都大学稲盛財団記念館、京都

2015年12月19日 「マダガスカルの海に生きる」琉球大学国際沖縄研究所シネマトーク「海に生きる」カフェmofgmona、宜野湾

2015年12月20日 「マダガスカルの木彫り技術の展示と映像記録」琉球大学国際沖縄研究所 民族誌的映像製作のための実践的ワークショップ『自然利用の技と知恵を記録する』琉球大学50周年記念館、西原

・研究講演

2015年４月25日 「マダガスカルの子どもたち」FNSチャリティキャンペーン『ユニセフ春のチャリティコンサート――マダガスカルについて知り、アートと音楽を楽しむ１日』カンテレ扇町スクエア、大阪

2015年６月25日 「日高昆布づくりの現場から」国立民族学博物館友の会 第70回体験セミナー「日本の食文化：昆布に親しむ」阪口楼、大阪

2015年６月27日 「研究成果公開としての民博展示」MMP（みんぱくミュージアムパートナーズ）新規メンバー養成研修、国立民族学博物館

2016年１月16日 「マダガスカルの音楽――舞台と儀礼、プロとアマチュア」rondokreanto『ギターマダガスカ

ル』上映会 同時講演、rondokreanto、京都

2016年２月26日 「『わざ』から見る。ふたつの無形文化遺産――マダガスカル、ザフィマニリの木彫り知識を中心に」第13回無形文化遺産セミナー、堺市博物館、大阪

・広報・社会連携活動

2015年６月26日 「手仕事のマダガスカル――アマチュア・ナチュラリストの達成」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――世界の『民芸』」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル１F

2015年12月23日 「貝の魅力――その使用価値、装飾的価値、象徴的価値」連続講座「みんぱくナレッジキャピタル「世界の天然素材」第７回、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年10月25日 「博物館の中の文化遺産、博物館の外の文化遺産」第402回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2015年10月１日～３日―鹿児島県伊仙町、天城町、徳之島町（戦後漁業における爆薬の使用に関する調査）

2015年12月21日～22日―沖縄県竹富町（戦後漁業における爆薬の使用に関する調査）

・海外調査

2015年10月29日～12月13日―マダガスカル、ケニア（マダガスカルの外資系企業と環境保護団体の活動に関する調査及びマダガスカルとケニアの漁民の民俗知に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）、副指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容」（研究代表者：飯田 卓）研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「インド洋西域島嶼世界における民話・伝承の比較研究」（研究代表者：小田淳一）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「「在来知」と「近代知」の比較研究――知識と技術の共有プロセスの民族誌的分析」（研究代表者：大村敬一）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「近代都市形成における多文化混住状況と出身地域社会への影響に関する研究」（研究代表者：岡田浩樹）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「アフリカ漁民文化の比較研究――水域環境保全レジームの構築に向けて」（研究代表者：今井一郎）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」（研究代表者：吉田憲司）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス・コロキアム運営委員、日本アフリカ学会評議員、文化遺産国際協力コンソーシアム委員、マダガスカル研究懇談会世話役代表

・非常勤講師

神戸大学大学院国際文化学研究科「文化情報リテラシー特殊講義」（集中講義）

卯田宗平［うだ しゅうへい］――――――

化誌学会、日本現代中国学会

【主要業績】

［論文］

卯田宗平

2015 「ポスト「北方の三位一体」時代の中国エヴェンキ族の生業適応――大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性――フィールドからのサスティナビリティ論』616：73-108，千葉：アジア経済研究所研究双書。

［単著］

卯田宗平

2014 『鵜飼いと現代中国――人と動物、国家のエスノグラフィ』東京：東京大学出版会。

［編著］

卯田宗平編

2014 『アジアの環境研究入門――東京大学で学ぶ15講』（古田元夫監修）東京：東京大学出版会。

【受賞歴】

2010年　第５回日本文化人類学会奨励賞

1998年　学部長コース賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国大興安嶺における生業環境の変化とトナカイ飼養民の適応形態

・研究の目的、内容

本研究は、中国東北部の大興安嶺森林地帯でトナカイ飼養を続ける少数民族を対象に、新中国成立前から集団化の時代を経て現在に至る生業環境の変化と生計維持のメカニズムを明らかにする。

・成果

中国大興安嶺のエヴェンキ族らは、かつて狩猟、漁撈、交通手段としてのトナカイの飼養という、いわゆる「北方の三位一体」の生業活動をおこなっていた。それが、2003年以降、トナカイの角を採取し、それを販売するトナカイ飼養に特化した生業活動に従事するようになった。つまり、エヴェンキ族らにとってのトナカイは「生業の手段」から「生業の対象」に変化したのである。こうした変化のなか、彼らは新たな技術を導入したり、飼養技術を革新したりすることはなく、むしろ既往の技術を援用することで引き続きトナカイを飼育していることが分かった。彼らが既往技術の援用で新たな環境に適応できたのは、角の商品化を積極的におこなう郷政府からの技術的な支援があったからであり、その背景には郷政府がトナカイ飼養をめぐる観光開発を推し進めていることに要因を求めることができる。なお、本研究は科学研究費助成事業（若手研究(B)）「中国大興安嶺における生業環境の変化とトナカイ飼養民の適応形態：1940-2010」（代表・卯田宗平）に基づいておこなった。

◎出版物による業績

［論文］

卯田宗平

2015 「手段としての動物と人間とのかかわり――中国と日本の鵜飼い漁の事例から」『生態人類学会ニュースレター』21：30-33。

［その他］

卯田宗平

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌㉕　琵琶湖のオオクチバス――駆除事業支える外来魚の食文化」『京都新聞』12月９日。

2015 「宇治川鵜飼の鵜匠とウミウの『はじめの一歩』」『Ocean Newsletter』357：6-7，東京：海洋政策研究所。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年９月17日　「概念を規定して、現象を読みとく――ウ類と人間とのかかわりの事例から」東京大学東洋文化研究所離任研究会、東京大学東洋文化研究所大会議室

2015年11月18日　「鵜飼――人間と動物の関係論再考」第269回民博研究懇談会、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2016年３月９日　「中国鵜飼い探訪記――消えゆく前にみてみよう」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

◎調査活動

・海外調査

2015年12月３日～12月18日―マケドニア共和国（鵜飼研究のための交渉、事前調査及び資料収集）

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業・若手研究（B）「中国大興安嶺における生業環境の変化とトナカイ飼養民の適応形態：1940-2010」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

岐阜市長良川鵜飼習俗総合調査専門委員会（岐阜市教育委員会）、関市小瀬鵜飼習俗総合調査委員会委員（関市教育委員会））

菊澤律子［きくさわ　りつこ］――――――

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

オーストロネシア諸語の比較形態統語論的研究――動詞の形態法の発達史を探る

・研究の目的、内容

2014年度に引き続き、オーストロネシア諸語の発達史における①「名詞化接辞の動詞接辞化」の具体的なメカニズムと、その発達史の解明を目標に研究をすすめる。加えて、②「格構造の変化に伴う主語のプロパティの分布の変化」に関するプロジェクト始動のための準備をすすめる。

オーストロネシア諸語においては、早い時期に分岐した言語ほど動詞の形態法が複雑であり、オーストロネシア祖語の動詞のシステムは、これをほぼ直接反映させて再建される傾向にある。これに対し菊澤は、昨年度の研究において、形態統語論的な特徴の変遷はシステムの変遷として捉えるべきであり、音韻や語彙の再建におけるものとは異なる視点および手法が必要であることを示した。さらに昨年度は、システムの具体的な変遷過程については、各文法的特徴が独立して変化するという認識を受けて、個別の変化を解明した上で、総合的にどのような相互関連があるのかを検討する必要があること、また、これまでdriftと称されてきた変化が祖語における変種の存在に基づく現象であることを指摘するReid（2015）らの指摘をうけ、同様の視点が統語構造の比較再建にどのように生かされるのか、検討する必要があることを具体例を示しつつ指摘した。

2015年度はこの内容をさらに発展させるとともに、その成果のデータへの応用にむけて研究をすすめる。①の研究の継続に加え、②の開始準備として、オーストロネシア語族全体にわたる大規模分析と、そのデータの一部となる太平洋言語に関するヨーロッパ時代の言語記述のデジタル資料化を見据えたチームを編成する。チームには大学院生およびPD研究者を意識的に加え、ベルギーのヘント大学からの招聘により、欧州研究会議（ERC）の研究プロジェクト「印欧語の項構造の史的変遷解明のためのプロジェクト」（代表者　ヨハンナ・バースダル）および、「コンゴ王国の歴史解明のための学際的研究」（代表者　クーン・ボストゥン）と一緒に二国間交流共同研究に申請する予定である。

・成果

2016年度は、日本財団助成手話言語学研究部門関連の申請および設置準備に関するリサーチ・アドミニストレーターとしての業務がメインとなり、各個研究課題で計画していた大規模分析のためのプロジェクトの準備は2016年度以降に持ち超しとなった。各個研究として予定していた研究に関する成果は、以下の通り。（いずれも出版もしくは採択済み。）

・Kikusawa, Ritsuko. Conducting syntactic reconstruction of languages with no written records. *Syntactic Reconstruction: Applying the Comparative Method* ed. by Eugenio Luján, Jóhanna Barðdal and Spike Guildea. Amsterdam: Brill. To appear.

・Kikusawa, Ritsuko. Ergativity and language change. *An Oxford Handbook of Ergativity* ed. by Jessica Coon, Diane Massam, and Lisa Travis. Oxford: Oxford University Press. To appear.

・Kikusawa, Ritsuko A diachronic typology of applicative verbs in western Austronesian languages: Toward a comparison and reconstruction (synopsis). *Diachronic Typology of Voice and Valency-Changing Categories* ed. by L. Kulikov and S. Kittila. To appear.

◎出版物による業績

［論文］

Kikusawa, R.

2015 Typological Generalisations and Diachronic Analyses: Actancy Systems in Austronesian Languages. *Historical Linguistics in Japan*, 4: 3–32.

［その他］

菊澤律子

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌㉔　フィジーの熱帯魚」『京都新聞』12月2日。

2015 「ことばを調べれば歴史がわかる【前編】――「歴史言語学」が明らかにすることとは」Academist Journal　12月7日。（https://academist-cf.com/journal/?p=462）

2015 「ことばを調べれば歴史がわかる【後編】――「歴史言語学」が明らかにすることとは」Academist Journal　12月9日。（https://academist-cf.com/journal/?p=472）

2015 「手話の変化をたどる――比較方法の手話語彙への応用にむけて」『民博通信』138：10–11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

Kikusawa, R and S. Fischer

2015年９月21日　‘Form, Function, and Grammar: Signed and Spoken Languages.’ “Signed and Spoken Language Symposium 2016.” National Museum of Ethnology

Kikusawa, R and K. Sagara

2015年９月20日　‘Towards Historical Sign Linguistics: A Preliminary Analysis Based on Number Expressions.’ “Signed and Spoken Language Symposium 2016.” National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年４月23日　‘The Gradual and Discrete Nature of *Syntactic Change* in Some Western Austronesian Languages.’ “EVALISA-African Studies Joint Workshop,” University of Ghent

・みんぱくゼミナール

2015年10月17日　「言語の遺伝子をたどる――ことばの変化と人の移動」第449回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

2015年10月14日　「南太平洋の島へことばの調査に行く――言語学者 at フィールドワーク」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・その他

2015年10月６日　「手話ってなに？　言語学ってなに？」東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」第１回講義

2015年12月14日　「いろいろなひとがいるということ――ことばと文化の多様性と私達」春日丘高等学校１年生人権学習講演、国立民族学博物館

2016年１月26日　「ディスカッション（半年間のまとめ）」東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」第15回講義

◎調査活動

・海外調査

2015年10月７日～10月11日―スウェーデン（国際ワークショップ「構文文法における文法化現象の分析方法」に参加）

2015年12月１日～12月６日―フランス（「音声言語コーパスにおける情報構造２」に関する会議に参加）

2016年１月１日～１月８日―オーストラリア（第12回手話言語の理論的研究に関する国際会議に参加）

2016年２月23日～３月23日―フィジー（南太平洋大学におけるフィジー語諸方言に関する調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館機関研究プロジェクト　マテリアリティの人間学「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」研究代表者、日本財団助成金「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催」研究代表者、筑波技術大学科研費研究分担者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

菊澤律子研究奨学資金

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

博士論文学外審査委員（大阪大学）、日本歴史言語学会事務局担当理事、日本言語学会広報委員、Association for Linguistic Typology 評議員、国際オーストロネシア言語学会運営委員、*Journal of Historical Syntax* 編集顧問委員、*Brill's Studies in Historical Linguistics* 編集顧問委員、*Journal of Historical Linguistics* 編集顧問委員、2015年度東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」コーディネーター、2015年度手話言語学講師派遣事業コーディネーター、2015年度国立民族学博物館学術手話通訳研究事業コーディネーター

◎学会の開催

2015年９月19日～９月21日　「《機関研究成果公開》国際シンポジウム「みんぱく手話言語学フェスタ2015」国立民族学博物館

2016年１月９日　「みんぱくセミナー「通訳学☆最前線」」国立民族学博物館

松尾瑞穂［まつお　みずほ］――――――

する。不採択となった場合でも、科学研究補助金の基盤研究をはじめとする外部資金への申請を行い、共同研究に向けて計画を進めていく。

・成果

上記のテーマに関し、文献収集と文献読解、インドにおける２度のフィールド調査、イギリスにおける資料収集とセミナー出席、南アジア研究者との研究交流、国際学会 9th International Convention of Asian Scholars（ICAS）での分科会組織と研究発表を行った。

1）に関しては、成果の一部を『民博通信』149号に掲載された「新たなサブスタンスとつながりの再配置――インドの生殖医療のフィールドから」としてまとめたほか、共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置」第一回研究会において、「サブスタンス研究の動向」と題する研究発表を行った。

2）に関しては、８月と２月～３月にかけてインドにおける現地調査と、１月にイギリスでの資料収集調査を行った。インドでは、民俗生殖理論、妊婦の儀礼、新生児の名づけ儀礼など、新生児をめぐる家族・親族のつながり（relatedness）に関する調査を重点的に実施した。また、チットパーヴァン・バラモンの高齢女性への生活史の聞き取り、複数のヒンドゥー教聖地での祖先祭祀儀礼の調査も並行して行い、多様な次元で個人と家族・親族の紐帯の生成についてデータを収集した。

3）に関しては、４月に申請した共同研究会が採択され、10月より「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」を計画通り開始することが出来た。今年度は２度研究会を開催し、オセアニア、ヨーロッパ、アジア、日本を調査地とする研究者とともに、研究会の方向性や概念の検討・共有を行った。今後、三年半にわたり計12回開催する予定である。研究代表を務めるこの共同研究会以外にも、館内の３つの共同研究会のメンバーとして共同研究会に参画した。さらに、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」（民博拠点）の拠点構成員として、年間を通した研究会の運営と参加、国際シンポジウムへの参加を行った。

また、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「インド高齢女性のライフヒストリー」（代表：押川文子）、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（代表：杉本良男）、および科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「インド・マハーラーシュトラにおける集団意識とカースト・ダイナミクスの学際的研究」（代表者：足立享佑）の分担者・連携協力者として、研究会への参加、発表や海外調査を実施した。海外出張はすべて、これら科学研究助成事業および人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド研究」（民博拠点）の予算によって実施した。

研究成果の公開としては、Routledge 社から刊行された論集 Cities in South Asia にヒンドゥー聖地における祖先祭祀儀礼の隆盛と家族関係の変容について分析した論文を執筆したほか、２本の評論、小論を刊行した。また、インドの人工妊娠中絶にみる被傷性と暴力に関する論文、インドにおける体外受精という新技術をめぐる神話的、社会的言説と文化的認識を検討した論文を執筆し、来年度の刊行を目指している。その他、エッセイや事典項目を執筆し公表した。発表による成果公開としては、国際シンポジウムや国内研究会等での研究発表を４回、一般向け講演会を５回実施した。

◎出版物による業績

［単著］

Matsuo, M.

2015　Solving family problems: The role of religious practices for the Indian middle class. In C. Bates and M. Mio（eds.), *Cities in South Asia,* pp.228–242. Oxon and New York: Routledge.

松尾瑞穂

2015　「メディカル・ツーリズム」三尾稔・杉本良男編『現代インド６　環流する文化と宗教』pp.180–184, 東京大学出版会

［論文］

松尾瑞穂

2015　「新たなサブスタンスとつながりの再配置――インドの生殖医療のフィールドから」『民博通信』149：4–9。

［その他］

松尾瑞穂

2015　「ライフスタイルの変化――ワインとビーフ」『月刊みんぱく』39(6)：8。

2015　「旅・いろいろ地球人　踊る⑥　女たちの夜更かし」『毎日新聞』６月18日夕刊。

2015　「生殖と家族」「生殖革命」「ベビーＭ事件」『現代家族ペディア』東京：弘文堂。

2016 「優生学」『月刊みんぱく』40(2)：20。
2016 書評「嶺崎寛子著『イスラーム復興とジェンダー――現代エジプト社会を生きる女性たち』昭和堂」『イスラーム世界研究』9：359-361，京都大学イスラーム地域研究センター。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2015年11月７日 「サブスタンス研究の動向」共同研究会『グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究』（研究代表：松尾瑞穂）、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年７月８日 “At lease we've done a Good thing”: Commercialisation of funeral rites in Contemporary India”（ICAS9), Adelaide, Australia
2015年10月15日 「インドにおける生殖医療の研究動向」アジア経済研究所『中東イスラーム諸国における生殖医療と家族』（研究代表：村上 薫）、東京外国語大学サテライト
2015年11月５～６日 ‘Searching for a Meaningful Life: Experiences of Education and Society work of Senior Chitpāvan Women’, Workshop on Hearing Women's Voices: Senior Women's Recollection of Every-day Life in South Asia, Kyoto University, Kyoto

・みんぱくウィークエンドサロン

2015年７月19日 「インドのお手伝いさん」第391回みんぱくウィークエンドサロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2015年７月20日 みんぱく映画会 インド映画特集「ファンドリー」解説、国立民族学博物館
2015年10月２日 「インドのジェンダーと社会変化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
2015年10月９日 「インドの生殖の医療化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」
2016年１月13日 「インドの家族とそのかたち、いま・むかし」カレッジシアター「地球探求紀行」、あべのハルカス近鉄本店
2016年１月23日 TUFSシネマ インド映画特集「ファンドリー」解説、東京外国語大学
2016年２月11日 基調講演「多様な家族――文化人類学の視点から」みらいのかぞくプロジェクト『“みらいのかぞく”を考える――人の心・制度・科学技術』日本科学未来館

◎調査活動

・海外調査

2015年７月２日～７月10日―オーストラリア（国際会議（ICAS9）での研究発表および資料収集）
2015年８月９日～８月26日―インド（インド高齢女性のライフヒストリーに関する調査）
2016年１月14日～１月21日―イギリス（現代インド地域研究に係る資料収集）
2016年２月20日～３月12日―インド（西インドにおける構造変動に関する現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「インド高齢女性のライフヒストリー」（代表：押川文子）研究分担者、科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）「インド・マハーラーシュトラにおける集団意識とカースト・ダイナミクスの学際的研究」（代表者：足立享佑）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（代表：杉本良男）連携協力者、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド研究」（国立民族博物館拠点MINDAS）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

南山大学「地域の文化と歴史（南アジア）」（集中講義）、新潟国際情報大学「現代南アジア論」（集中講義）

丸川雄三［まるかわ ゆうぞう］――准教授

【学歴】東京工業大学理学部応用物理学科卒（1996）、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了（1998）、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学（2001）**【職歴】**東京工業大学精密工学研究所助手（2001）、科学技術振興機構CREST研究員（国立情報学研究所高野明彦研究室）（2003）、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手（2004）、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員（2006）、国立情報

学研究所連想情報学研究開発センター特任助手（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授（2007）、国際日本文化研究センター文化資料情報企画室准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）**【学位】**博士（工学）（東京工業大学大学院 2003）、修士（理学）（東京工業大学大学院 1998）**【専攻・専門】**1）連想情報学、2）文化財情報発信**【所属学会】**アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

［論文］

丸川雄三

2008 「文化財情報発信の実際――文化遺産オンラインの取り組みについて」『画像ラボ』19(4)：26-29.

水谷長志・川口雅子・丸川雄三

2014 「アジアからの美術書誌情報の発信――東京国立近代美術館・国立西洋美術館 OPAC の artlibraries.net における公開の経緯とその意義」『東京国立近代美術館研究紀要』18：6-31.

丸川雄三・阿辺川 武

2010 「横断的連想検索サービス『想－IMAGINE』――データベース連携が拓く新たな可能性」『情報管理』53(4)：198-204.

【受賞歴】

2011　文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムを、データと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。

2015年度は、近代日本の身装（身体と装い）関係資料を対象とする情報サービスの研究開発を実施する。この研究は、これまで JSPS 科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築――文化変容に視点を据えて」（代表：高橋晴子、2012年度～2014年度）の助成を受け実施されてきたものであるが、研究成果をふまえ今年度も継続して研究を進める。さらに美術情報分野を中心とする制作者典拠データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は、JSPS 科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（代表：丸川雄三、2014年度～2016年度）の助成を受けて実施するものである。

・成果

画像アーカイブズの活用研究として、近代日本の身装（身体と装い）を発信するウェブサイトの研究開発を実施した。明治から昭和期（1868～1945年）における身装に関する画像（身装画像デジタルアーカイブ）のデータベースの試験運用を行い、連想検索技術によって検索・閲覧が可能なウェブサイト「近代日本の身装文化」の一般公開に向けた準備を進めた。これまでの研究成果を2015年12月に「人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2015」」で発表した。この研究は、JSPS 科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築――文化変容に視点を据えて」（代表：高橋晴子、2012年度～2014年度）の研究成果をふまえ実施されたものである。また、文化財情報の活用基盤の研究として、制作者典拠データベースの研究開発を実施した。2015年度は、東京文化財研究所および国立美術館と協働で作家データの調査と収集を行うとともに、他の機関が所蔵する作品情報との連携および公開活用を前提とした制作者データベースを試作した。この研究は、JSPS 科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（代表：丸川雄三、2014年度～2016年度）の助成を受けて実施されたものである。

◎出版物による業績

［論文］

丸川雄三

2015 「身装画像データベース「近代日本の身装文化」の公開と運用――公開用ウェブインタフェースと研

究者の参加を促す編集環境の実現」『じんもんこん2015論文集』pp.233-238.［査読有］

［その他］

丸川雄三

2015 「あかり」『月刊みんぱく』39(2)：10-11.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年６月７日 「文化遺産オンライン API による収蔵品情報の活用」2015年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会、国立西洋美術館、東京

2015年７月23日 「制作者データベースの試作と公開に向けた課題」「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」第３回研究会、東京文化財研究所、東京

2015年10月２日 「国立民族学博物館における文化資源情報公開の取り組み――フォーラム型情報ミュージアムについて」コアプロジェクト FS 第１回研究会「オープンサイエンス時代の社会協働に基づく地球環境研究を支援する情報サービスの実現」、総合地球環境学研究所、京都

2015年11月14日 「美術分野における制作者情報の統合――制作者データベースの実現を目指して」2015年度アート・ドキュメンテーション学会第８回秋季研究発表会、根津美術館、東京

2015年12月12日 「身装画像データベース「近代日本の身装文化」の公開と運用――公開用ウェブインタフェースと研究者の参加を促す編集環境の実現」人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2015」、同志社大学京田辺校地、京都

2016年２月６日 「近代日本の身装文化――研究資源データベースの発信と展開」第11回人間文化研究情報資源共有化研究会「人間文化研究機構のもつ画像データ共有化の前進に向けて」、TKP ガーデンシティ京都、京都

2016年２月11日 “Test Program of Info-Forum Museum” Yuzo Marukawa, Hirofumi Teramura,《International Workshop》System Development for the Info-Forum Museum: Philosophy and Technique, National Museum of Ethnology

2016年３月30日 「フォーラム型情報ミュージアムにおける情報システムの開発」2015年度人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築「個別プロジェクト等成果報告会」、国立民族学博物館

・展示

2015年８月27日～11月10日 国立民族学博物館特別展「韓日食博――わかちあい・おもてなしのかたち」実行委員

2015年７月18日～10月４日 東京都美術館「キュッパのびじゅつかん――みつめて、あつめて、しらべて、ならべて」参加型展示スペースにおいてデジタルビューアを担当

・広報・社会連携活動

2016年３月４日 「データベースからみる世界の民族文化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年１月17日 「画像データベースで見る・学ぶ「近代日本の身装文化」」第410回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2016年２月20日～２月22日―大韓民国（韓国国立民俗博物館においてフォーラム型情報ミュージアムにかかる調査研究）

◎大学院教育

総合研究大学院大学・論文ゼミ担当

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

国立情報学研究所客員准教授、東京国立近代美術館客員研究員、東京文化財研究所「近現代美術資料の収集、

整理、公開に関する調査研究」客員研究員、奈良国立博物館「仏教美術に関する共同調査研究」調査員、立命館大学アート・リサーチセンター「歌舞伎・浄瑠璃データベースの活用に関する研究」客員協力研究員

研究戦略センター

鈴木七美［すずき　ななみ］――――――

1）高齢化社会に関する実践的研究において注目されている「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」というタームについて、日本文化人類学会第49回研究大会（大阪国際交流センター 2015年５月31日）において検討した：「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の課題」。

2）アメリカ老年学会第68回年次大会（米国・オーランド、2015年11月20日）において、東日本震災後の高齢者の生活支援に関し、５年間継続してきた実践者との共同研究成果を発信した：“The New Role of Care Manager Toward Promoting Aging-In-Place of Elderly Experienced the Great East Japan Earthquake”。

3）応用人類学会第76回年次大会（SfAA2016）（カナダ・バンクーバー、2016年３月31日）のシンポジウム The Value of Applied Anthropology in Gerontology（SMA: Society of Medical Anthropology）において、高齢者研究における現場実践者と文化人類学研究者の協働の意義について検討した：“The Meaning of Collaborative Practices Conducted by Care Workers and Anthropologists after the Great East Japan Earthquake toward Aging-in-Place of Migrant Older Adults”。

4）文化人類学の現代的な効用を学生や一般市民に発信する日本文化人類学会主催公開シンポジウム「人類学的想像力の効用」（金沢市しいのき迎賓館　11月８日）において、高齢者の生活支援と想像力に関わる発表を行った：（招待講演）「医療現場での想像力――エイジング・イン・プレイスと養生」。

5）高齢者の生活に関する文化人類学、社会学、福祉政策学の学際的研究成果の公開として、2014年に企画開催した高齢者の住環境開発に関する人間文化研究機構シンポジウム「高齢期の多様な住まい方とウェルビーイング」（イイノホール（東京） 2014年３月８日）の成果をまとめ、人間文化研究機構のウェブサイトで広く一般に発信した：「高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方――変わりゆく人の生（ライフスタイル）から考える」人間文化研究機構『人間文化』22：2-12（http://www.nihu.jp/sougou/jouhou/publication/ningen.html#22）。

6）科学研究費助成事業の成果を、国立民族学博物館において来館者と共有する目的で、国際セミナーを２回、公開セミナーを１回開催した。（①“Happiness and “Governance” 2015年７月８日　②“Integration of Older Adults in Social, Educational, & Religious Settings” 2015年８月６日　③「高齢者たちと共に考えるウェルビーイング――宮城県の在宅高齢者生活支援の現場から」 2016年２月12日）。

Ⅱ　外部資金：科学研究費助成事業（基盤研究（C））「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」（研究代表者：鈴木七美）に基づく研究成果を、学会誌とウェブサイトを通して、広く医療従事者・研究者および一般に向けて発信した。

1）論文「未病から考える高齢社会の養生とレジリエンス」日本未病システム学会『日本未病システム学会雑誌』20-2：31-35。

2）「スイスにおける養生文化とエイジ・フレンドリー・コミュニティ」（公益社団法人日本薬学会 http://www.pharm.or.jp/highlight/index.shtml）。

◎出版物による業績

［論文］

鈴木七美

2015 「高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方――変わりゆく人の生（ライフスタイル）から考える」『人間文化』2013(22)：2-12，東京：人間文化研究機構。（Internet　2016年４月28日　http://www.nihu.jp/ja/publication/ningen/22）［科学研究費助成事業（基盤研究（B）特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー）成果］

2016 「スイスにおける養生文化とエイジ・フレンドリー・コミュニティ」公益社団法人日本薬学会。（Internet　2016年４月28日 http://www.pharm.or.jp/highlight/index.shtml）［科学研究費助成事業（基盤研究（C））成果］。

［その他］

2016 「ワーク・ライフ・バランスを要請する北欧福祉社会の課題」中谷文美・宇田川妙子編著『仕事の人類学――労働中心主義の向こうへ』pp.242-245，京都：世界思想社。［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年５月31日　「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の課題――変動のなかのエイジング・イン・プレイス」日本文化人類学会第49回研究大会、大阪国際交流センター［査読有］

2015年７月９日　「趣旨説明」公開国際セミナー「幸福とガバナンス」科学研究費助成事業「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（基盤研究Ｂ）〔特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー〕（代表者：鈴木七美）成果公開、国立民族学博物館４階大演習室

2015年８月６日　「趣旨説明」公開国際セミナー「『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践」科学研究費助成事業「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（基盤研究（B））〔特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー〕（代表者：鈴木七美）成果公開、国立民族学博物館４階大演習室

2015年11月20日　“The New Role of Care Manager Toward Promoting Aging-In-Place of Elderly Experienced The Great East Japan Earthquake,” 68th Annual Scientific Meeting, The Gerontological Society of America, Walt Disney World Swan and Dolphin. Orland, U.S.A.［査読有］

2016年２月12日　「趣旨説明　高齢化社会におけるウェルビーイングとエイジング・イン・プレイスの共同研究」公開研究セミナー『高齢者たちと共に考えるウェルビーイング――宮城県の在宅高齢者生活支援の現場から』科学研究費助成事業「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（基盤研究（B））〔特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー〕（代表者：鈴木七美）成果公開、国立民族学博物館４階大演習室

2016年３月31日　“The Meaning of Collaborative Practices Conducted by Care Workers and Anthropologists after the Great East Japan Earthquake toward Aging-in-Place of Migrant Older Adults,” Symposium: The Value of Applied Anthropology in Gerontology: Imaging Career Paths at the Intersection of Anthropology, Health, and Aging（SMA: Society of Medical Anthropology）SfAA 2016: Society for Applied Anthropology 76th Annual Meeting, The Westin Bayshore. Vancouver, Canada［査読有］

・研究講演

2015年11月８日　招待講演「医療現場での想像力――エイジング・イン・プレイスと養生」日本文化人類学会研究成果公開発表シンポジウム「人類学的想像力の効用」金沢市しいのき迎賓館３階セミナールームＢ

・広報・社会連携活動

2015年７月８日　「アメリカン・キルトの世界：キルトのある生活、キルティングする人びと」ナレッジキャピタル「超」学校シリーズ「みんぱく×ナレッジキャピタル――世界の『民芸』」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル１F

2015年11月13日　「コメント」みんぱく公開講演会「育児の人類学、介護の民俗学」（主催：国立民族学博物館・日本経済新聞社）日経ホール

◎調査活動

・国内調査

2015年７月20日～７月23日―バイタルケア名取（科学研究費助成事業（基盤研究（B）特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（研究代表者：鈴木七美）に関わる資料収集及び調査）

2016年２月29日～３月３日―バイタルケア秋田（北）・バイタルケア秋田（南）（科学研究費助成事業（基盤研究（B）特設分野研究：ネオ・ジェロントロジー）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」（研究代表者：鈴木七美）に関わる資料収集及び調査）

・海外調査

2015年６月14日～７月５日―スイス、ドイツ（「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」に関わる資料収集及び調査）

2015年11月17日～12月３日―アメリカ合衆国（「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の調査）

2016年３月26日～４月５日―カナダ（「多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究」にかかる調査研究）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

博士論文審査委員（１件）、予備審査委員（１件）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

Editorial Advisory Board for Anthropology & Aging（A&A: The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology（AAGE）、American Society on Aging（ASA）2016 Aging in America Conference 発表の査読者（peer reviewer）、日本文化人類学会学会誌『文化人類学』編集委員会委員、地域研究コンソーシアム理事

・他大学の客員、非常勤講師

京都ノートルダム女子大学「ウェルビーイング研究特論」（集中講義）

樫永真佐夫［かしなが　まさお］―― 教授

1971年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、総合研究大学院大学教授併任（2016）**【学位】**学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）**【専攻・専門】**文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）**【所属学会】**日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」――村のくらしと恋』東京：雄山閣。

2011 『黒タイ年代記――「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀――家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010　第６回日本学術振興会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムにおける黒タイ文字と文書／東南アジアにおけるボクシングの文化人類学

・研究の目的、内容

フランスによるインドシナの植民地化が進んだ19世紀後半、当時のベトナム西北部の黒タイ首領たちが、外部の諸国家や首領たちに対するどのような政治的外交的戦略から黒タイ文字を創成したのかを歴史的に考察した論文の編集作業を、出版に向けて編著者らと進める。

黒タイ詩人による歌謡テクストの翻訳と注釈を付す作業を継続して行い、来年度刊行を目指す。

・成果

ベトナムの黒タイ歌謡テクスト研究の副産物として、黒タイと白タイによる民族文化の資源化に基づく観光開発の現状を比較検討した論文「ベトナムにおける民族文化の資源化と観光開発――マイチャウとソンラーにおけるターイの事例から」が、塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス－中国南部地域の分析から』（風響社）の１章として刊行された。

そのほか、ベトナム社会文化研究の一環として、「台所のカミさまがいる展示場」「ベトナム・黒タイ族の山椒」等の小論を発表した。

フランスによるインドシナの植民地化が進んだ19世紀後半、当時のベトナム西北部の黒タイ首領たちが、外部の諸国家や首領たちに対するどのような政治的外交的戦略から黒タイ文字を創成したのかを歴史的に考察した論文を執筆した。現在、編著者とともに編集作業を継続して進めるとともに、出版助成金の獲得を検討している。

◎出版物による業績

［論文］

樫永真佐夫

2016 「ベトナムにおける民族文化の資源化と観光開発――マイチャウとソンラーにおけるターイの事例から」塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス――中国南部地域の分析から』pp.295-322, 東京：風響社。

［その他］

樫永真佐夫

2015 「台所のカミさまがいる展示場」『月刊みんぱく』39(7)：5。

2015 「みんぱく　食の民族誌　考える舌⑦　ベトナム・黒タイ族の山椒」『京都新聞』 7月1日。

2016 「ゾックン峠の野火――ベトナム、タイ族の囲炉裏収集のこぼれ話」『みんぱく e-news』175号, 1月1日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2015年12月19日 「ベトナム、黒タイの台所」第451回みんぱくゼミナール

・研究講演

2015年6月10日 「ベトナム、黒タイの『竹の文化』」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――世界の『民芸』」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル1F

2015年8月23日 「食の歳時記－ベトナム、黒タイの村から」第113回国立民族学博物館友の会東京講演会、JICA地球ひろば、東京

2015年10月27日 「ベトナムにおけるガストロノミック・ツーリズムの可能性」ル・コルドン・ブルー創立120周年記念シンポジウム『食の未来－ガストロノミック・サイエンス＆イノベーション』、立命館大学びわこ・くさつキャンパス、滋賀

2015年11月28日 「トレーニングの楽しさをめぐる文化学」日本ハイインテンシティトレーニング協会（JHITA）主催『STRONG DEPOT セミナー』、STRONG DEPOT、大阪

・広報・社会連携活動

2015年11月11日～11月12日　2015年度みんぱく若手研究者奨励セミナー「伝承と身体をめぐる文化人類学」コーディネーター

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年12月13日 「ベトナム、ターイの台所」第407回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年11月30日～12月11日―ベトナム（黒タイの歌にかかる調査研究）

◎大学院教育

・博士論文審査委員

博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）

岸上伸啓［きしがみ　のぶひろ］――副館長（研究・国際交流担当）

塚田誠之［つかだ　しげゆき］――教授

1952年生。**【学歴】**北海道大学文学部史学科東洋史学専攻卒（1978）、北海道大学大学院文学研究科修士課程東洋史学専攻修了（1980）、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程東洋史学専攻単位取得（1987）**【職歴】**国立民族学博物館第3研究部助手（1988）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長（2011）国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）、総合研究大学院大学学長特別補佐（2013）**【学位】**文学博士（北海道大学 2001）、文学修士（北海道大学大学院文学研究科 1980）**【専攻・専門】**

歴史学 中国南部地域（広西・貴州等）のチワン（壮）族をはじめとする諸民族の歴史民族学的研究**【所属学会】**日本文化人類学会、史学会、宋代史研究会、北海道大学東洋史談話会、北大史学会、漢民族研究学会（中国）、壮学学会（中国）

【主要業績】

［単著］

塚田誠之

2000 『壮族文化史研究――明代以降を中心として』東京：第一書房。

［編著］

塚田誠之編

2016 『民族文化資源とポリティクス――中国南部地域の分析から』東京：風響社。

［論文］

塚田誠之

2016 「壮族の「民族英雄」儂智高に関する研究の動向と問題点」『国立民族学博物館研究報告』40(3)：411-453。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国南部・広西におけるチワン族の歴史の資源化に関する研究

・研究の目的、内容

中国の急速な経済発展にともない、歴史が政府や知識人などによって資源化されている。とくに中国南部・広西におけるチワン族の歴史の資源化を対象として調査研究を進める。チワン族の「民族英雄」として扱われている儂智高の歴史的解釈の変遷、土着の権力者「土司」に関する史跡の資源化について、調査研究を行う。

・成果

儂智高の歴史的解釈の変遷について、「国立民族学博物館研究報告」40巻3号に論文「壮族の「民族英雄」儂智高に関する研究の動向と問題点」を掲載した。そして、人民共和国成立以降、時代の変化に応じて、その時代の思潮を映し出すような異なった解釈がなされ続けてきたこと、儂智高をめぐってこれまで分析されてこなかった経済基盤や宋朝との制度史的な関係などを考察した。

また、ふるい土司建築が残る広西忻城県の土司博物館について、歴史の資源化に関する調査を行い、さらに、漢族の地方集団「六甲人」の歴史と現状について調査を行った。くわえて、儂智高に関して、ベトナム・カオバン省で複数の廟と祭祀に関する調査を行い、儂智高の資源化の現状を考察した。

この他、民博共同研究「中国における民族文化の資源化とポリティクス――南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究」（2010年9月～2013年3月）の成果として論文集「民族文化資源とポリティクス――中国南部地域の分析から」（塚田誠之編、東京：風響社）を刊行した。そして、その中の論文で中越国境の「徳天跨国瀑布」観光におけるチワン族とベトナム民族との関わりの実態を明らかにした。

さらに、チワン族とベトナム側民族との中越国境を越えて交流してきた歴史について、4月に愛知大学国際問題研究所で開催された国際シンポジウム「「戦後」の意味――アジアにおける1945年とその後」で研究発表を行い、論文「論中越辺境広西壮族与高平儂族岱族70年的民族交往」（謝政諭・松岡正子・廖炳恵・黄英哲編『何謂「戦後」――亜洲的「1945」年及其之後』（台北：允晨文化実業股份有限公司）を公表した。

◎出版物による業績

［編著］

塚田誠之編

2016 『民族文化資源とポリティクス――中国南部地域の分析から』東京：風響社。［査読有、共同研究「中国における民族文化の資源化とポリティクス――南部地域を中心とした人類学・歴史学的研究」2010年9月～2013年3月の成果］

［論文］

塚田誠之

2015 「論中越邊境廣西壮族與高平儂族岱族間70年的民族交往」謝政諭・松岡正子・廖炳恵・黄英哲主編『何謂「戦後」――亜洲的「1945」年及其之後』pp.411-435, 台北：允晨文化公司。

2016 「壮族の「民族英雄」儂智高に関する研究の動向と問題点」『国立民族学博物館研究報告』40(3)：411-453。［査読有］

2016 「国境地域における観光の現状と問題――徳天跨国瀑布観光の事例から」塚田誠之編『民族文化資源とポリティクス――中国南部地域の分析から』pp.273-294, 東京：風響社。［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年４月12日 「中国広西の壮族とベトナム民族の交流の70年」、国際シンポジウム『「戦後」の意味――アジアにおける1945年とその後』（主催：愛知大学国際問題研究所、台湾・東呉大学人文社会学院、アメリカ・カリフォルニア大学サンディエゴ校文学系）、愛知大学車道校舎コンベンションホール

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年６月７日 「中国チワン族の棚田観光の現状」第386回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年８月１日～８月15日―中華人民共和国（広西におけるチワン族を中心とした歴史・文化の資源化の調査）

2016年３月６日～３月17日―ベトナム（ベトナム・カオバンにおける儂智高廟とその祭祀に関する調査）

平井京之介［ひらい　きょうのすけ］―― 教授

【学歴】東北大学文学部社会学科社会学専攻卒（1988）、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了（1992）、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了（1998）**【職歴】**花王株式会社本社チェーンストア部（1988）、国立民族学博物館第１研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）**【学位】**Ph. D.（ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998）、M. Sc.（ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992）**【専攻・専門】**社会人類学 1）アジア産業労働者の人類学的研究、2）ラオス仏教の人類学的研究、3）コミュニティの政治人類学的研究**【所属学会】**日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute、組織学会

【主要業績】

［単著］

平井京之介

2011 『村から工場へ――東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT 出版。

［編著］

平井京之介編

2012 『実践としてのコミュニティ――移動・国家・運動』京都：京都大学学術出版会。

［論文］

Hirai, K.

2008 The Romantic Ethic and the Notion of Modern Society: Imagining Communities among Northern Thai Factory Women. In S. Tanabe (ed.) *Imagining Communities in Thailand: Ethnographic Approaches*, pp.135-160. Chiang Mai: Silkworm Books.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

水俣病被害者支援運動の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人びとが水俣病被害者を支援する運動を通じて新たにコミュニティを形成し、国家や社会との関係をつくりかえようとする過程を、人類学的アプローチを用いて明らかにする試みである。本研究では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援NPOをコミュニティという観点から調査研究することによって、1970年代半ばから現在までのあいだに、この運動の活動や組織、関係性、資源と、そこに参加する人びとの志向する社会のイ

メージがいかに変化してきたか、またその過程において、国家統治や資本主義との関係をどのように変化させてきたかを解明することを目的とする。

・成果

本年度は、2013年度から３年間の予定で実施している科学研究費助成事業プロジェクト（基盤研究Ｃ）「水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究」の研究活動の一部として、熊本県水俣市のNPOにおいて約６ヵ月間の集約的な現地調査を実施した。特に、NPOの歴史的変容過程を明らかにするための補足的な調査と、過去40年間の元メンバーらから、運動の歴史についての聞き取り調査を実施し、データを収集した。また、一昨年度に実施した国際シンポジウム“Social movements and the production of knowledge: politics, identity and social change in East Asia”の成果を、SESとして刊行した。

◎出版物による業績

［編著］

Hirai, K.（ed.）

2015 *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91). Osaka: National Museum of Ethnology［査読有、機関研究の成果］

［論文］

平井京之介

2015 「「公害」をどう展示すべきか――水俣の対抗する二つのミュージアム」竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶――戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』pp.148-177，東京：東信堂。［査読有、機関研究の成果］

2015 「心で感じるミュージアム――日本軍「慰安婦」歴史観」竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶――戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』pp.258-264，東京：東信堂。［査読有、機関研究の成果］

2015 Social movements and the production of knowledge: body, practice, and society in East Asia. In K. Hirai（ed.）*Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia*（Senri Ethnological Studies 91), pp.1-22. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有、機関研究の成果］

2015 Storytelling as political practice: habitus and social change in the Minamata disease movement. In *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia*（Senri Ethnological Studies 91), pp.81-99. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有、機関研究の成果］

［その他］

平井京之介

2015 「靴を脱いでお上がりください」『月刊みんぱく』39(7)：4。

2015 「たんぼ道、女工と僧のすれ違い」『月刊みんぱく』39(7)：9。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

平井京之介監修

2015 マルチメディアコンテンツ『寺院の歩き方』（日本語）

2015 『森の僧院』（日本語、２分18秒）

・電子ガイドの制作・監修

平井京之介監修

2015 『女工』（日本語・英語）

2015 『寺院』（日本語・英語）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2016年２月20日 「みんぱくにタイ寺院ができるまで」第453回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

2016年３月18日 「タイ・ラオス仏教寺院の歩き方」2016年春の公民館講座『民族学への招待――躍動する東南・南アジア』芦屋市立公民館

2015年８月26日　「タイ・ラオスの仏教寺院――その伝統と文化」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年12月20日　「タイ・ラオス仏教寺院の歩き方」第408回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2015年９月２日～11月13日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2015年11月21日～12月19日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2016年１月５日～２月19日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2016年２月26日～２月29日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2016年３月９日～３月12日―岩手県大槌町、奥州市（社会と研究のインターフェースとしての展示に関する総合的研究）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究（2013-2015）研究代表者

伊藤敦規［いとう　あつのり］――――――

・研究の目的、内容

本研究は五年計画（2011～2015年度）で実施される。その目的は、第一に日本国内の博物館等が所蔵するアメリカ南西部先住民資料（物質文化）の来歴、情報管理、保存状況を総合的に把握することである。第二の目的は日本国内での調査結果をソースコミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第三の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映されるだろう協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。調査対象機関は、野外民族博物館リトルワールド（愛知）、天理大学附属天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）、松永はきもの資料館（旧 日本郷土玩具博物館、広島）とする。また、資料調査対象とする民族集団は、ホピとヤキとズニを中心とした。

2015年度の計画として、2014年度に採択された科学研究費助成事業プロジェクト（若手研究（A））および民博のフォーラム型情報ミュージアムの開発型プロジェクトと連動させながら、ホピの人びとを招聘し、資料熟覧を継続して行う。また、米国南西部先住民の保留地に赴き、トライブ政府の文化行政担当者やコミュニティ成員などと調査成果の共有を図り、今後に向けた資料管理の要望などに関する聞き取り調査を実施する。また、10月以降に予定している三度目のホピ招聘では、天理参考館とリトルワールドでの熟覧と記録化を行う。その準備もかねて４月の二度目の招聘時に、それら機関の学芸員と共に人類学的ドキュメンテーションに関する国際ワークショップを民博で開催する。

・成果

学術協定に基づく国際共同研究を実施しながら、３度の国際ワークショップでの発表（その内二度は実行委員長として主宰）、２カ国４機関での熟覧調査、13度の研究発表・招待講演・ソースコミュニティにおける現地報告会を行った。さらに、本研究で得られたデータを、デジタルビューアとしてまとめるために、システムデザインの監修を行った。

なお、本研究の実施に当たり、科学研究費助成事業（若手研究（A）「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（研究課題番号：26704012）、研究代表者」）と、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」（研究代表者）の一部を充てた。

◎出版物による業績

［論文］

伊藤敦規

2015 「再会ツールとしての著作権――国立民族学博物館所蔵カナダ先住民版画資料の著作権処理を事例として」齋藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題――国立民族学博物館所蔵のイヌイットおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして』（国立民族学博物館調査報告131）pp.211-227，大阪：国立民族学博物館。［査読有］

［その他］

伊藤敦規

2015 「民族学博物館とソースコミュニティとの再会」『民博通信』150：10-11。

2015 「米国先住民ミュージシャン エド・カボーティ」『月刊みんぱく』39(11)：18-19。

2015 「アメリカ合衆国南西部先住民ホピのソーシャルダンス」国枝たか子編『世界のダンスII――百カ国を結ぶ舞踊文化』pp.78-79，東京：不昧堂出版。

◎映像音響メディアによる業績

伊藤敦規、鈴木紀監修

2016 『みんぱく映像民族誌 第18集　米南国南西部先住民の宝飾品』、大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年４月16日 「趣旨説明――国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・大型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」および科学研究費助成事業（若手研究（A））「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」の目的と視座」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧――資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』、国立民族学博物館

2015年４月16日 「「映像記録『Demonstration of the Collection Review（話者：シンシア・チャベス＝ラマー

（国立アメリカン・インディアン博物館、資料管理副部長）、ジム・イノーテ（ズニ博物館、館長））』の視聴」の解説」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧――資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』、国立民族学博物館

2015年４月16日　「「映像記録『Host Museum and Source Community Responsibilities in Collection Reviews（話者：シンシア・チャベス＝ラマー（国立アメリカン・インディアン博物館、資料管理副部長）、ジム・イノーテ（ズニ博物館、館長））』の視聴」の解説」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧――資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』、国立民族学博物館

2015年４月17日　「資料熟覧に関する人類学的ドキュメンテーションについて」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧――資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』、国立民族学博物館

2015年４月17日　「まとめ」国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧――資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討』、国立民族学博物館

2016年１月20日　「民族学博物館資料の高度情報化とオンライン協働環境整備に向けた取り組み――フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの中間報告として」第271回民博研究懇談会

2016年２月12日　Kathy Dougherty and Atsunori Ito “Hopi Collection Review Project in the US and Japan” in the Minpaku International Workshop “System Development for the Info-Forum Museum: Philosophy and Technique”, National Museum of Ethnology

2016年３月26日　「ソースコミュニティと共に行う博物館資料調査――国立民族学博物館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの意義と内容の紹介」国立民族学博物館・金沢大学　研究フォーラム『文化遺産の保存と活用：ミュージアムの視点から』、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2015年10月25日　「ソースコミュニティとの協働資料熟覧――民博と北アリゾナ博物館の事例紹介」『米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』、国立民族学博物館

2015年11月14日　伊藤敦規、ジェロ・ロマベンティマ、マール・ナモキ「ソースコミュニティとの協働資料熟覧」『米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』、国立民族学博物館

2015年11月14日　「米国先住民ホピによる民博所蔵民族誌資料熟覧の紹介」『米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』、国立民族学博物館

2016年２月28日　「共同研究の中間段階における総括」『米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』、南山大学人類学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年７月４日　Kelley Hays-Gilpin, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema “Hopi Overlay Program”, Museum of Northern Arizona 85th Hopi Festival, Easton Collections Center

2015年10月16日　「民族學博物館與資源社群的再相會――意義與方法論」國立臺灣歷史博物館與日本國立民族學博物館交流工作坊『民族學與歷史學的交會』國立臺灣歷史博物館

2015年12月11日　“Collaborative Reviewing Efforts of Hopi items in museum collections both domestic and international” Shungopavi Community Building, Arizona, USA

2016年３月12日　「カチーナ人形資料の熟覧調査――ホピの人びとを松永に招聘してコメントをしてもらう計画について」伊藤敦規代表フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト研究会、松永はきもの資料館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年３月27日　「ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査」第418回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう

・映像作品上映

2015年７月４日　Kelley Hays-Gilpin, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema “Hopi Overlay Program”『アメリカ先住民ホピの銀細工づくり――銀板に重ね合わせる伝統』（国立民族学博物館ビデオテーク（番組番号1705））上映、Museum of Northern Arizona 85th Hopi Festival, Easton Collec-

tions Center

◎調査活動

・**海外調査**

2015年６月９日～８月５日―アメリカ合衆国（フォーラム型情報ミュージアム構築に向けた北アリゾナ博物館等との資料調査）

2015年９月７日～９月16日―アメリカ合衆国（国際研究大会（Association of Tribal Archives, Libraries, and Museums）に参加）

2015年10月14日～10月18日―台湾（国立台湾歴史博物館との協定調印式及びワークショップに参加）

2015年12月７日～12月31日―アメリカ合衆国（フォーラム型情報ミュージアム構築に向けた北アリゾナ博物館等での資料調査）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

国立民族学博物館共同研究会「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト『北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有』研究代表者、科学研究費助成事業（若手研究（A））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：26704012）研究代表者、科学研究費助成事業（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：15KK0069）研究代表者、北海道大学アイヌ・先住民研究センター共同研究「先住民族アートプロジェクト」研究代表者：山﨑幸治　共同研究者

◎社会活動・館外活動等

・**他の機関から委嘱された委員など**

地域研究コンソーシアム運営委員

◎学会・シンポジウム等の開催

2015年４月16日～４月17日　国立民族学博物館国際ワークショップ「資料熟覧――資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討」、国立民族学博物館。

2016年２月11日～２月12日　国立民族学博物館国際ワークショップ『フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて――オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討』、国立民族学博物館。

丹羽典生［にわ　のりお］――――――

春風社。

［共編著］

丹羽典生・石森大知編

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉――脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。

【受賞歴】

2010　第９回オセアニア学会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

応援の人類学：政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の諸相

・研究の目的、内容

本研究は、＜応援＞という視角から人類の諸文化を通文化的に比較することを通じて、利他性という人間性の根源について文化人類学的に考察することを目的とする。＜応援＞の下位項目として、政治、スポーツ、ファン文化をさしあたり設定し、世界の事例を取り上げ検討する。日本の事例では、大学を中心とする応援団の諸活動を具体的な民族誌的研究の対象とする。調査の遂行に当たっては、科学研究費助成事業への応募も計画している。

・成果

東京、大阪にて聞き取り調査を行った。各種大学図書館に収蔵されている応援団関係資料や新聞資料の収集閲覧とデータベースの作成を行った。成果公開としては、本館の共同研究「応援の人類学――政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」を開始し、応援文化に関する通文化比較研究を始めた。また、上記の研究会にて研究発表を二回行ったほか、『月刊みんぱく』にて「応援文化論序説」、『民博通信』にて「応援の人類学の挑戦」を掲載した。

◎出版物による業績

［編著］

丹羽典生編

2016 『＜紛争＞の比較民族誌――グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』神奈川：春風社。

［論文］

丹羽典生

2016 「イノセンスの終焉にて――オセアニアにおける＜紛争＞の比較民族誌的研究にむけて」丹羽典生編『＜紛争＞の比較民族誌――グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』神奈川：春風社。

2016 「分裂と統合のはざまで――フィジーにおける2000年クーデタと西部政体の樹立運動」丹羽典生編『＜紛争＞の比較民族誌――グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』神奈川：春風社。

［その他］

丹羽典生

2015 「応援文化論序説」『月刊みんぱく』39(4)：2-3。

2015 「まくら」『月刊みんぱく』39(10)：10-1。

2016 「応援の人類学の挑戦」『民博通信』151：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2015年11月13日　総合司会『みんぱく公開講演会 育児の人類学、介護の民族学――フィールドワークによる再発見』日経ホール、東京

2016年３月25日　討論進行『みんぱく公開講演会 ワールドアートの最前線――アイヌの文様とエチオピアの響き』オーバルホール、大阪

・機構の連携研究会での報告

2015年10月24日　「野次・喝采から応援へ――応援の人類学的研究に向けた試論」『応援の人類学――政治・ス

ポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌』国立民族学博物館

2016年１月30日　「応援文化という領域と特性――日本の大学応援団の変化から考える」『応援の人類学――政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌』国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2015年８月15日　「オセアニアの戦争の文化」第447回みんぱくゼミナール

・広報・社会連携活動

2015年10月28日　「応援をめぐる旅　ニュージーランドのハカから日本の大学応援団まで」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年８月16日　「南太平洋のハカ（民族舞踏）の広がり」第394回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年９月８日～９月18日―フィジー（トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学に関する調査研究）

2015年11月17日～12月９日―オーストラリア（トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学に関する調査研究）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

１年生ゼミ担当

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」研究代表者

三尾 稔［みお　みのる］――――――

宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が20年あまりにわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。本年度は昨年度に引き続き、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践をどのように変容させているかという点に注目し、フィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。

人間文化研究機構地域研究推進事業の一環である「現代インド地域研究」は、第２期目に入る。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。各個研究のテーマは、この地域研究プロジェクトの内容に密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマのもとでの１つの実証的研究として各個研究を遂行する。

また、文化資源プロジェクト予算を獲得した、『「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、上記「現代インド地域研究」プロジェクト経費も活用しつつ、20世紀後半のインドの文化変容を写真によって跡づけられるデータベース資料とすべく、スライド写真のデジタル化およびデータベース化に向けた資料詳細目録の作成を、昨年度に引き続いて実施する。

一方、文化資源プロジェクト「『ラージャスターン州の生活・信仰・儀礼』に関する映像資料の編集と現地語版の作成」では、今年度中に現地語版の映像音響番組を作成し、プロジェクトを完成させる。

・成果

上記テーマに関して、「現代インド地域研究」推進経費に基づき2015年８月にインドに赴き民衆的で地域限定的なヒンドゥー教の信仰実践のサイバー空間利用に関して現地調査を行った。

「現代インド地域研究」推進事業に関しては、国立民族学博物館拠点の代表として、研究会やシンポジウムの開催、研究資料の受け入れなど拠点事業の推進を主導した。拠点の研究はグループ１「現代インドの宗教：運動と変容」及びグループ２「環流する現代インド文化」から組織される。今年度は両グループ合同の研究会を３回開催した。また、「現代インド地域研究」プロジェクト全体事業として2015年12月に国立民族学博物館において本プロジェクトの第２期目のキックオフ・シンポジウムを開催した。報告者はこれらの国内研究会および国際シンポジウムの企画立案に関与し、研究会を主宰、国際シンポジウムにおいても総括司会を担当した。拠点プロジェクトの研究成果は、「現代インド地域研究」ネットワーク全体として企画した全６巻の研究叢書のうちの第６巻として編集し、2015年５月に出版された。この巻において、報告者自身は編者として関与するだけでなく、序論および第12章を執筆している。

「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点は、研究ネットワークの国際化の推進にも積極的に取り組んでいる。2010年度に研究交流に関する覚書を交わしたエジンバラ大学南アジア研究センターとの間では日本の南アジア研究の成果の英文叢書としての刊行事業を進めている。報告者は、この英文叢書のうちの３冊の編集執筆を行っており、このうち２冊が2015年５月及び10月に出版された。また、本プロジェクトの国際化の一環として、世界各地の南アジア研究センターの連携による「国際南アジア研究センターコンソーシアム」の設立が構想されている。今年度はこの準備のため、世界各地の南アジア研究センターを訪問し、その実際の研究内容を視察するとともに、コンソーシアム設立に向けた意見交換を行った。報告者自身は、このためオランダ・スウェーデン・韓国を訪問した。

『「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、文化資源プロジェクト経費と「現代インド地域研究」プロジェクト経費を活用し、受け入れた全てのスライド写真のデジタル化を終え、データベースを構築して2016年３月に館内公開を行った。

文化資源プロジェクト「『ラージャスターン州の生活・信仰・儀礼』に関する映像資料の編集と現地語版の作成」では、本館に特別客員准教授として受け入れたShyam S. Kumawat博士との共同作業により、計７本の映像音響番組の現地語版を作成し、当　初の予定通りプロジェクトを完成させた。

2015年４月25日にネパールで発生した大地震後、科学研究費による緊急調査プロジェクト「2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査」（代表：矢田部龍一・愛媛大学教授）が立ち上げられた。報告者はこのプロジェクトに研究協力者として参加し、2015年８月、11月、2016年１月の３回にわたってインドおよびネパールで、震災後の復旧・復興に取り組むインド系のNGO団体の活動に関する調査を行った。その成果は、上記科研の報告書に発表した。

◎出版物による業績

［編著］

Mio, M. and C. Bates（eds.）

2015　*Cities in South Asia.* London: Routledge.

Mio, M., C. Bates and A. Tanabe（eds.）

2015　*Human and International Security in India.* London: Routledge.

三尾 稔・杉本良男編

2015「現代インド６　環流する文化と宗教」東京：東京大学出版会。

［論文］

Mio, M.

2015　Community of retrospect: spirit cults and locality in an old city of Rajasthan. In M. Mio and C. Bates（eds.）2015 *Cities in South Asia.* pp.210-227. London: Routledge.

Mio, M. and A. Tanabe

2015　Epilogue: human and international security in an age of new risks and opportunities. In M. Mio, C. Bates, and A. Tanabe（eds.）*Human and International Security in India,* pp.175-184. London: Routledge.

三尾 稔

2015「序章　『環流』するインド」三尾 稔・杉本良男編　『現代インド６　環流する文化と宗教』pp.3-24，東京：東京大学出版会。

2015「宗教のポリトロピー」『現代インド６　環流する文化と宗教』pp.327-348，東京：東京大学出版会。

2016「2015年ネパール震災後のインド系NGO団体による活動に関する民族誌的調査報告」矢田部龍一編『科学研究費報告書2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査』pp.97-110，松山：愛媛大学。

［その他］

三尾 稔

2015「躍動する南アジア」『月刊みんぱく』39(6)　特集の編集。

2015「躍動する南アジアへ」『月刊みんぱく』39(6)：2-3。

2015「交錯する豊かな宗教伝統」『月刊みんぱく』39(6)：4。

2015「カバディのプロスポーツ化」『みんぱく e-news』172号、10月１日。

2015「みんぱく　食の民族誌　考える舌⑱　インドの『ピジャ』」『京都新聞』10月７日。

2016「文化のグローバル化がもたらすこと」『現代インド・フォーラム』2016年冬季号：10-16。

2016「ハヌマーン――神になったサル」『月刊みんぱく』40(1)：6。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

三尾 稔監修

2016　マルチメディア番組「ラージャスターン州メーワール地方の暮らしと信仰」（追加編集）日本語、マルチメディア番組のため時間は不定

Minoru Mio, Shyam S. Kumawat 監修（ヒンディー語版）

2015『バスニ・カラン村の領主のくらし』（15分）、『ウダイプルの婚礼』（33分）、『ラージャスターンの結婚式』（106分）、『バスニ・カラン村の女神祭礼』（26分）、『ウダイプルのホーリー祭』（20分）、『ウダイプルの女神祭礼』（74分）、『ラージャスターンの戦士の霊　サガスバウジー』（32分）

・電子ガイドの制作・監修

三尾 稔監修（日本語、英語）

2015『ホーマ儀礼』『ヒンドゥーの神々』『憑依』『ゾロアスター教徒の儀礼』『ナヴァラートリー』『北インドの婚礼』『食文化』『インドの雑踏』

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年２月26日　“Professor Srinivas and the development of social anthropological village study of India in Japan5.” *The International Workshop on M. N. Srinivas and Sociology of India.* Delhi School of Economics, University of Delhi

・研究講演

2015年４月18日　「社会が育む宗教――カースト、共同体、個人」朝日カルチャーセンター中之島教室

2015年５月16日　「神との合一をめざして――神を愛する技法」朝日カルチャーセンター中之島教室

2015年６月20日　「異なる宗教を乗り越える――くらしに根ざす宗教の強さともろさ」朝日カルチャーセンター中之島教室

2015年７月18日　「躍動するインドに息づく宗教――多様な伝統の競合と共存」国立民族学博物館（朝日カルチャーセンター現地講座）

・広報・社会連携活動

2015年４月５日　「映画『聖者たちの食卓』解説」、聖者たちの食卓＆Market実行委員会、萬福寺

2015年４月15日　「南アジア大躍動。その『からくり』とこれから」カレッジシアター「地球探求紀行」、あべのハルカス近鉄本店

2015年５月２日　「躍動する南アジアの背景に迫る」千里文化財団（友の会講演会）、国立民族学博物館

2015年６月28日　「忠実再現！インド西部の刺繍布――展示資料の模写に挑戦」講師（ワークショップ　インド刺繍とインドのくらし）、国立民族学博物館

2015年８月８日　「映画『勇者は花嫁を奪う』解説」（みんぱく映画会「インド映画特集」）国立民族学博物館

2015年10月30日　「映画『聖者たちの食卓』解説」、箕面市立萱野中央人権文化センター、箕面市芝楽広場

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年５月３日　「くらしに息づく豊かな宗教伝統――南アジアの新展示から」第381回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・データベースの作成

三尾 稔作成・監修

『沖守弘インド写真データベース』（国立民族学博物館データベース。館内公開用）

◎調査活動

・海外調査

2015年８月16日～８月31日―インド（現代インド地域研究推進経費による調査）

2015年10月18日～10月25日―オランダ、デンマーク、スウェーデン（地域研究プロジェクトの国際化に係る関係機関の調査研究）

2015年11月24日～11月29日―インド（2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査）

2016年１月17日～１月24日―ネパール（ネパールの地震災害に対するインドを本部とする援助活動に関する現地調査）

2016年２月14日～２月19日―アメリカ合衆国（カリフォルニア大学バークレー校において国際シンポジウムに参加）

2016年２月23日～２月28日―インド（デリー大学においてインド社会にかかるワークショップに参加及び現代インド地域研究プロジェクトの国際化に関する調査研究）

2016年３月９日～３月12日―大韓民国（地域研究プロジェクトの国際化に係る調査研究）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

１年生ゼミ担当

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点拠点代表

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

京都大学地域研究統合情報センター運営委員、日本南アジア学会理事、日本文化人類学会評議員

◎学会の開催

2015年５月30日～31日　国立民族学博物館主催：日本文化人類学会第49回研究大会、大阪国際交流センター（大会実行委員会・事務局長）

南 真木人［みなみ　まきと］――――――

2015 「移民大国ネパール」三尾 稔・杉本良男編『現代インド６　環流する文化と宗教』pp.122-126，東京：東京大学出版会。

［その他］

南 真木人

2015 「ネパールの仮面作り三〇年」『月刊みんぱく』39(6)：5，千里文化財団。

2015 「ネパール地震の被災地を訪ねて」『月刊みんぱく』39(11)：10-11，千里文化財団。

2015 「公開講演会「育児の人類学、介護の民俗学」の趣旨」『育児の人類学、介護の民俗学――フィールドワークによる再発見』（国立民族学博物館公開講演会抄録）p.3，大阪：国立民族学博物館。

2015 「出版物『現代ネパールの政治と社会――民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）南 真木人・石井 溥編，明石書店，2015年」『民博通信』151：22。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

［ビデオテーク］

南 真木人・寺田吉孝制作監修、井ノ本清和・安藤葉月制作、国立民族学博物館製作

2015 『ネパールの伝統音楽――パンチャイ・バージャ』（日本語・16分）

南 真木人・寺田吉孝制作監修、井ノ本清和・岡部 望・安藤葉月制作、国立民族学博物館製作

2015 『ネパールの婚礼』（研究用映像）（日本語・58分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究

2016年１月10日 「カースト社会の職人――手工芸、美術と手芸的なもの」『現代「手芸」文化に関する研究』東京国立近代美術館、東京

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2016年３月７日 「ネパール地震の社会的影響――社会再編かコミュニタス的高揚か」文部科学省科学研究費助成事業（特別研究促進費）「2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査」最終報告会、東京大学本郷キャンパス・情報学環・福武ホール、東京

・研究講演

2015年11月13日 討論進行　みんぱく公開講演会『育児の人類学、介護の民俗学――フィールドワークによる再発見』日経ホール、東京

2016年３月25日 総合司会　みんぱく公開講演会『ワールドアートの最前線――アイヌの文様とエチオピアの響き』オーバルホール、大阪

・研究公演

2015年４月18日 司会・解説『関連ワークショップ　ネワール仏教舞踊チャルヤーへのいざない』国立民族学博物館第５セミナー室

2015年４月19日 司会・解説「ネパールとネワール人」『研究公演　ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤー』国立民族学博物館第５セミナー室

・広報・社会連携活動

2015年６月14日 「インナータライにネパール近代化の縮図をみる――チトワン国立公園の開発を例に」第112回国立民族学博物館友の会東京講演会、モンベル渋谷店５Ｆサロン、東京

2015年７月25日 「Away ⟷ Home ――移り・住む、ということ」大阪大学文学研究科主催『劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェステイバル人材育成事業＜声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声＞芸術祭Ⅲ―― AIR』国立民族学博物館第３セミナー室

2015年11月28日 「2015年ネパール地震の概要」及び「激甚被災５郡の広域予備調査から見えてきたこと」青年海外協力隊ネパール会／同会ネパール震災復興支援チーム主催『ネパール地震現地報告――元青年海外協力隊員の視点から』関西大学千里山キャンパス・第２学舎２号館C301号室、大阪

2015年11月29日 民博ブースでの解説、大学共同利用機関協議会／大学共同利用機関法人機構長会議主催「大学共同利用機関シンポジウム2015」アキバ・スクエア、東京

2016年３月25日 「激動のネパール」『春の公民館講座　民族学への招待――躍動する東南・南アジア』芦屋市立公民館、兵庫

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年８月９日　「温故知新――ネパールの1982年と2013年の映像から」第393回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

［その他］

2015年４月28日～「ネパール地震2015ポータルサイト」現代インド地域研究 国立民族学博物館拠点ウェブサイト内

◎調査活動

・海外調査

2015年６月20日～６月27日―ネパール（ナワルパラシ郡ダーダジェリ行政村の地震被災状況調査）

2015年７月６日～７月17日―ネパール（ネパール地震広域被災状況調査）

2016月１月12日～１月25日―ネパール（ネパール関連ビデオテーク番組制作のための海外映像音響資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

指導教員（１人）、副指導教員（２人）

・大学院ゼミでの活動

テーマシリーズ講義「国際移民と移民の送り出しシステム」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（研究代表者：三尾 稔）研究分担者、科学研究費助成事業（特別研究促進費）「2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査」（研究代表者：矢田部龍一（愛媛大））研究分担者

河合洋尚［かわい　ひろなお］――助教

1977年生。**【学歴】**関西学院大学社会学部卒業（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科（修士課程）修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科（博士課程）修了（2009）**【職歴】**嘉応大学客家研究院講師（2008）、中山大学社会学・人類学学院助理研究員（講師）（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）**【学位】**博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）**【専攻・専門】**都市人類学、景観人類学、漢族研究**【所属学会】**日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、中国広東民族学会

【主要業績】

［単著］

河合洋尚

2013 『景観人類学の課題――中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

［編著］

河合洋尚編

2016 『景観人類学――身体・政治・マテリアリティ』東京：時潮社。

2013 『日本客家研究的視角与方法――百年的軌跡』北京：社会科学文献出版社。

【受賞歴】

2001　安田三郎賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1）中国漢族地域の都市景観形成にまつわる人類学的研究

2）環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌

3）景観人類学にまつわる先行研究の整理

・研究の目的、内容

1）景観人類学を理論的に整理するとともに、その視点と手法をもって中国華南地方の漢族社会における景観形成を解読する。

2）漢族のサブ・エスニック集団である客家に特に着目し、その国境を超えた文化的ネットワークを明らかにする。華南地方の客家に対する理解を深めるとともに、中国南方――東南アジア――台湾――日本の華人社会における客家とのつながりを考察する。

3）景観人類学、及びそれと関連する人工環境（built environment）の人類学的研究について検討をおこなう。

・成果

今年度は主に以下の５つの研究成果を提示した。

1）本館の共同研究「ランドスケープの人類学」の成果として、編著『景観人類学――身体・政治・マテリアリティ』（時潮社、2016年）を刊行した。本書では、景観人類学を理論的に整理するとともに、新たなアプローチを提示した。

2）中国の文化遺産にまつわる研究会の成果をまとめ、編著『中国地域の文化遺産――人類学の視点』（国立民族学博物館調査報告、2016年）として刊行した。本書は、有形と無形の文化遺産を扱ったが、そのうち有形文化遺産にまつわるアプローチには景観人類学の視点と方法を援用した。

3）世界の客家地域におけるネットワーク、およびそれに伴う文化変容、景観創造について比較検討した。その成果として、編著『全球化背景下的客家文化景観的創造――環南中国海的個案』（訳：グローバル時代における客家文化景観の創出――環南シナ海の事例）（暨南大学出版社、2015年）を出版した。序文では景観人類学の視点を紹介し、そこから中国南部、ベトナム、日本の客家における景観創出のメカニズムを考察した。

4）科学研究費助成事業（若手研究(B)）「漢族的特色の空間利用とエスニシティの再編――中・越隣接エリアの調査研究」の成果の一つとして、中国南部とベトナムにおいて客家文化を資源として景観を建設する動きを調査した。その成果の一部を、「越南客家的移居与文化景観建設」（ベトナム客家の移住と文化的景観の建設）として、プーアル大学で開催された国際シンポジウムにて中国語で発表した。

5）中華民国（台湾）政府の資金援助により、台湾光点計画を実施した。具体的には、３度の講演会、映画『一八九五』の放映・解説、台湾客家の工芸・音楽をめぐるイベントを通して、台湾および日本の客家をめぐる研究成果を一般にむけて公開した。なお、イベントの入場者数は延べ1000人以上であった。

◎出版物による業績

［編著］

夏遠鳴・河合洋尚編

2015 『全球化背景下客家文化景観的創造――環南中国海的個案』広州：暨南大学出版社。

河合洋尚・飯田卓編

2016 『中国地域の文化遺産――人類学の視点から』（国立民族学博物館調査報告 136）大阪：国立民族学博物館。

河合洋尚編

2016 『景観人類学――身体・政治・マテリアリティ』東京：時潮社。［民博共同研究］

［論文］

河合洋尚

2015 「景観人類学的動向和視野」（周星訳）『広西民族大学学報（哲学社会科学版）』CSSCI 期刊，37(4)：44-59。［査読有］

2015 「広西客家的認同感与文化景観――改革開放後的空間政策以及族群変動」夏遠鳴・河合洋尚編『全球化背景下客家文化景観的創造――環南中国海的個案』pp.104-121，広州：暨南大学出版社。

2016 「都市景観をめぐるポリティクス――中国における漢族文化の類型学と＜場所＞の再構築」河合洋尚編『景観人類学――身体・政治・マテリアリティ』pp.195-224，東京：時潮社。

2016 「『世界遺産』と景観再生――円形土楼と囲龍屋の比較研究」河合洋尚・飯田卓編『中国地域の文化遺産――人類学の視点から』（国立民族学博物館調査報告 136）pp.123-139。［査読有］

河合洋尚・呉雲霞

2015 「越南客家的神佛信仰与宗族宗教景観的創造」夏遠鳴・河合洋尚編『全球化背景下客家文化景観的創造――環南中国海的個案』pp.166-186，広州：暨南大学出版社。

河合洋尚・阿部朋恒

2016 「中国雲南省における＜僑郷空間＞の創出――紅河県を事例として」川口幸大・稲澤努編『僑郷――華僑のふるさとの表象と実像』pp.287-310, 滋賀：行路社。

［その他］

河合洋尚

2015 「囲龍屋での混住生活」『月刊みんぱく』39(10)：7-8。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

2016年２月13日 「趣旨説明」学術潮流サロン「公共人類学 × 公共社会学」国立民族学博物館

・共同研究会

2016年１月９日 「客家地域における歴史の資源化と景観形成――寧化石壁を中心として」『資源化される「歴史」――中国南部諸民族の分析から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム

2015年６月27日 「客家空間的拡張――中国南部客家認同感、文化、景観的建構」国際シンポジウム『激活客庄研討会』台湾・交通大学客家研究院

2015年10月21日 「越南客家的移居与文化景観建設」国際シンポジウム『湄公河紅河流域生態与文化多様性国際学術論壇』プーアル大学

2015年12月５日 「ベトナム北部「華人」の移動・アイデンティティ・文化表象――ディアスポリック空間の一考察」東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題研究会『インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間』東京外国語大学

2015年12月20日 「四川成都郊区客家認同感的興起和文化景観創造（四川省成都市における客家アイデンティティの覚醒と文化的景観の創造）」愛知大学国際問題研究所プロジェクト公開研究会『中国農村における都市化の現状と課題』愛知大学名古屋キャンパス

2016年２月21日 「『中国研究』と公共人類学――新たな可能性を考える」日本文化人類学会東アジア公共人類学懇談会シンポジウム『成果報告会――回顧と展望』国立民族学博物館

・研究講演

2015年４月22日 「日本客家的社会組織与文化活動――初歩報告」中央研究院民族学研究所特別連続講演、台北

2015年４月23日 「越南客家的移居、認同感、景観創造――多地点考察」中央研究院民族学研究所特別連続講演、台北

2015年11月７日 「移住がつくる客家の食」第448回友の会講演会、国立民族学博物館

2016年１月27日 「中国の世界遺産建築――円形土楼と囲龍屋」カレッジシアター「地球探求紀行」、あべのハルカス近鉄本店

・広報・社会連携活動

2015年９月23日 『一八九五』台湾文化光点計画、国立民族学博物館

2015年10月12日 『長江哀歌』みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年４月12日 「台湾客家――日本、アメリカへの移住」第379回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育

・**特別共同利用研究員の研究指導教員**

（対象学生数１）

◎上記以外の研究活動

台湾文化光点計画「台湾客家」代表者、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所共同研究員

◎社会活動・館外活動等

・**非常勤講師**

流通科学大学総合政策学部「民族文化誌」

・**学会活動・委員**

日本文化人類学会課題研究懇談会 代表・世話人、中国人類学民族学研究会客家専門委員会 副秘書長、『全球客家研究』（台湾）顧問、『華僑華人研究』編集委員、東アジア人類学研究会幹事

・**社会活動**

市民団体「みのお中国文化に親しむ会」（大阪府箕面市、代表：市村晃）への活動参与

華僑団体「関東崇正会（日本客家団体）」参事

菅瀬晶子［すがせ　あきこ］――助教

【学歴】東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程（アジア第三専攻）修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程（地域文化学専攻）修了（2006）**【職歴】**日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2009）、神奈川大学経営学部非常勤講師（2010）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2010）、共立女子大学国際学部非常勤講師（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（学術）（東京外国語大学大学院 1999）**【専攻・専門】**文化人類学・中東地域研究（パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏）**【所属学会】**日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

［単著］

菅瀬晶子

2012 『豊穣と共生への祈り――パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』（民族紛争の背景に関する地政学的研究19）大阪：大阪大学世界言語研究センター。

2010 『イスラームを知る６　新月の夜も十字架は輝く――中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。

2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒――その社会とアイデンティティ』広島：渓水社。

【受賞歴】

2006　長倉研究奨励賞、総研大研究賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・**研究課題**

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・**研究の目的、内容**

前年度に引き続き、東地中海アラブ諸国のうち、パレスチナ・イスラエルとレバノンにおける宗教的アイデンティティの表象にかかわる研究をおこなう。今年から数年間は、科学研究費助成事業（基盤研究（C））の「ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考」を中心に研究を進めるため、前年度で予備調査をおこなったアラブ・ナショナリスト二名、具体的にはナジーブ・ナッサールとグレゴリオス・ハッジャールの著作収集とデータベース作成、さらにはその精読と分析をおこなう。ことに、宗教的マイノリティであるキリスト教徒であるがゆえに彼らがなしえた功績と、逆にキリスト教徒であるがゆえになしえなか

った限界、パレスチナとレバノン間の越境性に注目する。

・成果

イスラエルおよび占領地パレスチナでおこなった調査によって、ナジーブ・ナッサールの著作を網羅したコレクションは存在せず、ハイファ大学やベツレヘム大学で断片的に保管されていることが判明した。このうち、ベツレヘム大学にはナッサールが主筆をつとめたカルメル誌の全号が保管されているが、機材の老朽化により閲覧が事実上不可能となっている。また、ハイファ大学のカルメル誌コレクションは不完全であり、マイクロフィルムの状態も良好ではない。これらの現地調査をとおして、データベース作成は急務であることを確認した。

ベツレヘム大学のコスタンディ・ショウマリー教授、アル・クドゥス大学のハーレド・イヤーン氏など、アラブ・ナショナリズム研究をおこなっている現地の研究者と意見交換をおこない、データベースの構想を練った。ショウマリー教授からは、これまでの研究データをデータベースに取り込む許可も得ることができた。また、カルメル誌全号が大英博物館に保存されており、コピーを購入することが可能であることもあきらかになった。ベルリン自由大学にもコレクションが存在し、ドイツに移住したキリスト教徒のアラブ・ナショナリストが、文壇や演劇界で高い評価を得ていたことも判明した。

現在イスラエル国内のアラブ人キリスト教徒に対する徴兵の是非が問われており、これにともないキリスト教徒の間では、パレスチナ人アイデンティティへの回帰の動きがみられる。これについての論文を二本執筆し、『ユダヤ・イスラエル研究』第29号と『現代宗教2016』に寄稿した。ほかに、イスラエルの対アラブ人市民政策の影響を受けて変化した、キリスト教徒の豚肉食の様態についてまとめた論考が、『国立民族学博物館研究報告』40巻4号に掲載された。

◎出版物による業績

［論文］

菅瀬晶子

2015「第6章　歴史的パレスチナにおける奇跡譚の今――聖者ハディル崇敬の事例」山中由里子編『＜驚異＞の文化史――中東とヨーロッパを中心に』pp.433-455，名古屋：名古屋大学出版会。［共同研究会「驚異譚にみる文化交流の諸相――中東・ヨーロッパを中心に（代表：山中由里子）の成果」］

2015「イスラエルのアラブ人市民の政治参加――キリスト教徒を中心に」『ユダヤ・イスラエル研究』29：23-34，東京：日本ユダヤ学会。

2015「パレスチナ・アラブ人アイデンティティの回復――イスラエルのキリスト教徒徴兵問題」『現代宗教2016』pp.77-98，東京：（公財）国際宗教研究所。

2015「パレスチナ自治区・ヨルダン川西岸地区とイスラエル・ガリラヤ地方における豚肉食の現在」『国立民族学博物館研究報告』40(4)：619-652，大阪：国立民族学博物館。［査読有］

［その他］

菅瀬晶子

2015「旅・いろいろ地球人　驚く⑥　色ガラスの家」『毎日新聞』4月23日夕刊。

2015「みんぱく世界の旅　アラブ世界①　国や地域ごとに多様性」『毎日小学生新聞』5月2日。

2015「みんぱく世界の旅　アラブ世界②　共存する二つの宗教」『毎日小学生新聞』5月9日。

2015「みんぱく世界の旅　アラブ世界③　宗教による食文化の違い」『毎日小学生新聞』5月16日。

2015「みんぱく世界の旅　アラブ世界④　三つの宗教の聖所『マカーム』」『毎日小学生新聞』5月23日。

2015「鬼の博物館とその背景」『月刊みんぱく』39(8)：9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2016年3月17日　「中東のキリスト教徒からみたイスラーム世界」宝塚国際理解ゼミナール、宝塚市立南口会館、兵庫

・広報・社会連携活動

2015年12月12日　映画で知る東南アジア『イロイロ　ぬくもりの記憶』みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ　新展示関連

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年11月29日　「聖者崇敬からみたシリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナ」第405回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・**海外調査**

2015年９月28日～10月５日―イタリア（立命館大学との学術協定による「食サービス分野における高度マネジメント人材育成」プログラム開発のための調査研究）

2016年２月15日～３月４日―イスラエル（アラブ・ナショナリズム文献の調査）

◎社会活動・館外活動

・**非常勤講師**

滋賀県立大学「国際関係論」、神戸女子大学「多文化共生論」

文化資源研究センター

野林厚志［のばやし　あつし］――――――

ついてフィールド調査を行うとともに、現地での調査で得られた盛装に関わる歴史的な背景と博物館に収蔵されてきた資料とを連結させる考察を行った。パイワン族の社会は首長および貴族の階層と平民の階層とに大別される階層社会を構成しており、盛装は首長・貴族層に与えられた特権的行為である。これは階層の存在を社会の中で顕在化させる秩序安定の文化的装置としても機能してきた。一方で、博物館に収蔵されてきた初期（19世紀末から20世紀初頭）の衣類資料や古写真にはこうした盛装においてもっとも象徴的に付加される文様が欠落している。これにはいくつかの理由が考えられるが、フィールド調査にもとづく解釈の一つには、首長・貴族層の権威は当時の資料収集にも影響をあたえたというものである。文様も含めた象徴財の外部への移出は避けられ、逆に新規性、希少性をもつ外部からの物質の流入は促進されていたという、権威性と物質性に関わる新たな解釈を引き出すことにつながった。これについてはヨーロッパ台湾学会での口頭発表（審査有）で成果の公開を行っている。なお、本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」による外部資金によって実施した。

◎出版物による業績

［論文］

Nobayashi, A.

2015 The Significance of Museum Materials in the Name Correction Movement of the Pingpu Peoples of Taiwan. In K. Hirai (ed.), *Social Movements and the Production of Knowledge* (Senri Ethnological Studies 91), pp.101–119. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

［その他］

野林厚志

2015 「祖先と自らを結びつける家畜：台湾客家の神豬」『BIOSTORY』23：84–89。

2015 「日本に潜在する台湾資料――内田勣コレクションを事例に」『第８回台日原住民族研究論壇』台北：国立政治大学原住民族研究中心，13p.（電子媒体）。［査読有］

2015 「（旅の読書室68）東北を聴く」『まほら』83：50–51，東京：旅の文化研究所。

2015 「台湾原住民族の工芸品に付された名前――創る主体と所有の主体」『月刊みんぱく』40(5)：16–17。

2015 「狩猟活動から遺されるもの」『FIELD PLUS』14：16–17，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌④　台湾の愛玉子」『京都新聞』６月３日。

2015 「旅・いろいろ地球人　ミュージアム③　知の空間」『毎日新聞』７月23日夕刊。

2015 「カレッジシアター地球探究紀行　台湾のイノシシ猟にみるアジア文化」『産経新聞』９月29日夕刊。

2015 「アジアの隣人・交流の深め方は　爆買いに見る文化」『朝日新聞』10月１日夕刊。

2015 「旅の読書室⑳　帰り道のない旅」『まほら』85：50–51，東京：旅の文化研究所。

2015 「旅・いろいろ地球人　肉食紀行①　先史時代の舌鼓」『毎日新聞』12月３日夕刊。

2015 「旅・いろいろ地球人　肉食紀行②　ハモンの肩代わり」『毎日新聞』12月10日夕刊。

2015 「旅・いろいろ地球人　肉食紀行③　台湾素食で肉を味わう」『毎日新聞』12月17日夕刊。

2015 「旅・いろいろ地球人　肉食紀行④　クリスマスの正餐」『毎日新聞』12月24日夕刊。

2015 「「情報遺産」を博物館が構築する意義――「核としての周縁」からの発信」『民博通信』151：12–13。

2016 「みんぱく食の民族誌　考える舌㉝　火による調理」『京都新聞』３月９日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

【機関研究】「文化遺産の人類学――クローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」

2015年10月13日　‘Cultural Property and Bureaucracy: A case of the local governance in Japan.’（Discussant）Minpaku International Forum “Thinking about Cultural Heritage Regimes: A Discussion with Prof. Regina Bendix.”（「文化財と官僚制――日本の地域ガバナンスの事例より」（討論参加者）みんぱく国際フォーラム「文化遺産レジームを考える――レギーナ・ベンディクス教授を迎えて」）

2016年３月13日　‘Copy or acquirements: authenticity within craft in the different domains of the intellectual property for indigenous crafts in Taiwan.’ International Symposium “Authentic Change in the Transmission of Intangible Cultural Heritage.”（「複製か倣いか――知的財産の異なる領域における台湾原住民族工芸の真正性」国際シンポジウム「無形文化遺産の

継承における『オーセンティックな変更・変容』」）

【基幹研究プロジェクト】フォーラム型情報ミュージアム「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

2016年１月24日　「プロジェクトの概要と博物館資料のデータベース化の国際的状況」国際ワークショップ「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」・フォーラム型情報ミュージアム「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

・機構の連携研究会での報告

2016年２月12日　「文明における食文化の布置（Constellation of food and foodways in the civilization）」国際ワークショップ「アジアの食と健康」人間文化研究機構・広領域連携型基幹研究「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」コープ・イン京都

・共同研究会での報告

2015年12月２日　「エスニシティを可視化する：台湾における民族認定と衣装の意匠」「表象のポリティックス――グローバル世界における先住民／少数者を焦点に」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年４月９日　‘Ethnicity of Indigenous Peoples Visualized in Material Culture.’ The 12th Annual Conference of the Europian Association of Taiwan Studies. Jagiellon University, Krakow, Poland.［査読有］

2015年９月６日　「日本の客家――歴史と現在」台湾文化光点計画講演会、国立民族学博物館

2015年10月16日　「台湾族群性興動物観」博物館交流工作坊「民族学興歴史学的交会」（「台湾のエスニシティと動物観」博物館交流ワークショップ「民族学と歴史学の交わり」）国立台湾歴史博物館、台南、台湾

2015年10月17日　「内田先生資料和日本学者的収集活動的意義」博物館交流工作坊「民族学興歴史学的交会」（「内田コレクションと日本人研究者の収集活動の意義」博物館交流ワークショップ「民族学と歴史学の交わり」）国立台湾歴史博物館、台南、台湾

2015年10月30日　「日本に潜在する台湾資料――内田勣コレクションを事例に」『第８回台日原住民族研究論壇』国立政治大学原住民族研究中心、台北、台湾

2015年12月２日　「ミドルレンジ・リサーチ――遺物と行動とをつなげる試み」NINS/IURIC Colloquium 2015「学術研究の将来」大学共同利用機関４法人、ヤマハリゾート「つま恋」、静岡

2015年12月12日　「台湾ヤミ族の名制と社会関係」ワークショップ「台湾原住民の姓名と身分登録――過去と現在をつなぐ文化・社会・制度」早稲田大学台湾研究所、東京

2015年12月26日　「エスノアーケロジー（スト）の可能性と限界」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド・サイエンス・コロキアム・ワークショップ、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

・広報・社会連携活動

2015年６月28日　「民族のモザイク：台湾」愛知県立旭丘高校講義、国立民族学博物館

2015年７月23日　「民博の展示」国際ソロプチミストアメリカ日本中央リジョンユースフォーラム2015 in大阪、国立民族学博物館

2016年９月23日　「一八九五」『台湾映画鑑賞会　映画から台湾を知る』みんぱく映画会

2015年９月30日　「台湾のイノシシ猟――日本のイノシシ猟と比較しながら」カレッジシアター「地球探究紀行」、あべのハルカス近鉄本店

2015年11月26日　「台湾の『食べる』フィールドワーク」獨協大学講義、獨協大学、東京

2015年12月19日　「民博の展示」追手門学院大学講義、国立民族学博物館

2016年１月８日　「フィールドワークをはじめよう」兵庫県立伊丹高校講義、兵庫県立伊丹高校、兵庫

2016年２月２日　「人種、民族、先住民族」大阪聖母女学院高校講義、国立民族学博物館

2016年２月６日　「波伝谷に生きる人びと」みんぱく映画会

2016年３月８日　「知恵泉　太陽の塔で日本を元気に！「岡本太郎 万博への道」」NHK・Eテレ

◎調査活動

・海外調査

2015年６月17日～６月20日―台湾（フォーラム型情報ミュージアム構築のための準備会）

2015年７月30日～８月13日―台湾（工芸生産とエスニシティの再構築との関係についての調査）

2015年10月３日～10月５日―台湾（映像におけるエスニシティ表象に関する調査）
2015年10月15日～10月18日―台湾（国立台湾歴史博物館との協定調印式及びワークショップに参加）
2015年10月24日～10月27日―ベトナム（世界博物館会議　民族博物館分科会に参加及び研究成果の報告）
2015年10月29日～11月３日―台湾（フォーラム型情報ミュージアム構築に関する民博収蔵の台湾資料についての情報収集ならびに研究発表）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）、副指導教員（２人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

問題解決志向型基幹研究プロジェクト形成に係る準備調査「文明社会における食の布置」（研究代表者）、総合研究大学院大学学融合推進センター戦略的共同研究「『料理』の環境文化史：生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト」（研究代表者）

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

順益台湾原住民博物館研究賛助金「台湾原住民族の文化、社会、歴史に関する総合的研究」（研究責任者）

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

奈良県文化財保存・活用会議委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールド・サイエンス・コロキアム運営委員

◎学会・シンポジウム等の開催

2016年１月24日　国立民族学博物館国際ワークショップ「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」（フォーラム型情報ミュージアム「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」）、国立民族学博物館。

園田直子［そのだ　なおこ］――教授

【学歴】パリ第１大学文学部卒（1980）、パリ第１大学科学技術修士課程修了（1982）、エコール・ド・ルーブル卒（1983）、パリ第１大学博士課程修了（1987）**【職歴】**フランス博物館科学研究所研究員（1987）、国立美術館絵画修復研究所（フランス）研究員（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第５研究部助手（1993）、国立民族学博物館第５研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館情報管理施設長（2009）、館長補佐（2010）**【学位】**Doctorat de 3ème cycle（Histoire de l'art）博士（美術史）（Université de Paris I, 1987）、Maîtrise des Sciences et Techniques（Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques）科学技術修士（Université de Paris I, 1982）**【専攻・専門】**保存科学**【所属学会】**ICOM（国際博物館会議）、IIC（国際文化財保存学会）、文化財保存修復学会、IIC-Japan（国際文化財保存学会日本支部）

【主要業績】

［編著］

園田直子編

2010　『紙と本の保存科学（第２版）』東京：岩田書院。

日髙真吾・園田直子編

2008　『博物館への挑戦――何がどこまでできたのか』千葉：三好企画。

［学位論文］

Sonoda, N.

1987　Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3ème cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2010　文化財保存修復学会第４回業績賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

大型民族資料を対象とした環境に「やさしい」殺虫処理法の使い分け

・研究の目的、内容

国立民族学博物館では、民族資料の防虫・殺虫処理法を選択するにあたっては、ひと、資料、環境に配慮してきた。2004年度以降は、海外からの新着資料には化学薬剤を用いた殺虫・殺カビ処理を行い、国内で加害された資料に関しては化学薬剤を用いない手法として二酸化炭素処理を中心に、高温処理や低温処理、あるいは低酸素濃度処理を必要に応じて併用している。この方針に沿いながら、今年度も2014年度に引き続き、船資料に代表される大型民族資料を対象に、いかに適切かつ効率的に殺虫処理法の使い分けができるかの検討を続ける。

・成果

多機能保管庫（2014年新設）に併設した処理室の大型密封バッグに収納できない大きさの資料、そして材質的に虫に加害されやすい資料を対象に、二酸化炭素処理以外の殺虫手法と、予防保存の見地にたった保管方法、これらの研究開発を進めた。

二酸化炭素処理法以外の殺虫手法の研究開発として、2014年度に引き続き太陽熱を利用した高温処理の実験をおこなった。結果、コンテナの養生等で保温効果を上げることで、先行研究から導き出した目標とする温度を、必要時間維持できる見通しがたった。ここまでの成果は、2016年度の文化財保存修復学会で報告する。

虫害にあいやすい材質の資料の保管法として、低酸素濃度環境下での保管システムの開発に着手した。具体的には窒素を、低流量で流しても高流量で流しても適切に調湿できるよう条件を検討し、2016年度の基礎実験に向けての準備を整えた。

◎出版物による業績

［論文］

園田直子・日髙真吾・末森 薫・奥村泰之・河村友佳子・橋本沙知・和髙智美

2016 「博物館におけるLED照明の現状――2015年夏　国立民族学博物館での実験データから」『国立民族学博物館研究報告』40(4)：513-545, 大阪：国立民族学博物館。［査読有］

Okayama, T., C. Kadoya, R. Kose, M. Seki, and N. Sonoda

2015 “A new technique for strengthening degraded paper – Application of cellulose nanofiber coating on a paper surface”, IADA（International Association of Book and Paper Conservators）XIII Congress, p.74.［査読有］

Tonoyama, M., M. Seki, N. Sonoda, and T. Okayama

2015 “Cellulose derivative nano-fibers –Applicability as strengthening agent for paper materials”, IADA（International Association of Book and Paper Conservators）XIII Congress, p.110.［査読有］

［その他］

園田直子

2015 「III. 人間文化資源の保存環境研究」久保正敏編『人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の須郷的研究成果報告書』pp.609-875, 大阪：遊文舎。

2015 「旅・いろいろ地球人　ミュージアム⑧　博物館学の国際研修」『毎日新聞』８月27日。

2015 「絵画をかたちづくるもの――絵具の科学」関西大学国際文化財・文化研究センター文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業『平成26年度文化財保存修復セミナー講義録』pp.269-284, 大阪：関西大学国際文化財・文化研究センター。

2015 博物館環境データ（生物生息調査、温度・湿度モニタリング）分析システム・スモールパッケージの開発」『IPMフォーラム「臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在』報告書』pp.38-47, 東京：独立行政法人文化財機構東京文化財研究所。

Sonoda, N.

2015 New Horizons for Asian Museums and Museology —— International Symposium February 21-22, 2015, *MINPAKU Anthropology Newsletter* 40：14-15, June 2015.

園田直子・日髙真吾・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明・和髙智美・河村友佳子・橋本沙知
2015 「国立民族学博物館に新設した多機能保管庫の運用事例――大型民族資料の保管を目指して」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』pp.94-95。［査読有］

日髙真吾・園田直子・末森 薫・和髙智美・幡野寛治・川越和四・多田隈卓司・佐治木悠子・小谷竜介・福田尚・河村友佳子・橋本沙知
2015 「東日本大震災の被災文化財一時保管場所の環境改善――気仙沼市旧月立中学校の事例から」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』pp.32-33。［査読有］

日髙真吾・園田直子・末森 薫・玉置春佳・西澤昌樹・飯島善明・和髙智美・河村友佳子・橋本沙知・川越和四
2015 「国立民族学博物館における大規模な殺虫処理」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』pp.96-97。［査読有］

末森 薫・園田直子・日髙真吾・高鳥浩介・吉田直人・川越和四・和髙智美・河村友佳子・橋本沙知
2015 「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法――カビに由来する蛍光反応の可視化を事例として」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』pp.104-105。［査読有］

殿山真央・関 正純・園田直子・築地球太・岡山隆之
2015 「カルボキシメチルセルロースを用いたエレクトロスピニング法による紙資料の劣化抑制処理」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』pp.180-181。［査読有］

門屋智恵美・岡山隆之・小瀬亮太・関 正純・園田直子
2015 「劣化紙へのセルロースナノファイバー・コーティング」『文化財保存修復学会第37回大会於京都研究発表要旨集』pp.184-185。［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年６月27日 「東日本大震災の被災文化財一時保管場所の環境改善――気仙沼市旧月立中学校の事例から」（日髙真吾・園田直子・末森 薫・和髙智美・幡野寛治・川越和四・多田隈卓司・佐治木悠子・小谷竜介・福田 尚・河村友佳子・橋本沙知、発表は日髙真吾）文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都

2015年６月27日 （ポスター発表）「国立民族学博物館に新設した多機能保管庫の運用事例――大型民族資料の保管を目指して」（園田直子・日髙真吾・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明・和髙智美・河村友佳子・橋本沙知）文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都

2015年６月27日 （ポスター発表）「国立民族学博物館における大規模な殺虫処理」（日髙真吾・園田直子・末森 薫・玉置春佳・西澤昌樹・飯島善明・和髙智美・河村友佳子・橋本沙知・川越和四）文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都

2015年６月27日 （ポスター発表）「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法――カビに由来する蛍光反応の可視化を事例として」（末森 薫・園田直子・日髙真吾・高鳥浩介・吉田直人・川越和四・和髙智美・河村友佳子・橋本沙知）文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都

2015年６月27日 （ポスター発表）「カルボキシメチルセルロースを用いたエレクトロスピニング法による紙資料の劣化抑制処理」（殿山真央・関 正純・園田直子・築地球太・岡山隆之）文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都

2015年６月27日 （ポスター発表）「劣化紙へのセルロースナノファイバー・コーティング」（門屋智恵美・岡山隆之・小瀬亮太・関 正純・園田直子）文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都

2015年７月13日 「国立民族学博物館と滋賀県立琵琶湖博物館のJICA博物館学コース――コース概要とコースに参加した東・中央アジアの博物館事情」文化遺産国際協力コンソーシアム 東・中央アジア分科会、東京国立博物館、東京

2015年７月16日 「博物館環境データ（生物生息調査、温度・湿度モニタリング）分析システム・スモールパッケージの開発」、東京文化財研究所フォーラム「臭化メチル全廃から10年：文化財のIPMの現在」、東京文化財研究所、東京

2015年10月13日 （ポスター発表）“Cellulose derivative nano-fibers –Applicability as Strengthening agent for paper materials”（Tonoyama, M., Seki, M., Sonoda, N., and Okayama, T.), IADA（International Association of Book and Paper Conservators）XIII Congress, Staatsbibliothek zu

Berlin, Germany.

2015年10月15日　“A new technique for strengthening degraded paper – Application of cellulose nanofiber coating on a paper surface”（Okayama, T., Kadoya, C., Kose, R., Seki, M., and Sonoda, N, 発表はOkayama, T.), IADA（International Association of Book and Paper Conservators）XIII Congress, Staatsbibliothek zu Berlin, Germany.

・研究講演

2015年７月４日　「特別講演：美術館・博物館の裏側」日本ジョンソン協会第48回大会、同志社大学今出川キャンパス、京都

・広報・社会連携活動

2015年７月25日　「資料の保存・取り扱いについて」MMP 2015年度新規メンバー養成研修、みんぱくミュージアムパートナーズ MMP、国立民族学博物館

2015年12月９日　「資料の保存と活用」文化資源プロジェクト2015年度年末年始展示イベント「さる」、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年２月14日　「窓から「見ることができる」収蔵庫」、第414回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

・大学院ゼミでの活動

2015年10月26日～28日　総合研究大学院大学　文化資源研究特講、国立民族学博物館。

2015年10月29日　一年生ゼミナール　テーマシリーズ「民族資料の保存と活用を考える」、国立民族学博物館。

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（B）（一般）（2015-2017））「セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（A）（一般）（2015-2019））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（一般）（2015-2017））「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（研究代表者：日髙真吾）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（一般）（2015-2017））「文化人類学における映像制作とアーカイブズ実践――活用と保存の新展開」（研究代表者：大森康宏）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、文化財 IPM コーディネータ委員会、舞鶴市ユネスコ世界記憶遺産有識者会議委員、知覧特攻平和会館保存討委員会委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学国際文化財・文化研究センター2015年度文化財保存修復セミナー「文化財各論・美術工芸品(I)絵画」

信田敏宏［のぶた　としひろ］―― 教授

1968年生。**【学歴】**東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1995）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）**【職歴】**東京都立大学人文学部社会学科助手（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2014）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2014）**【学位】**社会人類学博士（東京都立大学 2002）**【専攻・専門】**社会人類学、東南アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

［単著］

信田敏宏

2013　『ドリアン王国探訪記――マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書１）京都：臨川書店。

2004 『周縁を生きる人びと――オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。
Nobuta, T.
2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia.* SubangJaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006　第４回東南アジア史学会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

協力行動に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、助け合い、分かち合い、支援といった人間の協力行動について、人類史的観点からアプローチすることを目的とする。具体的には、マレーシアの先住民オラン・アスリに対する支援活動や、障がい者に対する支援活動等の具体的事例に注目しながら、文明化と人間、社会とマイノリティの関係性について考察を進める。

・成果

本年度は、東南アジア展示新構築の広報に関連した口頭発表・講演を行なったが、そのうち、オラン・アスリに関する口頭発表および講演を９回実施した。展示新構築に関連したテーマの発表であったが、内容的には、近年の動向、とりわけ、オラン・アスリに対する支援活動の状況について細かく紹介することができた。来年度以降、論文等にまとめる予定である。

障がい者に対する支援活動についての成果としては、本年度は、みんぱく公開講演会、市民向けの講演会、大学での講演会にて講演を行なった。いずれも昨年度に出版した著作に関連した内容で、主に障がい児の子育てに関連する内容であったが、反響が大きく、新たな執筆依頼もあり、来年度には、論文等にまとめる予定である。

いずれも、マイノリティの立場にある人びとへの支援に関するものであるが、ポジティブな面だけでなく、現実的に厳しい面も多々あることを、様々な反響やいただいた意見から学ぶことができたので、今後の研究に生かしていきたい。

◎出版物による業績

［その他］

信田敏宏

2015 「Ninja～マレーシア～」『みんぱく e-news』166号，４月１日。
2015 「表紙のことば　みんなの心をつなぐ『ホーホー』の詩」『日本ダウン症協会会報』（６月号）508：10–11。
2015 「乗り物編」『月刊みんぱく』39(6)：10–11。
2015 「東南アジアの１日」『月刊みんぱく』39(7)：2–3。
2015 「先住民の店」『月刊みんぱく』39(7)：9。
2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌⑪　マレーシアのハラールフード」『京都新聞』８月５日。
2016 「暑い地域に生きる人々――マレーシアの生活」『中学社会　地理的分野』pp.14–15，東京・大阪：日本文教出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2015年10月11日　「ハラールフードの研究――予備調査報告」人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」研究ユニット「文明社会における食の布置」準備全体会合、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年４月25日　「イスラーム化と先住民――みんぱく東南アジア展示新構築から考える」日本マレーシア学会関西地区例会、国立民族学博物館

・研究講演

2015年11月13日　「心に寄り添う子育てとは？――遊びと学びのすごろくワールド」みんぱく公開講演会『育児の人類学、介護の民俗学――フィールドワークによる再発見』、日経ホール、東京

2015年11月26日　特別講義「毎日がフィールドワーク――心に寄り添う我が家の子育て」奈良大学大学院社会学研究科（奈良大学）、奈良

2016年１月９日　「イスラーム化と向き合う先住民――新東南アジア展示から読みとく」第450回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

2016年３月４日　「マレーシアのイスラームと先住民」公民館講座『民族学への招待――躍動する東南・南アジア』、芦屋市立公民館、兵庫

・広報・社会連携活動

2015年４月22日　「異種混淆の世界・東南アジア――インド文明と中国文明のはざまで」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店

2015年５月１日　「多民族国家マレーシアと先住民」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年５月15日　「マレーシア先住民のイスラーム化」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2015年６月17日　「多様性を認める社会へ――マイノリティの視点から」2015年度社明研修会及び富田林地区保護司会と富田林地区更生保護女性会との交流会、富田林市消防本部、大阪

2015年11月18日　「『東南アジア』展示の新構築について」第４回来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座、国立民族学博物館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年12月６日　「東南アジアの１日」第389回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2015年９月７日～９月14日―マレーシア、シンガポール（マレーシアおよびシンガポールの食文化についての現地調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（１人）、副指導教員（１人）

・特別共同利用研究員の研究指導教員

（１人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業　人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」研究ユニット「文明社会における食の布置」準備プロジェクト分担者、（科学研究費助成事業（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」）（研究代表者：須藤健一）連携研究者

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

大阪大学「政治経済の人類学」

吉田憲司［よしだ　けんじ］――副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

上羽陽子［うえば　ようこ］――准教授

1974年生。**【学歴】**大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程前期修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程後期修了（2002）**【職歴】**大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）、総合研究大学院大学准教授併任（2014）**【学位】**博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）**【専攻・専門】**民族芸術学、染織研究、手工芸研究**【所属学会】**民族藝術

学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

［単著］

上羽陽子

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼――ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

［監修］

上羽陽子監修

2010 「NGO 商品を作らないという選択――インド西部ラバーリー社会における開発と社会変化」『地域研究』10(2)：204-223，京都：昭和堂。

2008 「インドの手工芸と振興活動――ラバーリー社会を事例に」デザイン史フォーラム編，藤田治彦責任編集『近代工芸運動とデザイン史』pp.292-299，京都：思文閣出版。

【受賞歴】

2010　意匠学会作品賞

2007　第 4 回木村重信民族藝術学会賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的、内容

急激に進む経済成長やグローバル化をうけ、現代インドの手仕事は急速に姿を変えている。本研究の目的は、現代インドにおける手工芸品のつくり手たちが、急速に変化する自然環境や社会環境にどのように対応しながら、伝統的な手工芸技術の生産形態を保持あるいは変容させつつ、現代的な要素をいかに選択しているかを明らかにすることである。

同時に、文化資源である現地の人びとのものづくりに関する知識を、どのように活用することができるか、さらに共同利用や社会還元への可能性を展示やワークショップなど実践的研究を通じて探る。

なお、本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」、2014～2017年度）および科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究（代表：中谷文美）」、2014～2017年度）の課題として実施する予定である。また、現在代表を務めている共同研究「現代『手芸』文化に関する研究」とも連動し、世界の手工芸文化における現代インドの特性についても考察を行う。

・成果

本年度は、科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」の研究活動の一部として、デリーおよびグジャラート州カッチ県において、女神儀礼に関する染織品の市場および製作現場の現状調査を実施した。カッチ県は2001年の大地震によって被災した地域であり、その影響によって衣装や家屋など多くの物質文化が変容した。本調査において、女神儀礼における物質文化の変容に焦点をあてた結果、それまで奉納されていた女神儀礼用布がタイル装飾に置き換えられ、対象社会において刺繍布を女神に奉納するといった既存の意味づけや価値づけが変容していることが明らかとなり、これに伴って他の刺繍布の役割や女神儀礼自体にも変容がおきているかといった新たな検討課題が浮かび上がった。

また、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究（代表：中谷文美）」の研究活動の一部として、アッサムにおける野蚕飼養の現状に関する調査を実施した。近年、インド国内外で野蚕織布がファッション素材として高額で流通している。調査の結果、特に製織において、多くの織り手がローカルな伝統的織技術を活用して、都市部および外向けの野蚕糸織布の生産に従事していることが明らかとなった。また、そのような状況を生みだしている背景には、個人経営者（デザイナー兼仲買人）や NGO などの影響が大きいことが明らかとなり、かれらから今後、聞き取り調査等の協力をおこなう同意を得ることができた。現在、得られた資料を整理しており、できるかぎり早期に論文として刊行する予定である。

◎出版物による業績

［単著］

上羽陽子

2015 『インド染織の現場――つくり手たちに学ぶ』京都：臨川書店。

［論文］

上羽陽子

2015 「伝統染織」三尾 稔・杉本良男編『（現代インド６） 還流する文化と宗教』pp.214-217，東京：東京大学出版会。

［その他］

上羽陽子

2015 「ブルターニュの春風（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.15）」『フラワーデザインライフ』567：10。

2015 「豊穣を描きだす（世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.16）」『フラワーデザインライフ』568：10。

2015 「染織文化の今」『月刊みんぱく』39(6)：6-7。

2015 「技術から知る南アジア」『月刊みんぱく』39(6)：6-7。

2015 「旅・いろいろ地球人 踊る④ 流行を身にまとう」『毎日新聞』６月４日夕刊。

2015 「色で楽しむ（世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々file.17）」『フラワーデザインライフ』569：10。

2015 「省略の美（世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.18）」『フラワーデザインライフ』570：10。

2015 「調和がうみだす彩り（世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.19）」『フラワーデザインライフ』572：10。

2015 「輝きとともに（世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.20）」『フラワーデザインライフ』573：10。

2015 「生命の樹（世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.21）」『フラワーデザインライフ』574：10。

2015 「アンデスを織りなす（世界の民族衣装 手仕事から生まれる花々 file.22）」『フラワーデザインライフ』575：10。

2016 「みんぱく食の民族誌 考える舌㉘ ラクダの『ミルク』」『京都新聞』１月20日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2016年１月30日 「他者表象に便乗しないという選択――インド西部のラバーリーを事例に」『表象のポリティクス――グローバル世界における先住民／少数者を焦点に』国立民族学博物館

2015年７月18日 「刺繍は手芸か工芸か？――手仕事をめぐる他者の視点」『現代「手芸」文化に関する研究』『第４回共同研究会』国立民族学博物館

2015年11月22日 「染織文化を伝える――その技術と造形的特徴（セッションＢ 布（とその作り手）を伝える）」（コメント）『2015年度アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究 科学研究費助成事業（基盤(A)）』ワークショップ（代表：中谷文美）』倉敷物語館

2016年11月22日 「工芸資源の消失と内在的手仕事の喪失による『場』の変化」（コメント）公開シンポジウム『手しごとと復興』（主催：南山大学人類学研究所）南山大学人類学研究所１階会議室

・講演

2015年６月17日 「インドの衣装と染織文化」神戸大学発達科学部ファッション文化論(2) 神戸大学

2015年６月20日 「インド刺繍布がうみだす世界」第445回みんぱくゼミナール

2015年７月４日 「色と光が放つイメージ」企画展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」関連イベント（主催：郡山市立美術館、共催：国立民族学博物館友の会）郡山市立美術館多目的スタジオ

2016年２月27日 「インド刺繍布の造形力」、「南アジアがうみだす装飾美」園田・みんぱく連続講座――「世界の造形に見る“美”の文化」園田学園女子大学

・広報・社会連携活動

2015年６月３日　「インドの縫い目から――作り手たちの知恵と工夫」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――世界の『民芸』」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館１F

2015年６月14日　「みんぱく本館展示ツアー　南アジアの染織文化」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――世界の『民芸』」、CAFE Lab. 国立民族学博物館本館展示場

2015年11月11日　「インド染織文化の今」カレッジシアター「地球探求紀行」あべのハルカス近鉄本店

2015年12月16日　「インドの野蚕――その特徴と魅力」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――世界の天然素材」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館１F

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年５月10日　「染織の伝統と現代――新しくなった南アジア展示場」第382回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・ワークショップ・単独企画

上羽陽子

2015年６月２日、９日、23日　「模写実践と異文化理解――インド西部の刺繍布を読みとる」（主催：川島テキスタイルスクール）川島テキスタイルスクール［依頼有］

2015年６月24日　「手織り絨毯の織技術について」（主催：株式会社絨毯ギャラリー）クロス・ウェーブ梅田［依頼有］

2015年７月11日　「インドのキターブチャルカで糸紡ぎ」（主催：川島テキスタイルスクール）川島テキスタイルスクール［依頼有］

・ワークショップ・共同企画

上羽陽子

2015年６月～８月　毎週木、土曜日　「はじめの一歩　やってみようミラー刺繍」躍動する南アジア――春から秋のみんぱくフォーラム2015関連ワークショップ、（講師：チーム・プラカーシュ（MMP）、企画：企画課）国立民族学博物館本館展示場、エントランスホール、

2015年８月１日　夏休みこどもワークショップ「キラキラ　カラフル　インド布――フィールドワークに挑戦！」躍動する南アジア――春から秋のみんぱくフォーラム2015関連ワークショップ（ファシリテーター：喜多川真由美・国立民族学博物館技術補佐員）国立民族学博物館本館展示場、ナビひろば

上羽陽子、三尾 稔

2015年５月24日、６月７日、６月28日　「忠実再現！インド西部の刺繍布――展示資料の模写に挑戦」躍動する南アジア――春から秋のみんぱくフォーラム2015関連ワークショップ（主催：国立民族学博物館、企画担当：企画課）国立民族学博物館本館展示場、ナビひろば

・展示活動

2016　年末年始展示イベント「さる」プロジェクトチーム・リーダー

◎調査活動

・海外調査

2015年12月18日～2016年１月５日―インド（現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究）

2016年２月15日～２月17日―インド（現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究）

2016年２月18日～２月26日―インド（アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究）

2016年３月３日～３月15日―ロンドン（現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

民族藝術学会理事（研究例会担当）、意匠学会国際交流委員会委員

・非常勤講師

京都精華大学「文様史１」、「クラフト１」、大阪芸術大学「織実習Ⅰ-２（パイル織）」

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」（研究代表者：中谷文美）研究分担者

林 勲男［はやし　いさお］――――――

林編『災害文化の継承と創造』所収の論文「災害にかかわる在来の知と文化」でも言及している。

◎出版物による業績

［編著］

林 勲男編

2015 『アジア太平洋諸国の災害復興――人道支援・集落移転・防災と文化』東京：明石書店。

［共編著］

林 勲男・橋本裕之編著

2016 『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店。

［論文］

林 勲男

2015 「集落移転と土地権――1998年アイタペ津波災害被災地の課題」林編著『アジア太平洋諸国の災害復興――人道支援・集落移転・防災と文化』pp.84-116，東京：明石書店。

2016 「災害にかかわる在来の知と文化」林 勲男・橋本裕之編著『災害文化の継承と創造』pp.14-28，京都：臨川書店。

［その他］

林 勲男

2015 「みんぱく世界の旅　パプアニューギニア①　上級生がこぐカヌーで通学」『毎日小学生新聞』６月27日。

2015 「みんぱく世界の旅　パプアニューギニア②　火山と共存するラバウルの人々」『毎日小学生新聞』７月４日。

2015 「みんぱく世界の旅　パプアニューギニア③　噴煙上げ続けるタブルブル山」『毎日小学生新聞』７月11日。

2015 「みんぱく世界の旅　パプアニューギニア④　ベダムニ族男子の成人儀礼」『毎日小学生新聞』７月18日。

2015 「宣教師による南太平洋コレクションの情報を集める」『民博通信』150：12-13。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2016年１月29日 「オセアニアの都市」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

2016年２月５日 「パプアニューギニアの地方集落での暮らし」大阪府高齢者大学校「世界の文化に親しむ科」

◎調査活動

・国内調査

2015年４月24日～４月26日―三重県津市（昭和東南海地震・津波に関する調査）

2015年５月３日～５月７日―岩手県大船渡市・南三陸町（科学研究費助成事業（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」に係わる調査）

2015年８月13日～８月16日―岩手県大船渡市・釜石市（科学研究費助成事業（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」に係わる調査）

2015年８月28日～８月30日―宮城県石巻市・仙台市（科学研究費助成事業（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」に係わる調査）

2015年９月～12月―宮城県南三陸町・大崎市・仙台市（害遺構・モニュメントに関する調査）

2015年12月15日～12月16日―新潟県南魚沼市（パプアニューギニア民族資料に関する調査）

2015年12月26日―宮城県仙台市（科学研究費助成事業（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」に係わる調査）

2016年２月13日～２月15日―岩手県宮古市（黒森神楽の巡業に関する調査）

2016年３月５日～３月７日―福島県いわき市（じゃんがら念仏踊りに関する調査）

2016年３月23日～３月25日―宮城県石巻市・仙台市（震災復興に係わる市民活動等に関する調査）

・海外調査

2016年12月１日～12月13日―イギリス（ジョージ・ブラウン・コレクションにかかる調査研究）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表：京都大学・林春男）研究分担者、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業「効果的・持続的な災害伝承を目的にした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」（研究代表者：東北大学・佐藤翔輔）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

内閣府「災害遺構の収集及び活用に関する検討委員会」委員

日髙真吾［ひだか　しんご］――――――

めの調査及び意見交換をおこなうこととして、金沢美術工芸大学や京都造形芸術大学、北海道の地域博物館、台北芸術大学、国立台湾歴史博物館を始めとする各機関との協力関係の推進や実質的な協力者となる研究者との意見交換をおこない、2016年度以降の本格的に実施する本プロジェクトの基盤を整えることができた

なお、本研究を進めるにあたっては、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる事前調査」（代表：日髙真吾）および、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（代表：日髙真吾 15H02954）の研究プロジェクトと関連付けながら実施した。

◎出版物による業績

［論文］

日髙真吾

2015 「生活の記憶を取り戻す――文化財レスキューの現場から」木部暢子編『災害に学ぶ――文化資源保全と再生』pp.175-199，東京：勉誠出版。

2015 「大規模災害における文化財レスキュー事業に関する一考察――東日本大震災の活動から振り返る」『国立民族学博物館研究報告』40(1)：1-52，大阪：国立民族学博物館。［査読有］

2015 「中越地震から10年――公開シンポジウム「災害と文化財レスキュー」に参加して」日髙真吾・中村信也米村祥央・加藤和歳・田井東浩平・間渕創・内田俊秀『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.336-337。

2015 「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法――カビに由来する蛍光反応可視化を事例として」末森 薫・園田直子・日髙真吾・高鳥浩介（カビ相談センター）・吉田直人（東京文化財研究所）・川越和四（環境文化創造研究所）・和髙智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.104-105。

2015 「国立民族学博物館における大規模な殺虫処理」日髙真吾・園田直子・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明（国立民族学博物館）・和髙智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）・川越和四（環境文化創造研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.96-97。

2015 「国立民族学博物館に新設した多機能保管庫の運用事例――大型民俗資料の保管を目指して」園田直子・日髙真吾・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明（国立民族学博物館）・和髙智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.94-95。

2015 「東日本大震災の被災文化財の一時保管場所の環境改善――気仙沼市旧月立中学校の事例から」日髙真吾・園田直子・末森 薫（国立民族学博物館）・和髙智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）・多田隈卓司・左治木悠子（金剛）・川越和四（環境文化創造研究所）・福田尚（イカリ消毒）・小谷竜介（東北歴史博物館）・幡野寛治（気仙沼市教育委員会）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.32-33。

2015 「北斗遺跡出土の織物・繊維遺物に関する一考察」日髙真吾・吉本 忍・佐々木史郎（国立民族学博物館）・右代啓視（北海道博物館）・石川 朗（釧路市埋蔵文化財調査センター）・和髙智美（合同会社文化創造巧芸）『日本文化財科学会』pp.160-161。

2015 「東日本大震災で被災した民俗文化財の脱塩処理に関する一考察」『民具研究』152：99-114、日本民具学会［査読有］

2015 「IPM 実現のための予算獲得について――国立民族学博物館の事例から」『臭化メチル全廃から10年：文化財の IPM の現在』報告書 pp.48-54，東京文化財研究所。

2016 「文化財等レスキュー事業の意義を考える――被災文化財から文化財へ」橋本裕之・林 勲男編『災害文化の継承と創造』pp.238-250，京都：臨川書店。

2016 「民博の資料管理技術をエジプトで活用する」『文化財保存修復学会誌』59：48-54，文化財保存修復学会。

［その他］

日髙真吾

2015 「『ライオンキング』と人形浄瑠璃」『ライオンキングプログラム』pp.30-31。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年４月17日　「東日本大震災における文化財レスキュー」国際学術大会『災難及び産業安全に関する東アジア安全共同体摸索』高麗大学、ソウル特別市、大韓民国

2015年６月24日　「漆を使う――漆工技術の継承」カレッジシアター「地球探究紀行」アベノハルカス近鉄本店

2015年６月27日～６月28日　中越地震から10年――公開シンポジウム「災害と文化財レスキュー」に参加して」日髙真吾・中村信也・米村祥央・加藤和歳・田井東浩平・間 渕創・内田俊秀『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』京都工芸繊維大学、京都

2015年６月27日　「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法――カビに由来する蛍光反応可視化を事例として」末森 薫・園田直子・日髙真吾・高鳥浩介（カビ相談センター）・吉田直人（東京文化財研究所）・川越和四（環境文化創造研究所）・和髙智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』京都工芸繊維大学、京都

2015年６月27日　「国立民族学博物館における大規模な殺虫処理」日髙真吾・園田直子・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明（国立民族学博物館）・和髙智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）・川越和四（環境文化創造研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』京都工芸繊維大学、京都

2015年６月27日　「国立民族学博物館に新設した多機能保管庫の運用事例――大型民俗資料の保管を目指して」園田直子・日髙真吾・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明（国立民族学博物館）・和髙智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』京都工芸繊維大学、京都

2015年６月27日　「東日本大震災の被災文化財の一時保管場所の環境改善――気仙沼市旧月立中学校の事例から」日髙真吾・園田直子・末森 薫（国立民族学博物館）・和髙智美（文化創造巧芸）・河村友佳子・橋本沙知（元興寺文化財研究所）・多田隈卓司・左治木悠子（金剛）・川越和四（環境文化創造研究所）・福田 尚（イカリ消毒）・小谷竜介（東北歴史博物館）・幡野寛治（気仙沼市教育委員会）『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』京都工芸繊維大学、京都

2015年７月11日～７月12日　「北斗遺跡出土の織物・繊維遺物に関する一考察」日髙真吾・吉本 忍・佐々木史郎（国立民族学博物館）・右代啓視（北海道博物館）・石川 朗（釧路市埋蔵文化財調査センター）・和髙智美（合同会社文化創造巧芸）『日本文化財科学会』東京学芸大学、東京

2015年７月16日　「IPM 実現のための予算獲得について――国立民族学博物館の事例から」フォーラム『臭化メチル全廃から10年：文化財の IPM の現在』東京文化財研究所、東京

2015年９月10日　「如何展示日本的民俗生活：國立民族學博物館的實踐」公開ワークショップ『生活的展示――生活物件與生活方式』台湾国立博物館

2015年11月18日　「国立民族学博物館の資料管理活動について」文化財等防災ネットワーク研修、奈良文化財研究所、奈良

2015年11月18日　「文化財等レスキュ――後の支援活動について：国立民族学博物館の活動を中心に」文化財等防災ネットワーク研修、奈良文化財研究所、奈良

2015年11月18日　「文化財等レスキュー事業について：国立民族学博物館の活動を中心に」文化財等防災ネットワーク研修　奈良文化財研究所

2016年１月30日　「アンデス文明形成期の金属製品の製作に関する一考察――蛍光 X 線分析の結果から」日髙真吾・橋本沙知　公開シンポジウム『アンデス文明初期の神殿と権力生成』キャンパス・イノベーションセンター東京、東京

2016年３月５日　「一時保管場所の現状――気仙沼市旧月立中学校の事例」文化財防災ネットワーク推進事業・文化財保存修復学会例会『大規模災害時における被災資料の一時保管施設について考える』フクラシア東京、東京

2016年３月27日　「民具の保存処理と災害時における応急措置について」第66回日本木材学会企画講演、名古屋、愛知

・広報・社会連携活動

2015年６月24日　「漆をつかう――漆工技術の継承」カレッジシアター「地球探究紀行」あべのアルカス近鉄本店

2015年10月28日　「日本の漆器、世界の漆器」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――世界の天然素材」、CAFE Lab. グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル１F
2016年２月６日　「波伝谷に生きる人びと」みんぱく映画会

・研究会・シンポジウム・学会など

2015年２月21日～２月22日　国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」

◎調査活動

・海外調査

2015年４月16日～４月18日―大韓民国（国際学術大会『災害を通じてみる「東アジア安全共同体」の模索』参加及び、発表）
2015年８月30日～９月７日―ロシア（ロシアにおけるアイヌ等北方民族関連の衣類資料の調査）
2015年９月９日～９月14日―台湾（「生活文化と博物館」の研究に向けての学術協力）
2015年10月15日～10月19日―台湾（台湾における地域文化に関する調査研究）

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「彩色塗装のある歴史的木造文化財建造物の加湿温風処理による虫害処理方法の検討」（代表：木川りか 15H01778）研究分担者、基幹研究「地域における歴史文化研究拠点の構築」（代表：小池淳一）研究メンバー、国立歴史民俗博物館共同研究「東日本大震災被災地域における生活文化研究の復興と博物館型研究統合」（代表：川村清志）共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化財保存修復学会理事、文化財保存修復学会第37回大会実行委員、文化財保存修復学会第37回大会プログラム作成委員長、文化財虫菌害研究所総合的防除対策検討委員、九州国立博物館「みんなでまもる文化財みんなを守るミュージアム」事業協力委員、文化遺産防災ネットワーク有識者委員、展示学事典編集委員

・他大学の客員、非常勤講師

関西学院大学非常勤講師（集中講義）

福岡正太［ふくおか　しょうた］――――――

・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、学術的な記録および分析の手段として、音楽芸能研究において一定の役割を果たしてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの影響を抜きにして論じることはできない。一方、20世紀を通じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、手軽なビデオ撮影機器の普及により、音楽芸能の伝承や創造、研究の過程において、関係者が自ら映像を作成して発表するようになり、映像は音楽芸能にかかわる活動に不可欠なものとして組み込まれつつある。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、①20世紀前半から半ばの日本とインドネシアにおいて、レコードやラジオなどのメディアの登場が音楽にもたらした変化を明らかにする研究に取り組む。②鹿児島県硫黄島および徳之島の芸能を例として、映像による芸能の民族誌的記録の作成および活用のあり方を探る。特に、映像を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像による民族誌の作成が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。③東南アジアの音楽芸能、特にゴングにかかわる文化に焦点をあて、映像を用いて地域間の比較研究を進める。また、①～③を通じて、映像音響資料のアーカイブ化と公開における諸課題についても検討したい。

・成果

①1930年代半ばインドネシアにおいて本格化したラジオ放送における西ジャワのスンダ音楽について、ラジオ雑誌等の記述に基づき検討し、共同研究会「東南アジアのポピュラーカルチャー――アイデンティティ、国家、グローバル化」（代表者：福岡まどか）にて発表した。従来、録音産業の登場により非西洋世界の音楽において、スター音楽家の誕生、娯楽への傾斜、レコードの時間制限によるより短い作曲されたジャンルの増大すること等が指摘されてきたが、ほぼ同様の現象が西ジャワにおいても見られた。②徳之島の芸能の映像記録を主なデータとするフォーラム型情報ミュージアムの構築を試みた。本格的な稼働に向けて、民博撮影、他の研究者による撮影、そして住民撮影のビデオの比較視聴の会、学校におけるシステムの利用への調整等を進めた。撮影年代の異なるビデオは芸能や集落の変化を反映しており、歴史の記録としても重要であることが住民にも実感された。また、集落の芸能の伝承における学校の役割が高くなっており、集落の年長者からの手ほどきに加えて、映像記録資料等への期待も高まっていることが明らかになった。③科学研究費助成事業による研究「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」の成果に基づき、東洋音楽学会大会においてパネルディスカッション「東南アジア諸地域のゴング文化の相互関連」を開催した。島嶼部におけるガムランの需要の高まりは鉄ゴング製造の広がりをもたらした。恐らくそれに起因してジャワ島中部において製造される青銅ゴングの流通にも変化が起こり、バリ島への移出の減少がみられるようになっていることなどが明らかになった。

◎出版物による業績

［論文］

福岡正太

2016 「無形文化遺産としての音楽」徳丸吉彦監修、増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.74-84，東京：音楽之友社。

2016 「資料としての楽器」徳丸吉彦監修、増野亜子編『民族音楽学12の視点』pp.85-87，東京：音楽之友社。

2016 Audiovisual Ethnography of Performing Arts as Human Cultural Resources. In Y. Terada (ed.) *An Audiovisual Exploration of Philippine Music: The Historical Contribution of Robert Garfias* (Senri Ethnological Reports 133), pp.99-104. Osaka: National Museum of Ethnology.

［その他］

福岡正太

2015 「太鼓編」『月刊みんぱく』39(4)：10-11。

2015 「ヒジャーブがあらわす女性の夢」『月刊みんぱく』39(7)：6-7。

2015 「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」『民博通信』149：12-13。

2015 「『ライオンキング』とインドネシアの人形芝居」劇団四季編集部編『ライオンキング公演プログラム』pp.32-33。

2015 「盗まれた仮面――インドネシア」『みんぱく e-news』173号，11月1日。（http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/173）。

2016 「第266回定例研究会報告」『(一社) 東洋音楽学会西日本支部だより』82：2–5。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

［東南アジア］

福岡正太監修

2015 「木彫り人形」日本語、英語、韓国語、中国語

2015 「影絵人形」（スバエク・トム）日本語、英語、韓国語、中国語

2015 「影絵人形」（ワヤン・クリット・シアム）日本語、英語、韓国語、中国語

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年10月13日 「コメント」国際フォーラム「文化遺産レジームを考える――レギーナ・ベンディクス教授を迎えて」、国立民族学博物館第４セミナー室

2016年３月13日 「コメント」国際シンポジウム「無形文化遺産の継承における『オーセンティックな変更・変容』」、国立民族学博物館第４セミナー室

・共同研究会での報告

2015年７月11日 「ファッション・デザイナー――インドネシア女性の生き方のモデルとして」『東南アジアのポピュラーカルチャー――アイデンティティ、国家、グローバル化』国立民族学博物館大演習室

2016年１月８日 「スンダ音楽の『モダン』の始まり――ラジオと伝統音楽」『東南アジアのポピュラーカルチャー――アイデンティティ、国家、グローバル化』国立民族学博物館第３演習室

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年８月16日 「フォーラム型情報ミュージアムによる映像記録の公開――徳之島の芸能を例に」、シンポジウム『民間文芸のデジタル・アーカイブ化と活用――歌や語りの継承に向けて』奄美沖縄民間文芸学会鹿児島大会、鹿児島県歴史資料センター黎明館講堂、鹿児島

2015年11月１日 「趣旨説明」、パネルディスカッション『東南アジア諸地域のゴング文化の相互関連』東洋音楽学会第66回大会、東京芸術大学、東京

2015年11月28日 「フォーラム型情報ミュージアム『徳之島の歌と踊り』」アーカイブ研究会、沖縄県立芸術大学附属研究所

・みんぱくゼミナール

2016年１月16日 「東南アジアの人形芝居」第452回みんぱくゼミナール

・研究講演

2015年11月11日 「越境する身体知――ガムランの伝承を例に」、若手研究者奨励セミナー「伝承と身体をめぐる文化人類学」、国立民族学博物館第６セミナー室

2016年２月15日 「ジャワ島のガムラン――おしりで合わせるリズム」、文化サロン話題探訪、伊丹アイフォニックホール、兵庫

・研究公演

2015年12月６日 「息づく仮面――バリ島の仮面舞踊劇トペンと音楽」企画・司会

・広報・社会連携活動

2015年６月21日 「音楽の祭日2015 in みんぱく」国立民族学博物館。

2015年12月５日 研究公演関連ワークショップ「仮面を生かす踊り」企画、国立民族学博物館講堂

2016年１月10日 みんぱく映画会新展示関連「映画で知る東南アジア『虹の兵士たち』」企画・司会

2016年１月24日 みんぱく映画会新展示関連「映画で知る東南アジア『消えた画――クメール・ルージュの真実』」企画・司会

2016年２月13日～２月28日 みんぱくワークショップ「東南アジアの仮面と人形」全６回、企画・司会、国立民族学博物館第５セミナー室

・みんぱくウィークエンド・サロン

2016年１月24日 「東南アジアの人形芝居――撮影裏話」第411回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2015年９月26日～９月28日―徳之島（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」の一環として映像取材および映像公開打ち合わせ）

2016年２月22日～２月24日―徳之島（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」の一環として映像取材および映像公開打ち合わせ）

・海外調査

2016年１月26日～２月４日―インドネシア（ゴング文化にかかる調査研究）

◎大学院教育（館内専任教員のみ）

副指導教員（１名）

・大学院ゼミでの活動

2015年10月15日　「おしりで合わせるリズム――ガムランにおける時間の組織化」テーマシリーズ

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

アジア太平洋無形文化遺産研究センター助言組織委員

・非常勤講師

大谷大学「民族誌講義」「社会学研究」、広島市立大学「音楽人類学Ⅰ」「音楽人類学Ⅱ」（集中講義）

山本泰則［やまもと　やすのり］――――――

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

機械学習をもちいた民族学情報の検索

・研究の目的、内容

国立民族学博物館では、所蔵するさまざまな民族資料情報のデータベースを作成して公開しているが、必ずしも十分な情報が付与されているわけではない。特に標本資料に関するものは、同種の資料が多数ある、同じ資料に異なる名称が与えられているなど、文字列の単純な照合による従来の検索方法で求める情報を得るには限界がある。

本研究は、最近情報科学の分野で進展がめざましい機械学習の技術を応用して、データベースから民族学研究に有用な情報を抽出しようとするものである。多量のデータの統計処理やクラスタリングなどの手法により、データの構造を概観して全容を把握したり、不完全な情報から有用な情報を抽出、あるいは誤入力された情報を発見する可能性について研究をおこなう。

・成果

今年度も機械学習研究の現状のサーベイを進めるとともに、民博のもつ情報への応用の可能性について検討をおこなった。またこれと関連して、民博のデータベースのデータに対して、以下を実施した。

原則として命名が担当者に任されている民博の標本資料名を形態素解析することにより、命名の特性を分析した。この結果は、現在民博で進めようとしている標本資料データベースの標本資料名の英語化にも貢献できると考える。

また、「バッドデータハンドブック」などの文献により、規格外のデータが生じる原因やそのパタンに関する知見を得て、2016年３月に更新した図書システムから、人間文化研究機構の「統合検索システム」のために抽出したデータを変換処理するプログラムに反映させた。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2015年６月30日　『民博通信』no.149、国立民族学博物館［編集委員］
2015年９月30日　『民博通信』no.150、国立民族学博物館［編集委員］
2015年12月24日　『民博通信』no.151、国立民族学博物館［編集委員］
2016年３月30日　『民博通信』no.152、国立民族学博物館［編集委員］

川瀬 慈［かわせ　いつし］――助教

1977年生。**【学歴】**立命館大学文学部卒（2001）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）**【職歴】**日本学術振興会PD（2007）、マンチェスター大学グラナダ映像人類学センター研究員（2010）、ベルギーSoundImageCulture客員講師（2011）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2012）、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所Hiob Ludolf客員教授（2013）、ブレーメン大学人類学・文化調査学部客員教授（2014）**【学位】**博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 2007）**【専攻・専門】**アフリカ研究、映像人類学、民族誌映画制作**【所属学会】**英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

［共編］

鈴木裕之・川瀬 慈編

2015 『アフリカン・ポップス！――文化人類学からみる魅惑の音楽世界』東京：明石書店。

分藤大翼・川瀬 慈・村尾静二編

2015 『フィールド映像術』（FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ15）東京：古今書院。

［論文］

Kawase, I.

2014 The Amharic Oral Poetry by Lalibäločč. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 15: 185–198.［査読有］

【受賞歴】

2013　第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞

2008　最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovative　イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、自身の映画制作や上映活動を事例に、コミュニケーションによって生成する人類学的な映像実践を示すことにある。報告者は、撮影者の存在や行動を前景化し、撮影の過程でかわされる撮影者・被写体間の議論を映像の中であえて開示し、撮影プロセスを明示する方法論を発展させてきた。民族誌映画においては、観察型、解説型の映画様式が重視され、制作中の撮影者・被写体間の相互作用や、映画を視聴する幅広いアクターの役割が軽視される傾向にあった。そのようななか本研究では、民族誌映画を固定的で完結した表象としてではなく、視聴する人々とのたえまない相互作用のなかに位置づける。さらにその相互作用が、研究の新たな展開を生成させうる創発的な営みであることを自身の民族誌映画制作の実践や映画公開の活動を基軸に検討する。

・調査

科学研究費助成事業（若手研究(B)）『アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用』の研究のため、10月から11月にかけて、エチオピア連邦民主共和国において調査を行った。本調査では、エチオピア北部の地域社会において音楽を担う職能集団の活動を対象に報告者が制作した民族誌映画を被写体や被写体の親族と視聴するなかで、当集団の社会集団としての特質の変容、技能の伝承、さらに他集団に対して映画を通してアピールしたい自集団の理想像について議論を交わすことができた。11月に大英図書館 World & Traditional Music 部門において、報告者が過去に制作した民族誌映画やフッテージ、約13点をアーカイブした「Itsushi Kawase Collection」の活用に関して調査を行った。民族誌映画のアーカイビングや活用をめぐる課題や今後の展望に関して、関係者と議論を行った。以上のエチオピアと英国における調査で得られたデータを整理し、今後論文としてまとめ、映像人類学の学術雑誌に投稿する予定である。

・映画上映

山東大学人類学部において開催された国際会議、韓国国立民俗博物館のセミナーにおいて、報告者が制作したエチオピアの憑依儀礼ザールに関する民族誌映画『When Spirits Ride Their Horses』や、民博特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」の展示映像を編集した、マダガスカルの無形文化遺産に関する『Zaffimaniry Style』を上映し、本研究課題についての講演を行った。中国や韓国の学生や映像人類学者と、無形文化を対象とした民族誌映画制作の方法論や、作品公開によって引き起こされる問題をテーマとした議論を行った。

・成果公開

日本文化人類学会機関誌『文化人類学』80巻１号の特集「人類学における映像実践の新たな時代に向けて」において、近年の民族誌映画の研究潮流を考察する論文（特集序文）、並びに本研究課題に関する論文、計２本を発表した。以上の２本の論文では、民族誌映画を視聴する側の人々の役割を映像人類学が軽視してきたことを指摘し、民族誌映画の制作と公開をめぐる議論を通して生まれる、研究者と調査対象の人々との関係性の変化、あるいは映画公開によって創出される社会との新たなつながり、について考察した。作品を、被写体や、それを視聴する人々との創発的な営みのプロセスにあると位置づけ、映像実践をともなう人類学研究の可能性について検討した。

◎出版物による業績

［論文］

Kawase, I.

2015　An Analysis of *Lawāgi* Oral Poetry in Ethiopia. In J. Kawada（sous la direction de.）*Cultures sonores D'afrique* VI: 55–76. Yokohama: Universite Kanagawa.［査読有］

2016　Exploring the Old Town Lijiang or Re-visualizing Myself? *Visual Anthropology Forum*（影视人类学论坛）11：166–197.

川瀬 慈

2015　「序＜特集＞「人類学と映像実践の新たな時代に向けて」『文化人類学』80(1)：1–5。［査読有］

2015 「コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画――エチオピアの音楽職能集団と子供たちを対象とした映画制作と公開の事例より」『文化人類学』80(1)：6-19。［査読有］

［その他］

川瀬 慈

2015 書評 遠藤保子・相原進・高橋京子編著「無形文化財の伝承・記録・教育――アフリカの舞踊を事例として」『JANESニュースレター』22：82。

2015 「現代のことば 約束の地」『京都新聞』 5月14日夕刊。

2015 「旅・いろいろ地球人 踊る① 精霊を誘う」『毎日新聞』 5月14日夕刊。

2015 「旅・いろいろ地球人 踊る③ 密なやりとり」『毎日新聞』 5月28日夕刊。

2015 「現代のことば 永遠」『京都新聞』 7月17日夕刊。

2015 「みんぱく食の民族誌 考える舌⑫ エチオピアの生肉食」『京都新聞』 8月12日。

2015 「現代のことば 高原のチャプリン」『京都新聞』 9月14日夕刊。

2015 「現代のことば コロタマリ」『京都新聞』11月16日夕刊。

2015 「映像人類学の国際的な研究動向とのつながりのなかで」『民博通信』151：18-19。

2016 「恭平へ――アジスアベバ、岐阜、大阪、パリ、ロンドン」『ユリイカ――特集：坂口恭平』東京：青土社。

2016 「現代のことば 再会」『京都新聞』 1月19日夕刊。

2016 「みんぱく食の民族誌 考える舌㉜ エチオピアのインジェラ」『京都新聞』 3月2日。

2016 「現代のことば 十字架」『京都新聞』 3月15日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2015年6月13日 「川瀬 慈「イメージへの亡命――声とサウンドによるパフォーマンスの試み」」『映像民族誌のナラティブの革新』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年6月19日 'Towards a New Age of Anthropology with Visual Practice -Cases from Japan-' International Conference on Anthropology of Northeast Asia "The Anthropology of Northeast Asia: Flows and Groundings" Shandong University, Jinan

2015年4月19日 「ゴンダール、ストリートの残響」『Pop Africa 2015』一橋大学、東京

・研究講演

2016年1月30日 「ゴンダール、ストリートの残響」『文化人類学者が語り演じるアフリカン・ポップス！～エチオピア、カメルーン、ギニア、ジンバブエから～』日本アフリカ学会関東支部 2015年度第2回例会、下北沢Com. Cafe 音倉、東京

2016年3月16日 「Jammin' ストリートの残響」『文化人類学者が語り演じるアフリカン・ポップス！～エチオピア、カメルーン、ギニア、ジンバブエから～』日本アフリカ学会関西支部 2015年度後援イベント、京都きんせ旅館、京都

2016年3月25日 「職能者からアーティストへ――世界に羽ばたくエチオピアの楽師たち」みんぱく公開講演会『ワールドアートの最前線――アイヌの文様とエチオピアの響き』、オーバルホール、大阪

・映像作品制作

撮影、編集、監督 川瀬 慈

『ジムナジウム /gymnasium』（17分，アムハラ語・英語字幕、2016年）

・映像上演

2015年5月14日 *Room11*, *Ethiopia Hotel*（Dir. Itsushi Kawase），同志社大学国際教育インスティテュート

2015年6月20，21日 *When Spirits Ride Their Horses*（Dir. Itsushi Kawase），*Zaffimaniry Style*（Dir. By Itsushi Kawase and Taku Iida）映像人類学セミナー、山東大学、中国

2015年7月10日 *When Spirits Ride Their Horses*（Dir. Itsushi Kawase），*Zaffimaniry Style*（Dir. By Itsushi Kawase and Taku Iida）、韓国国立民俗博物館、韓国

2016年1月30日 *Gymnasium*（Dir. Itsushi Kawase）一般社団法人エチオピア・アートクラブ設立記念 "Secret Art of ETHIOPIA"、HIS 旅と本と珈琲とOmotesando、東京

2016年2月27日 *Gymnasium*（Dir. Itsushi Kawase）『文化人類学者が語り演じるアフリカン・ポップス！――エチオピア、カメルーン、ギニア、ジンバブエから』日本アフリカ学会中部支部20第2回例

会、下北沢Com. Cafe 音倉、東京

◎調査活動

・海外調査

2015年６月18日～６月23日―中華人民共和国（国際会議：The Anthropology of Northeast Asia: Flows and Groundingsでの発表、映像人類学セミナーでの上映、講演、山東大学、済南）

2015年７月９日～７月13日―大韓民国（民博ビデオテーク制作プロジェクト、韓国国立民俗博物館、ソウル）

2015年10月１日～10月７日―台湾（台湾国際民族誌映画祭への参加と台湾の映像人類学研究動向調査、台北）

2015年10月13日～11月５日―エチオピア（科学研究費助成事業若手Ｂ・音楽職能集団に関する調査と映像記録、アジスアベバ）

2015年11月８日～11月11日―フランス（国際会議 “*Visual* Ethnography: Tools, Archives and Research Methods” への参加、社会科学高等研究院、パリ）

2015年11月12日～11月16日―イギリス（大英図書館world & traditional music アーカイブでの調査、ロンドン）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究『映像民族誌のナラティブの革新』代表、国立歴史民俗博物館共同研究『研究資源としての民俗研究映像の制作と活用に関する研究』（研究代表者：内田順子）共同研究員

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

Scientific Committee, Last Focus Visual Studies Conference, “*Visual* Ethnography: Tools, Archives and Research Methods” への参加、社会科学高等研究院、パリ、日本ナイル・エチオピア学会第21回高島賞審査委員、一般社団法人 エチオピア・アートクラブ特別顧問

・非常勤講師

龍谷大学「多文化映像論Ｂ」（前期）

寺村裕史［てらむら　ひろふみ］―――― 助教

1977年生。**【学歴】**岡山大学文学部歴史文化学科（考古学履修コース）卒（2000）、岡山大学大学院文学研究科歴史文化学専攻修了（2002）、岡山大学大学院文化科学研究科人間社会文化学専攻修了（2005）**【職歴】**同志社大学文化情報学部実習助手（2005）、総合地球環境学研究所研究部プロジェクト研究員（2007）、国際日本文化研究センター研究部機関研究員（2011）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室特任准教授（2013）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2015）**【学位】**博士（文学）（岡山大学大学院 2005）、修士（文学）（岡山大学大学院 2002）**【専攻・専門】**情報考古学、文化情報学**【所属学会】**考古学研究会、地理情報システム学会、日本情報考古学会

【主要業績】

［単著］

寺村裕史

2014 『景観考古学の方法と実践』東京：同成社。

［論文］

寺村裕史

2009 「古墳のデジタル測量と空間データ処理――岡山市造山古墳のデジタル測量の成果から」『考古学研究』56(3)：92-101，岡山：考古学研究会。

2006 「古墳築造場所の選択と眺望分析」宇野隆夫編著『実践 考古学GIS ――先端技術で歴史空間を読む』pp.204-223，東京：NTT出版。

【受賞歴】

2007年　日本情報考古学会優秀賞（日本情報考古学会）

【2015年度の活動報告】

・研究課題

墳墓からみたインダス文明期の社会景観

・研究の目的、内容

本研究は、インダス文明期の社会構造理解を深化するために、インダス文明期の墓に焦点を当て、その形状・立地場所や埋葬形態などを、GIS（地理情報システム）を分析に援用しながら当時の社会構造と関連付けて解明することを目的とする。2015年度は、主にインド・グジャラート州において、墓地遺跡であるダネッティ遺跡での地中レーダー（GPR）探査ならびに地形測量の実施や、昨年度に引き続いて、カーンメール遺跡での発掘調査も実施した。また、それらの調査と並行して、カッチ地方の周辺遺跡の踏査（GPSを用いた位置情報の取得）ならびに墓地遺跡に関連する資料収集も実施した。

・成果

ダネッティ遺跡では、乱掘により既に多数の墓が掘り返されている状況が確認された。地中レーダー（GPR）探査の結果については、現在分析途中ではあるが、直径約3メートルの円形の高まりの中央部分に異常応答がみられるなど、まだ掘り返されていない墓が存在する可能性が指摘できた。さらに、GPSを用いた地形測量によって、遺跡の全体的な地形および墓の分布状況を、詳細に記録することができた。

カーンメール遺跡の発掘調査においては、墓に関わるような遺構は検出できなかったが、城塞の南壁中央部において、城門（ゲート）と考えられる遺構が見つかった。従前の調査においてカーンメール遺跡の城門は見つかっておらず、今回の調査で城塞への出入り口と思われる遺構を検出できたことは、大きな成果である。

さらには、GPSを用いた遺跡踏査により、カッチ地方の遺跡分布図のデータに追加・修正を加え、より精確な分布図を作成することが可能となった。また、墓地遺跡に関連する文献資料を収集するとともに、墓地遺跡データベースの作成にも着手することができた。

上記の成果は、次年度にEASAA2016で学会発表を予定しているほか、発掘調査概要報告書を作成し刊行する予定である。最終的には、この地域におけるインダス文明期の墓の立地、分布、埋葬形態の関係をGISを用いた分析によって明らかにし、当時の社会構造を解明理解するための、地域――埋葬統合モデルの構築につなげることを構想している。

なお、本研究は、科学研究費助成事業（一部基金）［基盤研究（B）・海外学術調査］、課題名：「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」（研究代表者：寺村裕史、2014-2016）の成果の一部である。

◎出版物による業績

［論文］

寺村裕史

2015 「古代シルクロード都市遺跡の比較研究――出土遺物のデジタルアーカイブ化を通して」『公益財団法人　三島海雲記念財団　研究報告書』2015(52)：127-130。

Watanabe, S. and H. Teramura

2016 3D Modelling of the Cuneiform Tablets and Bricks Possessed by the National Museum of Iran, In K. Maekawa (ed.) *Ancient Iran -New Perspectives from Archaeology and Cuneiform Studies, Ancient Text Studies in the National Museum of Iran*: 2: 173-179. Iran-Japan Project of Ancient Texts.

［その他］

寺村裕史

2015 「考古学ミステリーは情報工学で解けるか」『月刊みんぱく』39(11)：8-9。

2015 「世界遺産の街における文化財の保存と修復――ウズベキスタン・サマルカンド」『みんぱく e-news』167号。

2015 「みんぱく世界の旅　ウズベキスタン①　1000年以上前のパン焼きがま」『毎日小学生新聞』12月12日。

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌㉖　ウズベキスタンの『羊料理』」『京都新聞』12月16日。

2015 「みんぱく世界の旅　ウズベキスタン②　日本のうどんによく似た『ラグマン』」『毎日小学生新聞』12月19日。

2015 「みんぱく世界の旅　インド①　インダス文明のめずらしい遺物」『毎日小学生新聞』12月26日。

2016 「みんぱく世界の旅　インド②　デジタル化すすむ発掘調査」『毎日小学生新聞』1月9日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年10月17日　「地理情報システム（GIS）を用いた時空間情報の統合の方法論とその意義」（情報的空間化GIS和Database的関係）、國立臺灣歷史博物館　國立民族學博物館「民族學與歷史學的交會」博物館交流工作坊、國立臺灣歷史博物館、台南、台湾

2016年２月12日　「What is “Information” in the field of Archaeology and the Scientific Study of Cultural Properties?」、国際ワークショップ『フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて――オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討』、国立民族学博物館

・民博研究懇談会

2015年６月17日　「考古学・文化財科学における“情報”とは何か」第266回民博研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年６月27日　「イラン国立博物館蔵の楔形粘土板文書およびブリックの３次元モデリング」第58回シュメール研究会、京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター、羽田記念館、京都

2015年10月３日　「フィールド調査データの公開・共有に際しての課題と展望」総合地球環境学研究所コアプロジェクトFS「オープンサイエンス時代の社会協働に基づく地球環境研究を支援する情報サービスの実現」第１回研究会、総合地球環境学研究所、京都

・みんぱくゼミナール

2015年11月21日　「シルクロードの古代都市遺跡と歴史空間」第450回みんぱくゼミナール

・展示

2015年　年末年始展示イベント「さる」、本館展示新構築「中央・北アジア」

・広報・社会連携活動

2015年10月15日　「焼けた壁と炭化物は何を語るのか？」10月度プレス懇談会・研究こぼれ話

2015年12月21日　地球研・知の跳躍インタビュー、総合地球環境学研究所

2016年３月18日　「3. プロジェクトメンバーにきく(2)：寺村裕史さん（プロジェクト研究員）」『大学共同利用機関法人人間文化研究機構機構長裁量経費「地球環境学のエビデンスに基づく具体的評価システム構築事業」「知の跳躍」プロジェクト報告書』pp.87-113、総合地球環境学研究所「知の跳躍」研究グループ

・みんぱくウィークエンド・サロン

2015年９月20日　「デジタル技術でモノ（文化資源）を測る」第397回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2015年９月25日～９月27日―宮城県柴田郡村田町（愛宕山古墳の三次元計測に関する調査）

・海外調査

2015年９月６日～９月17日―ウズベキスタン（シルクロード都市遺跡の発掘調査及び関連資料収集）

2015年10月16日～10月18日―台湾（国立台湾歴史博物館との協定調印式及びワークショップに参加）

2015年12月25日～12月31日―イラン（「イラン国立博物館所蔵粘土板文書の調査・研究」に関する現地資料調査

2016年１月30日～２月８日―インド（「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」に関する現地調査及び資料収集）

2016年２月18日～２月29日―インド（「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」に関する現地調査及び資料収集）

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業（一部基金）（基盤研究（B）・海外学術調査）「墳墓からみたインダス文明期の社会景観」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（A）・海外学術調査）「イラン国立博物館所蔵粘土板文書の調査・研究」（研究代表者：前川和也）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「前方後円墳の三次元計測とそれにもとづく設計原理の検討」（研究代表者：新納泉）研究分担者、総合地球環境学研究所コアプロジェクトFS「オープンサイエンス時代の社会協働に基づく地球環境研究を支援する情報サービスの実現」（代表者：近藤康久）共同研究者

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

奈良大学文学部文化財学科「文化財情報学Ⅱ」

国際学術交流室

岸上伸啓［きしがみ　のぶひろ］―――― 室長　兼：副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

印東道子［いんとう　みちこ］―――― 兼：民族社会研究部教授

韓　敏［ハン　ミン］―――― 兼：民族社会研究部教授

齋藤　晃［さいとう　あきら］―――― 兼：先端人類学研究部教授

MATTHEWS, Peter Joseph［マシウス、ピーター・ジョセフ］―――― 兼：民族社会研究部教授

菊澤律子［きくさわ　りつこ］―――― 兼：先端人類学研究部准教授

山中由里子［やまなか　ゆりこ］―――― 兼：民族文化研究部准教授

梅棹資料室

吉田憲司［よしだ　けんじ］―――― 室長　兼：副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

機関研究員

金田純平［かねだ　じゅんぺい］―――― 研究員

1977年生。**【学歴】**関西学院大学総合政策学部総合政策学科卒業（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション学専攻博士前期課程修了（2005）、神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション科学専攻博士後期課程修了（2008）**【職歴】**しんきん大阪システムサービス株式会社（2000-2003）、日本学術振興会特別研究員（DC2）（2006-2008）、神戸大学大学院国際文化学研究科特命助教（2008-2010）、株式会社国際電気通信基礎技術研究所専任研究員（2010-2011）、ATR Learning Technology 株式会社（2010-2011）、関西大学文学部特別任用准教授（2010-2012）、関西大学教育推進部特別任用准教授（2012-2013）、国立民族学博物館機関研究員（2013）**【学位】**博士（学術）（神戸大学大学院総合人間科学研究科 2008）、修士（学術）（神戸大学大学院総合人間科学研究科 2005）**【専攻・専門】**話し言葉における文法と音声および非言語行動の対照研究、人文研究および教育に関するコンピュータシステムのユーザーインタフェース研究**【所属学会】**情報処理学会、日本語教育学会、日本音声学会、日本語文法学会、ヨーロッパ日本語教師会

【主要業績】

［共著］

定延利之・森 篤嗣・茂木俊伸・金田純平

2012 『私たちの日本語』東京：朝倉書店。

［論文］

金田純平

2015 「文末の感動詞・間投詞――感動詞・間投詞の対照を視野に入れて」友定賢治編『感動詞の言語学』pp.28–59，東京：ひつじ書房。

2014 「日本語教師によるビデオ教材の作成と共有のすすめ――企画・制作・公開・コミュニケーション」『日本語音声コミュニケーション』2：28–59，日本語音声コミュニケーション研究会。

【受賞歴】

2013　日本音声学会学術研究奨励賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1）博物館展示情報システムのユーザビリティの研究

2）笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較

・研究の目的、内容

1）来館者が直接利用する博物館展示情報システムについて、その利用状況やログの解析による数理・統計的手法に加え、人文・社会科学的手法である参与観察・行動観察による定性分析を通じて、そのシステムのユーザビリティ（使いやすさ）における問題点を明らかにし、根拠に基づいた改善案を提示することでユーザビリティの向上につなげる。また、スマートフォンを使った電子ガイドの運用に向けた実験を実施し、今後の電子ガイドのあり方について調査と検証を行う。

2）日本語における体験談（語り・ナラティブ）について、その展開においてどのような方法がとられているのか、また、どのような特徴がみられるのかについて、東北地方と関西地方を中心に比較を行う。

・成果

1）ビデオテークの利用ログからの利用状況を洗い出し、ユーザーインタフェースの改善策について検討を行った。また、他のビデオライブラリーを訪問して、利用方式や端末のユーザーインタフェース、什器類の形状について調査を行い、次世代のビデオテークに相応しい仕組みの検討を行った。

昨年度に続いて、次世代電子ガイドの開発にむけて、展示場の特定の位置にBluetoothの発信機（ビーコン）を設置し、展示物に接近するだけで電子ガイドの映像が取捨選択される仕組みを実験的に導入し、実用化に向けた試験を実施し、動作及び使い勝手について調査を行い、検証した。

2）関西地方の話者について既存の会話データに基づいた調査を行い、会話の型として、直接引用の部分において声の高さや声質を変えることにより、その話者の真似を行おうとしていることが分かった。また、それは、その話者本人の真似をするではなく、話者の人物像に基づいて声の高さや声質を変えていた。また、ナラティブの構造について、東北地方の話者は、出来事を語るときに、時系列に沿って何が起きたかどうかについてのみ話し、最後に感想を述べたりまとめたりするという流れで話すことが分かった。これに対し関西地方の話者は、出来事を語るときに、場面ごとに遭遇した出来事について小オチや感想をつけるように話していた。

◎出版物による業績

［論文］

金田純平

2015 「マルチメディアからみた日本語とキャラ」日本語文法学会第16回大会予稿集，pp.49–53。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年11月15日 「マルチメディアからみた日本語とキャラ」日本語文法学会第16回大会

・展示

文化資源プロジェクト2015年度年末年始展示イベント「さる」プロジェクトメンバー

◎調査活動

・国内調査

2015年10月24日～10月25日―青森県弘前市（日本語ナラティブの調査）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

神戸大学大学院国際文化学研究科「アカデミックライティング・日本語」「文化情報リテラシー専門演習」、関西大学大学院文学研究科「日本文献情報処理研究Ａ・Ｂ」、関西大学文学部「日本語学１ Ａ・Ｂ」、関西大学人間健康学部「スタディスキル・ゼミ」「導入演習」、兵庫医科大学「医学概論入門」

末森 薫［すえもり　かおる］――研究員

1980年生。**【学歴】**国際基督教大学教養学部人文科学科卒業（2004）、筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻修了（2006）、筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻単位取得満期退学（2009）**【職歴】**東京文化財研究所客員研究員（2009-2010）、国際協力機構専門家（2010-2014）**【学位】**修士（学術）（筑波大学大学院 2006）**【専攻・専門】**文化財保存科学、中国仏教美術史、文化遺産学**【所属学会】**文化財保存修復学会、日本中国考古学会、日本文化財科学科、東アジア文化遺産保存学会、国際文化財保存学会（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）

【主要業績】

［共著］

麦積山石窟芸術研究所・筑波大学世界遺産専攻編

2011 『麦積山石窟環境与保護調査報告書』北京：文物出版社。

［論文］

末森 薫

2009 「天水麦積山石窟の東崖面の復元的考察」『中国考古学』9：111-131。

2016 「大エジプト博物館保存修復センターへの技術支援プロジェクト」『文化財保存修復学会誌（古文化財之科学）』59：37-47。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国立民族学博物館における文化資源の保存・管理システムの構築に関わる実証的研究

・研究の目的、内容

本研究では、国立民族学博物館に展示・収蔵される30万点以上の資料を安定的かつ長期的に保存・活用するための恒常的な管理システムを構築することを目的に、システム構築に係る基礎実験や各種の分析機器（ガスクロマトグラフ質量分析計（GC/MS）、フーリエ変換赤外分光光度計（FR-IR）、蛍光Ｘ線分析装置（XRF）、分光測定器等）を用いた分析調査により、資料の保存・管理に関する実証的な検証を行う。2015年度は、主に下記４点について、調査・研究を実施した。

1）博物館照明としての発光ダイオード（LED）光源の光学特性に関する調査

2）光学調査法を用いた資料点検システムの開発に係る検証実験

3）各種分析機器を用いた博物館資料等の材質調査

4）カナダにおける博物館資料保存・管理に関する実践的研究活動の動向調査

・成果

1）国立民族学博物館の展示場照明をハロゲン光源からLED光源に変更するにあたり、高演色性を備えるLED光源の情報を収集するとともに、2015年夏時点で入手可能な高演色性のLED光源について、光学特性の測定や照明下での「もの」の見え方の確認等の検証実験を行った。本研究の成果により、国立民族学博物館に導入するLED照明の仕様が策定されるとともに、『国立民族学博物館研究報告』40(4)に掲載された。

2）近紫外・可視光・近赤外領域の狭域帯LED光源および各種の光学フィルターを用いた光学撮影法を用いて、博物館資料や絵画資料の調査を行った。本手法が、彩色を伴う資料のマルチスペクトルイメージングや油や微生物等付着物の発見に応用できることを確認した。本研究の成果の一部を、2015年６月の文化財保存修復学会第37回大会、同８月の2015東アジア文化遺産保存国際シンポジウムin奈良にて発表した。

3）国立民族学博物館が所有する各分析機器を用いて、資料や資料収蔵に用いる資材、資料に付着した未知物質等の材質分析を行い、物性の同定や推定を行った。本研究の成果の一部を、2015年７月に開催された日本文

化財科学会第32回大会にて発表した。

4）文化資源研究センターの事業として、カナダのビクトリア、バンクーバー、オタワ、トロントにある博物館６館とCanadian Conservation Institute（CCI）にて、有害生物対策や環境管理、合成素材の使用など、博物館資料保存・管理に関する研究および実践的な活動について動向を調査した。本調査を通じて、収蔵・展示環境のコントロール、光源によるものへの影響実験、合成素材の劣化への対応、CD等記録媒体の保存、小中規模の博物館の収蔵庫改善など、日本の博物館と共通する資料保存の課題が提示された。本調査の成果を、文化財保存修復学会第38回大会（2016年６月）にて発表する予定である。

◎出版物による業績

［論文］

園田直子・日髙真吾・末森 薫・奥村泰之・河村友佳子・橋本沙知・和髙智美

2016「博物館におけるLED照明の現状――2015年夏　国立民族学博物館展示場での実験データから」『国立民族学博物館研究報告』40(4)：513-545。［査読有］

末森 薫

2016「大エジプト博物館保存修復センターへの技術支援プロジェクト」『文化財保存修復学会誌（古文化財之科学)』59：37-47。

［その他］

末森 薫

2015「敦煌莫高窟北朝期窟の造営の展開に関する一考察――千仏図像の描写法の変遷を中心として」『日本中国考古学会2015年度大会・予稿集』。

2015「十日町市古文書整理ボランティア活動記録誌刊行記念講演会　参加記」末森 薫『文化財保存修復学会通信』150：10-11。

2015「敦煌莫高窟の日々」『月刊みんぱく』39(7)：10-11

2015「旅・いろいろ地球人　驚く⑤　にぎわいの仏国土」『毎日新聞』４月16日夕刊。

末森 薫・八木春生・松井敏也・馬千・董広強・岳永強

2015「近紫外光・可視光線狭帯域光源を用いた天水麦積山石窟壁画片の調査」『2015東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良　研究発表要旨集』pp.128-129。

2015「中国天水・麦積山石窟壁画片の彩色材料に関する非破壊分析調査」『日本文化財科学会第32回大会　研究発表要旨集』pp.200-201。

岳永強・王通玲・馬千・董広強・松井敏也・末森 薫

2015「锚杆技术在天水麦積山石窟壁画保护修复中的应用（アンカー技術を応用した天水麦積山石窟壁画の保存修復)」『2015東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良　研究発表要旨集』pp.124-125。

末森 薫・園田直子・日髙真吾・高鳥浩介・吉田直人・川越和四・和髙智美・河村友佳子・橋本沙知

2015「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法――カビに由来する蛍光反応可視化を事例として」『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.104-105。

園田直子・日髙真吾・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明・和髙智美・河村友佳子・橋本沙知

2015「国立民族学博物館に新設した多機能保管庫の運用事例――大型民俗資料の保管を目指して」『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.94-95。

日髙真吾・園田直子・末森 薫・西澤昌樹・玉置春佳・飯島善明・和髙智美・河村友佳子・橋本沙知・川越和四

2015「国立民族学博物館における大規模な殺虫処理」『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.96-97。

日髙真吾・園田直子・末森 薫・和髙智美・河村友佳子・橋本沙知・多田隈卓司・左治木悠子・川越和四・福田 尚・小谷竜介・幡野寛治

2015「東日本大震災の被災文化財の一時保管場所の環境改善――気仙沼市旧月立中学校の事例から」『文化財保存修復学会第37回大会研究発表要旨集』pp.32-33。

Hidaka, S., K. Suemori, Y. Masada, H. Tokuda, Z. Eissa, B. Mohamed, A. Shabaan

2015 ‘Collection Management of Egyptian Artifacts: Transferring means of collection care into Grand Egyptian Museum - the new house of Tutankhamun collection.’ 1st International Tutankhamun GEM Conference: Moving and Displaying. Grand Egyptian Museum, Cairo, Egypt.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年５月11日　‘Collection Management of Egyptian Artifacts: Transferring means of collection care into Grand Egyptian Museum - the new house of Tutankhamun collection.’ 1st International Tutankhamun GEM Conference: Moving and Displaying. National Museum of Egyptian Civilization, Cairo, Egypt

2015年６月28日～６月29日　「近紫外・可視光波長域を応用した博物館資料の光学調査法――カビに由来する蛍光反応可視化を事例として」文化財保存修復学会第37回大会、京都工芸繊維大学、京都

2015年７月11日～７月12日　「中国天水・麦積山石窟壁画片の彩色材料に関する非破壊分析調査」日本文化財科学会第32回大会、東京学芸大学、東京

2015年８月27日～８月28日　「近紫外光・可視光線狭帯域光源を用いた天水麦積山石窟壁画片の調査」2015東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良、奈良県新公会堂、奈良

2015年８月31日　「敦煌莫高窟早期窟千仏図像の規則性および機能」中国仏教美術考古セミナー2015「敦煌莫高窟美術史研究の現在」成城大学、東京

2015年12月19日～12月20日　「敦煌莫高窟北朝期窟の造営の展開に関する一考察――千仏図像の描写法の変遷を中心として」日本中国考古学会2015年度大会、成城大学、東京

・展示

文化資源プロジェクト2015年度年末年始展示イベント「さる」プロジェクトメンバー

・広報・社会連携活動

2015年８月22日　「古代エジプト文明とイスラム社会～アラブの春が過ぎて」芦屋市公民館講座「世界はニュースだけではわからない」芦屋市民センター、兵庫

2015年10月16日　「エジプト博物館事情と技法・材料から見る古代エジプト」NHK 公開講演会「クレオパトラとエジプトの王妃展」芦屋市民センター芦屋ルナ・ホール、兵庫

2015年10月23日　「エジプト博物館事情と技法・材料から見る古代エジプト」NHK 公開講演会「クレオパトラとエジプトの王妃展」大東市立生涯学習センターアクロス、大阪

2015年10月27日　「エジプト博物館事情と技法・材料から見る古代エジプト」NHK 公開講演会「クレオパトラとエジプトの王妃展」千里公民館、大阪

2015年11月９日　「エジプト博物館事情と技法・材料から見る古代エジプト」NHK 公開講演会「クレオパトラとエジプトの王妃展」高槻市生涯学習センター、大阪

◎調査活動

・海外調査

2015年５月５日～５月15日―エジプト（大エジプト博物館主催「第一回ツタンカーメンカンファレンス」での発表）

2015年５月27日～６月８日―カナダ（カナダにおける博物館資料保存・管理に関する実践的研究活動の動向調査）

2015年10月28日～11月８日―中国（河西回廊沿い（敦煌、蘭州、天水、西安）の文化遺産に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）「中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考――麦積山石窟を事例として」研究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（一般））「セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への影響」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B）（一般））「東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究」（研究代表者：日髙真吾）研究分担者、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる事前調査」（研究代表者：日髙真吾）研究メンバー、国立民族学博物館共同研究若手「高等教育機関を対象とした博物館資料の活用に関する研究」（研究代表者：呉屋淳子）研究メンバー

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

国際基督教大学「Introduction to Cultural Heritage」講師

・他の機関から委嘱された委員など

文化財保存修復学会第37回大会実行委員、国際協力機構大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト専門家

戸田美佳子［とだ　みかこ］――研究員

1983年生。**【学歴】**神戸大学理学部物理学科卒（2006）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科五年一貫制博士課程満期認定退学（2011）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（DC1）（2008）、京都大学アフリカ地域研究資料センター特任研究員（産官学連携）（2011）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2012）、成安造形大学非常勤講師（2014）、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員（2015）**【学位】**修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2013）**【専攻・専門】**生態人類学、アフリカ地域研究（中部アフリカ）**【所属学会】**日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際開発学会、障害学会

【主要業績】

［単著］

戸田美佳子

2015 『越境する障害者――アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』東京：明石書店。

［論文］

戸田美佳子

2016 「国境をまたぐ障害者――コンゴ川の障害者ビジネスと国家」森壮也編『アフリカの「障害と開発」――SDGs に向けて』（研究双書 No.622）pp.153-193, 千葉：日本貿易振興機構アジア経済研究所。

2014 Peoples and Social Organizations in Gribe, Southeastern Cameroon. *African Study Monographs Supplementary Issue* 49: 139-168. Kyoto: Research Committee for African Area Studies.

【受賞歴】

2016　生存学奨励賞「審査員特別賞」

【2015年の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1）アフリカにおける障害者の生活基盤に関する地域研究

2）アフリカ熱帯雨林における森林資源の利用と住民組織に関する実践的研究

・研究の目的、内容

1）本研究の目的は、アフリカにおける障害者の生活基盤を明らかすることである。アフリカに暮らす障害者の生活様式は、彼らが暮らす生態環境に加えて、イスラーム教とキリスト教が広がってきた歴史的プロセスを通じて変化している。そこで本研究では、アフリカの中部（カメルーンおよびコンゴ共和国、コンゴ民主共和国）と西部（セネガル）において（1）障害者の生計調査と（2）ライフヒストリー調査から、障害者の生業に関する資源マッピングを作成し、障害者のライフコースをとおした地域史を再編することに取り組む。これらの事例研究の積み重ねによって、アフリカの障害者の生活圏を浮き彫りにすることを目指す。調査は、科学研究費助成事業（若手研究（B））「アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究」（研究代表者：戸田美佳子）により実施する。

2）果実や葉、樹皮、野生動物などの非木材森林産物（Non-Timber Forest Products, NTFPs）が近年、木材伐採に替わる森林資源の持続的利用法として森林保全の文脈で注目を集めている。とくに非木材森林産物は、カカオなどの商品作物を栽培していない狩猟採集民や農耕民女性にとって現金稼得の重要な機会となっており、地域住民の生活向上を目指す上でも期待が高まっている。本研究は、カメルーン熱帯雨林地域における非木材森林資源の利用に関する住民参加型の現地共同研究に参加しながら、住民の社会関係と在来の住民組織の働きから、森林資源の持続的利用を可能にする社会システムの構築を目指すことを目的としている。調査は、主にJST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力事業（SATREPS）プロジェクト「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」（研究代表

者：荒木茂）により実施する。

・成果

1）今年度は９月７日から９月11日にかけてウィーン大学で開催された第11回国際狩猟採取民会議（CHAGS 11）に参加し、カメルーン共和国熱帯雨林地域に暮らすピグミー系狩猟採集民の身体障害者に関する研究成果を「People with Disabilities Crossing the Boundary between Hunter Gatherer and Agricultural Societies」という題で口頭発表をおこなった。そのほかに、９月26日に国立民族学博物館で開催した国際シンポジウムでの研究発表、京都大学や日本貿易振興機構（JETRO）での研究講演、さらには国内学会や研究集会での研究報告など、研究成果の発信に力を注いだ。また2016年２月17日から３月５日までの18日間、コンゴ共和国のブラザヴィル市において、コンゴ川をまたいだ障害者の国境ビジネスに関する現地調査をおこなった。本調査では特に、2014年にブラザヴィル市警察当局が実施した治安維持のためのオペレーションによって河港で引き起こった変化に着目し、国家の統制や規制の強化が障害者の生計活動や社会関係に与えた影響について、2014年11月に実施した現地調査や現地メディアなどの資料を比較しながら検討しなおしている。これらの成果の一部を、論文「国境をまたぐ障害者――コンゴ川の障害者ビジネスと国家」にまとめ、森壮也編『アフリカの『障害と開発』――SDGsに向けて』日本貿易振興機構アジア経済研究所（研究双書No.622）に上梓した。

2）非木材森林産物（NTFPs）の持続的利用のためには、資源採取をめぐる過度な競合をさけるとともに、NTFPsから得られる収入が適正であることが肝要である。そのため、効率的な売買にむけた住民の組織化が求められてきた。今年度は2015年８月１日から９月３日までの34日間、カメルーン東部熱帯雨林地域において、森林資源の利用と住民組織に関する現地調査をおこなった。その結果、これまでのプロジェクトでは村内での保存法や加工法に着目し住民組織に働きかけをおこなうことが多かったが、森林内で採集活動を担う狩猟採集民には利益が行き渡らず、そうした取り組みだけでは住民間の対立関係が深まるリスクを回避できないことがわかった。売買にかかわるアクター間に生じている労働等のコスト差に配慮した適切な利益配分システムが必要であると考えられる。その点を踏まえ、2015年11月11、12日にカメルーン共和国・ヤウンデ市で開催された国際シンポジウム『森林地域および森林・サバンナ境界地域における森林と農地の統合マネージメント：保全と開発に向けた分野横断的アプローチ』（Integrating Forest and Farm Management at Forest and Forest/Savanna Margins: Cross-Sectorial Approach to Conservation and Development）に参加し、農耕民と狩猟採集民の関係に注目しながら非木材資源の持続的利用した住民組織の働きに関する研究成果を口頭発表した。国際シンポジウムではプロジェクトサイトに暮らす住民を招待し、当該国の共同研究者と現地住民、そして日本人研究者が今後の取り組みについて意見を交換した。

◎出版物による業績

［論文］

戸田美佳子

2016「国境をまたぐ障害者――コンゴ川の障害者ビジネスと国家」森壮也編『アフリカの「障害と開発」――SDGsに向けて』（研究双書No.622）pp.153-193，千葉：日本貿易振興機構アジア経済研究所。［査読有］

Olivero, J., J. E. Fa, M. A. Farfán. J. Lewis, B. Hewlett, T. Breuer, G. M. Carpaneto. M. Fernandez, F. Germi. S. Hattori, A. Noss, D. O. Ekoumou, P. Paulin, R. Real. M. Riddell, E. G. J. Stevenson, M. Toda, J. M. Vargas, H. Yasuoka, R. Nasi.

2016 Distribution and Numbers of Pygmies in Central African Forests. *PLoS ONE 11 (1).*［査読有］

［その他］

戸田美佳子

2015「『商売の王さま』と呼ばれる障害者集団――コンゴ川の国境ビジネスの展開」『SYNODOS』。（http://synodos.jp/international/15684）12月８日。

2015「アフリカの障害者を研究すること」『アフリカ Now』104：6-9，12月31日。

2016「人間学のキーワード　ケア」『月刊みんぱく』40(1)：20。

2016「ムスリムとクリスチャンが集うカメルーンの名物屋台」『みんぱく e-news』177号、３月１日。（http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/177）

Toda, M.

2015 Systematization of NTFPs and Inter-ethnic Relationships among the Baka hunter-gathers and Bantu farmers. *ORAL PAPERS of FOSAS International Symposium*, pp.339-358.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年９月26日　‘Disability and the Life Course among the Hunter-gatherers and Agriculturalists living in Cameroon.’ International Symposium “How Do Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape?” National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年５月24日　「国境をまたぐ障害者――コンゴ川における障害者の国境ビジネスの展開」日本アフリカ学会第52回学術大会、犬山国際観光センター・フロイデ、愛知

2015年６月７日　「アフリカにおける障害者とビジネス――コンゴ川の国境貿易を例に」セッション『アフリカの障害と開発』（代表：アジ化経済研究所・森壮也）国際開発学会第16回春季大会、法政大学、東京

2015年９月８日　‘People with Disabilities Crossing the Boundary between Hunter Gatherer and Agricultural Societies.’ 11th International Conference on Hunting and Gathering Societies (CHaGS 11), Session: “Hunter-gatherer Affluence: Social and Material Perspectives.” University of Vienna, Vienna

2015年10月16日　「障害者をとおしてアフリカ社会を紐解く――カメルーン共和国を事例に」第９回アフリカ研究自主セミナー、関西大学千里山キャンパス、大阪

2015年11月12日　‘Systematization of NTFPs and Inter-ethnic Relationships among the Baka hunter-gathers and Bantu farmers.’ Forest-Savanna Sustainability Project Cameroon（FOSAS）International Symposium “Integrating Forest and Farm Management at Forest and Forest/Savanna Margins: Cross-Sectorial Approach to Conservation and Development.” Hotel MONT FÉBÉ, Yaoundé Cameroon

2016年１月15日　「アフリカ熱帯林に暮らす障害者の社会性」京都人類学研究会（2015年度１月例会）、京都大学、京都

・研究講演

2015年６月18日　「越境する障害者――アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌」第211回地域研究会・2014年度総長裁量経費（若手研究者に係る出版助成事業）・アフリカ研究出版助成記念講演、京都大学、京都

2015年７月23日　「コンゴ川における『障害と開発』」2015年アジア経済研究所夏期公開講座「アフリカにおける『障害と開発』、日本貿易振興機構（JETRO）本部、東京

2016年２月11日　「アフリカ熱帯林における身体と資源利用――障害者の生態人類学的理解に着目して」第16回教育・学習の人類学セミナー「『障害者』の立場から教育・学習の基盤を再考する――日本とアフリカの文化的・生態学的フィールドワークの実践から」、京都大学、京都

・展示

2015年度文化資源計画事業　年末年始展示イベント「さる」展示監修、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2015年６月21日　音楽の祭日　実行委員会メンバー、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2015年７月31日～９月13日―カメルーン、フランス、オーストリア（カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理に関する現地調査及び「第11回国際狩猟採集社会会議」に参加・発表）

2015年11月８日～11月16日―カメルーン共和国（国際シンポジウム『森林地域および森林・サバンナ境界地域における森林と農地の統合マネージメント：保全と開発に向けた分野横断的アプローチ』に参加・発表）

2016年２月15日～３月７日―コンゴ共和国（アフリカにおける障害者の人類学的研究に関する現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（若手研究(B)）「アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究」研究代表者、科学研究費

助成事業（挑戦的萌芽研究）「Participatory mapping を利用した熱帯雨林の持続的利用システム」（研究代表者：京都大学・市川光雄）研究協力者、JST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）「カメルーン熱帯雨林とその周辺地域における持続的生業戦略の確立と自然資源管理：地球規模課題と地域住民ニーズとの結合」（研究代表者：京都大学・荒木茂）研究協力者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

障害学会第 7 期理事、京都中部アフリカ研究会庶務、NPO 法人アフリックアフリカ事務局

・非常勤講師

成安造形大学「文化人類学」（集中講義）、

永田貴聖［ながた　あつまさ］ 研究員

1974年生。**【学歴】**京都学園大学法学部法学科卒業（1997）、立命館大学大学院文学研究科史学専攻地域文化領域博士前期課程修了（2004）、立命館大学大学院先端総合学術研究科先端総合学術専攻共生領域博士課程修了（2008）**【職歴】**立命館大学第一号助手（2005-2006）、日本学術振興会特別研究員 DC・立命館大学（2007-2008）、日本学術振興会 PD・京都大学（2008-2009）、立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー・GCOE 生存学担当（2009-2010）、立命館大学先端総合学術研究科研究指導助手（2010-2012）、立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員（2012-2015）、京都学園大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員（2015）**【学位】**博士（学術）（立命館大学大学院、2008）**【専攻・専門】**文化人類学・移民研究（日本・韓国におけるフィリピン人移民の社会関係とネットワークに関する研究）**【所属学会】**日本文化人類学会、日本移民学会、社会学研究会

【主要業績】

［著書］

永田貴聖

2011 『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』京都：ナカニシヤ出版

［論文］

永田貴聖

2016 「日本・韓国のフィリピン人たちによる複数の国家・国民とかかわる実践」黒木雅子・李恩子編『「国家」を超えるとは――民族・ジェンダー・宗教』pp.151-199，東京：新幹社。

2016 「『韓国』を消費するだけではない日本人の存在――政治的な日韓関係を超える関係についての試論」『生存学』9：94-107，東京：生活書院。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本・韓国におけるフィリピン人移民の社会関係とネットワークに関する研究

・研究目的・内容

本研究の目的は、世界有数の移民・移住労働者送り出し国であるフィリピンから移動してきた人びとが形成する社会関係、中でも結婚による女性の移住が多い東アジア（本研究では日本と韓国）に注目し、1) フィリピン人移住者がカトリック教会などを拠点として、自助・同国人グループを組織し、フィリピン人同士の関係を形成していること、2) フィリピン人同士の関係を媒介にして、日本人や他国出身の移住者たちとも強いつながりを構築すること、3)「フィリピン」が共通項となる空間を一時的につくりだし、そこに集まるさまざまな人びとと関係することを明らかにすることである。

・成果

2015年度は、主に、2012年～2015年 3 月の期間、断続的にフィールド調査を実施してきた韓国首都圏ソウル特別市ならびにその周辺地域に居住するフィリピン人結婚移民、移住労働者たちが中心となり週末などに限定して、集まる場所について民族誌学的な分析を試みてきた。この場所が、フィリピン人だけの社会空間ではなく、「フィリピン」を共通項とする、多様な人びとが帰属意識を問わずに集まる「フィリピン」を強調する「ア

フィニティ空間（Affinity Space）」として成立していることを解釈した。この検討に基づき、The European Association for Southeast Asian Studies（EuroSEAS）8th conferenceにおいて研究報告を実施した。その成果の一部は、日本在住フィリピン人との活動比較として関西社会学会おいても報告し、その内容をもとに論文「日本・韓国のフィリピン人たちによる複数の国家・国民とかかわる実践」を刊行した。

今後の課題は、日本におけるフィリピン人の最新の動きを把握し、日本と韓国の比較を試みることである。日本では、フィリピン人移住者は在日コリアンを中心としつつ、他国出身の移住者たちとつながりをつくろうとしている。

◎出版物による業績

［論文］

永田貴聖

2016 「日本・韓国のフィリピン人たちによる複数の国家・国民とかかわる実践」黒木雅子・李恩子編『「国家」を超えるとは――民族・ジェンダー・宗教』pp.151-199，東京：新幹社。

2016 「『韓国』を消費するだけではない日本人の存在――政治的な日韓関係を超える関係についての試論」『生存学』9：94-107，東京：生活書院。

［その他］

永田貴聖

2015 「旅・いろいろ地球人　踊る⑦　フィリピンの曲？」『毎日新聞』6月25日夕刊。

2015 「アドボ～フィリピンの歴史がつまった料理」『月刊みんぱく』39(10)：14-15。

2015 「イロイロ――ぬくもりの記憶」『社会科NAVI』2015(11)：16-17，日本文教出版。

2016 書評　三浦綾希子著「ニューカマーの子どもと移民コミュニティ――第二世代のエスニックアイデンティティ」『移民研究年報』22：90-93。［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月24日 「在日フィリピン人コミュニティを中心とする関係の広がり――京都市に注目して」関西社会学会第66回大会、立命館大学衣笠キャンパス、京都

2015年8月12日 'Spaces in Consociation of Filipino Migrants in Seoul of Korea.' The European Association for Southeast Asian Studies（EuroSEAS）8th conference, University of Vienna, Austria.

2016年1月23日 「フィリピン人移住者とは――京都のフィリピン人」京都YWCA　2016年研修、京都YWCA、京都

・広報・社会連携活動

2015年12月12日 「映画解説　イロイロ ぬくもりの記憶（爸媽不在家　ILO ILO）」みんぱく映画会／第31回みんぱくワールドシネマ

◎調査活動

・海外調査

2015年8月10日～8月22日―オーストリア（ヨーロッパ東南アジア学会国際会議に参加、報告及びオーストリア・サイエンス・アカデミー、ヴィエナ大学において文化人類学、民族学海外研究動向調査）

2016年3月14日～3月24日―フィリピン共和国（フィリピンにおける韓国地域研究と動向に関する海外研究動向調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

立命館大学生存学研究センター若手研究者研究協力型プロジェクト・現代社会エスノグラフィ研究会、課題「現代社会におけるエスノグラフィ方法論――『生の技法』記述への探求」（代表、小川さやか准教授）客員協力研究員・実務担当、2015年日本移民学会ワークショップ「マイノリティ混住地域における『多文化社会』のいま」コーディネーター

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

京都学園大学「質的社会調査法」、立命館大学「プロジェクト・スタディ」、神戸市外国語大学「社会調査分析１」、龍谷大学「人権論」、京都外国語大学「現代アジア地域事情」

浜田明範［はまだ　あきのり］――研究員

1981年生。**【学歴】**千葉大学文学部行動科学科卒業（2003）、千葉大学大学院文学研究科人文科学専攻修士課程修了（2005）、一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻単位取得（2010）**【職歴】**産業能率大学兼任教員（2008）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2010）、江戸川大学非常勤講師（2011）、国立民族学博物館機関研究員（2013）、高知大学非常勤講師（2013）、立命館大学客員協力研究員（2013）**【学位】**博士（社会学）（一橋大学社会学研究科 2012）、修士（文学）（千葉大学文学研究科 2005）**【専攻・専門】**医療人類学・アフリカ地域研究（西アフリカにおける生物医療と生政治の展開に関する研究）**【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences、American Anthropological Association

【主要業績】

［単著］

浜田明範

2015 『薬剤と健康保険の人類学――ガーナ南部における生物医療をめぐって』東京：風響社。

［論文］

浜田明範

2015 「書き換えの干渉――文脈作成としての政策、適応、ミステリ」『一橋社会科学』7（別冊）：125-150。

2010 「医療費の支払いにおける相互扶助――ガーナ南部における健康保険の受容をめぐって」『文化人類学』75(3)：371-394。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

西アフリカにおける生権力の複数性に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、ガーナ南部における生物医療の展開に注目することにより、生物医療が、(1) どのように異なる立場の人々の行為を統制しながら全体的な目標を達成しようとしているのか、(2) どのようなモノ・行為・制度の配置によって人々の自己統治を促しているのか、(3) どのように「生かすべき者」と「死ぬに任せる者」を結果的に選別しているのか、の三点について明らかにすることにある。

・成果

2015年度は、(1) アフリカの生物医療に関する国際シンポジウム“How Do Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape?”を本館准教授の松尾瑞穂とともに共催するとともに、(2) ガーナ南部の農村地帯におけるオンコセルカ対策プログラムに関する現地調査を実施した。

国際シンポでは、オスロ大学からウェンゼル・ガイスラー教授とルース・プリンス准教授を招聘したほか、国内から10名の研究者を招き、サハラ砂漠以南アフリカにおいて、生物医療が人々の生活、社会性、景観をどのように変容させているのかを各地からの事例に基づいて検討した。その結果、アフリカにおける生物医療について考える際に、複数の時間性や空間性について検討することの有効性が明らかになった。

現地調査とそれを通じた思索の具体的な成果としては、以下の諸点が明らかになった。(1) 従来の薬剤の人類学では、薬剤の入手可能な地域の空間的な広がりに焦点が当たっていたが、とりわけ医療従事者による実践においては、むしろ薬剤摂取のタイミングを整序することに焦点が当たっている、(2) 薬剤摂取のタイミングは、病気と薬剤、それに人間の身体の関係性の特性に由来しており、病気や薬剤の種類によって、摂取の間隔や許容されるタイミングのズレが大きく異なる（例えば、結核対策は一日毎に厳密に摂取することが求められるが、オンコセルカ対策では半年に一度の摂取でよく、ときに数か月のずれが許容される）、(3) オンコセルカ対策は、半年から一年に一度の摂取が求められるという例外的に長い周期性を持っており、また、摂取のタイミングは純粋に医学的な論理だけでなく、人々の生活に関する民族誌的な知識に基づいても決定されている、(4) 人々の生活環境のリスク評価に応じて地域単位で実行されるオンコセルカ対策においては、個人単位ではなく特定の地域の全住民に薬剤を摂取することが求められる、(5) 薬剤の集団投与の際には、薬剤の摂取者と拒否者のリストが作成されるが、そこでは症状や副作用についての記録も取られている。このことは、薬剤の人口に対する集団投与が、感染症の治療であると同時に予防であると同時に、調査研究ともなっていることを意味している。

これらの成果については、2016年度に研究論文として発表する予定である。

◎出版物による業績

［訳書］

大杉高司・浜田明範・田口陽子・丹羽 充・里見龍樹

2015 『部分的つながり』マリリン・ストラザーン著，東京：水声社。

［その他］

浜田明範

2015 「みんぱく食の民族誌　考える舌⑮　ガーナのネズミ」『京都新聞』 9月9日。

2015 「再分配論の再始動：理論、制度、行為」『民博通信』150：20-21。

2015 「書評　顧みられない熱帯病と国際協力：ブルーリ潰瘍支援における小規模NGOのアプローチ」『アフリカ研究』88：53-55。

2015 「ソフィア・京都新聞文化会議　大村さんのノーベル賞の意味」『京都新聞』12月11日。

2016 「グローバルヘルス」『月刊みんぱく』40(3)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・国立民族学博物館主催のシンポジウムでの報告

2015年9月27日 'Interference in a Milieu: On Multiple Governments of Multiple Actors around Tuberculosis Treatment Projects in Southern Ghana.' International Symposium "How Do Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape?" National Museum of Ethnology, Japan.

・共同研究会での報告

2015年5月9日 「アフリカでの生活用品試行調査」『生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究』国立民族学博物館

2015年6月6日 「なぜ世帯という単位は機能しなかったのか――家族を要請しない社会を考える」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究――保育と介護の制度化／脱制度化を中心に』国立民族学博物館

2015年10月18日 「妖術による媒介：ガーナ南部における王権闘争をめぐって」『呪術的実践＝知の現代的位相――他の諸実践＝知との関係性に着目して』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年5月31日 「再分配研究の再始動：行為から集団の生成を考える」『日本文化人類学会第49回研究大会』大阪国際交流センター、大阪

2015年6月27日 「西アフリカのカカオ農村地帯における生物医療と感染症」『海外学術調査フォーラム』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京

2016年2月29日 'Restyling the Milieu: On Milieu Making Practices around Tuberculosis Treatment Projects in Southern Ghana.' "Japanese Scholars Afternoon." University of Amsterdam, Netherland

◎調査活動

・海外調査

2015年9月6日～9月16日―イギリス（ヨーロッパにおけるグローバルヘルスの人類学の研究動向調査）

2015年12月17日～2016年2月16日―ガーナ共和国（西アフリカにおける感染症対策と生権力の複数性に関する人類学的研究及びポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究に関わる現地調査）

2016年2月26日～3月7日―オランダ（オランダにおける医療人類学の研究動向調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

日本学術振興会科学研究費助成事業（若手研究（A））「西アフリカにおける感染症対策と生権力の複数性に関する人類学的研究」研究代表者、国立民族学博物館共同研究若手「再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究――手続きと多層性に注目して」研究代表者、立命館大学生存学研究センター若手研究者研究協力型プロジェクト「現代社会エスノグラフィ研究会」客員協力研究員、立命館大学国際言語文化研究所萌芽的プロジェクト研究「アフリカの社会と笑い研究会」客員協力研究員。

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

産業能率大学「文化を知る」、江戸川大学「福祉・医療人類学」、高知大学「医療人類学（集中講義）」

◎学会等の開催

2015年５月29日　日本文化人類学会課題研究懇談会「医療人類学教育の検討」第六回研究会、第４セミナー室

2015年９月25日～９月27日　How Do Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape?

2015年11月22日　日本文化人類学会第四回次世代育成セミナー、第３・第４セミナー室

八木百合子［やぎ　ゆりこ］――研究員

1977年生。**【学歴】**天理大学国際文化学部イスパニア学科卒（2001）、三重大学大学院人文社会科学研究科修了（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科単位取得満期退学（2011）**【職歴】**在ペルー日本国大使館専門調査員（2012-2014）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2015）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2012）、修士（人文科学）（三重大学 2004）**【専攻・専門】**文化人類学、アンデス民族学、ラテンアメリカ地域研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

［単著］

八木百合子

2015 『アンデスの聖人信仰――人の移動が織りなす文化のダイナミズム』京都：臨川書店。

［著書］

八木百合子

2012 「聖女に捧げられた大聖堂――近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト」染田秀藤・関雄二・網野徹哉編『アンデス世界――交渉と創造の力学』pp.243-267，京都：世界思想社。

［論文］

八木百合子

2009 「サンタ・ロサ信仰の形成と発展――20世紀ペルー社会における展開を中心に」『総研大文化科学研究』5：5-28。

【2015年の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モノを通してみる現代ペルーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究

・研究の目的・内容

本研究は、宗教的なモノの生産と流通に焦点をあて、現代ペルーにおける聖人信仰の発展について人類学的に追究するものである。その際、聖像というモノを分析の中心に据え、モノと人々が作り出す多様な実践を捉えることで、教会や宣教師の活動に力点をおく従来の見方を越え、宗教現象の新たな理解をはかることを目的とする。より具体的には、(1) 現代の聖像の生産がいかなる人々によりどのようにして行われ、(2) どのような人々の手を介して聖像が流通し、(3) それが各地の村落においてどのように受容され、聖性をもった存在となるかという点について明らかにしていく。なお、上記調査の遂行にあたっては科学研究費助成事業（研究スタート支援）をあてる。

・成果

本年度は、聖像の生産の実態と商品化プロセスを把握するために、ペルーの首都リマおよびクスコ市において調査を実施した。その結果、(1) 現在聖像生産のさかんなリマでは首都の人口増大を背景にここ30年ほどで生産市場が拡大したこと、(2) 市場拡大とともに、生産形態についても、従来の職人を中心とした個人型から工場型が増え商品化が進んでいること、(3) 市場競争により聖像の材質やデザインに変化がみられることが明らかになった。特に(3)の点については、現在の聖像の生産市場に中国製の安価な商品が登場するなど、国内のみならず国際市場の影響を受けていることなども判明した。これらの成果については2016年度に公開する予定である。

◎出版物による業績

［単著］

八木百合子

2015 『アンデスの聖人信仰――人の移動が織りなす文化のダイナミズム』京都：臨川書店。

［その他］

八木百合子

2015 「聖なるモノの商品化――ペルー」みんぱく e-news 168号、6月1日。

2015 「聖母への贈りもの――奉納品を通してみる世界」『チャスキ（アンデス文明研究会）』51：11-13。

2015 「ペルーの選挙制度」『選挙時報』64(10)：1-22。

2016 「都市が生み出す力――リマに暮らす農村出身者たち」『ラテンアメリカ時報』1413：46-48。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2015年10月17日 「アンデスの聖人崇拝――モノに映し出された信仰の世界を読む」アンデス文明研究会定例講座、東京外国語大学本郷サテライト

2016年2月4日 'Migration and Cultural Change in Peru'. School's Special Lecture Series on Latin America, Hankuk University of Foreign Studies, Seoul, Korea.

◎調査活動

・海外調査

2015年11月19日～12月3日―スペイン（スペインにおけるラテンアメリカ地域に関する人類学的研究の動向調査）

2015年12月11日～2016年1月25日―ペルー（現代ペルーにおける聖像の制作活動に関する調査）

2016年2月3日～2月5日―韓国（韓国外国語大学における特別講義）

2016年2月18日～3月22日―ペルー（クスコ市の教会堂における奉納品の調査）

◎上記以外の研究活動

科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）「モノを通してみる現代ペルーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費助成事業（新学術領域研究）「古代アメリカの比較文明論」（研究代表：青山和夫）連携研究者

プロジェクト研究員

相良啓子［さがら　けいこ］――研究員

【学歴】筑波大学大学院修士課程教育研究科障害児教育専攻修了（1999）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所大学院 MPhil 課程修了（2014）**【職歴】**株式会社 JTB 本社 IT 企画部（1999）、株式会社 JTB 首都圏新橋支店営業三課バリアフリーツアー推進担当（2002）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所研究官（2010）、国立民族学博物館プロジェクト研究員（2014）**【学位】**修士（教育研究科障害児教育専攻）（筑波大学大学院 1999）、手話言語学修士（M. Phil.）（セントラルランカシャー大学国際手話言語学・ろう者学研究所（iSLanDS）2014）**【専攻・専門】**手話言語学類型論・聴覚障害児教育**【所属学会】**日本手話学会、日本言語学会、日本歴史言語学会、社会言語科学会

【主要業績】

［編著書］

Zeshan, U. and K. Sagara（eds.）

2016 *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

［論文］

Sagara, K. and U. Zeshan

2016 A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara（eds.）*Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*, pp.3-37. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen:

Ishara Press.
Nonaka, A. K. M., and K. Sagara
2015 Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses. *Sign Languages Studies* 16(1): 57–85.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話の歴史研究にむけて――数詞に基づく分析と試論

・研究の目的・内容

本研究の目的は、手話表現の歴史的変遷を解明するために、手話表現を客観的に比較し、共通点と相違点を記述するための方法を確立することである。ここでは特に、数のバリエーションを記述し、比較するためのノーテーションを考案し、それを利用して変化の一般化を試みる。対象とする言語は、系統関係が明らかであり、分岐してから時間があまりたっていないため、変化を追うことができる可能性が高い日本手話と関連手話（台湾手話・韓国手話）とする。神田（1986）の記述法を応用して、特に手形に着目し、手形を構成する要素、すなわち指の形、位置、動きについて記述を行い、先行研究や慣例などを参考にして書式化する。

・成果

手話表現をノーテーションで示すことにより、写真だけでは明らかにできない指の形や動きの有意な違いを、はっきりと示すことができた。今後、この方法を更に吟味し、もっと複雑な表現、例えば両手を使う手話、複雑な動きのある手話にも展開する。それにより、手話表現の史的変遷を一般化に応用できると考える。

具体的なノーテーションの適用例として、日本手話、台湾手話、韓国手話に見られる数詞「13」に関係性が見られること、また、変化の方向性について仮説をたてることができた。日本手話では「13」は、人差し指を曲げて表現する「10」と、人差し指、中指、薬指を立てて表現する「３」というふたつを組み合わせた表現を用いる。台湾手話では「13」を、「10」の人差し指を継続して上下に動かすのと同時に、中指と薬指を立てるという、日本手話の「10」と「３」が一つに融合した形で表現する。韓国手話では、人差し指を曲げた状態で静止させ、同時に中指と薬指を立てることで「13」を表す。この、起源を同じくすると考えられる３つの表現の変化の順序について考察した。Frishberg（1975）は、アメリカ手話の例で、「赤」と「切る」を示す二つの表現が融合して「トマト」と表すアメリカ手話の表現ができたことを述べているが、この「13」の例でも、もともとは二つの表現の組み合わせで表現されていた手話の語彙が、時間が経つにつれて融合したと考えられる。すなわち、変化の方向としては、日本手話の「13」から台湾手話の「13」あるいは韓国手話の「13」であったと考えられる。このように、二つの表現が一つに融合した例は、アメリカ手話の「家」の表現にも見られる。

さらに、ノーテーションを利用することにより、日本手話と台湾手話において、「60」、「70」、「80」、「90」を表す表現に、パラダイムとしての変化がみられることを記述した。ふたつの手話言語におけるこれらの表現は、指の組み合わせや形は同じであるが、すべての数の表現において、指先が向いている方向と手のひらの向きに違いがある。日本手話では、指先を横に向け、手のひらを話者側に向けて表現するが、台湾手話では指先を上に向け、手のひらを相手側に向けて表現するという違いがある。ふたつの手話における相違点と共通点を考えると、いずれかがいずれかから変化したと考えられる。指先を上に向けて表現する手話は、新潟の高齢ろう者の手話にも見られることから、以前は日本でも台湾手話と同じように指先を上に向け、手のひらを相手側に向けた表現がよく使用されていた可能性がある。この部分についてはさらなるデータに基づいた考察が必要である。パラダイムの変化については、構成要素のすべてが変化した例だけではなく、韓国手話の「11」～「19」のように、一部の要素のみが変化した例などもみられた。

◎出版物による業績

［編著］

Zeshan, U. and K. Sagara（eds.）
2016 *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

［論文］

Sagara, K. and U. Zeshan
2016 A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara（eds.）*Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*, pp.3–37. Berlin: Mouton de Gruyter &

Nijmegen: Ishara Press.

Nonaka, A. K. M., and K. Sagara

2015 Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses. *Sign Languages Studies* 16(1): 57–85.

［その他］

相良啓子

2016 「世界ろう者会議と手話通訳者」『みんぱく e-news』第174号，12月１日。

◎映像音響メディアによる業績

・民博言語チーム監修

相良啓子

2015年 『手話の世界へようこそ!!』マルチメディア番組（6054）12手話言語（オーストラリア手話、韓国手話、日本手話、イギリス手話、オーストリア手話、フィンランド手話、中国手話、インド手話、香港手話、インドネシア手話、アメリカ手話、モルディブ手話）に関する番組

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年９月21日 菊澤律子・相良啓子「手話言語の歴史言語学的研究に向けて」機関研究成果公開 みんぱく手話言語学フェスタ2015

2015年11月28日～11月29日 廣瀬浩二郎との対談「全盲者の耳、ろう者の目――『障害』から生まれる身体知」公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開――展示・教育から観光・まちづくりまで」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年７月28日～８月１日 ‘Numeral Systems in Sign Languages Across the World.’ The XVIIth World Congress of the World Federation of the Deaf, Istanbul, Turkey

2016年１月４日～１月７日 （With Nick Palfreyman）“Counting the difference: Variation in the number systems of Japanese, Taiwan and South Korean Sign Language.” The 12th International Conference on Theoretical Issues in Sign Language Research (TISLR12), Melbourne, Australia

2016年１月30日 「パネルディスカッション いまなぜろう通訳なのか」特定非営利活動団体手話教師センター主催『ろう通訳シンポジウム』鹿児島県産業会館、鹿児島

2016年２月11日 「パネルディスカッション いまなぜろう通訳なのか」特定非営利活動団体手話教師センター主催『ろう通訳シンポジウム』愛媛大学、愛媛

2016年２月21日 「世界の手話における数のしくみ，日本手話系言語における数表現の変化」公開講座『手話類型論』、東京外国語大学語学研究所、東京

・研究講演

2015年６月24日 「世界の手話～数のしくみを通して」関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス、兵庫

2015年６月25日 「世界のろう事情」関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス、兵庫

2015年11月17日 「世界の手話における数のしくみ、日本手話系言語における数表現の変化」東北大学川内北キャンパス、宮城

◎調査活動

・国内調査

2015年５月―鹿児島県（手話話者10名を対象に数詞表現の調査を実施）

2015年６月１日～６月17日―外来研究員アンジェラ野中と日本手話の敬語表現についての調査を実施

・海外調査

2015年12月29日～１月８日―オーストラリア（第12回手話言語の理論的研究に関する国際手話言語学学会において発表）

◎社会活動・館外活動等

2015年６月18日 山形県高畠町立第三中学校 第57回創立記念式 記念講演「世界に広がる仲間・仕事・夢」高畠第三中学校、山形

2016年３月３日 山形県聴覚障害者協会 第32回耳の日記念集会 記念講演「異文化体験を通して広がる夢～フィンランド・イギリスにおけるろう者の生活・仕事・通訳体験などから～」鮭川村農村

交流センター、山形

中野聡子［なかの　さとこ］―――― 研究員

【学歴】筑波大学第二学群人間学類卒業（1994）ギャローデット大学特別研究生（1997.8-1998.8）筑波大学大学院博士課程心身障害学研究科心身障害学専攻修了（2001）**【職歴】**国立身体障害者リハビリテーションセンター学院・手話通訳学科非常勤講師（2000）、東京大学先端科学技術研究センター・科学技術振興特任研究員（2002）東京大学先端科学技術研究センター・科学技術振興特任助手（2002）、共愛学園前橋国際大学国際社会学部国際社会学科非常勤講師（2003）、群馬大学教育学部非常勤講師（2007）、東京大学先端科学技術研究センター特任助教（2007）、日本社会事業大学社会福祉学部非常勤講師（2008-現在）、広島大学アクセシビリティセンター・特任講師（2011）、国立民族学博物館先端人類科学研究部・外来研究員（2015）、国立民族学博物館先端人類科学研究部・プロジェクト研究員（2015.6-2016.3）**【学位】**修士（教育学）（筑波大学・1996）、博士（心身障害学）（筑波大学・2001）**【専攻・専門】**聴覚障害特別支援教育、障害児・者支援、手話通訳・翻訳論**【所属学会】**日本心理学会、日本発達心理学会、日本特殊教育学会、日本発達障害学会、日本社会福祉学会、障害科学会、日本手話学会、日本通訳・翻訳学会、学校心理士協会

【主要業績】

［著書］

中野聡子

2012 「聴覚障害者のアイデンティティ・トラブル――テクノロジーの利用によって生じるコンフリクト」福島智・中邑賢龍編著『バリアフリー・コンフリクト 争われる身体と共生のゆくえ』pp.197-211，東京：東京大学出版会。

中野聡子

2002 『大人の手話・子どもの手話――手話にみる空間認知の発達』東京：明石書店。

［論文］

中野聡子・山田敏幸・上原景子・金澤貴之・フーゲンブーム レイモンド B.・上田一貴・伊福部 達

2014 「聴覚障害者が読みやすい英語音声認識字幕呈示の改行条件に関する研究」日本特殊教育学会『特殊教育学研究』52(4)：275-285。

【受賞歴】

2005 第6回㈳計測自動制御学会システムインテグレーション2005ベストセッション講演賞（井野秀一・黒木速人・中野聡子・堀耕太郎・伊福部達）

1994 国際ソロプチミストベンチャークラブアメリカ第10回日本リジョン賞受賞

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

学術手話通訳養成のための基礎的研究

・研究の目的、内容

日本における手話通訳者の大半は、日本手話とは対極的に位置し，音声から手指へのコード変換である手指日本語により近い，中間型手話であると言われている。しかし、手指英語を使用する聴覚障害大学生であっても、アメリカ手話の通訳のほうが内容に対する理解度が高かったという研究報告がある（Murphy and Fleischer 1976）。そこで、中間型手話を使用しているコミュニティ手話通訳者および聴覚特別支援学校の教員を対象に、手話通訳場面・授業場面で表出される手話の特徴について分析を行った。

・成果

(1) 複合語の訳出において、わかりにくいと評価された表現では、通訳の受け手にとって複合語がひとつの単語と認識される表現方法になっていなかった。手話表現の文法に則っていないことが主な理由であり、具体的には「空間の移動」「リズム」「うなずき」「手の動きの弱化・消失の非生起」が関与していた。

(2) 聴覚特別支援学校の教員の手話表現は日本語の意味やリズムに沿ったものであった。具体的には、CLの不使用や誤用、日本語の複合動詞や補助動詞における辞書形の動詞の手話の組み合わせ、形容詞や副詞にお

ける非手指マーカーの脱落、ロールシフトの不使用がみられた。

◎出版物による業績

［翻訳］

中野聡子

2015 「アメリカ手話と手指コード英語の発達」『オックスフォードハンドブック　デフ・スタディーズ　ろう者の研究・言語・教育』pp.391-411，四日市章・鄭仁豪・澤隆史監訳，東京：明石書店（*Oxford Handbook of Deaf Studies, Language, and Education,* edited by Marc Marschark and Patricia Elizabeth Spencer）

［論文］

中野聡子

2015 「広島県の学術手話通訳養成に関する実践的研究」教育アクセシビリティ研究『広島大学アクセシビリティセンター研究報告書』1：3-12。［査読有］

中野聡子・菊澤律子・市田泰弘・飯泉菜穂子・岡森裕子・金澤貴之・原 大介

2015 「手話通訳における複合語の訳出――通訳スキルの違いにおける比較」日本通訳翻訳学会『通訳翻訳研究』15：17-34。［査読有］

［その他］

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年７月12日 「学術手話通訳のための事前準備」国立民族学博物館学術手話通訳研究事業第２回ミーティング、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年８月27日 「PEPNet-Japan 遠隔情報保障事業について」FD／SD セミナー――遠隔情報保障のこれからを考える、早稲田大学早稲田キャンパス、東京

2015年９月20日 「聴覚障害者による学術場面の手話通訳評価」日本特殊教育学会第53回大会、東北大学川内北キャンパス、宮城

◎上記以外の研究活動

2015年７月　国立民族学博物館学術手話通訳研究事業　第２回ミーティング「学術手話通訳のための事前準備」

◎社会活動・館外活動等

・他機関から委嘱された委員など

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）運営委員、遠隔情報保障事業代表

・非常勤講師

大阪教育大学非常勤講師

拠点研究員

■人間文化研究機構地域研究推進センター・「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点

竹村嘉晃［たけむら　よしあき］――研究員

【学歴】日本大学芸術学部演劇学科卒（1995）、沖縄県立芸術大学大学院音楽芸術研究科音楽学専攻修士課程修了（2001）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2012）**【職歴】**独立行政法人日本学術振興会特別研究員（DC2）（2005）、大阪大学国際企画推進本部特任研究員（2008）、和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師（2009-2013）、国立民族学博物館外来研究員（2010-2014）、奈良大学社会学部非常勤講師（2011-2012）、国立民族学博物館共同研究員（2011-2014）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（2014）**【学位】**博士（人間科学）（大阪大学大学院 2012）、修士（人間科学）（大阪大学大学院 2003）、修士（音楽学）（沖縄県立芸術大学大学院 2001）**【専攻・専門】**芸能人類学、南アジア地域研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本南アジア学会、舞踊学会、民族藝術学会、日本スポーツ人類学会、東洋音楽学会、The Congress on Research in Dance

【主要業績】

竹村嘉晃

2015 『神霊を生きること、その世界――南インド・ケーララ社会における「不可触民」の芸能民族誌』東京：風響社。

［論文］

竹村嘉晃

2015 「踊る現代インド――グローバル化の中で躍動するインドの舞踊文化」三尾 稔・杉本良男編『現代インド6　環流するインドの文化と宗教』pp.159-179，東京：東京大学出版会。

2014 「インド・ケーララ州出身者たちの神霊を介した故地とのつながり」細田尚美編『湾岸アラブ諸国における移民労働者――「多外国人国家」の出現と生活実態』pp.229-250，東京：明石書店。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

南インド社会における身体文化とその担い手たちの社会的世界の変容に関する研究及びダンス・エスノグラフィーに関する理論的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、南インドのケーララ州北部に伝わるテイヤム祭儀を伝統的職業として担う不可触民の実践者たちを照射し、現代社会の動態や祭儀を取り巻く巨視的な位相と、彼らの生計活動や社会とのつながりといった微視的な要素がいかに実践レベルと関係し、影響を与えているのかを彼らの生活世界に足場をおく民族誌的記述から解明することにある。同時に人類学的視点と舞踊・芸能研究的観点を融合させた方法論のもとで、市場経済原理に対する実践者たちの適応戦略の実態を調査し、彼らが技芸や社会的形態を維持しながらもその実践を創発・変容させていく過程を実践レベルから捉える芸能民族誌の新たな方法論を提示することも試みる。また、舞踊関連の科目を有する欧米の高等教育機関において一定の地位を確立しているダンス・エスノグラフィー（舞踊民族誌）という方法論を対象に、近年の研究動向を整理しながらその有益性を検討し、南アジアの芸能に関する人類学及び芸能研究への援用の可能性を探る

・成果

南インド・ケーララ州北部のローカルなヒンドゥー社会では、テイヤムと呼ばれる神霊祭祀を照射し、カーストの伝統的職業として神霊の役割を担う実践者集団に密着した長期のフィールドワークをもとに、現代ケーララ社会におけるテイヤム祭儀の受容動向を多角的に考察した。また、実践者たちの間で生じる軋轢や世代間の齟齬、かれらの社会的世界の変容について、祭儀を取り巻くマクロな動向と技芸などのミクロな実践レベルと関連づけながら、神霊に生きる今日の「不可触民」の生の姿を民族誌として『神霊を生きること、その世界』（2015年5月刊行）を執筆した。

さらに、ダンス・エスノグラフィーの手法を援用する事例として、シンガポールにおけるインド人コミュニティの宗教・芸能実践に注目し、身体文化のグローバルな伝承とインド・欧米への環流、ホスト社会の文化政策、移民たちのアイデンティティ形成と芸能との結びつきなどに関する現調査を実施し、収集したデータを分析している。

◎出版物による業績

［単著］

竹村嘉晃

2015 『神霊を生きること、その世界――南インド・ケーララ社会における「不可触民」の芸能民族誌』東京：風響社。

［共著］

竹村嘉晃

2015 「踊る現代インド――グローバル化の中で躍動するインドの舞踊文化」、三尾 稔・杉本良男編『現代インド6　環流するインドの文化と宗教』pp.159-179，東京：東京大学出版会。

［論文］

竹村嘉晃

2016 「『伝統』を支える多元的位相――シンガポールにおけるインド舞踊の発展と国家」『舞踊学』38：121-138。

［その他］

竹村嘉晃

2015 「旅・いろいろ地球人　神霊を担い、受け継ぐ」『毎日新聞』 7月2日夕刊。

2015 「シンガポールにインド芸能を伝えた男」『月刊みんぱく』39(8)：18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年6月7日 「『伝統』を支える多元性――シンガポールにおけるインド舞踊の発展と移民・国家・多文化主義」、舞踊学会第20回定例研究会、若手研究者によるシンポジウム「アジアにおける伝統の再創造と再構築」、日本大学芸術学部、東京

2015年10月16日 'From Unintended Settlement to the (Re)construction of Tradition: A Case Study of Malayalee Migrant Dancer and the Development of Indian Performing Arts under the Umbrella of Multiculturalism in Singapore'. World Dance Alliance (Singapore), "Asia-Pacific Dance Bridge 2015: Connectivity through Dance, Nanyan Academy of Fine Arts". Singapore.

2015年11月1日 「伝統音楽研究における定量的アプローチの可能性――インド音楽世界の動向を事例として」（田森雅一・小日向英俊・竹村嘉晃・田中多佳子・寺田吉孝）東洋音楽学会パネルディスカッション，東京藝術大学音楽学部，東京

2016年2月16日 'Good Life and Traditional Occupation: Gulf Money, Social Mobility and Ritual Practices in Kerala, South India'. 2015 INDAS-UCB International Conference "Rethinking Religion, Ethics, and Political Economy in India and Sri Lanka:Critical perspectives from Japan". Institute for South Asia Studies, University of California, Berkeley, U.S.A.

・研究講演

2015年4月27日 招聘講演「インド文化の伝播と伝承」第41期大津市民教養大学講座、大津市市民会館、滋賀

2015年7月4日 招聘公演「ヨーガの隆盛をさぐる――現代インドにおける『伝統』の再評価」、第444回国立民族学博物館友の会講演、国立民族学博物館

2015年11月23日 "Evolution of Bharatanatyam and multiculturalism in Singapore" 現代インド地域研究国立民族学博物館拠点2015年度第2回合同研究会、国立民族学博物館

2016年1月16日 「神霊と人をつなぐ『モノ』――インド・ケーララ州のテイヤム祭祀と実践者の生活世界」国立民族学博物館若手共同研究「演じる人・モノ・身体――芸能研究とマテリアリティの　人類学の交差点」（代表者：吉田ゆか子）国立民族学博物館

◎社会活動・館外活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業現代インド地域研究国立民族学物館拠点拠点構成員，国立民族学博物館、若手共同研究「演じる人・モノ・身体――芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」（代表者：吉田ゆか子）共同研究員、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「インドにおける新しいメディア状況と芸能のグローバル化：文化の環流の人類学的研究」（研究代表者：松川恭子）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

立命館大学産業社会学部非常勤講師、「スポーツ人類学」「スポーツ方法実習」、関西大学文学部非常勤講師、「南アジア・内陸アジア論1・2」

豊山亜希［とよやま　あき］――研究員

1977年生。**【学歴】**近畿大学文芸学部文化学科卒（2000）、関西大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了（2002）、関西大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程後期課程修了（2008）**【職歴】**関西大学文学部総合情報学部非常勤講師（2007-2012）、関西大学大学院文学研究科「EU-日本学教育研究プログラム」ポストドクトラル・フェロー（2008）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2009）、国立民族学博物館外来研究員（2012-2014）、宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所客員研究員（2013-現在）、現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（人間文化研究機構地域研究推進センター研究員）（2014-2015）**【学位】**博士（文学）（関西大学 2008）**【専攻・専門】**インド美術史 1）

植民地インドにおける近代化概念の形成と美術の大衆化、2) 戦間期の南アジア・東南アジアにおける日本製タイルの受容実態、3) 古代インドにおける仏教石窟寺院の消長と社会変容【所属学会】美術史学会、美学会、日本南アジア学会、民族藝術学会、社会経済史学会

【主要業績】

［論文］

豊山亜希

2015 「インドのマジョリカ熱――イギリス統治下のインドにおける日本製タイルの消費について」『美術フォーラム21』32：83-88。

2012 「〈土着の伝統〉と〈複製の近代〉――ハヴェーリー壁画にみる英領インド期の大衆美術とマールワーリー・アイデンティティ」『南アジア研究』24：56-80。

Toyoyama, A.

2012 Asian Orientalism: Perceptions of Buddhist Heritage in Japan. In P. Daly and T. Winter (eds.) *Routledge Handbook of Heritage in Asia*, pp.339-349. Oxon: Routledge.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地インドにおける視覚イメージの消費と日本製タイルの受容に関する美術史的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、両大戦間期のインドにおいて、日本製の装飾タイルが都市部の中産階級住宅を中心に愛好された事実に注目し、その実態を明らかにすることによって、消費文化とアイデンティティ表象の相関性を理解することにある。

経済史の領域においては近年、当該時期の日印貿易について詳細な研究が進んでいる。しかし、陶磁器の一品目であるタイルへの注目度は決して高くなかった。実際にはタイルは、綿製品・絹製品・マッチなど他の主要輸出品と比較すると、消費市場における現存率がきわめて高く、実証性の高い研究資料である。

本研究においては特に、1) 現存するタイル張建造物の来歴とタイルの施工状況、2) タイル表面に施されたデザイン、3) タイル裏面（解体された建造物からの収集例によって確認可能）に施された商標、の３点に視座を定め、日本製タイルの消費者層とその嗜好性、および戦前期日本のタイル業界におけるインド市場への販売戦略を分析する。これらの考察を通して、両大戦間期という国際情勢の転換期において、インド社会のアイデンティティはいかなる変容を遂げ、そこに日本がどのように介在したのかを、表象文化の観点から明らかにする。

・成果

研究目的に関連した資料調査を、科学研究費助成事業（若手研究(B)）「植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究」（研究代表者・豊山亜希）に基づき、2015年８月24日～９月15日にかけてイギリス・ロンドンにおいて、また2016年３月６日～15日にかけてシンガポールにおいてそれぞれ実施した。前者においては、大英図書館において植民地インドの戦間期の対日貿易統計を悉皆的に調査し、インドにおける日本製タイルの受容状況を実証するためのデータを収集した。一方、後者においてはシンガポール国立大学図書館において、英領マラヤおよびシンガポールの戦間期の貿易統計を悉皆的に調査するとともに、中国系住民の抗日運動に関する資料と当該時期のインド系商人の動向に関する資料を調査した。その結果、戦間期における日印貿易の緊密なネットワークの構築過程と、そこでタイルが近代的な都市空間の創出を可能にする商品として積極的に取引されたことが明らかとなった。また、取引のアクターであるインド系商人が誰かという点についても具体的に明らかにしうる手がかりを得た。

タイルの受容実態に関しては、インドで二度の調査を実施した。一度目は上述した科研費に基づき、2015年10月19日～24日にかけて、インドの西ベンガル州コルカタにおいて、イギリス統治期に造営された邸宅建築の調査を行ったものである。調査実施期間は現地でヒンドゥー祭礼「ドゥルガー・プージャー」が行われている時期にあたり、各邸宅の祭壇が装飾され一般に公開されていたことから、建築の内部を熟覧する貴重な機会を得た。その結果、イギリス統治期からコルカタ社会のマジョリティを構成してきたベンガル人富裕層が、その家屋建築において積極的に日本製タイルを受容していたことが明らかとなった。イギリス統治期にヒンドゥー祭礼がコミュニティ単位で活性化した時期と、家屋建築内の祭壇にタイル装飾が施された時期はおそらく近接していることが想定され、その相関性と意味を明らかにすることが今後の課題として浮かび上がった。

二度目は「現代インド地域研究」推進経費に基づいて、2016年２月15日～28日にインドのマハーラーシュトラ州ムンバイ、グジャラート州ワーンカーネールおよび同州モールビーにおいて調査を行ったものである。ムンバイにおいてはイギリス統治期の官庁街であるフォート地区の建造物を巡見し、戦間期における日本製タイルの受容実態を調査した。前述したコルカタでは植民地期の建造物が多く原状をとどめているのに対し、ムンバイでは歴史建造物のメンテナンスが積極的に行われてきたことで、むしろ植民地期に施工されたタイルの現存状況が思わしくないことが判明した。しかし一部の建造物では、ペンキ塗りされた壁面の下にタイルの痕跡が確認され、こうした事例を収集してマッピングすることで、タイルの受容層や流通経路が把握できると想定する。またグジャラート州ワーンカーネールとモールビーは、イギリス統治期にはそれぞれ藩王国だった地域で、日本製タイルを規範とした国産タイルの開発が1930年代後半には行われていたことが、昨年までの調査から明らかとなっている。そこで植民地期のタイル受容から国産化へ至る系譜を明らかにする長期的な視点を踏まえて、藩王国期の建造物と現在のタイル産業の状況を予備的に調査した。いずれの資料調査および現地調査においても、タイルを介した戦間期の日印関係の実態を把握する手がかりを得るとともに、次年度以降の調査課題を明確にできた点で大いに成果があった。

◎出版物による業績

［論文］

豊山亜希

2015 「インドのマジョリカ熱――イギリス統治下のインドにおける日本製タイルの消費について」『美術フォーラム21』32：83-88。

2016 「インドの近代化遺産とビジネス・コミュニティ」『現代インド・フォーラム』28：3-9。

2016 「インドのナショナリズムを「扇動」した日本のタイル」『民族藝術学会会報』88：5。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年８月１日 「インドを彩る日本のタイル：インド近代化遺産のもうひとつの物語」第445回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年７月５日 ‘Japanese Majolica Tiles and National Aestheticism in Late Colonial Asia.’ The 9th International Convention of Asia Scholars, Adelaide Convention Centre, Adelaide, Australia

2015年８月３日 ‘Japanese Majolica Tiles in Inter-War India: Modernization, Sanitization, and Beautification of the National Landscape.’ The 17th World Economic History Congress, Kyoto International Conference Center, Kyoto

2015年９月27日 「マールワーリーの近代的アイデンティティとしての日本製マジョリカタイル」日本南アジア学会第28回全国大会、東京大学、東京

2015年10月31日 ‘The Tiling of Indian Modernity: Japanese Majolica Tiles in Marwari Architecture.’ International Workshop “Representing Marwaris in 1920s-30s India.” Otemon Gakuin Osaka-Umeda Sattelite, Osaka

2015年12月12日 ‘Modernity, Hybridity, and New Identities: Architectural Representations of the ‘Black Town’ in Late Colonial Calcutta.’ The 4th International Congress of Bengal Studies, Tokyo University of Foreign Languages, Tokyo

◎調査活動

・海外調査

2015年８月24日～９月15日―イギリス（植民地インドにおけるタイルの普及拡大に関する文献調査）

2015年10月19日～10月24日―インド（コルカタにおける植民地期のタイル建築調査）

2016年２月15日～２月28日―インド（ムンバイにおける植民地期のタイル建築調査およびタイル国産化に関する予備的調査）

2016年３月６日～３月15日―シンガポール（イギリス統治下のアジアにおけるタイルの普及と日本製タイルの受容実態に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（若手研究(B)）「植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究」研

究代表者、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「インド商業集団（マールワーリー）の研究：実体と表象への学際的アプローチ」（研究代表者・中谷純江）研究分担者、科学研究費助成事業（基盤研究(C)）「インドにおける近代的宗教表現の展開とその影響」（研究代表者・冨澤かな）研究分担者、国立民族学博物館文化資源共同研究員、宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所客員研究員

客員教員

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

Narum, Paul［ネルム、ポール］―――――――

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

飯泉菜穂子［いいずみ　なおこ］――――――

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年11月26日　「盲ろう者と楽しむバリアフリー映画」NPO法人バリアフリー映画研究会主催シンポジウム、鹿児島県民交流センター、鹿児島

2016年１月30日　「non-Deaf interpreter（聴の手話通訳者）の立場から」NPO法人手話教師センター主催ろう通訳シンポジウム（鹿児島会場）鹿児島県産業会館、鹿児島

2016年２月６日　「盲ろう者と楽しむバリアフリー映画――バリアフリー映画の可能性を探る」NPO法人バリアフリー映画研究会主催シンポジウム、大津プリンスホテル、滋賀

2016年２月11日　「non-Deaf interpreter（聴の手話通訳者）の立場から」NPO法人手話教師センター主催ろう通訳シンポジウム（愛媛会場）愛媛大学南加記念ホール、愛媛

2016年２月28日　「non-Deaf interpreter（聴の手話通訳者）の立場から」NPO法人手話教師センター主催ろう通訳シンポジウム（宮城会場）仙台シルバーセンター、宮城

2016年３月27日　「舞台・演劇の創作における手話通訳について考える」NPO法人シアターアクセシビリティネットワーク（TA-net）第２回シンポジウム、森下スタジオ、東京

・研究講演

2015年９月８日　「手話通訳を目指すみなさまへ――よい手話通訳とは」東京都日野市手話講習会特別講演、日野市中央福祉センター、東京

2015年10月16日　（教員対象）「手話の魅力」東京都立大塚ろう学校手話研修会、東京都立大塚ろう学校、東京

2015年11月14日　「つながり」埼玉県朝霞市手話通訳者等派遣事務所主催講演会、朝霞市総合福祉センターはあとぴあ、埼玉

・広報・社会連携活動

2015年９月24日　（技術研修）：東京都日野市登録手話通訳者研修会、日野市中央福祉センター、東京

2015年９月27日　（技術研修）：埼玉県川越市登録手話通訳者研修会、川越市総合福祉センターオアシス、埼玉

2015年10月３日　（技術研修）：大阪府松原市登録手話通訳者研修会、松原市総合福祉会館、大阪

2015年10月13日　（技術研修）：東京都武蔵村山市登録手話通訳者研修会、武蔵村山市市民総合センター、東京

2015年10月19日　（技術研修）：東京都江戸川区登録手話通訳者特別研修会、グリーンパレス、東京

2015年11月14日　「通訳に対する評価方法」NPO法人手話教師センター主催『翻訳通訳講師養成講座／通訳理論講座』国立オリンピック記念青少年総合センター、東京

2016年３月12日　（技術研修）：栃木県登録通訳者現任研修（ブラッシュアップ講座）栃木県手話通訳士協会主催、とちぎ福祉プラザ、栃木

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

「わかりやすい字幕ガイドライン技術委員会」（国立研究開発法人・産業技術総合研究所標準基盤研究プロジェクト『映画等映像コンテンツのバリアフリー化に向けた補助字幕設計手法の標準化』）委員、NPO法人シアターアクセシビリティネットワーク（TA-net）「演劇・舞台における手話通訳養成カリキュラム研究会」委員（公益財団法人セゾン文化財団助成事業）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

名古屋市登録手話通訳者選考委員、社会福祉法人聴力障害者情報文化センター評議員、お茶の水女子大学リベラルアーツ科目「手話学入門」聴者ゲストスピーカー、NPO法人バリアフリー映画研究会理事、東京都登録手話通訳者、世田谷区登録手話通訳者

特別客員教員

■先端人類科学研究部・社会環境研究部門

末成道男［すえなり　みちお］―――――――

◎出版物による業績

［論文］

末成道男

2016 「台湾プユマ族――半世紀前の多言語空間を闊達に生きる」『世界の名前』東京：岩波出版社。

2016 A Family and House of Han Chinese: Viewed form My Social Anthropological Research in East Asia., In Han M. and H. Kawai（eds.）*Family, Ethnicity and State in Chinese Culture under the Impact of Globalization*. Los Angeles: Bridge21 Publications

中生勝美［なかお　かつみ］――教授

【学歴】中央大学法学部律学科卒（1979）、明治大学法学研究科博士前期課程修了（1981）、上智大学文学研究科博士後期課程満期退学（1989）**【職歴】**外務省嘱託専門調査員（在香港日本国総領事館）（1987）、日本学術振興会特別研究員（1989）、宮城学院女子大学・短期大学助教授（1992）、和光大学人間関係学部助教授（1995）、大阪市立大学文学研究科助教授（2002）、東洋英和女学院大学教授（2005）、桜美林大学教授（2007）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2016）**【学位】**論文博士（京都大学人間・環境研究科 2014）**【専攻・専門】**社会人類学、中国地域研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本民俗学会、アジア政経学会、現代中国学会、比較家族史学会

【主要業績】

［単著］

中生勝美

2016 『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』東京：風響社。

1990 『中国村落の権力構造と社会変化』東京：アジア政経学会。

［編著］

中生勝美編

2000 『植民地人類学の展望』東京：風響社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

梅棹忠夫資料及び「民族学研究アーカイブズ」に基づく日本人類学史の研究

・研究の目的、内容

人類学史の研究のため、長年、年配の研究者からヒヤリングをおこない、必要に応じて個人的な文書やフィールドノートなどを見せてもらっていた。特に、梅棹忠夫初代館長からは、何度も戦前の西北研究所や大興安嶺探検に関する思い出を聞かせてもらっていた。その過程で、モンゴルのファイルとフィールドノートを見せてもらったが、梅棹館長の没後、アーカイブに整理されて公開された。以前から、国立民族学博物館には、研究者の貴重な個人文書が未整理の状態であることを聞いており、整理されることを待っていたが、近年、その整備が進み、梅棹文書に限らず、「民族学研究アーカイブズ」として公開された。そこで、梅棹文書にかぎらず、幅広くこうしたアーカイブを活用しながら、日本の人類学史を研究したいと考えている。

・成果

研究期間が１月から３月と短かったので、今年度の成果は、梅棹資料ではなく、篠田統文庫と泉靖一アーカイブの資料を用いて、著作としてまとめた『近代日本の人類学史』に直接関係する資料のみを調べた。特に、篠田文庫には、梅棹忠夫が1945年６月に内蒙古草原の共同調査に関連する資料が含まれており、その基礎調査を行った。また、泉靖一アーカイブでは、1943年に岡正雄から泉靖一が民族研究所の研究員に招へいされた経緯から、民族研究所の所内資料が含まれており、これは今までにない貴重な史料であることが判明した。

◎出版物による業績

［単著］

中生勝美

2016 「近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶」東京：風響社。

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

山田孝子［やまだ　たかこ］―― 教授

【学歴】京都大学理学部数学科卒（1970）、京都大学大学院理学研究科動物学専攻博士課程単位修得退学（1977）**【職歴】**京都大学総合人間学部助教授（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科教授（2003）、京都大学名誉教授（2012）金沢星稜大学教養教育部特任教授（2015）**【学位】**博士（理学）（京都大学 1983）**【専攻・専門】**文化人類学、認識人類学、シャマニズム研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本人類学会、American Anthropological Association、International Association for Academic Shamanistic Research

【主要業績】

［単著］

山田孝子

2012 『南島の自然誌――変わりゆく人－植物関係』京都：昭和堂。

2009 『ラダック――西チベットにおける病いと治療の民族誌』京都：京都大学学術出版会。

1993 『アイヌの世界観――「ことば」から読む自然と宇宙』（講談社選書メチエ）東京：講談社。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

多文化空間におけるミクロ・リージョナル共同性構築・維持

・研究の目的、内容

これまでの研究により、1990年代以降の社会状況は、文化的同質性をもたらすとされた近代化やグローバル化の予想に反し、ローカルな文化の価値の見直しと、それにもとづく共同性とコミュニティの再構築に特徴があるという知見を得てきた。これを踏まえ、本研究は、チベット難民をはじめとする越境した人々に焦点をあて、ホスト社会の多文化空間のなかで、どのように自分たちのコミュニティを作り出していくのか、共同性構築と維持の原理を解明することを目的とするものである。

今年度は、科学研究費助成事業（基盤研究（C）「在日チベット人におけるネットワーク形成と共同性の再構築・維持」、2015年度～2017年度、研究代表者：山田孝子）との連携により、在日チベット人における共同性の再構築も視野に入れながら比較の視点から調査を進め、ミクロ・リージョナルな共同性構築・維持の原理についての考察のさらなる深化をはかった。

・成果

JSPS科学研究費助成事業JP15K01874との連携により、在日チベット人社会におけるネットワーク形成、様々なチベット関連イベントに関する実態調査とともに、2015年12月19日～12月31日には、南インド、バイラクッペにあるチベット難民キャンプにおけるダライ・ラマの法話を対象とする現地調査の実施、チベット人社会、日蔵関係におけるジャーナリズムやチベット仏教の役割などに関する情報収集を行った。また、トロント在住チベット人社会における共同性再構築と維持について自己再定置という観点から論考としてまとめるとともに、2014年12月に開催した国際ワークショップ「Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness」の成果をSES（Senri Ethnological Studies）としての出版に向けての編集作業を行った。

その結果、以下の知見を得ることができた。まず、ホスト社会で暮らすチベット人にとって、集いあう場の構築はコミュニティとしての連帯性を維持するために不可欠な要素といえる。トロント在住チベット人社会では、恒久的な集いあう場の構築が可能となっているが、彼らに比べ、数の上で圧倒的に少なく、各地に分散して暮らす現状にある在日チベット人は、インターネット環境という最新のメディアを駆使することによる情報発信、時折の集いあう場の設定などにより、コミュニティとしての連帯性を高めていることが明らかになった。また、日本社会、日本人において、政治的、宗教的など様々な形でのチベットへの関心と支援が、ダライ・ラマの亡命以降継続されてきたことが明らかになった。最後に、国際ワークショップの成果としてまとめているが、多文化空間における共同性再構築・維持にあたっては、歴史性、ネットワーク構築、教育や「伝統」の問題、文脈化、宗教、そしてリーダーシップの存在などが重要なファクターとなりうるという知見を得ることができた。

◎出版物による業績

［論文］

Yamada, T.

2015 Continuity of Shamanism Among the Ladakhi and the Sakha. In D. Eigner and J. Kremer (ed.) *Transformation of Consciousness: Potentials for Our Future,* pp.163-182. Nepal: Vajra Books. ［査読有］

2015 Ladakhi Shaman in the Multireligious Milieu: An Agent of Incorporation and Mediation. *Shaman Journal of the International Society for Shamanistic Research* 23 (1-2): 191-209.［査読有］

2015 "The Source of Good Forces is Located in the East….": Yakut (Sakha) Shamans' Concepts about the Universe and Spiritual Beings. (Translated into Russian by Ekaterina Chiglintseva and Elena Glavatskaya), *Quaestica Rossica* 2015(2): 224-248.

山田孝子

2015 「ホスト社会における難民の自己再定置と共同性再構築・維持――トロント・チベット人社会の事例から」(Self-Reorienting and the Remaking of Communal Connectedness among Refugees in a Host Society: A Case Study of Tibetans in Toronto, Canada)『金沢星稜大学人間科学研究』9(1): 83-90。

◎口頭発表・展示・その他の業績・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年５月30日～５月31日 「難民社会にみるホスト社会との共生戦略――トロント・チベット人社会の事例より」分科会「多元的結合と下からの共生――アジアにおける移民・難民の視点から」大阪国際交流センター（国立民族学博物館）『日本文化人類学会第49回研究大会発表要旨集』p3［査読有］

2015年10月９日～10月13日 'Shamanic Power as an Agent for Reconciling Communal Conflicts.' ISARS (International Society for Academic Research on Shamanism) Conference, Delphi, Greece［Books of Abstracts, International Conference on "Sacred Landscapes and Conflict Transformation: History, Space, Place and Power in Shamanism", Delphi, pp.80-81].

北原次郎太［きたはら　じろうた］――准教授

【学歴】千葉大学ユーラシア言語文化論講座修士課程修了（2002）、千葉大学社会文化科学研究科博士課程修了（2007）**【職歴】**財団法人アイヌ民族博物館（2005）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授（2010）**【学位】**学術博士（千葉大学社会文化科学研究科 2007）**【専攻・専門】**アイヌ民族の宗教文化、物質文化、口承文学**【所属学会】**文化人類学会、口承文芸学会

【主要業績】

［単著］

北原次郎太

2014 『アイヌの祭具　イナウの研究』北海道：北海道大学出版会。

2015 『花とイナウ――世界の中のアイヌ文化』北海道：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

［論文］

北原次郎太

2015 「≪覚書≫ ikupasuy の口舌型式再検討」『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』pp.103-134。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化と日本およびその周辺諸文化の比較研究

・研究の目的、内容

アイヌ民族の文化と、日本国および周辺諸国の文化、とくに宗教文化と音楽文化について比較研究を行う。民博に蓄積された資料を元に、これらの文化における祭具類・楽器類の製作技法および使用法の比較を通じ、ア

ジアにおけるアイヌ文化の位置付けを検討し、当該文化の形成過程や周囲との類似性・独自性について考察する。

・成果

東アジアの撥弦楽器、擦弦楽器とアイヌの弦楽器の奏法、各部の形状と機能を比較した。それらの結果の一部を（一財）アイヌ民族博物館が刊行するWebマガジン『月刊シロロ』で公開した。

◎出版物による業績

［その他］

北原次郎太

2015 「《シンリッウレシパ（祖先の暮らし）7》北方の楽器たち④」『月刊シロロ9月号)』（http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201509.html）

2015 「《シンリッウレシパ（祖先の暮らし）8》北方の楽器たち⑤」『月刊シロロ11月号』（http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201511.html#07）

陳 天璽［チェン　ティェンシ］――准教授

1971年生。**【学歴】**筑波大学第三学群国際関係学類卒（1994）、香港中文大学国際交流計劃学部修了（1995）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士前期課程修了（1996）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士後期課程修了（2000）**【職歴】**ハーバード大学フェアバンクセンター東アジア研究所客員研究員（1997）、筑波大学社会科学系日本学術振興会特別研究員（1999）、ハーバード大学法学部東アジア法律研究所客員研究員（1999）、東京大学総合文化研究科日本学術振興会特別研究員（2001）、杏林大学社会学科非常勤講師（2001）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　共同研究員（2002-）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科嘱託講師（2009-）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2010）、早稲田大学国際学術院准教授（2013）、早稲田大学国際学術院教授（2016.4-）**【学位】**国際政治経済学博士（筑波大学大学院博士課程国際政治経済学研究科 2000）**【専攻・専門】**文化人類学、移民・移動者研究**【所属学会】**移民政策学会、日本華僑華人学会、American Anthropology Association、日本文化人類学会、アジア政経学会

【主要業績】

［単著］

陳 天璽

2011 『無国籍』（新潮文庫）東京：新潮文庫。

［編著］

陳 天璽・近藤 敦・小森宏美・佐々木てる編

2012 『越境とアイデンティフィケーション――国籍・パスポート・IDカード』東京：新曜社。

陳 天璽編

2010 『忘れられた人々――日本の「無国籍」者』東京：明石書店。

【受賞歴】

2002　第1回井植記念「アジア太平洋研究奨励賞」

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アジアにおける移民と文化

・研究の目的、内容

本研究は主に、アジアにおける移民とディアスポラ、そして彼らの文化とアイデンティティに注目する。なかでも特に、華僑華人、そして日本におけるインドシナ難民やビルマ難民の2世に注目している。彼らの国籍、そして身分証明のあり方、アイデンティフィケーションとアイデンティティの齟齬ついて情報収集、インタビュー調査を行う。また、アジアにおける移民の子どもたちの国籍の推移、教育環境、アイデンティティについても情報収集、研究調査を行う。

・成果

民博共同研究「人の移動と身分証明の人類学」の研究成果を論集にまとめ、北海道大学出版会より刊行すべく編集作業を進めた。2016年中に『パスポート学』（案）として出版する予定である。

◎出版物による業績

［論文］

Chen, T.(Lara)

2016 Born to Be Stateless, Being Stateless: Translational Marriage, Migration and the Registration of Stateless People in Japan, In Sari K. Ishii (ed.), *Marriage Migration in Asia: Emerging Minorities at the Frontiers of Nation States*, pp.187-201. Singapore: National Singapore Press.

［その他］

陳 天璽

2015 「中華街は食べ放題・食べ歩き天国？」『月刊東亜』576(6)：82-83。

2015 「人のつながりが拠り所になる」『We ――くらしと教育をつなぐ』197(8)：16-25。

2015 「日中のはざまで育ち、育て、育つ」『月刊東亜』579(9)：88-89。

2015 「孫文と横浜」『月刊東亜』582(12)：80-81。

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

共同研究会「人の移動と身分証明の人類学」代表

・社会活動・館外活動等

移民／難民のシティズンシップ――国家からの包摂と排除をめぐる制度と実践――（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究科）、NPO法人無国籍ネットワーク代表、APPRN（アジア太平洋難民権利ネットワーク）無国籍ワーキンググループ代表、日本華僑華人学会理事、移民政策学会理事

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

市田泰弘［いちだ　やすひろ］――教授

1962年生。**【学歴】**立教大学文学部教育学科卒（1986）、立教大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了（1989）**【職歴】**名古屋文化学園言語訓練専門職員養成学校専任教員（1989）、国立身体障害者リハビリテーションセンター更生訓練所生活訓練専門職（1991）、国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官（1996）、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科主任教官（2010）**【学位】**文学修士（立教大学 1989）**【専攻・専門】**手話言語学**【所属学会】**日本言語学会、日本手話学会、日本認知言語学会、日本通訳翻訳学会

【主要業績】

［共著］

木村晴美・市田泰弘

2014 『改訂新版・はじめての手話』東京：生活書院。

［論文］

Ichida, Y.

2010 Introduction to Japanese Sign Language: Iconicity in Language. *Studies in Language Sciences* 9: 9-32.

Sakai, K., Y. Tatsuno, K. Suzuki, H. Kimura, and Y. Ichida

2005 Sign and Speech: Amodal Commonality in Left Hemisphere Dominance for Comprehension of Sentences. *Brain* 128(6): 1407-1417.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話の特徴をふまえた手話言語学教授法に関する研究

・研究の目的、内容

現在、大学および大学院レベルで手話言語学の講義を行うための日本語による教科書は存在しない。また、国内の大学において手話言語学を導入するにあたっては、日本手話の言語事実を取り込むのが適当であると考えるが、その教授法はまだ確立していない。近年の手話言語学に対する関心の高まりなどから、各単年度の講義の教授法を踏まえたシラバスの内容の検討が急務となっている。本研究では、複数の大学において実施する手話言語学の講義を通して、シラバス案の策定とその実効性の検証を行い、その結果を長期的には、日本語による手話言語学講義のための教科書執筆という形に反映させることを目的とする。具体的な内容としては、シラバスの検討においては受講学生の一般言語学の基礎知識の程度に合わせた内容および用例の選択を中心に、実効性の検証については主として受講学生の評価の集計によって行う。

・成果

東京大学にて「日本手話：文法と意味」の講義を担当、シラバス案を策定し実践した。従来と同様、社会言語学的背景について扱う導入と、ヴォイス⇒アスペクト⇒モダリティという文法カテゴリーを基盤とした配列による本編からなるシラバス案を採用した。昨年度の反省にもとづき、日本手話の言語事実から出発し、その解釈にあたって文法カテゴリーとの関連にふれる、という形態をとった。おおむね好評であったが、手話言語特有の言語事実を音声言語のそれと比較するという、より大きな観点への拡張が不十分であるという指摘があった。手話言語のもつ「身体」と「手指」と「空間」という媒体が、文法的システムにどのように影響しているのか、という観点を、もっと強調すべきであると感じた。来年度のシラバス策定に役立てたい。

そのほか、東北大学のリレー講義にて手話言語の文法に関する概論を担当した。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・手話言語学出張講義

2015年通年講義　Sセメスター（15日間）「日本手話：文法と意味」（学部）／「言語学特殊講義」（大学院）、東京大学

2015年10月20日　「手話言語学入門：音声言語と手話言語、日本語と日本手話」、東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」、東北大学

清水郁郎［しみず　いくろう］――教授

1966年生。**【学歴】**芝浦工業大学工学部（1990）、芝浦工業大学大学院建設工学専攻修了（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了（2001）**【職歴】**大同工業大学工学部建築学科助教授（2005）、芝浦工業大学工学部建築工学科准教授（2009）、芝浦工業大学工学部建築工学科教授（2013）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2001）**【専攻・専門】**建築学（計画）、東南アジア研究、物質文化研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本建築学会

【主要業績】

［単著］

清水郁郎

2005 『家屋とひとの民族誌――北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌』東京：風響社。

［編著］

日本建築学会編

2012 『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』東京：風響社。

［論文］

清水郁郎

2014 「映画をめぐる生の交差――時間と空間の共有がもたらすもの」村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学――人類学の新たな実践へ』pp.158-174, 東京：せりか書房。

【受賞歴】

1992　第3回日本建築学会優秀修士論文賞

【201年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジアにおける木造建築の建設にかかわる比較研究

・研究の目的、内容

本研究は、東南アジア大陸部のタイ系を中心とする民族集団の木造住居や寺院について、建設にかかわる比較研究を行うことを目的とする。研究においては、現地調査を実施し、そこで得られた資料を中心に使う。また、国立民族学博物館所蔵の資料を適宜利用し、かつ文献資料とあわせて、当該地域の建築生産の現在的様態を明らかにする。そのさいには、建築物自体の物理的特徴に加え、建設にかかわる道具の伝播や材料の加工方法に留意し、それらによって産み出される建築構法にも着目する。さらに、建築生産にかかわる職能や社会組織の把握も行う。これらを統合して、当該地域における木造建築生産の整理・分類と理解の一助としたい。

現地調査については、科学研究費助成事業（基盤研究(B)）『東南アジア諸国の建築生産システムの実態および現代化プロセスに関する研究』（代表：蟹澤宏剛）、科学研究費助成事業（基盤研究(A)）『伝統的生産システムによる保存手法の研究――熱帯地域木造建造物保存の国際共同研究』（代表：上北恭史）の分担者配分金を使って実現する予定である。

・成果

2015年９月に、タイ王国プレー県ムワン郡のルー人の村、チェンマイ県サンパトーン郡のクーン人の村で、それぞれ１週間程度の現地調査をおこなった。現地調査では、実測による住居の各種図面と村落全図の作成を行い、また、建設道具の把握、建築生産の様態について調べ、住居の形式、構法、間取り、職能などを明らかにした。さらに、ルーについては、東南アジアに広く分布していることが知られており、そのために故地である中華人民共和国雲南省西双版納とラオス人民民主共和国ルアンパバーン県の事例を文献と過去の研究成果から参照し、タイに居住するルーの居住との比較研究を行った。このほかに、人体寸法が実際にどのように住居建設に使われているのか、また、社会経済的な変化が著しいタイにおいて、住民の生活がどのように変わったのかを、生活財の調査などから明らかにした。

2016年２、３月には、タイの首都バンコクとその近隣諸県で、タイ系集団の伝統的住居や村落空間がどのように維持、保存されているのかを調査した。また、同時期に、ラオスのルアンパバーン郊外のルーの村で、伝統的住居の変容と保存、維持の様態について調査を行った。

◎出版物による業績

［論文］

清水郁郎

2016 「暗闇の住まいが語りかけたこと　これからの建築に向けて」『物質文化』

Shimizu, I.

2016 Vernacular architecture of Lao P.D.R.: Case of the house of Lue in Luang Prabang. In T. Kubota, H. B. Rijal and H. Takaguchi (eds.), *Sustainable Houses and Living in Hot-Humid Climates of Asian Cities*. Tokyo: Springer Japan.

2016 Vernacular architecture of Thailand: Case of Chiang Mai rural area. In T. Kubota, H. B. Rijal and H. Takaguchi (eds.), *Sustainable Houses and Living in Hot-Humid Climates of Asian Cities*. Tokyo: Springer Japan.

［その他］

清水郁郎

2015 「村落の空間組織の特徴――タイ北部低地社会の居住空間に関する研究　その１」『日本建築学会学術講演梗概集（関東）pp.1197-1198。

2015 「ジェンダーから見た空間の使い方に関する研究――タイ北部低地社会の居住空間に関する研究　その２」『日本建築学会学術講演梗概集（関東）』pp.1199-1200。

2015 「ルーの住居における儀礼過程の象徴分析――東南アジア大陸部諸社会の住居の民族誌的建築研究　その１」『日本建築学会学術講演梗概集（関東）』pp.1205-1206。

2015 「住まいにおける宗教的空間に関する研究――東南アジア大陸部諸社会の住居の民族誌的建築研究　その２」『日本建築学会学術講演梗概集（関東）』pp.1207-1208。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年９月19日　'Spatial analysis on house and village, especially focusing on religious practice and gender relationship.' Special Lecture on The Research Project 2014 at THN Village, Department of Architecture and Environmental Design, Maejo University, Chiang Mai, Thailand

2015年７月４日　「北タイの山地社会における暗闇の住まい」『南山大学人類学研究所公開シンポジウム　建築人類学の行方』南山大学人類学研究所、愛知

◎調査活動

・国内調査

2015年８月５日～８月10日―沖縄県宮古島市（伊良部島における住宅と村落空間に関する調査）

2015年８月18日～８月26日―宮崎県東臼杵郡椎葉村（椎葉村の住宅と村落空間に関する調査）

2015年12月４日～12月６日―宮崎県東臼杵郡椎葉村（神楽の調査）

・海外調査

2015年９月７日～９月21日―タイ王国チェンマイ県とプレー県（タイ系集団の住宅と村落空間に関する調査）

2016年２月27日～３月13日―タイ王国バンコク特別市（サムット・ソンクラム県、アユタヤー県、ウタイタニー県における水上居民の住宅調査、ラオス人民民主共和国ルアンパバーン県における世界遺産の調査、近郊農村におけるタイ系集団の住宅と村落空間に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））（海外学術調査）／研究課題名：伝統的生産システムによる保存手法の研究―熱帯地域木造建造物保存の国際共同研究（研究課題番号15H02636）・分担者、科学研究費助成事業（基盤研究（B））（一般）／研究課題名：東南アジア諸国の建築生産システムの実態および現代化プロセスに関する研究（研究課題番号：26289216）・分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本建築学会・住宅計画運営委員会・幹事、日本建築学会・建築計画委員会・幹事、日本建築学会建築計画委員会・比較居住文化小委員会・委員

関本照夫［せきもと　てるお］―――― 教授

1947年生。**【学歴】**東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1976）**【職歴】**国立民族学博物館第五研究部助手（1976）、一橋大学社会学部講師（1981）、同学部助教授（1983）、東京大学東洋文化研究所助教授（1987）、同研究所教授（1991）、同研究所長（2006-2009）、東京大学を定年退職（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任教授（2010-2013）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2013）**【学位】**社会学修士（東京大学 1974）**【専攻・専門】**仕事の人類学、布、工芸、物質文化、東南アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、Association for Asian Studies

【主要業績】

［編著］

Sekimoto, T.（ed.）

2000　*Handicrafts and Industrial Development in Southeast Asia*（Toyota Foundation Research Grant Report）. Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.

［共編著］

関本照夫・船曳建夫編

1994　『国民文化が生れる時――アジア・太平洋の現代とその伝統』東京：リブロポート。

Sekimoto, T., Semiarto Aji Purwanto and Hanantiwi Adityasari（eds.）

2003　*Handicrafts in the Age of Global Economy: Indonesia and Japan*. Depok: Center for Japanese Studies, University of Indonesia.

【受賞歴】
1983　第14回澁澤賞

【2015年度の活動報告】
◎各個研究
・研究課題
布と人間の人類学的研究
・研究の目的、内容
1）2011年１月～2013年３月の間に実施した機関研究・マテリアリティの人間学のプロジェクト「布と人間の人類学的研究」の成果刊行のため、編集作業を進める。
2）インドネシアのバティック染物業の研究を基軸に、物質性の人類学、布と人間の人類学について、執筆作業を行う。
・成果
学術雑誌に論文として発表するため、準備を進めている。『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定。
◎社会活動・館外活動
・他機関から委嘱された委員など
財団法人東洋文庫研究員、国立大学法人教育研究評価委員会委員

高野明彦［たかの　あきひこ］――教授

1956年生。**【学歴】**東京大学理学部教学科卒（1980）**【職歴】**㈱日立製作所（1980）、東京大学大学院理学系研究科非常勤講師（1996）、国立情報学研究所ソフトウェア研究系教授（2001）、東京大学大学院情報理工学系研究科教授（2002-）、国立情報学研究所情報学資源研究センター長（2005）、特定非営利活動法人連想出版理事長（2005-）、国立情報学研究所コンテンツ科学研究系教授（2006年-）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター長（2006）、立命館大学アートリサーチセンター客員教授（2012）、㈱出版デジタル機構最高技術顧問（2012）**【学位】**博士（理学）（東京大学大学院理学系研究科2000）**【専攻・専門】**連想情報学、関数プログラミング、プログラム変換**【所属学会】**ACM、日本ソフトウエア科学会、情報処理学会

【主要業績】
［監修・共著］
高野明彦
2015　『検索の新地平』（角川インターネット講座第８巻）（監修・共著）東京：角川学芸出版。
高野明彦・吉見俊哉・三浦伸也
2012　『311情報学――メディアは何をどう伝えたか』東京：岩波書店。
高野明彦・太田 光・田中裕二
2008　『検索エンジンは脳の夢を見る――連想情報学』東京：講談社。

【受賞歴】
2013　岩瀬弥助記念書物文化賞「デジタル技術による書物文化の開発」
2011　科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）「連想情報技術による自発的学びのための情報理解増進」

【2015年度の活動報告】
◎各個研究
・研究課題
フォーラム型情報ミュージアムにおける情報の統合と発信に関する研究
・研究の目的、内容
フォーラム型情報ミュージアムの実現へ向けて、収蔵資料に関する情報を研究者からだけでなく、他のミュージアムやソースコミュニティからも収集して、多様な視点からの分析を可能にする情報システムが備えるべき基本機能について検討する。

・成果

国際ワークショップ「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて」に参加して、北米や欧州における民族学博物館とソースコミュニティの熟覧による情報の獲得と得られた知識のオンライン発信の現状について調査した。画像資料や映像資料を蓄積する研究プラットフォーム構築が地域研究の進展に大きく寄与できるとの知見を得て、それに基づき「地域研究画像デジタルライブラリ」事業の提案を行った。

◎出版物による業績

［単著］

高野明彦監修・共著

2015 『検索の新地平』（角川インターネット講座第８巻）東京：角川学芸出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2016年２月９日 「我が国のデジタル・アーカイブの諸状況――海外と対比して」東京大学大学院情報学環DNP学術電子コンテンツ研究寄附講座開設記念シンポジウム『これからの学術デジタル・アーカイブ』東京大学福武ホール、東京

◎社会活動・館外活動等

内閣官房知的財産戦略本部、デジタルアーカイブの連携に関する実務者協議会、委員（座長）、観光庁・文化庁、文化財の英語解説のあり方に関する有識者会議、委員（座長）、内閣府、大規模災害情報の収集・保存・活用方策に関する検討会（座長：御厨貴）、委員、MANGAマンガ・アニメ・ゲームに関する議員連盟（幹事長：馳浩）、MANGAナショナルセンター構想に関する有識者会議、委員，日本動画協会、日本のアニメーション100周年プロジェクト推進会議、アドバイザー，東京文化資源会議、文化資源連携ビジョン策定委員会、委員

林　史樹［はやし　ふみき］――――――

半島を中心に、戦中・戦後期に人々が大移動することで、どのように食が伝播していったのかを明らかにしようとした。とくに東アジア全体を視野に入れる上で、中華料理として分類されやすい小麦粉食の波及・定着について研究調査を行った。

・成果

今年度は、2015年８月から開催された特別展「韓国と日本の食文化と博物館」に合わせて刊行した解説本『韓国食文化読本』（国立民族学博物館、朝倉敏夫・守屋亜記子との共著）の執筆を中心に成果を公表した。また、展示企画に対してもそこで得た知見を反映させ、運営の末端に加わった。また2013年度から続く、植野弘子教授（東洋大学）を研究代表者とする「帝国日本下における人と物の移動」の研究プロジェクトとも引き続き連動させ、資料収集と国内外の調査を行っている。調査などを通じてわかってきたのは、粒食中心の食生活圏では、粉食はあくまでも補完的、二次的な地位にとどまってきたのが、徐々に郷土食、人気食へと変貌を遂げたことである。とくに日本の場合、救荒食が日常食、そして郷土食（あるいはＢ級グルメ）へと変わる過程で料理が洗練化されるなどの段階があった。これについてはまだ検証が必要であるが、全国的な「ふるさと創成」が大きく関わっているかもしれない。韓国の状況ではそこに日本による統治、アメリカからの小麦粉援助が外的要因として大きく関わったことである。課題として残るのは、帝国日本下において中華料理を中心とする小麦粉食が各地に普及していく際、たとえば日本と韓国・朝鮮において小麦粉食が定着していく過程とどのように違いがみられ、その違いどこからくるのかといった問題である。また、中華料理との比較し、当時の朝鮮半島において洋食というカテゴリがどのように定着していったのかも視野に入れていく必要性を感じた。

◎出版物による業績

［共著］

朝倉敏夫・林 史樹・守屋亜記子

2015 『韓国食文化読本』p.223, 大阪：国立民族学博物館。

［論文］

林 史樹

2016 「戦争期にともなう食の伝播に関する一考察：韓国における粉食を中心に」『神田外語大学紀要』28：311-325。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・展示

2015年８月27日-11月10日　特別展「韓日食博――わかちあい・おもてなしのかたち」国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2015年７月10日～７月12日―長野県上田市丸子地区（専売品の栽培技術の普及について）、長野県下伊那郡阿智村満蒙開拓平和記念館（引き揚げ経験者に対する共同インタビュー及びシンポジウム）

2016年１月30日～１月31日―山口県下関市（コリアタウンで食の伝播に関する調査、山口大学で研究会）

2016年２月22日～２月24日―岩手県盛岡市（麺文化の普及に関するインタビュー調査と資料収集）

・海外調査

2015年12月24日～12月29日―台湾：台北・台南（科研共同調査及び国際シンポジウムへの参加）

2016年２月９日～２月13日―大韓民国：仁川・ソウル（中華料理の伝播に関するインタビュー及び民博との共同企画展「飯床之交（飯膳の交わり）」見学・意見交換）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（A））「帝国日本のモノと人の移動に関する人類学的研究――台湾・朝鮮・沖縄の他者像とその現在」（研究代表者：植野弘子）研究協力者

◎社会活動・館外活動等

日本文化人類学会編集委員、韓国朝鮮文化研究会運営委員

飯髙伸五［いいたか　しんご］――――――

第17回総会・シンポジウム、早稲田大学戸山キャンパスにて）を行った。

◎出版物による業績

［論文］

Iitaka, S.

2015 Remembering Nan'yō from Okinawa: Deconstructing the Former Empire of Japan through Memorial Practices. *History and Memory* 27(2): 126-151.［査読有］

飯高伸五

2016 「セイネンダンのユーショーキ――日本統治下パラオにおける現地人若年層「動員」の記憶」『高知県立大学　文化論叢』4：71-84。［査読有］

◎口頭発表・展示・その他の業績

2015年５月29日 「旧植民地からの「応答」と人類学的「説明責任」――ミクロネシア・パラオでのフィールドワークの経験から」日本文化人類学会課題研究懇談会応答の人類学第19回研究会、新大阪丸ビル本館

2016年１月30日 「帝国後の混血のゆくえ――ミクロネシア「日系人」の越境実践と再生産される親日言説」早稲田大学文化人類学会第17回総会・シンポジウム、早稲田大学戸山キャンパス、東京

2016年３月５日 「林鉄遺構を活用したフィールドワーク教育」高知人文社会科学会公開シンポジウム「魚梁瀬森林鉄道」を通じた地域再考と地域振興」、集落活動センターなかやま、高知

◎調査活動

・海外調査

2016年２月９日～２月13日―パラオ共和国（太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する調査および資料収集を実施。）

2016年３月18日～３月22日―米領グアム（太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する調査および資料収集を実施。）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（C）「ミクロネシアの太平洋戦争戦跡のレジャー化とヘリテージ化に関する観光人類学的研究」（2015年４月１日～2018年３月31日（予定））研究代表者、慶應義塾大学東アジア研究所2015年度プロジェクト「歴史生態学と歴史人類学の節合による景観史研究の拡張――アジア太平洋のフィールドワークから発想する」（研究代表者：山口 徹）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事・評議員、NPO法人地域文化資源ネットワーク理事、高知県土佐郡大川村村史編纂アドバイザー

・他大学の客員、非常勤講師

土佐リハビリテーションカレッジ「人間科学概論」

大杉 豊［おおすぎ　ゆたか］――――――

［共編］
大杉 豊・関 宜正編
2010 『わたしたちの手話学習辞典』東京：財団法人全日本ろうあ連盟出版局。
［論文］
大杉 豊
2012 「日本の手話における語彙の共通化の現象」『手話学研究』21：15-24。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語学に関する研究ネットワーク拠点の形成にむけての現状調査

・研究の目的、内容

学術的により堅固な基盤をもって手話言語学研究を推進するための研究ネットワーク拠点を形成することを長期的な目標とし、今年度は昨年度に引き続き、国内外の手話言語学研究の現状及び課題、その背景的要因の整理を継続することを目的とする。方法としては、人間文化研究機構連携研究として「第四回手話言語と音声言語に関するシンポジウム」を９月20・21日に実施する準備過程等で民族学博物館プロジェクト研究員を始めとする研究者との情報・意見交換を行う。筑波技術大学で継続している「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業では、学部講義・大学院講義・学術発表の動画及び言語学情報を付与した通訳動画で構成する手話通訳研修ウェブサイトを構築する。

・成果

人間文化研究機構連携研究として「言語の記述・記録・保存と通言語種類型論」をテーマとする「第四回手話言語と音声言語のシンポジウム」に関わる中で、国内外の手話言語学研究の現状および課題、その背景的要因について情報・意見交換を行ったが、この成果を出版物にまとめるにはいたらなかった。

一方、筑波技術大学の「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業では、国立民族学博物館の「関西地域学術手話通訳研究事業」を部分的（人材派遣・情報保障等）に支援する中で得た知見を活かし、学部講義・大学院講義・学術発表の動画及び言語学情報を付与した通訳動画で構成する手話通訳研修ウェブサイトの試行版を構築することができた。

◎出版物による業績

［共著］
青柳美子・浅野順一・浅利義弘・池上芳夫・石川 渉・石倉義則・伊藤芳子・植野圭哉・江原こう平・大内祥一・大瀧浩司・大杉 豊・奥田しのぶ・加藤 薫・亀田明美・小畑修一・金原輝幸・黒崎信幸・小出真一郎・斎藤千英・鈴村博司・高田英一・高塚千春・高塚 稔・高橋幸子・竹島春美・田中保明・長野秀樹・中山真理・那須英彰・西滝憲彦・浜野秀子・早瀬久美・曲 真理子・前田真紀・本村順子・柳 喜代子・山口健二・山本直樹・吉岡真人・吉田正雄・吉野木の実・若杉義光・若浜ひろ子
2015 『わたしたちの手話　新しい手話2016』東京：一般財団法人全日本ろうあ連盟。
［共編］
大杉 豊・関 宜正編
2015 『私たちの手話学習辞典Ⅰ改訂版』東京：一般財団法人全日本ろうあ連盟。
［その他］
大杉 豊・坊農真弓
2015 「手話人文学の構築に向けて(2)――手話言語コーパスプロジェクト」『手話・言語・コミュニケーション』2：99-136，京都：文理閣。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年11月３日　Gender difference in socioeconomic and health status among Japanese deaf adults: Results from the national level survey in Japan（邦題：聴覚障害者の社会経済的状態と健康状態におけるジェンダーの違い：全国レベルの調査の結果から）（小林洋子，田宮菜奈子との合同発表）2015 American Public Health Association Annual Meeting and Expo.、シカゴ、アメリカ

・研究講演

2015年７月４日　「手話言語条例を考える」浜松市聴覚障害者協会、静岡県浜松市

2015年７月16日　「手話言語法案について」茨城県身体障害者協会、茨城県水戸市

2015年８月８日　「Japanese Sign Language Corpus Project」Institute on Disability and Public Policy for the ASEAN Region、クアラルンプール、マレーシア

2015年８月22日　「情報通信技術の発展と『ろう者学』」情報処理学会アクセシビリティ研究会第１回研究会、国立情報学研究所、東京

2015年９月５日　「昔の手話，今の手話，そして新しい手話」九州聴覚障害者団体連合会、宮崎県宮崎市

2015年11月３日　「手話とろうあ者の生活について」「日本の手話創作について」福岡県聴覚障害者協会、福岡県春日市

2015年12月16日　「ろう者の言語として発展し続ける手話」三重県議会、三重県津市

2016年３月６日　「手話の方言――地域と年齢によって違う手話表現」沖縄県聴覚障害者協会、沖縄県那覇市

2016年３月21日　「移民の生活記録に学ぶ」長崎県手話通訳士協会、長崎県東彼杵町

◎調査活動

・国内調査

2015年７月10～７月12日―石川地域の手話言語データ収集

2015年10月29～10月31日―富山地域の手話言語データ収集

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「ろう者コミュニティの視点による日本手話語彙体系の記録・保存・分析」研究代表者、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター「東日本大震災における聴覚障害学生への支援経験をベースとした大学間コラボレーションスキームの構築」事業「情報保障に関する研究基盤構築：日本語――手話コーパスの作成」研究代表者、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター「聴覚・視覚障害学生のイコールアクセスを保障する教育支援ハブの構築――情報保障と障害特性に基づく教育方法の協調的開発と資源共有に向けて」事業「ろう者学教育コンテンツ開発」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

社会福祉法人全国手話研修センター日本手話研究所事務局長、NPO 法人日本 ASL 協会会長、財団法人現代人形劇センター理事、Executive committee member, Institute on Disability and Public Policy for the ASEAN Region、鳥取県手話パフォーマンス甲子園実行委員会委員

・非常勤講師

「聴覚障害児指導法概論」国立大学法人群馬大学教育学部（集中講義）、「ろう者文化と教育」国立特別支援教育総合研究所特別支援教育専門研修（単発講義）

高城 玲［たかぎ　りょう］――――――

［共編著］

宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城 玲共編

2016 『DVDブック 甦る民俗映像――渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』東京：岩波書店。

［論文］

高城 玲

2012 「国家統治の過程とコミュニティ――タイの国王誕生日と村民スカウト研修の相互行為」平井京之介編『実践としてのコミュニティ――移動・国家・運動』pp.187-217，京都：京都大学学術出版会。

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

タイにおける社会運動の相互行為に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、現在変動の中にあるタイ社会の動態を、主に社会運動に着目し、鳥瞰図的なマクロな視点のみではなく、人々が不断に繰りひろげる相互行為の過程というミクロな視点から人類学的に記述し探求することを目的とする。特に、タイ北部チェンマイ県や中部ナコンサワン県、バンコクなどにおいて、都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査と資料収集を行い、分析を進める。

・成果

本年度は、タイ北部チェンマイ県やバンコクなどにおいて、都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査、資料収集を計２回にわたって行った。タイでは2014年のクーデター以降、軍部主導の政権運営によって、政治・社会運動が統制されるという大きな変化を強いられている。本研究では、クーデター以後、政治・社会運動が統制下におかれていく現状を現地調査によって把握するとともに、クーデター以前の政治的対立状況下における政治・社会運動が如何に展開されていたのかに関して、人々の相互行為というミクロな視点に着目した現地調査と資料収集を行い、その分析を進めた。

◎出版物による業績

［共編著］

宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城 玲編著

2016 『DVDブック 甦る民俗映像――渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』東京：岩波書店。

［論文］

高城 玲

2016 「方法としての現地上映会――現代に生きる映像資料」宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城 玲共編『DVDブック 甦る民俗映像――渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』pp.99-114，東京：岩波書店。

［その他］

高城 玲

2016 「書評：辛島理人著『帝国日本のアジア研究――総力戦体制・経済リアリズム・民主社会主義』」『神奈川大学アジア・レビュー』3：164－166。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年10月13日 「現代タイにおける政治的対立の歴史的背景――政治・社会運動と地方農村部」神奈川大学アジア研究センター公開研究会、神奈川大学

2015年12月４日 「台湾『パイワン族の採訪記録』（1937）の現地上映会――現代に生きるアチックフィルム・写真」国際シンポジウム「帝国日本と台湾の眼差し――非文字資料の利用」国立台湾大学

◎調査活動

・海外調査

2015年８月19日～８月26日―タイ王国チェンマイ県およびバンコク（タイ農村部および都市部における社会運動に関わる現地調査）

2016年２月13日～２月24日―タイ王国チェンマイ県およびバンコク、ミャンマー　ヤンゴン（タイ農村部と都

市部、およびミャンマーにおける社会運動に関わる現地調査）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

神奈川大学共同研究「帝国とナショナリズムの言説空間――国際比較と相互連携の総合的研究」共同研究者

■文化資源研究センター・民族学応用教育研究部門

前川啓治［まえがわ　けいじ］―――― 教授

【学歴】大阪大学文学部卒（1980）、大阪大学人間科学研究科博士前期課程修了（1983）、大阪大学人間科学研究科博士後期課程単位取得退学（1989）**【職歴】**筑波大学歴史・人類学系講師（1992）、静岡大学人文学部助教授（1996）、筑波大学人文社会科学研究科准教授（2000）、筑波大学人文社会科学研究科教授（2004）**【学位】**博士（文学）（筑波大学 1993）**【専攻・専門】**文化人類学・民族学**【所属学会】**日本オセアニア学会、日本文化人類学会

【主要業績】

［単著］

前川啓治

2004 『グローカリゼーションの人類学――国際文化・開発・移民』東京：新曜社。

［編著］

前川啓治編

2012 「はじめに――文化の構築とインターフェースの再帰性」『カルチュラル・インターフェースの人類学――「読み換え」から「書き換え」の実践へ』東京：新曜社。

［論文］

Maegawa, K.

2015 Dynamics of Culture in Interface: Theoretical Consideration. In H. W. Wong and K. Maegawa (eds.) *Revisiting Colonial and Post-colonial: Anthropological Studies of the Cultural Interface*, pp.73-87. Los Angeles: Bridge21 Publications.［査読有］

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・**研究課題**

グローバリゼーションから視る組織文化の比較研究

・**研究の目的、内容**

本研究では、人と自然、伝統などのエージェンシーに目を向けながら、開発という観点からそれらの資源をどのように結びつけるかを、具体的に「農村民泊」と「フットパス」という方策を取り上げて探ってゆく。とくに、ドイツやフランスにおける「農泊」の展開の過程、イギリスにおける「フットパス」の展開の過程と、日本におけるそれらの展開の過程を比較し、いかに日本におけるそれらの導入がグローカル化してきたかを明らかにする。また、日本国内における各地域ごとの展開の経緯を、比較対照してみる。

・**成果**

日本の組織的な農泊は大分県安心院がその発祥地であるが、モデルとしたのはドイツ南西部のアッカレンである。アッカレンでは、有機ブドウ栽培の実態調査からヴァカンスのあり方と農村民泊の関連についてインタヴュー調査を行った。

連邦休暇法により一か月弱の休暇をとる義務があるドイツでは、農泊の意味が異なり、長期のためホストとの交流が趣旨とはなっていない。それに対し、安心院はホスト家族のもてなし、ホストとの交流がその趣旨であり、農泊の形態も意味も大きく異なっていう点で、日本でのグローカル化が著しい現象であることがわかった。

イギリスでは、コッツウォルズにおける四つの地域のウォーカーズ・アー・ウェルカム協会を訪れ、協会員のみならず、フットパス・ウォーキングを地域づくりの主要な手法として重視している市長および、地主、環境保護組織などの関係者にもグループ・インタヴューし、またロス・オン・ワイおよびウェールズンのチェプ

ストウにおいてコンフェランスも開催した。また、コモンズの研究者とも意見を交換した。

イギリスにおいてフットパス・ウォークはレクリエーションとして長年の歴史があり、観光と地域づくりという観点から、各地でウォーカーズ・アー・ウェルカム協会を組織化してきたが、ネットワーク化を推進し始めたのはこの十年のことである。

日本におけるフットパス・ウォークの組織化は北海道や町田市をはじめとして、イギリスにならい十年の時を経て、ネットワーク化もイギリスの２年後には開始されている。イギリスそして日本におけるネットワーク化には各々独自のアクターの活動があり、またアクター間の交流もすすんでいる。

日本におけるフットパスの独自の展開は熊本県美里において開始され、美里方式と命名されているが、これは地域のひとびとによる「もてなし」を重視したガイドウォーキングであり、とくに資源の乏しい地域における活性化の手法として、九州全域で取り入れる地域が急増している。

安心院での農泊がそうであったように、美里方式の展開はグローカリゼーションのプロセスといえるが、それだけではない。実はイギリス・コッツウォルズ地域のウォーカーズ・アー・ウェルカム協会も昨今そうした密なホスピタリティの導入を検討していることから、美里型のフットパスは一方的なグローカリゼーションのプロセスというわけではなく、ある意味、同時進行的に相互に影響しあう事例となっている。

グローカリゼーションは、通常グローバル→ローカルというプロセスと考えられているが、このようにローカル⇔ローカルの直接的な関係性、しかも相互的な関係性を包含するプロセスとしてグローバルに展開するあり方を、新たなグローカリゼーションの形態として認知することができるであろう。

また、安心院において、フットパス・ウォークと農村民泊の両方を体験した学生による両者の統合に関するディベートを主催したが、地元の地域づくりの実践家との意見交換からも、「農村民泊」と「フットパス」という地域づくりの手法の接合が簡単ではないことが明らかになった。一つの大きな理由は、各々の組織が主とする価値観の違いがあり、各々の推進者が互いの手法をまだよく理解していないということがある。また、農村を背景としながらも各々のシステムが独立して構築されてきた経緯から、それらを統合する、より大きなシステムの形成に抵抗があるアクターの存在も看過できない点が明らかとなった。

以上のほか、研究教育の実践的成果として、つくば市とともに市民を対象とした筑波山麓地区の北条・小田・平沢地区のフットパス・マップを作成した。また、郷土史家による遺跡に関するガイドの動画を作成し、筑波山ルネサンス資源ライブラリーに保存したが、そのショート・ヴァージョンを授業の一環として編集し、「つくばショートムービーコンペティション」つくば部門で佳作賞を受賞した。

本研究は、科学研究費助成事業の（基盤研究（B））（2015年～2018年、代表：前川啓治）による資金に基づく研究の一部である。

◎出版物による業績

［論文］

Maegawa, K.

2015 Management in Interface: Glocal Displacement. In H. Nakamaki, K. Hioki, I. Mitsui and Y. Takeuchi（eds.）*Enterprise as an Instrument of Civilization* pp.73–87. Tokyo: Springer.

［論文］

Maegawa, K.

2015 Dynamics of Culture in Interface: Theoretical Consideration. In H. W. Wong and K. Maegawa（eds.）*Revisiting Colonial and Post-colonial: Anthropological Studies of the Cultural Interface*, pp.73–87. Los Angeles: Bridge21 Publications.［査読有］

◎調査活動

・国内調査

2015年８月14日～９月６日―イギリス、フランス、ドイツ（フットパスと農村民泊の調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「下からの地域開発の実践――フットパスと農村民泊による展開」研究代表者

外国人研究員 客員

■研究戦略センター・超領域研究部門

CHU Xuan Giao［チュ スワン ザオ］―――― 准教授

任期：2014年７月１日～2015年６月29日
研究課題：ベトナムのヌン（Nung）族の社会変動と信仰に関する歴史人類学的研究
【学歴】ハノイ総合大学文学部卒（1994）、ベトナム社会科学院民俗文化研究所大学院修士課程（民俗学専攻）修了（2000）、東京外国語大学大学院研究生（文化人類学専攻、文科省国費留学生）（2000-2001）、東京外国語大学大学院博士後期課程（文化人類学専攻、文科省国費留学生）単位取得退学（2007）**【職歴】**ベトナム社会科学院民俗文化研究所契約研究員（1995）、ベトナム社会科学院民俗文化研究所研究員（1996-2011）、東洋大学社会学部外来研究員（1999）、東洋大学社会学部特別講師（2004）、ベトナム社会科学院民俗文化研究所上席研究員（2011）**【学位】**修士（民俗学）（ベトナム社会科学院 2000）**【専攻・専門】**文化人類学

【主要業績】
［単著］
Chu Xuan Giao
2013 *Đời sống, vai trò và đặc trưng của thầy Tào người Nùng An qua trường hợp bản Phia Chang, Nxb Từ điển Bách khoa*（『ヌン族ヌン・アン集団の宗教職能者タオに関する研究』）．ハノイ：ベトナム百科辞典出版社（ベトナム語）。
［共編著］
Chu Xuan Giao and Phan Lan Hương（eds.）
2011 *Nghiên cứu cơ bản về Phủ Tây Hồ: Di tích và lễ hội,* Hà Nội: Nxb Từ điển Bách khoa.（『ハノイの聖母信仰の聖地「西湖府」に関する基本研究』ハノイ：ベトナム百科辞典出版社）（ベトナム語）。
Chu Xuan Giao and Nguyễn Thị Lương（eds.）
2010 *Thăng Long thế kỉ 17 đến thế kỉ 19 qua tư liệu người nước ngoài,* Hà Nội: Nxb Quân đội nhân dân.（『外国人の文献資料から見た17世紀――19世紀のハノイ』ハノイ：人民軍隊出版社）（ベトナム語）。

【2015年度の活動報告】
◎各個研究
・研究課題
2014年７月１日から2015年６月29日まで国立民族学博物館に滞在した一年間、以下の研究活動を行った。
（1）ベトナムの東北地方のヌン族ヌン・アン集団の村落で1995年以来の20年間に渡ったフィールド調査から資料を整理し、約400頁の論文「ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成――東北地方のヌン・アン集団の事例から」を日本語で執筆した。
（2）ベトナム研究者の研究会「百越の会」（国立民族学博物館）でベトナムのヌン族をテーマとして４回連続で発表した。そのテーマ、期日は次の如くである。第29回（2014年９月６日）「民族学的観点から見たヌン・アン」、第30回（2014年11月８日）「ドイモイの進展とヌン・アン社会」、第31回（2015年１月17日）「ドイモイ政策下のヌン・アン文化」、第32回（2015年３月14日）「フクセン社ヌン・アンにとっての『ドイモイ』」。
（3）国立民族学博物館・第265回研究懇談会（2015年５月20日）で発表した（題目：「ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成――東北地方のヌン・アン集団の事例から」）。
（4）2015年４月25日、奈良大学社会科学部に赴き科学研究費助成事業「中越国境地域の市場から見た民族間交流とエスニシティの文化人類学的研究」（基盤研究（B）、研究代表者・芹澤知広教授）の研究会に参加し、コメントを行った。
（5）2015年６月20日～22日、東京でベトナム研究者との意見交換を行った。東京外国語大学外国語学部ベトナム語専攻（今井昭夫研究室、野平宗弘研究室）、慶應義塾大学文学部社会学専攻（三尾裕子研究室）、日本女子大学人間社会学部（中西裕二研究室）を訪問し、研究にかかる意見を交換した。

・成果

以下の３本の論文を執筆した。

日本語論文（博士学位請求論文として）：

「ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成――東北地方のヌン・アン集団の事例から」（約400頁）。

ベトナム語論文：

（1）「ヌン族ヌン・アン集団の研究史（Lịch sử nghiên cứu nhóm Nùng An trong tộc người Nùng ở Việt Nam）」（約100頁）

（2）「ベトナムの聖母・柳杏伝説におけるハノイの西湖府の位置づけの変遷プロセス（Phủ Tây Hồ ở Hà Nội trong hệ thống truyền thuyết Mẫu Liễu）」（約200頁）

CISSE Mamadou［シセ　ママドゥ］―――――――――――――――――――――――――――――――― 教授

任期：2015年８月３日～2015年12月17日

研究課題：アジア地域の商取引におけるアフリカ系商人とアラブ系商人によるアラビア語使用に関する言語人類学的調査

【学歴】モロッコ国立シディ・モハメド・ベン・アブラダ大学卒（1985）、モロッコ国立シディ・モハメド・ベン・アブラダ大学言語学修士課程終了（1987）、フランス国立東洋言語文化研究所言語学専攻言語学専門研究課程修了（1992）フランス国立東洋言語文化研究所フランス語専攻課程修了（1993）国際関係専攻課程修了（1993）、アラビア語専攻文学学士課程修了（1994）言語学専攻言語学博士課程修了（1995）**【職歴】**モハメド・ベン・アブダラ高校（モロッコ）英語教師（1986）フランス国立東洋言語文化研究所・アフリカ研究部門講師（1989）セネガル国立シェール・アンタ・ジョップ大学文学部教授（2003）**【学位】**博士（言語学）（フランス国立東洋言語文化研究所 1995）、D. E. A.（言語学）（フランス国立東洋言語文化研究所 1992）、修士（言語学）（モロッコ国立シディ・モハメド・ベン・アブラダ大学 1987）**【専攻・専門】**言語学

【主要業績】

CISSE M.

2014　*Bouquets de Sagesse Wolof, Recueil de Proverbes Bilingues Wolof-Français*. Paris: Présence Africaine.

2007　*Dictionnaire Français-Wolof*. Paris: Edition Revue et Augmentée.

1994　*Contes Wolof Modernes*. Paris: L'Harmattan.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アジア地域の商取引におけるアフリカ系商人とアラブ系商人によるアラビア語使用に関する言語人類学的調査

・研究の目的、内容

滞在期間中は、民博の豊富な文献資料を十分かつ有効に利用することができた。

研究課題については、学際的なアプローチから総合的な見地に立ち、数々の興味深い現象について考察の道筋を引き出すにいたった。

またよい機会に巡り合えたことによって、大阪の地、しかも民博からほど近い豊川にできたモスクにおいて、詳細な調査をおこなうことができた。モスクでインタビューした人びとの多様性は、研究課題についてのわれわれの仮定であった「アラビア語が人びとのコミュニケーション手段の中心」であることを確認することにつながった。

さらに熊本でも、日本人研究者との議論を行い、アラビア語を共通の社会言語的背景にもつ共同体が強固な連帯感を作り上げていることを確認した。

研究課題以外には、過去40年のあいだに民博が西アフリカで収集したすべてのモノについて、データーベースの点検をおこない、必要な情報を補い、また現地語の綴りの訂正をおこなった。

・成果

日本での滞在は、多くの新しい経験と、研究上の重要な発見につながった。アフリカ地域とアラブ圏出身の商人によるアラビア語の使用は、イスラームという宗教的側面以外にも、商取引における透明性をとおして共

通のノウハウを作り上げる実践的な役割を担っていることが判明した。

このような点において、商取引についての文化人類学的アプローチと言語学的アプローチの重要性が認識できる。商業と言語は密接な関係にある。言語は商業的意図において、言語的な相互関係における触媒なのである。

滞在中は、私自身の専門である記述言語学の研究についても研究を進めることができ、言語学の主要な雑誌（Sudlangue sn や Academia edu.com などセネガルをはじめ、アルジェリアやコートジボアールの雑誌）に論文を投稿した。

◎出版物による業績

［論文］

CISSE, M.

2015 Les Constructions Applicatives en Seereer Singadum. *Cahier Ivoirien de Recherches linguistiques* 37: 21–39.

2015 Controverse Autour de la Conjugaison du Wolof: le Cas de l'Emphatique du Sujet. *Sud Langues*.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2015年10月28日 「記述の意味――西アフリカにおけるアジャミ書法」

FISCHER, Susan Donna［フィッシャー、スーザン ドンナ］―― 教授

任期：2015年 9 月15日～2015年10月30日

研究課題：手話言語学研究のとりまとめと今後の長期計画に関する検討

【学歴】ハーバード大学ラドクリフ・カレッジ卒（1967）、マサチューセッツ工科大学博士課程修了（1972）**【職歴】**ソーク研究所研究員（1971）、ハワイ大学 第二言語としての英語学部客員助教（1974）、サンディエゴ州立大学言語学科講師（1977）、ロチェスター工科大学国立聾工科大学コミュニケーション研究科准教授、研究員（1978），ロチェスター工科大学国立聾工科大学研究科教授、研究員（1993）、カリフォルニア大学サンディエゴ校客員研究員（2006–）、ニューヨーク市立大学大学院客員研究員（2013–）**【学位】**Ph.D（言語学、心理学）（マサチューセッツ工科大学 1972）**【専攻・専門】**言語学

【主要業績】

［論文］

Fischer, S. D.

2011 Nominal Markers in ASL（with foreword, afterword, and commentary). *Sign Language & Linguistics* 15(2): 243–250.

2011 Marked Hand Shapes in Asian Sign Languages. In R. Channon and H. van der Hulst（eds.）*Formational Units in Sign Language*, pp.19–41. Boston: DeGruyter.

2011 Numeral Incorporation in Taiwan Sign Language. In Jung-hsing Chang（ed.）*Language and Cognition: Festschrift in Honor of James H.-Y. Tai on His 70th Birthday*, pp.147–169. Taipei: The Crane Press.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語学研究のとりまとめと今後の方向性に関する検討

・研究の目的、内容

1. みんぱく手話言語フェスタにおいて、（菊澤律子准教授と共著の）手話言語・音声言語の形式と機能に関する論文を発表した。また、フェスタのテーマと構成についてアドバイスを行った。
2. 手話言語の構造に関する専門課程の一環として東北大学で講義した。
3. 台湾の国立清華大学と公立中正大学で講演を行い、両大学の卒業生・大学院生と面談した。
4. 手話言語の比較統語論に関する文献を渉猟した。
5. 来年度のみんぱく手話言語フェスタの会議構成、発表要旨提出の管理、招待講演者の人選等について菊澤律

子准教授と時間をかけて話し合った。また、フェスタで開催された数々のワークショップや会議から得た研究成果の普及方法についても議論した。

・**成果**

招へいの目的上、一次的研究よりむしろ研究成果の議論と普及が中心であるが、約６週間の民博滞在中以下のような成果をあげた。

1. みんぱく手話言語フェスタの成功に貢献した。
2. 初来日時から引き続き民博では音声言語学者と共に手話言語の研究に取り組んで来た。
3. 2017年に出版予定の手話言語の比較統語論に関する論文のため文献収集を始めた。
4. 菊澤准教授と共に民博における次年度の研究計画と将来的プロジェクトの計画案を完成させた。

◎調査活動

・**海外調査**

2015年10月19日～10月25日―台湾（国立中正大学において講演及び手話言語学にかかる調査研究）

KIM Chang-ho（金 昌鎬）［キム　チャンホ］―――――――

2．研究活動の概要

本研究の遂行と関連し、まず次のように日本国内の博物館および展示館の情報サービス方法の事例調査と新しい技術についての把握を試みた。

- 物館情報サービスの情報範囲設定に係る事例調査（日本国内の博物館を対象）
- 具現化技術およびその方法についての事例調査（産業特別展、企業展示場などを対象）
- 資料分類体系の新しい動向の事例調査（国立情報学研究所および関連技術の特許化状況など）

また本研究の進行と連携し、国立民族学博物館の「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」事業に参加した。フォーラム型の双方向的情報交流は、世界の多くの博物館でも必要性を感じている事業である。これは、一つの社会的共同体文化の表象である資料についての個人的解釈をひきだし、主観的立場で文化を解釈し共有することを可能とする。これにより蓄積された情報は、資料についての追加情報として活用が可能である。フォーラム型情報ミュージアムの構築事業と関連して、次のような活動を行った。

- 国立民族学博物館所蔵韓国資料のメタデータ作成支援
- 韓国国立民俗博物館所蔵資料との連携サービスのための資料収集および整理
- フォーラム型情報ミュージアムのホームページのハングル UI 制作支援

トピックマップ基盤のオントロジーマップの試験制作のために対象とした基礎資料は、国立民族学博物館と韓国国立民俗博物館が所蔵する、韓国の食生活関連資料情報の一部である。研究は、次のように実施した。

- メタデータ基礎整理作業に Microsoft 社の Excel プログラムを活用
- メタデータシートのフィールド要素の点検および確定（サービス対象情報の範囲設定）
- 主題語の同義語と関連語についての連携性（Association）設定
- 主題語の説明に登場する主要用語と関連語についての連携性設定
- 作成されたメタデータシートをコンバータープログラムを活用してトピックマップ構造に変換

トピックマップ構造化作業とともに悩んだことは、情報の範囲をどこまでにするかということである。国立民族学博物館の場合、展示場のオーディオガイドを通して、展示資料の地域についての調査情報および収集地の関連情報を一部提供しており、とても重要な試みと評価できる。地域研究の結果として収集された資料とその情報は、このような収集地の現場情報を通して学術的真偽と価値を立証することができるからである。本作業では、メタデータ内に収集地の現場関連情報に関するフィールドを追加した。

・成果

トピックマップ基盤のオントロジーマップの長所は、ディレクトリー（Directory）マップに構成された資料に比べ、連携検索に柔軟性があることである。ディレクトリーの場合、上位階層と下位階層との連携性は現れるが、資料の水平的連関性は、容易に知ることが難しい。試験的に構成したシステムの検証のため、段階別標準検索類型を三段階に分けて分類し、段階別にさまざまな検索質問を活用して導出された結果と、連関関係をもつ他のトピックとの有効性を確認した。

限定された資料であることを勘案し、試みた質問類型については大部分が三段階までの連関および対象検索が可能であった。実際には、デジタルサイネージあるいはウェブ UI の視覚的デザインをどのようにするかによって、結果［Occurrence］により速いアクセスも可能であろう。もちろん情報蓄積量が多くなれば、類型は 4 段階（T-A-A-O）以上に増えることが予想される。

本研究には、次のような今後解決が必要な課題がある。

第一に、トピック主題および分野が偏り、多様な検索類型をテストすることの困難性である。基礎資料としたものが食生活という一つの主題についてのものだったこともあるが、資料についてのシソーラス（Thesaurus）研究および関連資料収集が不足していたためでもある。特に具現化に先立つ主題語シソーラスについての検討は、かならず実施しなければならないであろう。これに加えて外部の博物館イントラネットと標準化されたトピック間のリンクが可能になれば、今後博物館外の資料との連携も可能になるため、より多様な情報間の交差検索が可能になることが見込まれる。

第二に、初期に有用だと考えていたフォーラム型情報ミュージアムの既存情報との連携問題である。まだホームページが開設されていないが、より多くの検討を必要とする課題である。すなわち、構造化されたメタデータを有していないユーザーが、自由な文章入力で主題語検索を可能とする技術的方法の検討が必要である。Web 2.0で具現されるフリッカー（Flickr）やデリシャス（del.icio.us）リンクなどを活用する方法も検討できるであろうが、数多くの文章に対して適切性を点検することは容易ではないであろう。

トピックマップは、基本的な情報表現のための主題中心の連携モデルを提供することを可能とする。こうした機能は、シメンティクウェブをはじめ多様な方法でも具現化が可能だが、国際標準化機構（ISO）の標準案

として提案された以上、今後も長く使用されることになるだろう。

トピックマップの活用は、増加し続ける博物館の外的な文化情報の次元と、博物館内の情報とを容易に連携し、一つのサイネージデバイス（Signage Device）内でも幅広いサービスを具現化することを可能にする。そのため、急速度で発達する情報技術と、すでに適応されている大衆に対する博物館の能動的対応策の一分野として、継続して検討していく必要があるであろう。

KUMAWAT, Shyam Sunder［クマワット、シャーム　スンデル］――――――

New Delhi and Udaipur: Himanshu Publications.

2015 Human Rights of Women; A Sociological View, (in hindi) *Samajmiti,-Journal of Social Sciences and Humanities* 4(1): 112–118.

◎映像音響メディアによる業績

［映像番組］

Shyam S. Kumawat, Minoru Mio監修

2015 以下の番組のヒンディー語版の制作の監修

『バスニ・カラン村の領主のくらし』（15分）、『ウダイプルの婚礼』（33分）、『ラージャスターンの結婚式』（106分）、『バスニ・カラン村の女神祭礼』（26分）、『ウダイプルのホーリー祭』（20分）、『ウダイプルの女神祭礼』（74分）、『ラージャスターンの戦士の霊　サガスバウジー』（32分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年10月17日 "Ecological Imbalance and Changing Social Behaviour, (Sustainable Planet Earth; Ecological Dimensions and Strategies)." 10 DGSI International Geography Conference. Dept. of Geography, MLS University Udaipur, Rajasthan, India

2015年12月18日 "Issues of Communal Tensions in Indian Society." 22 National Conference on Emerging Social Problems of Contemporary Indian Society. Rajasthan Sociological Association, Dept. of Sociology, MLV Government College, Bhilwara, Rajasthan, India.

2016年１月22日 "Technical Words; Hindi Terminology in Social Sciences." Commission for Scientific and Technical Terminology. Ministry of Human Resource Development, New Delhi, India

ORBELYAN, Gevorg［オルベイアン、ゲヴォルグ］―― 准教授

任期：2015年12月８日～2016年11月24日

研究課題：博物館とコミュニティのあり方に関する博物館人類学的研究

【学歴】エレヴァン国立教育大学卒・エレヴァン国立教育大学大学院修士課程一貫修了（2005）**【職歴】**エレヴァン歴史博物館古代中世部上級専門官（2005）、モスクワLUDING株式会社 ウェッブサイト専任翻訳者兼通訳者（2006）、エレヴァン歴史博物館古代中世部上級専門官（2007）、エレヴァン歴史博物館展示デザイン部門長（2008）、エレヴァン市観光開発投資部門、観光促進プログラム（2011）、エレヴァン市立博物館副館長（2012-）**【学位】**修士（文化学）（大阪外国語大学大学院 2000）**【専攻・専門】**文化学

【主要業績】

［著書］

Orbelyan, G.

2011 *Welcome to Yerevan*. Yerevan: Yerevan History Museum.

［論文］

Orbelyan, G.

2011 Tourism Development Perspectives and Current Status. *Museum* 3: 266–70.

2011 Exhibition Making in Museums. *Museum* 2: 207–15.

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館とコミュニティのあり方に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

日本における各種博物館の展示と公共空間の利用法及びコミュニティとの連携などの比較研究を行うことであった。具体的には、①本館の機関研究「文化遺産の人類学」、②機構本部基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる事前調査」、③追手門学院大学との協定に基づく共同研究「地域文化の継承と創造」の３つであり、いずれも共同して受入れを行う吉田憲司教授と連携して実施した。

・成果

滞在中、①本館の機関研究「文化遺産の人類学」、②機構本部基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築にかかる事前調査」、③追手門学院大学との協定に基づく共同研究「地域文化の継承と創造」などに参加して、国内の博物館と地域コミュニティについての実地調査を行った。また来日期日が今年の国際研修「博物館学コース」の期間に少し重なるため、その期間中に研修に積極的に関与すると同時に、研修後のコース改良についても助言を行う。

SAM, Sam-Ang［サム　サムアン］――――――

はかり、相互に対照できる資料群を形成することが、長時間に及ぶ記録映像の参照性を高め、学術映像の活用において有効であることを検証する。具体的には、記録された語りのパートを、クメール語、英語が対照できる形で文字に移した上で、全パフォーマンスについて英語字幕を入れた映像作品を製作し（日本語字幕版は製作済み）、さらに文字資料を出版する準備も進めた。サム教授は、カンボジアの古典芸能を熟知している上、クメール語と英語の両言語に精通しており、文字資料の作成において中心的な役割を果たした。

また、カンボジアにおける学術映像資料の活用、特に、カンボジアの研究者および芸能伝承者による映像記録の活用を進めるための具体的な方策を、カンボジアの国内事情を勘案しながら検討した。文字資料に比べ映像資料の活用が進まない要因に、学術資料としての映像の所蔵が研究機関においても限られていること、また、目録および所蔵情報の流通システムが確立していないことが挙げられる。こうした状況を改善する方法を、民博製作の映像資料を例にして具体的に探った。なお、この研究は、2015年度文化資源プロジェクト「カンボジアの大型影絵芝居スバエク・トム全７夜の上演記録映像（英語字幕版）の制作」と密接に関連するものである。

◎出版物による業績

［論文］

Sam, Sam-Ang

2016 Folk Performing Arts of Cambodia. *The Folk Performing Arts in ASEAN*. Bangkok: Sirindhorn Anthropology Centre.

2016 Cambodia: Mobility, Exchange, Networking, and International Collaboration for Folk Performing Artists. *The Folk Performing Arts in ASEAN*. Bangkok: Sirindhorn Anthropology Centre.

2015 Teaching Traditional Music in Asia. *The Restoration of Asian Community Spirit: The Present State of Succession and Development of Asian Traditional Music*. Quezon City: Kunggi Hyang Je Jul Pung Ru, Inc. and University of the Philippines College of Music.

◎調査活動

・海外調査

2015年９月３日～９月８日―タイ（国際会議「アセアンの民俗芸能」において研究発表及び無形文化遺産保護における学術的映像資料の活用にかかる情報収集）

2015年10月16日～10月19日―中華人民共和国（アジア太平洋民族音楽学学会国際会議へ参加及び無形文化遺産保護における学術的映像資料の活用にかかる情報収集）

2015年11月23日～11月27日―大韓民国（無形文化遺産としての音楽の保護における映像の活用にかかる情報収集）

WILDE, Guillermo［ウィルデ，ギジェルモ］―― 准教授

任期：2015年１月16日～2016年１月14日

研究課題：ラテンアメリカとアジアにおけるキリスト教宣教と文化適応の比較研究

【学歴】ブエノスアイレス大学哲学文学部人類学専攻卒（1999）、ブエノスアイレス大学哲学文学部人類学専攻博士課程修了（2003）**【職歴】**国立科学技術研究会議（アルゼンチン）研究員（2005-）、ヌエストラセニョーラデアスンシオン・カトリカ大学大学院（パラグアイ）社会人類学専攻客員教授（2007）、国立サンマルティン大学（アルゼンチン）社会科学高等研究所准教授（2008-）、教皇庁立リオグランジドスウ・カトリカ大学大学院（ブラジル）歴史学専攻客員教授（2008）、リオデジャネイロ連邦大学大学院社会人類学専攻客員教授（2009）、社会科学高等研究所（フランス）宗教人類学センター客員教授（2010）、国立ミシオネス大学大学院（アルゼンチン）社会人類学専攻客員教授（2010）、パリ第３新ソルボンヌ大学ラテンアメリカ高等研究所パブロ・ネルーダ講座客員教授（2010-2011）**【学位】**Ph. D（ブエノスアイレス大学 2003）**【専攻・専門】**文化人類学

【主要業績】

［単著］

Wilde, G.

2009 *Religión y poder en las misiones de guaraníes*. Buenos Aires: Editorial SB.

［編著］

Wilde, G.（ed.）

2011 *Saberes de la conversión: jesuitas, indígenas e imperios coloniales en las fronteras de la cristiandad*.

Buenos Aires: Editorial SB.

［論文］

Wilde, G.

2014　Adaptaciones y apropiaciones en una cultura textual de frontera: impresos misionales del Paraguay jesuítico. *História Unisinos* 18(2): 270-286.

【受賞歴】

2010　Premio Iberoamericano of Latin American Studies Association

【2015年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ラテンアメリカとアジアにおけるキリスト教宣教と文化適応の比較研究

・研究の目的、内容

昨年度に引き続き、受入教員の齋藤晃氏とともに、研究課題に関連した学術活動を実施した。民博共同研究「近世カトリックの世界宣教と文化順応」（代表者：齋藤 晃）では、先行研究の再検討を目的として５回の研究会が開催されたが、そのうち９月の研究会で報告を行い、中国のキリスト教宣教に関する文献を批評した。他にも、民博共同研究「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」（代表者：吉江貴文）にも参加し、12月には植民地期パラグアイのイエズス会ミッション史料について報告を行った。

４月からスタートした齋藤氏の新規プロジェクト「アンデスにおける植民地的近代――副王トレドの総集住化の総合的研究」科学研究費助成事業（基盤研究(A)）に参加し、11月には米国ヴァンダービルト大学で開催された国際シンポジウム「植民地期アンデスの強制移住を再考する」で報告を行った。

７月には民博研究懇談会で「接触領域の時空間――植民地期の知覚体制への比較論的アプローチ」と題した報告を行い、11月には早稲田大学で植民地期南米カトリック・ミッションにおける音楽・イメージ・力について講演した。両発表は、わたしの研究課題であるキリスト教宣教における文化適応と感覚的媒体の効果に関するものである。５月にはまた、専修大学で行われた日本ラテンアメリカ学会の定期大会で南米イエズス会ミッションの信徒会について報告した。

以上の活動を通して、日本各地の研究者と出会い、民博での研究課題を深め、将来、日本とアルゼンチンの学術機関が協同でプロジェクトを行うための意見交換ができた。また、民博の研究者・外国人研究員・外来研究員とも友好関係を築いた。

招聘期間の最終日には大阪大学の美術史を専門とする教授に招かれ、植民地期南米の宗教美術についてのスペイン人研究者の講演にコメントした。

このほかにも、齋藤氏と研究打合せを定期的に行い、また共著論文の執筆を進めた。

民博の図書室の蔵書はわたしの研究にたいへん役立ち、図書館相互間の貸出システムにも助けられた。

・成果

民博滞在中、以下のおもな目的をすべて達成できた。(1) ラテンアメリカとアジアにおけるキリスト教宣教、とりわけ文化適応についての比較研究の立ち上げと推進、(2) 同テーマに関する先行研究の再検討と理論的考察、(3) 齋藤氏ならびに他の研究者との定期的な交流・意見交換、(4) 日本における人脈の構築。

◎出版物による業績

［論文］

Wilde, G.

En prensa　Cacicazgo, territorialidad y memoria en las reducciones jesuíticas del Paraguay. En Akira Saito y Claudia Rosas Lauro（eds.）*Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el virreinato del Perú*. Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú.

Wilde, G.

In press　Missionary Frontiers in Colonial South America: Impositions, Adaptations, and Appropriations. In Cynthia Radding and Danna Levin Rojo（eds.）*The Oxford Handbook of the Borderlands of the Iberian World*. New York: Oxford University Press.

Wilde, G.

In press　Jesuit and Indigenous Subjects in the Global Culture of Letters: Production, Circulation and

Adaptation of Missionary Texts in the Seventeenth and Eighteenth Century. In Anna More, Rachel O'Toole and Ivonne del Valle (eds.) *Iberian Empires and the Roots of Globalization*. Nashville: Vanderbilt University Press

Wilde, G.

In press The Missions of Paraguay: Rise, Expansion and Fall. In Ronnie Po-chia Hsia (ed.), *Companion to Early Modern Catholic Global Missions*. Leiden: Brill

［その他］

Wilde, G.

2015 Indigenous Agency and Written Culture in the Jesuit Missions of Paraguay. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 40: 9–10.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年11月７日 'Transiciones entre los Andes y las Tierras Bajas: hacia una aproximación comparativa de los modelos reduccionales.' International Symposium "Rethinking Forced Resettlement in the Colonial Andes." Vanderbilt University, Nashville, TN, USA

・共同研究会での報告

2015年９月６日 「Nicolas Standaert著『*L'«autre» dans la mission: leçon à partir de la Chine*』について」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』国立民族学博物館。

2015年12月５日 'Reglamentando la vida cotidiana en las misiones fronterizas: libros de preceptos en el Paraguay jesuítico'『近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開』国立民族学博物館

・民博研究懇談会

2015年７月８日 'Time and Space in Contact Zones: A Comparative Approach to Regimes of Perception in Colonial Past', 国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年５月31日 'Identidad religiosa, memoria social y persona en las misiones jesuíticas de Sudamérica: congregaciones religiosas guaraníes y chiquitanias en los siglos XVII y XVIII' (報告). 日本ラテンアメリカ学会第36回定期大会、専修大学

2015年11月14日 「植民地期南米の布教区（ミッション）における音楽、イメージ、権力――イエズス会の土着文化への適応と先住民のキリスト教文化への順応」（講演）。講演会『ラテンアメリカン・デイ――遥かなる南米、そこに誕生したミッション文化と先住民文化の今』早稲田大学小野記念講堂